情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	1 年	学期	前期	科目分類	基礎科目
授業名	イノベーションの志					授業形態	講義
授業コード	AIV111	単位数	2 単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	中村 伊知哉						
授業概要	本学は「変化を楽しみ、自ら学び、革新を創造する」ことを教育理念とし、経営と情報通信技術に関する理論と実践力、国際的なコミュニケーション能力、これらを組み合わせた応用力を主体的に身に付け、国際社会と地域社会の産業発展に貢献する人材を育成する大学である。 本授業ではこの「イノベーション」について理解を深めるとともに、イノベーションを生み出し、イノベーターとなるために必要な資質や素養を身につけるための土台を様々な事例を学ぶことにより構築する。 具体的には、分野ごとにイノベーション事例を取り上げ、情報社会における ICT を使ったイノベーションとは何かについて、自分なりの解を導き出す。各インプットを基にグループワークで意見交換を交え、他者と比較の中で、自身のビジョンステートメントを構築する授業構成をとる。 また、イノベーションを起こす人材となるために必要なことは何か、自らイノベーションを起こすために何をするかを考え自分なりのイノベーター像、イノベーションのあり方を検討し、この後の本学での学びの素地とする。						
授業の目的・到達目標	・情報社会におけるイノベーションについて基本的な考え方を理解すること。 ・常に変化する世界の流れの中でも、イノベーションを生み出し、イノベーターになるためのスキルとマインドを身につけること。						
授業計画							
第 1 回	イントロダクション：情報社会におけるイノベーションとは何か 1 （本授業の背景、目標など）						
第 2 回	イントロダクション：情報社会におけるイノベーションとは何か 2 （本授業の背景、目標など）						
第 3 回	ICT とイノベーション 1 （ビジネス分野及びグローバル分野での ICT を用いたイノベーションについて講義）						
第 4 回	ICT とイノベーション 2 （ビジネス分野及びグローバル分野での ICT を用いたイノベーションについて講義とグループワーク）						
第 5 回	ICT とイノベーション 3 （ビジネス分野及びグローバル分野でのイノベーションについて講義）						
第 6 回	ICT とイノベーション 4 （ビジネス分野及びグローバル分野及び ICT 分野でのイノベーションについて講義とグループワーク）						
第 7 回	ICT とイノベーション 5 （ICT 分野及びビジネス分野でのイノベーションについて講義）						
第 8 回	ICT とイノベーション 6 （ICT 分野及びビジネス分野でのイノベーションについて講義とグループワーク）						
第 9 回	ICT とイノベーション 7 （ICT を用いたイノベーションのグループワーク 1）						

第 10 回	ICT とイノベーション 8 （ICT を用いたイノベーションのグループワーク 2）
第 11 回	ICT とイノベーション 9 （ICT を用いたイノベーションのグループワーク 3）
第 12 回	ICT とイノベーション 10 （ICT を用いたイノベーションの企画プレゼンテーション及び講評）
第 13 回	ICT とイノベーション 11 （ICT を用いたイノベーションの企画プレゼンテーション及び講評）
第 14 回	最終発表、まとめ 1 （学生によるイノベーション企画の発表・討論とイノベーションの志のまとめ、講評）
第 15 回	最終発表、まとめ 2 （学生によるイノベーション企画の発表・討論とイノベーションの志のまとめ、講評）
成績評価の方法	各回ごとのフィードバックレポート・授業への参加度 最終ワーク・発表
準備学修（予習・復習、課題等）	参考書を読んでおくこと。 参考 URL を視聴しておくこと。 発表及び最終発表に向けた準備を行うこと。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	■参考文献 「超ヒマ社会をつくる」（ヨシモトブックス） 「新版 超ヒマ社会をつくる―アフターコロナはネコの時代―」（ヨシモトブックス） ■参考動画 中村伊知哉学長による iU Channel https://www.youtube.com/c/iUCHANNEL
備考	
昨年度からの振り返り	「iU とは」を皆さんで考える講義です。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	1年	学期	前期	科目分類	基礎科目
授業名	スタディスキル					授業形態	講義
授業コード	SSK111	単位数	2単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	加藤 直人						
授業概要	大学生活は社会で貢献するための準備期間であり、自分が興味関心を持つ分野について主体的に学ぶとともに、社会に出ていくにあたって企業におけるプレゼンテーションに代表されるように今度は自らが情報発信をしなければならないという立場にもなる。本講義では有意義な大学生活を送るために、基本となるアカデミックスキルや社会人基礎力など、入学時に立てた目標を実現する力を身につける。具体的には、課題に取り組みながら大学生活を送るために必要なコミュニケーション、情報収集と活用、レポートやプレゼンテーションなどを身につけるとともに、取り上げる課題やテーマから大学での学びや将来の目標を考える。						
授業の目的・到達目標	有意義な4年間の大学生活を送るための基本となる、大学において学ぶ（授業、課外活動）ことのスキルを身につけることを目的とする。そして、本専門職大学の学生として、自覚を持って行動できるようになることを目標とする。						
授業計画							
第1回	オリエンテーション スタディスキルとは、スタディスキルで何を学ぶのか						
第2回	目標の振り返りと本科目における課題設定 情報リテラシー、レポーティング、プレゼンテーション、コミュニケーションの観点から自己分析し、本講義で何を学ぶのかを明確にする						
第3回	情報リテラシー① インターネットの利用の仕方、SNSの利用の仕方、利用上の注意						
第4回	情報リテラシー② 図書館の利用、専門書・文献の収集、検索方法、読み方						
第5回	レポーティング① 考えのまとめ方、レポートの書き方						
第6回	レポーティング② 引用、参考、出典と剽窃の禁止など						
第7回	レポーティング③ 表計算を用いたデータ作成						
第8回	中間発表 課題の進捗、振り返り、見直し						
第9回	プレゼンテーション① プレゼン資料の作り方						
第10回	プレゼンテーション② プレゼンのポイント、方法						
第11回	コミュニケーション① 議論、質疑応答のしかた						
第12回	コミュニケーション② 自己理解、相互理解						
第13回	コミュニケーション③						

	発信力、表現力、傾聴力
第 14 回	個別発表 これまでの学修成果としてプレゼンテーションを行う
第 15 回	まとめ 課題や本科目を通じて得た気づき、目標の再設定
成績評価の方法	・講義内タスク：講義で学んだ知識、理解度の確認を行う（60%） ・課題：レポート、プレゼンテーション、まとめの内容（40%）
準備学修（予習・復習、課題等）	・講義中だけではなく、大学生活や家庭生活においても常にスタディスキルを意識すること。 ・講義資料を公開する予定なので、復習では講義資料中のキーワードを自分の講義ノートであらためて整理し（2 時間程度）、実践すること。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	必要な資料は随時配布する。 参考文献： 『大学での学びをアクティブにするアカデミック・スキル入門』 伊藤奈賀子（編）、中嶋祥子（編）、有斐閣、2019 年 『ゼミで学ぶスタディスキル』 南田勝也（著）、矢田部圭介（著）、山下玲子（著）、北樹出版、2011 年
備考	この科目は「大学等における修学の支援に関する法律」において本学が申請した実務経験のある教員による授業科目です。
昨年度からの振り返り	昨年度は、IM 局との連携により「原始人 PJ」として、レポーティングやプレゼンテーションの課題を設定してきたが、本年度はビジネスに関連する現実的なトピックを中心課題として、講義を行っていく。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	1年	学期	前期	科目分類	基礎科目
授業名	英語コア・スキルズⅠ					授業形態	演習
授業コード	EC1112	単位数	2単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎奥村 耕一、柿崎 理、後藤 亮						
授業概要	現代社会において、グローバルで活躍するためには英語力は必要不可欠である。この授業では、入学までの学習を基礎に、基本的な4技能を駆使して、アウトプットの強化を図っていく。基本的に各授業の前半 45 分では、ビジネスや日常生活などを題材に、個人やグループで、さまざまな形態の Listening と Speaking を中心とした集中トレーニングを行い、後半の45分では、与えられた課題を解決するための言語活動を行う。特に集中トレーニングでは、音読、シャドーイング、ディクテーション等、音声によるインプットを取り込みながら、アウトプットにつなげる活動を行う。課題解決的な言語活動では、集中トレーニングで培った能力を活用し、実際の使用場面で、やり取りや発表を行うことによって、ビジネスシーンで使用する英語に対する基礎的なコミュニケーションの力を習得する。						
授業の目的・到達目標	・英語を取り込み、それを駆使する能力を高め、ビジネスシーンで必要な4技能の基礎を養う ・実際のやり取りや発表の場面を想定した言語活動を行うことを通じて、基礎的なコミュニケーションをとることができる。						
授業計画							
第 1 回	オリエンテーション1 ・英語のコア・スキルとは何か？ 英語が使えるようになる基礎を身につけるための学習方法 ・目標、概要、予定、評価方法、オンライン教材、Google Classroom の使用方法 ・アンケート調査						
第 2 回	オリエンテーション2 ・レベルチェックテスト ・Input → Intake（Practice）→ Output プロセスでの学び方（英語の内容理解、文構造の確認、発音・語彙の習得から英語の再生・産出を行う言語学習の基本）						
第 3 回	・教科書の使い方 Input 活動：リスニング ＋ リーディング（以下、Input 活動）＋ Intake 活動：音読、穴埋め音読、再生（以下、Intake 活動） ・Daily Talk（日常の話題でやり取りを行い、即興で表現する技能の向上を図る活動）の導入						
第 4 回	・Daily Talk ・教科書 Output 活動：プレゼンテーションに向かう活動（以下、Output 活動） ・アンケート結果、レベルチェックテスト集計結果、英語教育の現状から、学習のあり方の再考						
第 5 回	・Daily Talk ・Task Activity 1（与えられた場面や条件下でやり取りする活動）						
第 6 回	・Daily Talk ・教科書 Input 活動 ＋ Intake 活動（類似点・相違点を表す）						
第 7 回	・Daily Talk ・教科書 Intake 活動 ＋ Output 活動（類似点・相違点を表す）						
第 8 回	・スキルテスト1（小テスト）						

	・教科書 Input 活動 ＋ Intake 活動（対比・対照を表す）
第 9 回	・Daily Talk ・教科書 Intake 活動 ＋ Output 活動（対比・対照を表す）
第 10 回	・Daily Talk ・Task Activity 2
第 11 回	・スキルテスト 2（小テスト） ・教科書 Input 活動 ＋ Intake 活動（機能を説明する）
第 12 回	・Daily Talk ・教科書 Intake 活動 ＋ Output 活動（機能を説明する）
第 13 回	・Daily Talk ・教科書 Input 活動 ＋ Intake 活動（原因・結果を述べる）
第 14 回	・スキルテスト 3（小テスト） ・教科書 Intake 活動 ＋ Output 活動（原因・結果を述べる）
第 15 回	・練習と言語活動の振り返りと今後の学習課題 ・授業改善アンケート
成績評価の方法	発表・やり取りなどの実技面（30%） 各回の授業への参加度・貢献度（40%） 各回の課題提出状況と毎週のオンライン教材の利用率（30%）
準備学修（予習・復習、課題等）	各回 30～60 分を想定。 予習（授業準備）：各 Unit（教科書）の音声と基本的な語彙の確認 復習：授業で触れた表現の練習とそれを用いた自己表現 課題：授業内で課す音声または文字による自己表現の提出、授業内での学びに関するレポート、オンライン教材 EnglishCentral によるインプットの増加とスキルアップ

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
Simply Science	長谷川由美、James Horvat	金星堂	978-4-7647-4068-6	後期も使用

参考書	オンライン教材：EnglishCentral https://www.englishcentral.com/
備考	授業における学習の状況に応じて、練習や言語活動の内容や進め方が変わる場合があります。 授業では、各自のパソコンを使用しますので、毎回の用意が必要です（ノートまたはタブレットが必要な場合は使用可）。
昨年度からの振り返り	昨年度の授業評価・アンケート結果から、今年度も引き続き、ペア・グループ活動を積極的に取り入れ、互いに学び合うことを重視します。 授業は少人数クラスで、多様なレベルの仲間が互いの事情を理解し、効果的に取り組むことが重要です。 授業では個別最適化学習も推進するため、個人個人が目標を持って取り組む場面もあります。 授業資料は、必要なワークシートや自主学習資料の他、授業で用いた提示資料も全て Google Classroom に配布され、課題の提出先も Google Classroom になります。 EnglishCentral は、時間・場所を問わず継続的に有効活用して、インプット量の増加やスキルアップに役立ててください。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	1 年	学期	前期	科目分類	基礎科目
授業名	数学基礎 A					授業形態	講義
授業コード	FMA113	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施しない
担当教員	磯 俊樹						
授業概要	経営分野、工学分野等における実世界の課題は、数式により定義でき、これを数値解法を用いて解くことができるものが多く存在する。こうした課題を解くためには、数学的な課題の捉え方や考え方が重要となる。本科目では基礎的な解析学として「微分」「積分」をテーマに取り上げ、解析学の基本的な内容を学んでいく。これらの理論や考え方は、経営分析やデータサイエンスなどの分野の学習を深めるうえで基本的な考え方となる。「微分」「積分」において重要な基本概念について学ぶとともに、理解をより深めるために、本科目がデータサイエンスの分野でどのように利用されているなど、実際の応用例との関りについても学ぶ。						
授業の目的・到達目標	・「微分」「積分」に出てくる数式について、その意味や考え方を説明できる。 ・既に習得した知識を駆使することで、新規に出てきた数式であっても、大まかな数式の意味を解釈する（「数式を読む（解釈する）」）ことができることを目標とする。						
授業計画							
第 1 回	イントロダクション 「数式を読む！」など実用的な数学な考え方を学ぶ						
第 2 回	微分・積分の概要 微分・積分の定性的な意味やデータサイエンス等での事例を学ぶ						
第 3 回	微分・積分のための基礎ツール（1） 微分積分を学ぶ上で必要な数列を学ぶ						
第 4 回	微分・積分のための基礎ツール（2） 微分積分を学ぶ上で必要な指数関数・対数関数・三角関数を学ぶ						
第 5 回	微分（1） 導関数の定義や関数の挙動を分析する方法（関数の極値等）を学ぶ						
第 6 回	微分（2） 初等関数の微分、積の微分、合成関数の微分を学ぶ						
第 7 回	微分（3） テイラー展開や関数近似を学ぶ						
第 8 回	多変数関数の微分（1） 偏微分の定義、極値問題を学ぶ						
第 9 回	多変数関数の微分（2） ラグランジェの未定係数法を学ぶ						
第 10 回	微分のまとめ ここまでの微分の内容についてまとめる						
第 11 回	積分（1） 積分の基本計算を学ぶ						
第 12 回	積分（2） 置換積分と部分積分を学ぶ						
第 13 回	多変数関数の積分 重積分の変数変換を学ぶ						

第 14 回	積分のまとめ ここまでの積分の内容についてまとめる
第 15 回	まとめ これまで学習した内容とデータサイエンス分野との関りについてまとめる
成績評価の方法	期末レポート：50% 課題レポート：40% 上記以外のレポート提出（適時）や授業取り組み状況等の学習意欲：10%
準備学修（予習・復習、課題等）	予習（事前学習）: 各単元の内容をテレビ（放送大学などの数学の講義）の視聴やインターネット、文献等で 1 つ以上調べ、レポートにまとめる。 復習（事後学修）: 各単元で学んだ各手法に関連する演習問題をインターネットや文献等で 2 つ以上調べ、レポートにまとめる （あわせて各回 1 時間程度）

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	必要により、授業時にプリントを配布、または参考資料を適宜指示する。 ◎参考文献（一般教養向け） 『データサイエンスのための数学』 椎名洋 他（著）、講談社、2019 年 『最短コースでわかるディープラーニングの数学』 赤石雅典（著）、日経 BP 社、2019 年 ◎参考文献（理系一般教養向け） 『大学教養 微分積分』 加藤文元（著）、数研出版、2019 年 『チャート式 大学教養 微分積分』 加藤文元（著）、数研出版、2019 年
備考	・簡単な技術解説書に出てくる数式の意味が解釈できることを目指している。従って、単に公式に値を入れて解くことよりも「数式を読む（数式の意味を理解する）」ことに重点を置いた授業を行う。 ・授業では演習に時間を割けないので、各自が復習を兼ねて実施することを前提とする。 ・教員のオフィスアワー等を利用した個別対応による指導も可能である。 ・高校数学で数学Ⅱ、B、Ⅲまでの履修をしていない場合は、放送大学などで数学の講義を視聴した上での授業参加が望ましい。 ・進捗状況により授業内で扱う題材の難易度を変更する場合
昨年度からの振り返り	講義の内容が「具体的に何に利用されるか？」の問いに応えるために、データサイエンスで必要な数学の考え方に対象を絞り、適時、具体例を紹介しながら進めていく。また、数学履修状況や将来的な志向が学生に依って大きく異なるので、各自が必要に応じて積極的に個別対応を利用するように指導していく。 理解をより深めるために、授業やレポート等で演習の機会を増やすようにする。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	1 年	学期	後期	科目分類	基礎科目
授業名	リサーチ入門					授業形態	講義
授業コード	SRB112	単位数	2 単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	石村 源生						
授業概要	社会科学の調査・分析の手法をもとにリサーチの基本を学ぶ。社会調査の概要を理解するとともに、実際にリサーチする対象を設定し、リサーチを実施しながら授業を進めていく。 まず、文献やインターネット等を用いながら、個々人の関心事に基づいてリサーチ（調査）したい対象を決める。次に、そのリサーチによってどのような「イシュー」（＝達成すべき課題／解決すべき問題）に取り組みたいのかを明らかにしていく。その上で、様々なイシューに取り組むためにはどのようなリサーチ手法があるのかを理解し、取り組もうとしているイシューに適したリサーチ手法を絞り込んでいく。グループワークによって実際にリサーチを実施し、その結果をレポートにまとめてプレゼンテーションし、他のグループの学生からのフィードバックを受ける。それに基づいて、イシューに取り組むためにさらに必要なリサーチを見極め、再度実施する。このサイクルを複数回行い、リサーチによってイシューに迫っていく。 本科目を通じ、さまざまな事象を実証的・構造的に明らかにし、イシューに取り組んでいくための方法、特に資料やデータの収集と分析の具体的な方法とその特徴について実際のリサーチを行いながら習得し、今後の様々な科目の学習の基礎となる知識・スキル・経験を身につけることを目指す。						
授業の目的・到達目標	・真のイシュー（達成すべき課題／解決すべき問題）を明らかにすることの重要性とそのための方法論を理解する。 ・リサーチは、イシューに取り組むための「手段」であることを理解する。 ・さまざまなリサーチ手法の概要と目的、それらの特徴や実施方法、活用例を説明できるようになる。 ・資料やデータの収集と分析に必要となる知識やスキルを身につける。 ・真のイシューの決定、リサーチの企画・設計・実施、リサーチ結果のイシューへの活用まで行うことを通じ、リサーチの重要性と有用性、その限界や課題を理解する。						
授業計画							
第 1 回	イントロダクション ・本科目の趣旨と進め方を理解する。また、リサーチの目的、価値、方法などについての概略を理解する。						
第 2 回	リサーチ戦略の立案 ・すべてのリサーチにおいて最も重要な「リサーチ戦略」の考え方と手法を学ぶことにより、的確なリサーチを実施できるようになる。 ・とりわけ重要な「リサーチによって達成すべき課題を決める」ステップ、ならびに「イシュー」概念について理解を深め、リサーチの第一歩を正しく開始できるようになる。						
第 3 回	データ分析ストーリーの構築 ・実際のデータ分析に取り掛かる前に、どのような方針と手順でデータ分析を行うかという一連の流れを決めなければならない。この一連の流れを「データ分析ストーリー」という。 ・データ分析ストーリーの構築に関する一般的、基本的手順と考え方を学ぶことによって、リサーチにおいて適切にデータを収集、分析し、意思決定に貢献できるようになる。						
第 4 回	調査テーマの理解 ・特定の調査テーマを与えられたとき、調査テーマを適切に理解して、適切なリサーチ課題・						

	リサーチイシューを設定できるようになる。 ・そのために重要な、分解チャートの作り方を学ぶ。
第 5 回	リサーチの種類と既存情報の調査（1） ・代表的なリサーチ手法を概観することによって、リサーチの全体像をつかむ。 ・個々のリサーチ手法の特徴を理解し、目的に応じて適切な手法を選択できるようにする。 ・さらに、文献などの既存情報の調査に関する一般的、基本的手順と考え方を学ぶことによって、既存情報を有効に活用してリサーチを効果的に実施できるようになる。
第 6 回	リサーチの種類と既存情報の調査（2） ・特定のテーマに関する「既存情報の調査」の計画書を作成することによって、イシューに基づいたリサーチの計画方法を体験的に身につける。
第 7 回	アンケート調査（1） ・アンケート調査に関する一般的、基本的手順と考え方を学ぶことによって、定量データを有効に活用してリサーチを効果的に実施できるようになる。
第 8 回	アンケート調査（2） ・調査テーマに基づいて的確なリサーチイシューを設定し、アンケート調査を適切に計画する。
第 9 回	アンケート調査（3） ・アンケート調査の質問票の作成を実際に行い、その考え方と手順を体験的に理解する。
第 10 回	リサーチの倫理 ・リサーチにおいて遵守しなければならない倫理を学び、社会に対する責任を果たすことのできる職業人になる。
第 11 回	インタビュー調査（1） ・インタビュー調査に関する一般的、基本的手順と考え方を学ぶことによって、定性データを有効に活用してリサーチを効果的に実施できるようになる。
第 12 回	インタビュー調査（2） ・インタビュー調査のイシューを定めて調査計画を立案し、インタビューフローを作成できるようになる。
第 13 回	インタビュー調査（3） ・インタビューを実際に行い、インタビューの流れとその中でのコミュニケーションを体験的に修得する。
第 14 回	インタビュー調査（4） インタビュー調査の報告書を作成できるようになる。
第 15 回	リサーチ能力の向上 ・これまで学んできたことを順に振り返りながら、自らのリサーチ力をさらに高めていくための方法と考え方を学ぶ。
成績評価の方法	・授業貢献度：50% ・課題：50%
準備学修（予習・復習、課題等）	・講義内で指示された課題に個人またはグループで取り組む。 ・講義資料を再読して講義の内容の理解を深め、知識を定着させる。 ・講義で紹介された参考文献や教材などを活用して発展的な学習を行う。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	『大学生のためのリサーチリテラシー入門：研究のための８つの力』 山田剛史（著）、林創（著）、ミネルヴァ書房、2011 年 『イシューからはじめよ―知的生産の「シンプルな本質」』 安宅和人（著）、英治出版、2010 年 『基本がわかる 実践できる マーケティングリサーチの手順と使い方［定量調査編］』 蛭川速（著）、吉原慶（著）、日本能率協会マネジメントセンター、2020 年 『基本がわかる 実践できる マーケティングリサーチの手順と使い方［定性調査編］』 石井栄造（著）、日本能率協会マネジメントセンター、2019 年 『EXCEL マーケティングリサーチ＆データ分析［ビジテク］2013／2010／2007 対応』 千野直志他（著）、翔泳社、2014 年 『EXCEL ビジネス統計分析［ビジテク］第 3 版 2016／2013／2010 対応』 末吉正成（著）、末吉美喜（著）、翔泳社、2017 年 『電通現役戦略プランナーのヒットをつくる「調べ方」の教科書』 阿佐見綾香（著）、PHP 研究所、2021 年 『独学大全』 読書猿（著）、ダイヤモンド社、2020 年 『問題解決大全』 読書猿（著）、フォレスト出版、2017 年 『最新版 論文の教室』 戸田山和久（著）、NHK 教室、2022 年
備考	
昨年度からの振り返り	一部、グループワークへの参加度が非常に低い学生がおり、その学生が所属するグループの作業に支障が生じていた。そこで次年度は、そういった支障を軽減するように授業デザインを改善する。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	1年	学期	後期	科目分類	基礎科目
授業名	英語コア・スキルズⅡ					授業形態	演習
授業コード	EC2112	単位数	2単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎奥村 耕一、柿崎 理、後藤 亮						
授業概要	「英語コア・スキルズⅠ」に引き続き、基本的な4技能を駆使して、アウトプットの強化をさらに図っていく。基本的に各授業の前半45分では、ビジネスや日常生活などを題材に、個人やグループで、さまざまな形態のListeningとSpeakingを中心とした集中トレーニングを行い、後半の45分では、与えられた課題を解決するための言語活動を行う。特に集中トレーニングでは、音読、シャドーイング、ディクテーション等、音声によるインプットを取り込みながら、アウトプットにつなげる活動を行う。課題解決的な言語活動では、集中トレーニングで培った能力を活用し、実際の使用場面で、やり取りや発表を行うことによって、ビジネスシーンで使用する英語に対する基礎的なコミュニケーションの力を習得する。						
授業の目的・到達目標	・英語を取り込み、それを駆使する能力を高め、ビジネスシーンで必要な4技能の基礎を養う ・実際のやり取りや発表の場面を想定した言語活動を行うことを通じて、基礎的なコミュニケーションをとることができる						
授業計画							
第1回	オリエンテーション ・英語コア・スキルズⅠから学んだこととは何か？ 今後の学習課題と4年間の展望 ・目標、概要、後期の予定、評価方法の確認 ・スピーチ準備						
第2回	・Daily Talkの応用（即興でまとまった内容を話す技能の向上を図る活動） ・スピーチ発表						
第3回	・Daily Talkの応用 ・教科書 Input活動：リスニング ＋ リーディング（以下、Input活動）＋Intake活動：音読、穴埋め音読、再生（以下、Intake活動）（可能性を示唆する）						
第4回	・Daily Talkの応用 ・教科書 Output活動：プレゼンテーションに向かう活動（以下、Output活動）（可能性を示唆する）						
第5回	・Task Activity 1（与えられた場面や条件下でやり取りする活動） ・Daily Talkの応用						
第6回	・Daily Talkの応用 ・教科書 Input活動 ＋ Intake活動（着眼点を述べる）						
第7回	・スキルテスト1（小テスト） ・教科書 Intake活動 ＋ Output活動（着眼点を述べる）						
第8回	・Daily Talkの応用 ・教科書 Input活動 ＋ Intake活動（出展や根拠を述べる）						
第9回	・Daily Talkの応用 ・教科書 Intake活動 ＋ Output活動（出展や根拠を述べる）						
第10回	・スキルテスト2（小テスト） ・教科書 Input活動 ＋ Intake活動（プレゼンテーションー説明を始めるー）						

第 11 回	・Daily Talk の応用 ・教科書 Intake 活動 ＋ Output 活動（プレゼンテーションー説明を始めるー）
第 12 回	・Daily Talk の応用 ・教科書 Input 活動 ＋ Intake 活動（プレゼンテーションー目的を説明するー）
第 13 回	・Daily Talk の応用 ・教科書 Intake 活動 ＋ Output 活動（プレゼンテーションー目的を説明するー）
第 14 回	・スキルテスト 3（小テスト） ・教科書 Input 活動 ＋ Intake 活動（プレゼンテーションー結果を述べるー）
第 15 回	まとめ＆振り返り ・教科書 Intake 活動 ＋ Output 活動（プレゼンテーションー結果を述べるー） ・1 年間の学習経過の振り返りと実現可能な学習計画の改訂 ・授業改善アンケート
成績評価の方法	発表・やり取りなどの実技面（30%） 各回の授業への参加度・貢献度（40%） 各回の課題提出状況と毎週のオンライン教材の利用率（30%）
準備学修（予習・復習、課題等）	各回 30～60 分を想定。 予習（授業準備）：各 Unit（教科書）の Input 活動 復習：授業で触れた表現の練習とそれを用いた自己表現 課題：授業内で課す音声や文字による自己表現の提出、授業内での学びに関するレポート、オンライン教材 EnglishCentral によるインプットの増加とスキルアップ

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
Simply Science	長谷川由美、James Horvat	金星堂	978-4-7647-4068-6	前期から継続使用

参考書	オンライン教材：EnglishCentral https://www.englishcentral.com/
備考	授業における学習の状況に応じて、トレーニングや言語活動の内容や進め方が変わる場合があります。 授業では、各自のパソコンを使用しますので、毎回の用意が必要です（ノートが必要な場合は使用可）。
昨年度からの振り返り	昨年度の授業評価・アンケート結果から、今年度も引き続き、ペア・グループ活動を積極的に取り入れ、互いに学び合うことを重視します。 授業は少人数クラスで、多様なレベルの仲間が互いの事情を理解し、効果的に取り組むことが重要です。 授業では個別最適化学習も推進するため、個人個人が目標を持って取り組む場面もあります。 授業資料は、必要なワークシートや自主学習資料の他、授業で用いた提示資料も全て Google Classroom に配布され、課題の提出先も Google Classroom になります。 EnglishCentral は、時間・場所を問わず継続的に有効活用して、インプット量の増加やスキルアップに役立ててください。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	1 年	学期	後期	科目分類	基礎科目
授業名	数学基礎 B					授業形態	講義
授業コード	FMB113	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	落合 慶広						
授業概要	経営分野、工学分野等における実世界の課題は、数式により定義でき、これを数値解法を用いて解くことができるものが多く存在する。こうした課題を解くためには、数学的な課題の捉え方や解き方が重要となる。本科目では基礎的な線形代数として「ベクトル」「行列」「線形方程式」などをテーマに取り上げ線形代数の基本的な内容を学んでいく。これらの理論や考え方は、データ分析やソフトウェア、IoT 設計などの分野の学習を深めるうえで基本的な考え方となる。「ベクトル」「行列」「線形方程式」などの基本概念について学ぶとともに、演習を通して各手法の本質や適用方法についての理解を深める。 本授業では、こうした数学的素養の基礎となる線形代数について学ぶと共に、これに関連する各科目への入り口までを講義する。なお、本授業では数学の面白さや経営学、情報通信技術での有用性が十分理解できるような授業を行う。						
授業の目的・到達目標	・「ベクトル」「行列」「線形方程式」など線形代数の基本的な内容について、それぞれの考え方を説明できる。 ・適用する目的や対象に応じて各技術を使い分けることができる。						
授業計画							
第 1 回	■線形代数のガイダンス ベクトルと行列（1） ベクトルの考え方、図形表現など基本概念						
第 2 回	■ベクトルと行列（2） ベクトル、行列の基本演算と内積 ベクトルとベクトル空間、図形のベクトル表現						
第 3 回	■ベクトルと行列（3） 行列の基本変形（掃き出し法）と連立方程式の解法 連立一次方程式の解の存在（重要事項まとめ）						
第 4 回	■行列式（1） 行列式の計算方法と基本変形 行列式と逆行列						
第 5 回	■行列式（2） 余因子行列とクラメルの法則 行列式と余因子展開						
第 6 回	■ベクトル空間（1） 一次従属と一次独立 部分空間						
第 7 回	■ベクトル空間（2） 外積とベクトル空間 部分空間と基底、次元						
第 8 回	■線形写像、線形変換（1） 線形写像と行列、 ベクトル空間と積空間、和空間、直和						

第 9 回	■線形写像、線形変換（2） 核と像 線形代数の基本定理
第 10 回	■直交変換、直交化 内積と直交変換 正規直交基底とグラムシュミットの直交化
第 11 回	■固有値、固有ベクトル 固有値と固有ベクトル、固有空間 線形変換とその特徴
第 12 回	■対角化（1） 行列の対角化 実対象行列の対角化
第 13 回	■対角化（2） 対角化できるための条件
第 14 回	■三角化 対角化できない行列の三角化
第 15 回	■二次形式 最小二乗法と二次形式 二次形式と最適化法
成績評価の方法	各講義内容の理解や応用力を下記の観点から評価する。 ・各授業で「課題」を出します。これをノートに解き、写真を撮影して、課題レポートとして提出して下さい（75%）。 課題を解くために、授業資料、本、インターネット等で調べ学習をして解いて頂いて結構です。 ・課題の中に、少し難しい「発展課題」も出題し、加点します（15%）。 ・授業中での取り組み状況、発表や質疑応答なども評価し、加点します（10%）。 ■レポート提出方法 ・手書きにより作成したレポートの写真（jpeg フォーマット、縦×横：480×640pi）
準備学修（予習・復習、課題等）	予習：各授業ごとに事前に配布される資料を見て内容を理解し、重要事項をノートに書き出して下さい。分からない点は調べ学習をしてください。（15～30 分程度） 授業：授業中に出した問題をノートに解いたり、気づいた事をノートに書き出して下さい。（90 分授業） 復習：授業中に出した問題で不正解だった問題＋追加課題、独自課題をノートに解いて提出。（15～30 分程度）

教科書

書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	■授業資料：各授業の授業資料を配布する ■教科書として使える参考図書： 「線形代数入門」（新装版） 坂松和夫（著）、岩波書店、2018（基礎事項を幅広く丁寧に解説、対角化、三角化、二次形式も記載） 「線形代数」 藤原毅夫（著）、岩波書店、1996（初学者向き。基礎項目を簡潔に解説、固有値問題、対角化も記載）

	「線形代数入門」 斎藤正彦（著)、東京大学出版会、1966（基礎事項を幅広く解説、対角化、二次形式も記載） ■読み物： 「高校数学でわかる線形代数―行列の基礎から固有値まで（ブルーバックス)」 竹内淳（著)、講談社、2010（線形代数の基本項目を分かり易く解説） 「キーポイント 線形代数」 薩摩順吉（著)、四ツ谷晶二（著)、岩波書店、1992（線形代数の基本項目を分かり易く解説） ■非常に幅広い内容を網羅した参考図書： 「東京大学工学教程 基礎系数学 線形代数Ⅰ」 室田一雄（著)、杉原正顯（著)、丸善出版、2015 「東京大学工学教程 基礎系数学 線形代数Ⅱ」 室田一雄（著)、杉原正顯（著)、丸善出版、2015 「ストラング：線形代数イントロダクション（原著第 4 版)」 ギルバート・ストラング（著)、松崎公紀（訳)、新妻弘（訳)、近代科学社、2015（練習問題、応用が非常に豊富）
備考	
昨年度からの振り返り	授業資料を事前資料として提示しますので、事前に予習した上で授業に臨んで下さい。 また、事前資料中の課題について、授業中にグループ学習を行い、レポート課題を解く力も養いますので、積極的にご参加ください。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	1年	学期	後期	科目分類	基礎科目
授業名	数学基礎C					授業形態	講義
授業コード	FMC113	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施しない
担当教員	磯 俊樹						
授業概要	経営分野、工学分野等における実世界の課題は、数式により定義でき、これを数値解法を用いて解くことができるものが多く存在する。こうした課題を解くためには、数学的な課題の捉え方や考え方が重要となる。本科目では、経営の最適化や需要予測、ビッグデータなどの分野の学習を深めるうえで基本的な考え方となる基礎的な確率統計について学ぶ。また、「確率統計」において重要な基本概念について学ぶとともに、本科目がデータサイエンスの分野でどのように利用されているなど、実際の応用例との関りについても学ぶ。						
授業の目的・到達目標	・「確率」「統計」などに出てくる数式について、その意味や考え方を説明できる。 ・既に習得した知識を駆使することで、新規に出てきた数式であっても、大まかな数式の意味を解釈する（「数式を読む（解釈する）」）ことができることを目標とする。						
授業計画							
第1回	確率の基礎（1） 事象や確率など基本的な概念などを学ぶ						
第2回	確率の基礎（2） 条件付き確率の基礎を学ぶ						
第3回	確率の基礎（3） 独立と排反の違いなどを学ぶ						
第4回	確率の基礎（4） ベイズの定理や周辺化などを学ぶ						
第5回	確率の応用（1） 条件付き確率を用いた応用例を学ぶ						
第6回	確率の応用（2） 確率漸化式やベイズ推定の基本的な考え方などを学ぶ						
第7回	まとめ（1） これまで学習した確率の内容をまとめる						
第8回	統計の基礎（1） 確率変数と確率分布を学ぶ						
第9回	統計の基礎（2） 離散型確率分布の概要を学ぶ						
第10回	統計の基礎（3） 連続型確率分布の概要を学ぶ						
第11回	統計の基礎（4） 最尤法など点推定の概要を学ぶ						
第12回	統計の基礎（5） 仮説検定の基本的な考え方と手法の概要を学ぶ						
第13回	まとめ（2） これまで学習した統計の内容をまとめる						
第14回	多次元の確率変数と分布関数						

	確率ベクトル、共分散、相関係数、独立と無相関などの基礎を学ぶ
第 15 回	まとめ（3）総合演習 これまで学習した内容とデータサイエンス分野との関りについてまとめる
成績評価の方法	期末レポート：50% 課題レポート：40% 上記以外のレポート提出（適時）や授業取り組み状況等の学習意欲：10%
準備学修（予習・復習、課題等）	予習（事前学習）： 各単元の内容をテレビ（放送大学などの数学の講義）の視聴やインターネット、文献等で 1 つ以上調べ、レポートにまとめる。 復習（事後学修）： 各単元で学んだ各手法に関連する演習問題をインターネットや文献等で 2 つ以上調べ、レポートにまとめる （あわせて各回 1 時間程度）

教科書

書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	必要により、授業時にプリントを配布、または参考資料を適宜指示する。 ◎参考文献（一般教養向け） 『データサイエンスのための数学』 椎名洋 他（著）、講談社、2019 年 ◎参考文献（理系一般教養向け） 『統計学入門（基礎統計学Ⅰ）』 東京大学教養学部統計学教室（編）、東京大学出版会、1991 年 ◎参考文献（実応用向け） 『見えないものをさぐる―それがベイズ：ツールによる実践ベイズ統計』 藤田一弥（著）、フォワードネットワーク（監修）、オーム社、2015 年 『データ分析のための数理モデル入門』 江崎貴裕（著）、ソシム株式会社、2020 年 『分析者のためのデータ解析学入門』 江崎貴裕（著）、ソシム株式会社、2020 年 『データ分析に必須の知識・考え方 統計学入門』 阿部真人（著）、ソシム株式会社、2021 年 『本質を捉えたデータ分析のための分析モデル入門』 杉山聡（著）、ソシム株式会社、2022 年
備考	・簡単な技術解説書に出てくる数式の意味が解釈できることを目指している。従って、単に公式に値を入れて解くことよりも「数式を読む（数式の意味を理解する）」ことに重点を置いた授業を行う。 ・本科目の性質上、微分積分に関する基礎知識（「数学基礎 A」履修レベル）があることが望ましい。 ・授業では演習に時間を割けないので、各自が復習を兼ねて実施することを前提とする。 ・教員のオフィスアワー等を利用した個別対応による指導も可能である。 ・高校数学で数学Ⅱ、B、Ⅲまでの履修をしていない場合は、放送大学などの数学の講義を視聴した上での授業参加が望ましい。 ・進捗状況により授業内で扱う題材の難易度を変更する場合がある。

昨年度からの振り返り	講義の内容が「具体的に何に利用されるか？」の問いに応えるために、データサイエンスで必要な数学の考え方に力点を置くことに対象を絞り、適時、具体例を紹介しながら進めていく。また、数学履修状況や将来的な志向が学生に依って大きく異なるので、各自が必要に応じて積極的に個別対応を利用するように指導していく。 理解をより深めるために、授業やレポート等で演習の機会を増やすようにする。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	2 年	学期	前期	科目分類	基礎科目
授業名	キャリアデザイン I					授業形態	講義
授業コード	CD1111	単位数	1 単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎富澤 豊、安藤 健、曽和 利光						
授業概要	1 年間の大学生活を経て得た気づき、課題を整理するとともに、入学時に立てた目標や行動計画の振り返りを行い、3 年次のインターンシップや卒業後のキャリアに向け、改めてキャリアプラン、行動計画を考える。合わせて、改めて仕事や職業への理解を深め、働くことやキャリアデザインの概念を学ぶことで、キャリアについてのより具体的なアクションにつなげられるように展開する。これらを通じ大学生活やその後の人生をどのように作っていくかを考え、自分自身のキャリアを主体的に想像していく土台を作る。						
授業の目的・到達目標	・キャリア形成について理解し、自己の目指す方向性を見極め、目標が設定できる。 ・自分自身を振り返り、客観視する視点や考え方を得ることで、自己理解を深める。 ・また仕事や働くことに対する理解を深め、イノベーション人材となるためのキャリアデザインを行い、職業人の基礎となる力を醸成する。						
授業計画							
第 1 回	オリエンテーション ・現在のキャリアに対する考え方、状況を理解する。 ・VUCA の時代。 ・代表的なキャリア理論を理解する（統合的人生設計、プロティアンキャリア） ・iU1 年次の振り返り。 ・何ができて、何ができなかったのか。						
第 2 回	スキルとは何か ・ブランドハプンスタンス理論を理解する。 ・自分のスキルに対する理解。 ・自分の人生に影響を与えた人のスキルとは何か。						
第 3 回	価値観の異なる人との協働 ・起業から得られることは何か。 ・就職から得られることは何か。						
第 4 回	バリューチェーンを通じて社会を知る① ・実際の商品のバリューチェーンを考えることで、さまざまな「仕事」を知る。 ・清涼飲料、チョコレート菓子、氷菓。						
第 5 回	バリューチェーンを通じて社会を知る② ・実際のサービスのバリューチェーンを考えることで、さまざまな「仕事」を知る。 ・中華料理チェーン、不動産、保安、整体・マッサージ、衣服、中古品販売。						
第 6 回	自分のキャリアを客観的に捉える① ・架空の iU 生男子のキャリアを考えることを通じて、自分のキャリアを考える。						
第 7 回	自分のキャリアを客観的に捉える② ・架空の iU 生女子のキャリアを考えることを通じて、自分のキャリアを考える。						
第 8 回	まとめ ・2 年生のうちに高めておきたいビジネススキルは何か。 ・卒業までの目標。						
成績評価	授業への参加態度（70%）、授業における提出物（30%）から判断する。						

の方法	
準備学修 (予習・復習、 課題等)	各回テーマに応じた課題を毎回 30～60 分程度の予習・復習を行う。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	授業内で適宜指示する。
備考	事前学習→授業内の講義→グループ討議→各回のまとめ、という授業スタイルを繰り返します。
昨年度からの振り返り	グループ討議への積極的な参加姿勢、討議への貢献も成績の対象となります。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	2 年	学期	前期	科目分類	基礎科目
授業名	職業倫理					授業形態	講義
授業コード	BET112	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎島津 実伸、中井 良太						
授業概要	本授業では、ICT 業界で働く者として、コンテンツを作る上で最低限知っておくべき内容や、現代社会が持つ様々な課題事項への理解を深める。ケースメソッド、ゲスト講師の講義で最新の課題を取り上げながら、パワハラ、セクハラなどハラスメントの定義や対応方法、インターネット上で広告が炎上する理由、炎上の際の企業の適切な対処方法、metoo 運動が発生した背景や広がった理由など、企業の倫理、IT の倫理について考える。						
授業の目的・到達目標	企業人として必要となる倫理について基礎から学び、グローバル化した多様な社会の中で倫理的に判断し行動できるようになることを第一の目的とする。 具体的な達成目標としては 1. 職業倫理とは何かについて説明することができる。 2. 個人情報とプライバシーの問題について法的観点を含めて理解することができる。 3. ハラスメントの定義について理解し、その対処法を現実の問題に応用することができる。 4. ジェンダーについて多様な視点から問題点を理解することができる。 ことを挙げる。						
授業計画							
第 1 回	倫理とは：倫理とはどのようなものか、道徳や哲学とどう違うのかを学ぶ						
第 2 回	倫理学の基礎的考え方						
第 3 回	応用倫理としての職業倫理						
第 4 回	個人情報とプライバシー1：誹謗中傷						
第 5 回	個人情報とプライバシー2：プライバシー						
第 6 回	事例ディスカッション 1：小グループに分かれて個人情報とプライバシーに関する事例についてディスカッションする						
第 7 回	中間まとめ						
第 8 回	企業倫理と社会的責任						
第 9 回	企業の責任とハラスメント 1：企業にとってのインターネット						
第 10 回	企業の責任とハラスメント 2：ハラスメントとは						
第 11 回	事例ディスカッション 2：小グループに分かれて企業の責任とハラスメントに関する事例についてディスカッションする						
第 12 回	多様な社会に対応するための基礎的知識						
第 13 回	インターネット時代のジェンダー問題 1：セクシュアリティとジェンダー（1）						
第 14 回	インターネット時代のジェンダー問題 2：セクシュアリティとジェンダー（2）						
第 15 回	授業のまとめ						
成績評価の方法	最終レポート 60%、授業内レポート 40%						
準備学修（予習・復習、	あらかじめ各回の授業内容を提示しているため、その内容に沿った予習（90 分）、及び復習（90 分）を行うこと、また授業内容を確認するための課題を実施する。						

課題等)	

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	『改訂新版情報倫理』 高橋滋子 他（著)、技術評論社、2020 年、ISBN-13：978-4297110819 『現代社会の倫理を考える〈5〉職業の倫理学』 田中朋弘（著)、丸善出版、2002 年、ISBN-13：978-4621070581 『現代社会の倫理を考える〈3〉ビジネスの倫理学』 梅津光弘（著)、丸善出版、2002 年、ISBN-13：978-4621049921
備考	現代社会はこれまでの画一的な価値に従うものから、個々人の多様性に応じた多様な価値観を前提とした社会に変革しています。本授業を通して、社会の中でビジネスをしていく上で必要となる倫理を基礎から学ぶことで、多様な状況に自律的に対応できる力を身につけてください。
昨年度からの振り返り	抽象的な議論が分かりにくかったとの声があったため、具体的な例を増加して改善を図りました。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	2年	学期	前期	科目分類	基礎科目
授業名	先端グローバル社会					授業形態	講義
授業コード	LGS112	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	小林 久美子						
授業概要	過去から現在のグローバルで起きている変化、今後の人口動態と未来予測を踏まえた将来のグローバル社会の潮流を理解し、これらをICTが支える可能性について探求する。 具体的には持続可能な開発目標（SDGs）17のゴールをもとに、その概要と今日的な課題とそれに向けた取り組みの現状について概説する。また、グローバルな課題設定と自らの生活や学びがどのようにつながっているのかを考える。これらの学習を通じ、自分なりにグローバル社会に対し、ICTやビジネスなど本学での学びがどのように寄与していくのかを考える。 最終的にはテーマを絞り、個人・グループでの実行計画を策定する。						
授業の目的・到達目標	目的：持続可能な開発目標（SDGs）を実例で学ぶ。 目標：持続可能な社会の仕組みを理解し、自らが持つ課題へ関係づけることができるようになる。						

授業計画	
第 1 回	ガイダンス・地球と人間活動の関係性を解説する。
第 2 回	持続可能な開発目標（SDGs）
第 3 回	アンコンシャスバイアス（無意識の思い込み・偏見）
第 4 回	ソーシャルビジネス
第 5 回	災害とパンデミック
第 6 回	気候変動・環境破壊
第 7 回	エネルギー・水資源
第 8 回	貧困と飢餓
第 9 回	廃棄物
第 10 回	食品廃棄・フードロス
第 11 回	多様性・ジェンダー・少子高齢化
第 12 回	DX（デジタルトランスフォーメーション）
第 13 回	経済成長と企業の責任・役割
第 14 回	社会課題とステークホルダーの関係性
第 15 回	1回から14回のまとめ、持続可能な社会とは
成績評価の方法	授業内課題 50% 最終課題 50%
準備学修（予習・復習、課題等）	予習：テーマに関する文献リサーチ（45分） 復習：授業課題への取り組み（45分）

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	参考書・資料等は授業の中で適宜紹介する。
備考	
昨年度からの振り返り	グループワーク後の発表時間の配分を多くする。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	2年	学期	前期	科目分類	基礎科目
授業名	英語アカデミックリテラシー					授業形態	演習
授業コード	ALE112	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎Hug Jose、奥村 耕一						
授業概要	本授業では、英語をビジネスやICTの現場で活用し、コミュニケーションを図るだけでなく、海外の大学や国内外の研究機関で求められる発表能力を高めるものである。 具体的には、前半ではInternational Baccalaureate(IB)などを題材に、海外の大学レベルで求められる基礎能力や知識を概観し、そこで用いられる英語表現そのものとあわせて学ぶことで、国内外のアカデミックリテラシーの基礎を習得する。後半ではまた、ICT やビジネスの学術論文や製品・サービスの説明書を読み書きするために必要な語彙力、表現力を学ぶことで、アカデミックと実践を繋ぐための知識と方法論を習得する。						
授業の目的・到達目標	・海外の大学レベルで求められるアカデミックリテラシーの習得 ・英語でのレポートや論文に求められる語彙力、表現力などの習得						
授業計画							
第1回	オリエンテーション						
第2回	International Baccalaureate① (Studies in Language and Leterature)						
第3回	International Baccalaureate② (Language Acquisition)						
第4回	International Baccalaureate③ (Individuals and Societies)						
第5回	International Baccalaureate④ (Sciences)						
第6回	International Baccalaureate⑤ (Mathmatics)						
第7回	International Baccalaureate⑥ (The Arts)						
第8回	Documentation Writing①						
第9回	Documentation Writing①						
第10回	Documentation Writing②						
第11回	Academic Writing①						
第12回	Academic Writing②						
第13回	Write Paper Writing①						
第14回	Write Paper Writing②						
第15回	まとめ・発表						
成績評価の方法	各回の理解度・参加度・貢献度（80%） 最終発表（内容、方法など）（20%）						
準備学修(予習・復習、	各回ごとの課題に事前に取り組む。 配布された資料の単語などを辞書で調べておくとよい。						

課題等)	

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	各回ごとに資料を配布する。 参考文献： 『大学生のためのアカデミック英文ライティング：検定試験対策から英文論文執筆まで』 中谷安男（著)、大修館書店、2016 年
備考	
昨年度からの振り返り	各回の授業は、学生を主体とした「反転授業」の形式で行います。そのため、十分な準備をした上で授業に出席する必要があります。なお、準備学修に必要な資料等はすべて提供します。 授業時には能力や理解度を確認するため、課題に関する演習を行います。また、グループワークを取り入れ、グループへの貢献度も評価の対象となります。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	2 年	学期	後期	科目分類	基礎科目
授業名	科学史					授業形態	講義
授業コード	HSE112	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	大和 淳司						
授業概要	科学とは時間や空間を超えた普遍的なものと一般に考えられているが、人間の営みである以上、科学も歴史のなかで誕生し発展してきたものであり、その成果も歴史的な文脈によって規定されている。とりわけ近代科学は 17 世紀西欧社会において誕生したと考えられ、近世・近代日本における自然研究および近代日本への西欧科学の導入を、当時の歴史的文脈の中で理解することは、現代科学の理解にとっても重要である。以上をふまえ、本講義では「科学」とは何かについて歴史的に考察し、「科学」に対する理解を深めることを目的とする。						
授業の目的・到達目標	科学の発展してきた歴史を理解し、現在の科学技術文明がどのような背景を持っているかを説明できること。そうした文脈における現在の技術の価値と、今後の発展の方向性を予測し議論できるようになること。						
授業計画							
第 1 回	授業ガイダンスおよび科学史の意義とスコープ。 第 1 章「科学」という言葉 に沿って、科学、科学者について理解を深める。						
第 2 回	第 2 章 アリストテレス的自然観 に沿って、古代天文学、古代運動論のセントラル・ドグマについて理解し、素朴な直観との関係性、現代科学との関係性について議論する。						
第 3 回	第 3 章 科学革命（Ⅰ）に沿って、コペルニクス、ケプラーの発見を理解し、これに基づくセントラル・ドグマの破壊と新たな宇宙観について議論する。						
第 4 回	第 4 章 科学革命（Ⅱ）に沿って、ガリレオ、ニュートンによる発見と理論およびその位置づけを理解し、論証と実験の関係、天界と地上の統一理解への道筋について議論する。						
第 5 回	第 5 章 科学革命（Ⅲ）に沿って、デカルトの二元論と心身問題を理解し、心の哲学と現代の脳科学の関係について議論する。						
第 6 回	第 6 章 科学の制度化 に沿って、大学の成立と科学革命への流れを理解し、それらの現在に至る影響と特に日本における大学と科学の成立過程と現在の意義について議論する。						
第 7 回	第 7 章 科学の方法 に沿って、演繹法と帰納法について理解し、仮説演繹法とあわせて実際に使えるように基本的な訓練を実施する。						
第 8 回	第 8 章 科学の危機 に沿って、ラプラスの悪魔、非ユークリッド幾何学の発見、ニュートン力学の破綻と因果律の破れといった、数学、物理学の危機について議論する。						
第 9 回	第 9 章 論理実証主義と統一科学 に沿って、ラッセルの論理結合記号による定式化を理解し、ヴィトゲンシュタインの論理哲学の概要と検証可能性の概念について議論する。						
第 10 回	第 10 章 第 11 章 第 12 章 を概観し、カール・ホパーの反証可能性、プラグマティズム、クーンのパラダイム論について理解し、各々の関係と歴史的位置付けについて議論する。						
第 11 回	第 13 章 科学社会学の展開 に沿って、科学社会学の成立過程を理解し、マートンノルムとストロングプログラムを背景として発生したソーカル事件の意味について議論する。						
第 12 回	第 14 章 科学の変貌と科学技術革命 に沿って、日本における「科学技術」という語の成立背景と、2 つの大戦を経て成立した産業科学技術とその規範について議論する。						
第 13 回	第 15 章および補章 に沿って、科学技術の倫理について理解し、科学技術社会論（STS）に基づき 3.11 以降の科学技術の信頼と責任とリスクについて議論する。						
第 14 回	計算機科学の歴史を概観し、高速化、高集積化の流れに基づく世代論と同時に、集中と分散						

	を繰り返した過程について必然性と偶然性の分析に基づき議論する。
第 15 回	ネットワークとソフトウェアの歴史を外観し、工学的発展と社会的役割の変遷と社会における受容過程について科学史的に基づき開発側ユーザ側の双方の視点で議論を行う。
成績評価の方法	定期試験 50%、授業内での提出物 35%、授業内での発言等の貢献度 15%
準備学修(予習・復習、課題等)	予習：各回の教科書指定範囲を読んでおくこと。 復習：授業の振り返りとして新たな用語を調べてノートに書くこと。課題のある回はこれを実施する。 予復習と合わせて 2-4 時間程度

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
科学哲学への招待	野家啓一	ちくま学芸文庫	978-4-480-09575-6	

参考書	必要に応じて資料を配布
備考	
昨年度からの振り返り	教科書以外に科学史を学ぶのに良いものを、との声がありましたのでいくつか紹介します。「科学史・科学哲学入門」(講談社学術文庫) をはじめとする村上陽一郎氏の著作は定番です。物理や宇宙に関してでしたら、村山斉氏、大栗博司氏の著作が新書で読みやすいものが多いです。コンピュータ史については、Amazon kindle unlimited で無料で読める「レトロハッカーズ」のシリーズが楽しいでしょう。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	2年	学期	後期	科目分類	基礎科目
授業名	ICTと人間					授業形態	講義
授業コード	HBI112	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎佐藤 千尋、有馬 俊						
授業概要	日々進化するICTは、個々の要素が著しく進歩しつづけているだけでなく、急速に私たちの日常生活の中にも導入されている。よって、言葉だけは聞き慣れていても、基本的な技術や性能を理解しないまま誤用してしまう場合もある。本講義では、光、電気、電波、などの基礎知識から、情報の量や単位、情報の品質に直結する通信の速度、文字データの標準や音声・画像・映像などのマルチメディア技術と適用、企業活動や事業活動の中で汎用化している技術やプロセス、身の回りのインターネットサービスの種類と活用方法など、一般社会人に求められる社会基盤としてのITに関する活用知識を修得する。						
授業の目的・到達目標	本授業では前半に様々なICT技術を活用したプロトタイピングを実現するための基本的なリテラシーを、後半にそれらの技術をいかに人間の社会や生活を豊かにするために応用していくかの基礎的な方法論を学んでいく。この両輪を軸に調査、制作、評価の一連のサイクルから経験的にものづくりのコンピテンシーを身に付けることを目的とする。						
授業計画							
第1回	オリエンテーション 今後の授業の進め方を説明する						
第2回	情報伝達デザイン 様々なリソースを活用した情報の伝え方を考え、情報伝達、コミュニケーションデザインについて学ぶ						
第3回	情報編集1 記事制作の実践を通して情報の編集技法について学ぶ						
第4回	情報編集2 記事制作の実践を通して情報の編集の効果や危険性について学ぶ						
第5回	インタラクティブなプロトタイプ設計1 既存のICT技術を活用したインタラクティブなプロトタイプの設計について学ぶ						
第6回	インタラクティブなプロトタイプ設計2 既存のICT技術を活用して実際にインタラクティブなプロトタイプを制作する						
第7回	デザインを行うための基礎知識 デザインを行うために必要な基礎的な知識や進行手順を学ぶ						
第8回	調査の分析とアイディエーション デザインコンセプトに至るまでの調査内容の分析とアイディエーションを行う						
第9回	デザインコンセプト制作 デザインコンセプトを具体的に決定する						
第10回	プロトタイプ作り／コンセプトビデオ制作1 デザインコンセプトを実現するためのプロトタイプの制作						
第11回	プロトタイプ作り／コンセプトビデオ制作2 デザインコンセプトを紹介するコンセプトビデオの制作						
第12回	プロトタイプ作り／コンセプトビデオ制作3 最終発表のための発表資料制作						

第 13 回	映像制作 1 簡単な映像制作を通して基礎的な映像撮影技法を学ぶ
第 14 回	映像制作 2 簡単な映像制作を通して基礎的な映像編集技法を学ぶ
第 15 回	最終発表 各チームの成果物の発表と共有
成績評価の方法	70％ 課題提出（課題提出率／締め切り順守度／課題作品のクオリティ） 30％ 最終発表の内容（グループ評価）
準備学修（予習・復習、課題等）	毎回授業の課題制作を通して予習、復習とみなす。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	
備考	多くの作業がグループワークになります。また、グループワークの課題は個人ごとではなくグループごとの評価になります。
昨年度からの振り返り	スケジュールを調整した。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	2年	学期	後期	科目分類	基礎科目
授業名	英米文学演習					授業形態	演習
授業コード	ELR112	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	阿部川 久広						
授業概要	本授業は英米文学を題材とし、英文解釈（単語、構文理解、文法など）を行うだけでなく、その作品が作られた時代背景、文学上の位置付け、著者の作り出した世界観などを学ぶものである。英米文学の代表的な作品のいくつかをピックアップし、英米文学における代表的な作品を選出し、その中の主題となる記述をもとに授業を展開する。音読や精読を中心として内容を解釈し、その時代背景、文学上の位置付け、著者の作り出した世界観などを学ぶ。本授業を通じ、英語表現を身につけるだけでなく、真の意味での人間に対する深い洞察力を養い、グローバルな環境での議論に耐えうる世界観、人生観を構築するための武器としての教養をあわせて身につける。						
授業の目的・到達目標	・英米文学の英文解釈を通じて英語力の向上を図る。 ・英語圏の歴史や文化的な背景、世界観の理解を通じた教養を身につける。						
授業計画							
第1回	導入編～文学とは君たちにとって何だったか（議論＋課題） アメリカ文学のテーマと全体像 Herman Melville ″Moby Dick″ -1 精読、音読						
第2回	Herman Melville ″Moby Dick″ -2 精読、音読 バケモノの子						
第3回	Mark Twain 人と時代 Mark Twain ″Adventures of Huckleberry Finn″ -1 精読、音読						
第4回	Mark Twain ″Adventures of Huckleberry Finn″ -2 精読、音読						
第5回	フィッツジェラルドの歴史的位置づけ、その影響 F. Scott Fitzgerald ″The Great Gatsby″ -1 精読、音読						
第6回	F. Scott Fitzgerald ″The Great Gatsby″ -2 精読、音読 華麗なるギャツビー						
第7回	アメリカ文学の巨星としてのフォークナー William Faulkner ″The Sound and Fury″ ″Light in August″ 他-1 精読、音読						
第8回	William Faulkner ″The Sound and Fury″ ″Light in August″ 他-2 精読、音読						
第9回	ロストジェネレーション、テーマと文体、短編 Ernest Hemingway ″A Farewell to Arms″ ″The Old Man and the Sea″ ″A Day's Wait″ 他-1 精読、音読						
第10回	Ernest Hemingway ″A Farewell to Arms″ ″The Old Man and the Sea″ ″A Day's Wait″ 他-2 精読、音読						
第11回	カズオイシグロは、日本人作家か Kazuo Ishiguro ″Kulala and the Sun″ 他-1 精読、音読						
第12回	カズオイシグロは、日本人作家か Kazuo Ishiguro ″Kulala and the Sun″ 他-2 精読、音読						
第13回	日米をつなぐ作家　村上春樹 ノルウエイの森 Norwegian Wood（日本語英語）精読、音読						

第 14 回	音楽と文学 Beatles ″Norwedgian Wood″ ″No Reply″ ″Nowhere Man″ ″In My Life″ ″Hey Jude″ ″Let it Be″ 他
第 15 回	君たちにとって、これから文学は何なのか～議論～レポート 予備：Hemingway、Shakespeare、The Police、Paul Auster や Queen、Eagles などから （14 回の講義からの補遺）
成績評価の方法	(1) 出席した上での、クラスでの意見発表や討議の回数と内容 60% (2) 講義ごとのレポート内容 20% (3) レポート（最終提出）20%
準備学修（予習・復習、課題等）	講義で扱う作家のうち、少なくとも一人の作品を 1 作品以上、日本語で良いので読んでおくこと。Beatles など楽曲のあるものは少なくとも 2 曲以上、聴いてくること。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
講義アメリカ文学史入門編	渡辺利雄	研究社	978-4-327-47222-1	

参考書	「ヘミングウェイで学ぶ英文法」 倉林秀男（著）、河田英介（著）、アスク出版、2019 年、ISBN978-4-86639-280-6
備考	1. 講義に積極的に参加ください（議論、音読）そして読むことを楽しんでください。 2. 講義で扱う書籍には限りがあります。自分の好きな英米小説、できれば一生読み続けられるものを、大学在学中に 1 つでもいいので見つけてください。
昨年度からの振り返り	1. Shakespare、Faulkner について解説する時間を設けるよう講義を調整します。 2. 講義で取り扱う予定以外でも、注目すべき作家（Paul Auster、Stuart Dybek、Rebecca Brown など）は極力、取り上げます。 3. Queen の楽曲も極力、取り上げます。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	3年	学期	後期	科目分類	基礎科目
授業名	キャリアデザインⅡ					授業形態	講義
授業コード	CD2111	単位数	1単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎富澤 豊、安藤 健、曽和 利光						
授業概要	入学からインターンシップまでの3年弱の学習や経験を通じて得たこと、感じたことを振り返り、卒業後の活躍を見据えたキャリアプランやキャリアを考える要素となる今日的な話題、考え方について学習を進める。 大学生活の中での活動を履歴書やポートフォリオ、キャリアカルテに整理することで、これまでの振り返りと自己理解を深める。また、インターンシップでは、実際の企業などで実践的な業務を行ってきた。この経験の中で考えた職業人として必要なスキル、知識、社会人基礎力について整理し、今後の大学生活において何を実現させていくのか、そのためにどのような学びを深めるのかを考え、キャリアプランや行動計画を作成する。キャリアに関する今日的な話題を取り上げることで、多角的に自己や周囲のキャリアについて興味関心を持ち、主体的に学び選択していく素地を作る。 上記を通じ、残る大学生活や今後の職業人生に対し、主体的に行動する、選び取るための意識と判断基準を持つことを目指す。						
授業の目的・到達目標	これまでの学習やインターンシップを経て得た学びをもとに、自分や周囲のキャリアプランや職業選択を主体的に行うための意識づけ、判断基準を持つ。						
授業計画							
第1回	実習の振り返り ・臨地実務実習を振り返る。 ・後輩に伝えたいことは何か。 ・隣地実務実習の成果を自分のキャリアにどのように活かすか。						
第2回	ワーカーとしての働き方を考える ・新規事業開発に関係する動画を視聴する。 ・その動画の中で、働く側（ワーカー）の立場を理解する。 ・ワーカーとしてどのようなスタンスで職務を遂行すべきか考える。						
第3回	経営者としての働き方を考える ・新規事業開発に関係する動画を視聴する。 ・その動画の中で、経営者（リーダー）の立場を理解する。 ・経営者としてどのようなスタンスで職務を遂行すべきか考える。						
第4回	自分の人生を振り返る① ・「人生すごろく～金の糸」を実施する。 ・小学生時代の自分を振り返り、現在の意思決定や価値判断に共通する部分を探す。						
第5回	自分の人生を振り返る② ・「人生すごろく～金の糸」を実施する。 ・中学生・高校生時代の自分を振り返り、現在の意思決定や価値判断に共通する部分を探す。						
第6回	自分のキャリアプランを考える① ・管理職になることの意義を考える。 ・自分のワークライフバランスを考える。						
第7回	自分のキャリアプランを考える② ・自分はどのようなパートナーとともに生きるのか考える。						

	・自分はなんのために働くのか考える。
第 8 回	iU 生としてのキャリアを考える ・一国の首相といえども家庭人か、公人か。 ・人はなんのために働くのか。 ・経営者とはなんであるのか。 ・iU 生のキャリアとはなんであるのか。
成績評価の方法	授業への参加態度（70%）、授業における提出物（30%）から総合的に判断する。
準備学修（予習・復習、課題等）	事前準備学習 30 分～60 分。当回の振り返りのための復習 30 分程度。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	教科書を含め、必要な資料を適宜配布する。
備考	
昨年度からの振り返り	「キャリアデザインⅠ」と同じスタイルで実施いたします。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	1年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	マネジメント（経営学基礎）					授業形態	講義
授業コード	IMG121	単位数	2単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	三澤 一文						
授業概要	イノベーションは、科学・技術に関する革新的な発明や発見だけでなく、コンビニエンスストアや宅急便のような新しいビジネスのしくみを生み出すこともその一つである。近年は、日々、進歩するICT（インターネット、人工知能、仮想・拡張現実、ロボット、など）を効果的に活用することで、ますます、イノベーションを起こし易くなっている。 本授業では、経営学における戦略論や組織論の観点から、イノベーションを（偶発ではなく）体系的に生み出す戦略（狙い）や組織・プロセス（進め方）の考え方の基礎を学習する。具体的には、経営論の構成要素を概観するとともに、戦略の策定や具体化に必要な理論やフレームワーク、将来予測、成長戦略など経営戦略に関する事項や、組織や個人のマネジメントに関する諸理論について、各回毎提示される事例の分析や課題の検証を通じ修得する。これらの学習を通じ、ビジネスの実践を効果的、効率的に行えるよう、学習を深める。						
授業の目的・到達目標	イノベーションにかかわる経営戦略・組織論である「イノベーション・マネジメント」の基礎を習得する。本授業を履修することで、必修科目の「イノベーションプロジェクト」を始め、他の授業科目の学習を円滑に進めることができ、また、起業を含む今後の具体的ビジネスの実践が効果的、効率的になる。具体的には、ビジネスのアイデアを顧客への新たな価値提供に結び付け、事業として成長させる方法と進め方を、毎回の授業で、段階を追って学習する。						
授業計画							
第1回	イントロダクション： なぜ経営学を学ぶのか？ 本授業で学習する講義の全体像と方法論の概要						
第2回	組織論の基礎（1）： 周囲の変化に気づかず徐々に凋落してしまわないためには？ 意思決定の単純化、集団と個人の意思決定の特徴、非言語を含めたコミュニケーション						
第3回	組織論の基礎（2）： 周囲の変化をいち早く察知してイノベーションを起こすには？ 試行錯誤の継続、規律ある組織的実行力、直観を活かしながら目的を追求するリーダーシップ						
第4回	戦略論のステップ1： なぜ多くの人は未来に目を向けないのか？ 未来予測の限界を超えるシナリオ計画法、イノベーションの普及曲線、イノベーションを妨げる組織の特徴						
第5回	戦略論のステップ2： 新ビジネスのヒントと成功の要因を発見するには？ 市場・顧客セグメンテーション、大きな社会変化への着眼、ビジネスの流れの大局把握と競合調査						
第6回	戦略論のステップ3： 顧客に新しいメリットを提供できる有望な事業や製品を企画するには？ 市場の成熟度評価、競争環境の分析、ブルーオーシャン戦略						

第 7 回	戦略論のステップ 4： イノベーションを実際に起こすための方策は？ 顧客起点の発想、3 つの典型的な戦略、イノベーションと商業化の両立
第 8 回	戦略論のステップ 5： 戦略の実行の際に直面する典型的な問題は？ 強みや機会の活かし方、弱みや脅威への対応策、客観的判断と主観的判断の両立
第 9 回	戦略論のステップ 6： 戦略実行のいくつもの困難を乗り越えるには？ 実行組織のハード面とソフト面の両利き、有形資源と無形資源の活用、理論と実践の両立
第 10 回	戦略論のステップ 7： イノベーションを継続して成功させるには？ 顧客第一主義の徹底、周辺事業への段階的拡大、サービタイゼーション（ICT 活用のサービス化）
第 11 回	戦略論のステップ 8： ビジネスを長期的に成長し続けられる組織になるには？ 明確な長期ビジョン、日々の活動の使命と行動指針、単なる経済的成功を超える究極の目的
第 12 回	戦略論のステップ 9： イノベーションの実現をスピードアップさせるには？ 外部資源の効果的活用、顧客中心の仕事の流れと連携、ストリートスマート（実践的知恵）
第 13 回	戦略論のステップ 10： 起業を成功させるための基本法則は？ リーンスタートアップ（無駄なく素早く繰り返し改良する）、ICT 活用によるサービス品質の格段の向上、事業の買収・提携戦略
第 14 回	全体振り返り： 授業全体の総括と質疑応答、自由討議
第 15 回	授業内期末レポート： 本授業を通じての気付きや発見、将来のビジネスに応用したいこと、などについて授業内でレポートを作成する
成績評価の方法	毎回の授業内討議への参加、発表：40％ 毎回の授業課題の提出：30％ 授業内期末レポート：30％
準備学修（予習・復習、課題等）	毎回の授業内クラス討議を円滑に進めるために、授業前に UNIPA に掲示する講義資料や教科書の読了などの予習（毎週 1～2 時間程度）が必要。 毎回の授業の課題を指定期日までに UNIPA にアップすること。 第 15 回授業での授業内期末レポートの作成方法については、別途、担当教員から指示する。

教科書

書名	著者	出版社	ISBN	備考
チーズはどこへ消えた？	スペンサー・ジョンソン	扶桑社	4-594-03019-X	本書の電子図書版も可

参考書	『コア・テキスト イノベーション・マネジメント』 近能善範（著）、高井文子（著）、新世社、2010 年、ISBN978-4-88384-158-5 本授業では第 1、3、4、5、9、11、12 章を参考書として学習する（他の章は 2 年次の「オペレーションズ・マネジメント」の授業で学習予定）。
備考	「マネジメント（経営学基礎）」の方法論はビジネスだけでなく広範囲に多くの場面でも応用

	できますので、学内外のプロジェクトや日常生活でも活用する（練習する）ようにこころがけてください。
昨年度からの振り返り	昨年度授業のフィードバックにもとづき、毎講義の授業内グループ討議の学習効果を上げるため、学生間の相互学習がさらに図れるようにする。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	1年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	マーケティング基礎					授業形態	講義
授業コード	MK1122	単位数	2単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎富澤 豊、織戸 恒男						
授業概要	マーケティングの基礎的な概念とその発想法を習得することで、情報通信技術を用いたビジネスやサービスを検討する中で、実務としてマーケティング戦略の立案、戦術の策定ができるようにする。 具体的にはビジネスの現場で活用するためのマーケティングの基本的な知識やスキル、理論を幅広く学ぶ。身近な商品・サービスの実例を用いて、経営に欠かせないマーケティングの基礎知識を理解する。あわせて、デジタルマーケティングやソーシャルメディアを活用したマーケティングなど今日的な話題を学ぶことで、ビジネスの現場でマーケティングを活用するための知識・スキルを習得する。						
授業の目的・到達目標	マーケティングの基礎理論を理解し、情報通信技術とビジネス、マーケティングとの関係性と実践方法を説明できるようになる。						
授業計画							
第1回	●授業内容 マーケティングとは何か ●目標 マーケティングの重要性の理解。起業との関係性。 ●理解すること 稼ぐこと、儲けること、ビジネスにおけるマーケティングの意義。						
第2回	●授業内容 マーケティングの基本的な考え方 ●目標 人間の基本的行動とマーケティングの関係性。 ●理解すること 日常の何気ない行動に潜んだマーケティング活動。						
第3回	●授業内容 STP戦略①Segmentation ●目標 視点を多角的に持つことの重要性の理解と会得。 ●理解すること あらゆる分野を広く学ぶべきなのはなぜか。						
第4回	●授業内容 STP戦略②Targeting、Positioning ●目標 ポジショニング戦略の理解とその実践方法の会得。 ●理解すること さまざまな距離感をつかむことの重要性。						
第5回	●授業内容 4P・4C①Product ●目標 自らが関わる製品・サービスの価値とは何かを理解する。						

	●理解すること 品質とはなにか。
第 6 回	●授業内容 4P・4C②Price ●目標 自らが関わる製品・サービスはどのような価格設定をすればよいのかを理解する。 ●理解すること 価格戦略。買ってもいいと思う瞬間のこと。
第 7 回	●授業内容 4P・4C③Promotion ●目標 自らが関わる製品・サービスをどのように広めるのがよいのかを理解する。 ●理解すること 「伝説」とは何か。
第 8 回	●授業内容 4P・4C④Place ●目標 自らが関わる製品・サービスはどのような売り方をすればよいのかを理解する。 ●理解すること 顧客接点の重要性。
第 9 回	●授業内容 ネーミングとパッケージ ●目標 名前・外観がもたらす効用について理解する。 ●理解すること 第一印象の重要性。
第 10 回	●授業内容 サービス・マーケティング ●目標 対顧客もしくは見込み顧客にどのようなサービスを提供すればよいのか理解する。 ●理解すること カタチのないものを提供すること。
第 11 回	●授業内容 マーケティング・リサーチ ●目標 事業戦略、市場戦略を考えるうえで必要なマーケティング調査について理解する。 ●理解すること 市場分析の意味。
第 12 回	●授業内容 GIS マーケティング ●目標 エリアマーケティングの最新手法を理解し、自らの事業への活用を検討する。 ●理解すること 地域特性を考慮したマーケティングの考え方について理解を深める。 地域データのデジタル化はどこまで可能か。
第 13 回	●授業内容

	Web マーケティング ●目標 手軽であるがゆえに難しい Web に関するマーケティングを理解する。 マーケティングの今日的な手法について理解を深める。
第 14 回	●授業内容 スポーツマーケティング ●目標 世界規模のイベントで用いられるマーケティング手法を理解する。 ●理解すること 儲ける仕組みづくり。
第 15 回	●授業内容 マーケティングの未来 ●目標 これまでの振り返りをし、マーケティングを体系的に捉え、自らの事業への活用法を適切に説明できる。 ●理解すること 1 回目から 14 回目の授業内容。
成績評価の方法	・各回での事例検討レポートおよび授業態度・参加度（40%） ・期末のレポート（60%）
準備学修（予習・復習、課題等）	毎回の授業内容について、事前に教科書などをよく読み、当回についての課題をやってから授業に臨むこと。 授業では、当回の内容を確認し（約 30 分）、学生からの発表をもとに、討議中心に行うものとする。 【授業サイト】 「とみざわのマーケティング基礎」※iU の Google アカウントからのみ閲覧可。 https://sites.google.com/i-u.ac.jp/tomizawa/mkiso_home?authuser=1

教科書

書名	著者	出版社	ISBN	備考
戦略的想像力を養うマーケティングの着眼点	富澤豊	祇園書房	9798412436944	Amazon でのみ購入可能

参考書	
備考	この科目は「大学等における修学の支援に関する法律」において本学が申請した実務経験のある教員による授業科目です。
昨年度からの振り返り	事前学習をしたうえで、教員との討議中心に行います。随時グループ討議も行います。指定教科書および必要な書籍をよく読んでから授業に参加すること。討議への参加態度、協力的な姿勢も評価に入ります。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	1 年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	法務リテラシーⅠ					授業形態	講義
授業コード	LL1123	単位数	2 単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	境 真良						
授業概要	IT／ICT 事業に関わる、あるいは自ら起ち上げ、実施していく上で、社会制度としての法システムへの理解はかかせない。我が国の法システムの概要を、民事法・経済法の領域を中心に解説していく。その中で、法規定の形だけでなく、それがどのように執行され事業における得失をどう生み出していくのかという視点から、理解を深める。						
授業の目的・到達目標	以下の点についてその概要を理解する。 ・我が国の法システム ・民法のしくみと機能 ・商法と競争法の仕組みと機能 ・労働法の仕組みと機能						
授業計画							
第 1 回	ガイダンス～我が国の法と法システム 「法律」／三権分立と司法システム／判例とは何か／人権／憲法						
第 2 回	民法（1）～基本的考え方 人、契約、債権・債務関係、債務履行／正常な過程と異常な過程／法人／法律行為						
第 3 回	民法（2）～契約 契約の成立／契約の内容と効果／契約の終了／契約の限界						
第 4 回	民法（3）～債権 契約と債権／債権／債権の消滅と契約の終了						
第 5 回	民法（4）～物権 物権／物権とその効果／権利の衝突とその解決						
第 6 回	民法（5）～民法編のまとめ 契約／権利・義務関係の変動と対抗要件／民法の狙い						
第 7 回	商事法（1）～商事法制と会社 商法と民法／商行為／会社／法人の種類／株式会社とは						
第 8 回	商事法（2）～企業と金融 会社の設立／資本金と株式／会社の運営／会社の終了と再生						
第 9 回	商事法（3）～企業と資金調達 融資と投資／大量な決済処理の手法／企業を巡る債権債務と企業会計						
第 10 回	商事法（4）～競争を巡る法制 「正しい」商行為／外観を巡る規律／競争と競争法制						
第 11 回	労働法制概論 雇用契約と労働契約の主類型／雇用・労働関係規律の基本思考／労働法の役割						
第 12 回	刑事罰と不法行為 民事法と刑事法の不法行為／両罰規程／適用の考え方とその異同						
第 13 回	裁判（1）～概観 司法の独立／民事裁判と刑事裁判／裁判と判決の効果／親告罪						
第 14 回	裁判（2）～権利行使としての裁判						

	民事裁判のプロセス／保全手続／本訴／民事執行／法務戦略のデザイン
第 15 回	まとめ 総括／契約と契約書の意義／形式と実体とその解離とその限界／企業経営と法務
成績評価の方法	毎授業時実施するグループワーク及び中間レポート 50% 期末テスト（リモート授業時は期末レポート）50%
準備学修（予習・復習、課題等）	法令については、授業時に主要部分抜粋を配布するので、事前に目を通しておくこと。また、授業時に次回の主要事項を指示した場合には、インターネットなどで事前調べをしておくこと。なお、授業で言及する話題は情報技術、経済原理や現実のサービス動向、商品動向まで多岐に及びますが、授業で言及したキーワードについては、インターネットなどで関連分野のことがらと共に調べること（各回 30～60 分程度は必要）

教科書

書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	授業時に毎回レジュメ及び必要により参考資料を配布する。 参考文献： 事業時に参照した法令は、適宜 e-Gov 法令検索（http://elaws.e-gov.go.jp/search/elawsSearch/elaws_search/lsg0100/）などで調べること。 産業動向や業界事情については、ITmedia（http://www.itmedia.co.jp/）や CNET Japan（http://japan.cnet.com/）など各種情報通信関連サイトなどに定期的に目を通し、最新の状況をキャッチアップすること。
備考	
昨年度からの振り返り	全体量、構成は一定の完成型にはいったと考える。 労働法については、全く触れないというのはシラバスと乖離が大きすぎるので、修正したが、完成年度以降、見直したい。 授業後半のグループワーク＋発表についてはよい手法だと考えているが、ケースのデザインにはまだ改善の余地があり、より工夫を凝らしたい。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	1 年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	アカウンティング入門					授業形態	講義
授業コード	AC1123	単位数	2 単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施しない
担当教員	中嶋 隆一						
授業概要	ICT の進歩により飛躍的な発展を遂げるビジネス社会で有為な人材として活躍するためには、ビジネス社会の共通言語である会計を学ぶことが重要である。この授業では、会計を初めて学ぶ人達を対象に、会計の全般的で基礎的な内容を平易に解説する。会計といえば、一般的に企業会計を意味することが多い。会計情報は企業を取り巻く各種ステークホルダー(利害関係者）の意思決定に利用されるからである。そこで、企業において会計が果たす役割を外部報告会計（財務会計）と内部報告会計（管理会計）という 2 つの相互関連する視点で取り扱い、会計の基本的な考え方とその守備範囲についてわかりやすく説明する。						
授業の目的・到達目標	ICT を利用してビジネス社会で活躍する人材の育成をめざし、必要とされる会計の基礎知識を広く習得することを目的としている。これにより、会計の基本的考え方・必要性が理解できるようになる。とりわけ、会計情報の重要性をより深く学び、会計をビジネスのツールとして利用できるようになることが目標である。						
授業計画							
第 1 回	ガイダンス・・・会計とは何だろう。会計は何に役立つのだろう。 －会計の意義・目的・仕組みについて－						
第 2 回	会計について深掘りする。 －会計の対象、会計の分類、会社の健康チェック－						
第 3 回	会計情報の重要性を理解する。 －財務 3 表（B/S、P/L、C/F）の係わり－						
第 4 回	会社の財政状態表示とは －貸借対照表（B/S）のひな形と表示内容－						
第 5 回	会社の経営成績表示とは －損益計算書（P/L）のひな形と表示内容－						
第 6 回	キャッシュの流れを考えよう。 －キャッシュ・フロー計算書（C/F）のひな形と表示内容－						
第 7 回	財務諸表作成のプロセス① －簿記のルール：仕訳と転記の基礎－						
第 8 回	財務諸表作成のプロセス② －簿記のルール：仕訳と転記の確認－						
第 9 回	財務諸表作成のプロセス③ －簿記のルール：試算表（T/B）の作成－						
第 10 回	財務諸表作成のプロセス④ －簿記のルール：精算表（W/S)、決算書（F/S）の作成－						
第 11 回	財務諸表作成のプロセス⑤ －簿記一巡の手続きの確認－						
第 12 回	会社に影響を及ぼす会計制度 －日本における企業会計法の概要－						
第 13 回	会計の基本的前提条件						

	－会計の理論構造－
第 14 回	外部報告会計と内部報告会計について －財務会計と管理会計の範囲－
第 15 回	管理会計の考え方 －コーヒー缶の値段のつけ方－
成績評価の方法	授業内小テスト・レポート・課題プレゼンテーション等を含む平常点 30% 最終試験 70%（授業範囲すべてを含む）
準備学修（予習・復習、課題等）	予習：毎回完結型のテーマによる授業のため、関連する事例等をインターネット等で調べておく。 復習：授業時に適宜配布するレジュメ（グーグルクラスルームより配信）と講義内容の復習。授業時に適宜課す課題（グーグルクラスルームより送受信）については平常点に係るので、提出準備をしておく。 （あわせて 1 時間程度）

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	すべてオリジナルのレジュメ形式で毎回配布する。 参考文献： 『会計学入門（第 5 版）』 櫻井久勝（著）、日経 BP、2018 年 『日商簿記 3 級合格テキスト・日商簿記 3 級合格トレーニング』（最新バージョン） TAC 株式会社 『会計学基礎論 第六版』 神戸大学会計学研究室（編）、2019 年 『管理会計入門〈第 2 版〉』 加登豊（著）、梶原武久（著）、日経 BP、2017 年 『管理会計・入門（第 4 版）』 浅田孝（著）、頼誠（著）、鈴木研一（著）、中川優（著）、佐々木郁子（著）、有斐閣アルマ、2017 年 その他テーマごとに適宜提示する。
備考	授業クラスごとに設定したグーグルクラスルームで授業用資料を配布・連絡します。 履修者はこちらからの連絡後、速やかに所属するクラスルームへ登録し、資料を授業前に用意して授業に臨んで下さい。
昨年度からの振り返り	会計（アカンティング）は、簿記と共にビジネスの世界の共通言語とされ、大変重要である。とはいえ、昨年度からの授業では、当初オリジナルな用語の使い方、内容の難しさに、会計を苦手とする学生が多かった。 そこで、その基礎となる簿記システムの初歩を学ぶことにより、会計の内容をより理解しやすくなるように工夫している。全 15 回という短期間で会計のすべてを網羅・解説することは難しいが、この授業では簿記一巡の手続きについて 3 分の 1 の時間を割いている。簿記は会計を学ぶ上での基礎知識であり会計ではないが、これを学ぶことにより、少しでも難しいあるいは苦手とされやすい会計に興味を持ち、その重要性が理解されることを期待する。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	2 年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	オペレーションズマネジメント					授業形態	講義
授業コード	OPM121	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	三澤 一文						
授業概要	企業の現場にとって、「価格競争に陥らないような独創的な製品やサービスを開発したい」「製品開発のスピードで他社より勝りたい」「コスト競争力をもっと上げたい」「高い品質で顧客に満足してもらいたい」といった要望に応えられる方法論はたいへん重要である。 本授業では、企業の活動全般（製品・サービスの企画開発、原材料や部品の調達、生産、流通、販売、経営管理、など）を対象に、いかなる企業にとっても重要なコスト削減や時間短縮、品質向上、顧客満足度向上を実現するオペレーション（仕事の進め方や日々の仕事のやり方）の構築・改善・改革の方法論を学ぶ。						
授業の目的・到達目標	無理にものづくりやサービス開発のスピードを上げると、出来上がりの品質が悪くなる可能性がある。また、製品の訴求力にこだわり過ぎるとコスト競争に勝てなくなる可能性も高まる。このように、現実に、ものづくりやサービス開発を成功させるには、これらの相反、矛盾する複数の要望のあいだでの微妙な調整が欠かせない。 本授業を受講することで、以上のような、企業のものづくりやサービス開発の現場で実際に起きている典型的な問題とその原因を理解し、さらにそれらの問題の解決方法を習得することができる。						
授業計画							
第 1 回	イントロダクション： オペレーションとは「物事を巧みに行うための方法・手段」「仕事の進め方や日々の仕事のやり方」 本授業全体の概要紹介						
第 2 回	オペレーションズマネジメントの基礎理論（1）： なぜ、オペレーションズマネジメントはイノベーションに必要不可欠なのか？ 品質・コスト・スピードの新しい均衡関係をデザインする QCD 理論						
第 3 回	オペレーションズマネジメントの基礎理論（2）： なぜ、あの企業は継続してロングセラー商品を生み出せるのか？ ロングセラー商品を生み出すための PLM（プロダクト・ライフサイクル・マネジメント）理論						
第 4 回	独創性開発のイノベーション（1）： なぜ、企業は不毛な値引き競争に陥るのか？ 類似サービス・商品の間で没個性化し、無用に汎用化を進めてしまうコモディティ化の罠						
第 5 回	独創性開発のイノベーション（2）： サービス・商品の独創性を持続させる脱コモディティ化の戦略とは？ 脱コモディティの 5 つの戦略						
第 6 回	スピードアップのイノベーション（1）： なぜ、新規事業の開発は滞るのか？ 新商品・新サービスの立ち上げスピードを著しく低下させるサイロ化現象						
第 7 回	スピードアップのイノベーション（2）： 新規事業・製品開発のスピーディな進め方とは？ スピーディに新商品・新サービスの立ち上げるためのプロセス（仕事の流れ）						

第 8 回	コスト削減のイノベーション（1）： なぜ、コストは思うように下がらないのか？ 見えるコストと見えないコストの両方のコスト削減の重要性
第 9 回	コスト削減のイノベーション（2）： ZARA と H&M の 2 社のコスト削減方法の大きな違いは？ モジュール化、アウトソーシング、サプライチェーンマネジメント（SCM）
第 10 回	品質向上のイノベーション（1）： 日本製は本当に品質が良いのか？ 品質の考え方の 3 つの変化（定義の変化、範囲の変化、基準の変化）
第 11 回	品質向上のイノベーション（2）： 顧客満足を格段に上げる品質向上の方策とは？ リピート購入率が高い顧客を増やすための NPS（ネット・プロモーター・スコア）
第 12 回	今後のオペレーションズ・マネジメントの方法論（1）： なぜ、企業は AI をうまく使いこなせないのか？ オープン・イノベーション、デジタル SCM、コクリエーション
第 13 回	今後のオペレーションズ・マネジメントの方法論（2）： 日本の DX（デジタルトランスフォーメンション）の成功率を高める方法は？ DX を成功させる組織体制と具体的な進め方の企業事例
第 14 回	全体振り返り： 授業全体の総括と質疑応答、自由討議
第 15 回	授業内期末レポート： 本授業を通じての気付きや発見、将来のビジネスに応用したいこと、などについて授業内でレポートを作成する
成績評価の方法	毎回の授業内討議への参加、発表：30％ 毎回の授業課題の提出：40％ 授業内期末レポート：30％
準備学修（予習・復習、課題等）	毎回の授業内クラス討議を円滑に進めるために、授業前に UNIPA に掲示する講義資料や参考書の読了などの予習が必要。 毎回の授業の課題を指定期日までに UNIPA にアップすること。 第 15 回授業での授業内期末レポートの作成方法については、別途、担当教員から指示する。

教科書

書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	『コア・テキスト　イノベーション・マネジメント』 近能善範（著）、高井文子（著）、新世社、2010 年、ISBN978-4-88384-158-5 本授業では第 2、6、7、8、10 章を参考書として学習する（他の章は 1 年次の「マネジメント（経営学基礎）」の授業で学習）。 『技術マネジメント入門』 三澤一文（著）、日経 BP、2007 年、ISBN978-4-532-11132-8 『DX とは何か』 坂村健（著）、KADOKAWA、2021 年、ISBN978-4-04-082339-3
備考	「オペレーションズ・マネジメント」の方法論はビジネスだけでなく広範囲に多くの場面でも応用できますので、学内外のプロジェクトや日常生活でも活用する（練習する）ようにこころがけてください。

昨年度からの振り返り	昨年度授業のフィードバックにもとづき、毎講義の授業内グループ討議の学習効果を上げるため、学生間の相互学習がさらに図れるようにする。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	2 年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	マーケティング応用					授業形態	講義
授業コード	MK2122	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	富澤 豊						
授業概要	「マーケティング基礎」を履修した上で、さまざまな企業が実際に展開してきたマーケティングの応用法について学ぶ。特に、本学の位置する東京都墨田区周辺と縁の深い企業を選定、事例として取り上げ、その取り扱う製品・サービスがマーケティングの観点からどのような企図があるのかを検証する。特に、受講者にとって日常的に接することが可能なサービス・商品について詳しく取り上げ、各企業のマーケティング活動が理論的な裏付けに基づいた展開であることを理解する。						
授業の目的・到達目標	「マーケティング基礎」を履修した上で、さまざまなケースにおける応用方法について学び、その実践的な応用方法を理論的に説明することができる。						
授業計画							
第 1 回	イントロダクション 墨田区周辺地域と産業をマーケティングの観点から考察する						
第 2 回	マーケティング研究① プロダクトの差別化を意識させ 50 年に 1 度の超大ヒット商品（事例：アサヒビール）						
第 3 回	マーケティング研究② 国民に習慣化させるためのマーケティング法（事例：ライオン）						
第 4 回	マーケティング研究③ 独自技術の絞り込みから派生させるマーケティング戦略（事例：花王）						
第 5 回	マーケティング研究④ 鉄道がもたらす地域マーケティング（事例：東武鉄道）						
第 6 回	マーケティング研究⑤ 低迷期を抜け出すためのマーケティング戦術（事例：タカラトミー）						
第 7 回	マーケティング研究⑥ 日本初の多目的キッチンがもたらしたもの（事例：クリナップ）						
第 8 回	マーケティング研究⑦ 世界シェアを誇るプロダクトのマーケティング（事例：YKK）						
第 9 回	マーケティング研究⑧ 他の誰もできないモノだから作る職人魂（事例：岡野工業）						
第 10 回	マーケティング研究⑨ 不動産を活用するマーケティング戦術（事例：澁澤倉庫）						
第 11 回	マーケティング研究⑩ 事業の屋台骨を揺るがす危機を乗り越える（事例：マルハニチロ）						
第 12 回	マーケティング研究⑪ 黒子としてのマーケティング法（事例：デリカフーズ）						
第 13 回	マーケティング研究⑫ 大手を追随させる製品開発術（事例：ダイショー）						
第 14 回	マーケティング研究⑬ 一般的ではないジャンルを生き抜くニッチマーケティング（事例：小森コーポレーション）						

第 15 回	これまでの振り返り マーケティングの未来像を墨田区周辺地域から考える。 墨田区にどんな企業（事業）が生まれそうか。
成績評価の方法	各回での事例検討レポート（30%） 討議への参加態度（50%） 期末のレポート（20%）
準備学修（予習・復習、課題等）	各回ごとに以下の準備学習を行う。 事前学習：次回取り上げる企業についての事例検討レポートを Google クラスルームに提出。 事後学習：各回ごとの事例検討レポートのブラッシュアップを行い期末のレポートに向けて事例検討の深堀を行う。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	授業内で逐次指示する。
備考	対象となる企業は、社会情勢等により変更となる場合があります。 1 年次「マーケティング基礎」の単位を取得している方が対象となります
昨年度からの振り返り	毎回必ず予習をし、討議に参加し、毎回レポートを提出していただきます。 討議への参加態度、協力的な姿勢も評価に入ります。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	2 年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	アカウンティング応用					授業形態	講義
授業コード	AC2123	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施しない
担当教員	中嶋 隆一						
授業概要	「アカウンティング入門」で学んだ会計の基本知識をもとに、この授業では財務会計と管理会計の応用領域についてエッセンスを学ぶ。前者では、企業の健康状態をチェックするために必要な会計情報は、カルテともいうべき財務諸表から得られる。そのため、財務諸表の体系および内容を理解し、分析できなければビジネスに役立たない。とりわけ財務 3 表とも呼ばれる貸借対照表、損益計算書、キャッシュ・フロー計算書の関連性とそれらの計算構造の仕組みを理解しておくことが重要である。 後者では、企業等の経営管理者が組織運営にあたって不可欠なシステムの構造と機能についてより理解を深め、同時に、管理会計上で直面する課題解決のために、それらの手法を実際に活用できるような知識を習得することが重要である。ここでは、主に利益管理、原価管理、意思決定、および管理会計の新たな展開にかかわるテーマを中心に取り上げ、実際の事例を交えながら概説する。 どちらの領域も相互関連的であり、また、単なる実践的な会計処理方法を学ぶだけではなく、その理論的根拠や応用事例も同時に理解することで、企業価値を高める創造力をも身につけることを目指している。						
授業の目的・到達目標	この授業を通じて、会計情報の重要性、財務諸表の読み方、分析ができるようになり、ICT を利用した企業の発展およびグローバル社会への対応が可能となる。同時に、企業の付加価値を高める創造力を養うことが目標である。						
授業計画							
第 1 回	ガイダンス －企業の変化と会計情報－						
第 2 回	①貸借対照表（資産会計） －資産の区分表示とその内容－						
第 3 回	②貸借対照表（資産会計） －資産の評価基準と流動・固定の分類基準－						
第 4 回	③貸借対照表（負債会計） －負債の分類とその構成内容－						
第 5 回	④貸借対照表（資本会計） －資本の分類と構成内容－						
第 6 回	①損益計算書（損益会計） －損益項目の分類と構成内容－						
第 7 回	②損益計算書（損益会計） －営業外損益の例：外貨建て取引の検討－						
第 8 回	③損益計算書（損益会計） －工事進行基準と工事完成基準－						
第 9 回	キャッシュ・フロー計算書の作成 －直接法と間接法の表示－						
第 10 回	連結財務諸表の仕組みと作成方法						

第 11 回	①経営分析の基本 －静態分析と動態分析について－
第 12 回	②経営分析の基本 －収益性・安全性・成長性の分析－
第 13 回	財管一致に関する問題 －管理会計的視点から－
第 14 回	原価計算の種類と考え方
第 15 回	会計の応用分野について －会計の新たな展開（IFRS と研究開発費、ESG、SDG s 、DX 化の方向性と組織の問題等）－
成績評価の方法	授業内小テスト・レポート・課題プレゼンテーション等を含む平常点 30% 最終試験 70%（授業範囲すべてを含む）
準備学修（予習・復習、課題等）	予習：毎回完結型のテーマによる授業のため、関連する事例等をインターネット等で調べておく。 復習：授業時に適宜配布するレジュメと講義内容の復習。 授業時に適宜課す課題については平常点に係るので、提出準備をしておく。 （あわせて 1 時間程度）

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	すべてオリジナルのレジュメ形式で毎回配布する。 参考文献： 『財務会計講義 第 23 版』 桜井久勝（著）、中央経済社、2022 年 『新・現代会計入門 第 5 版』 伊藤邦雄（著）、日経 BP、2022 年 『管理会計 第 2 版』 岡本清（著）、廣本敏郎（著）、尾畑裕（著）、挽文子（著）、中央経済社、2008 年 『管理会計 第七版』 櫻井通晴（著）、同文館出版、2019 年 その他必要に応じ適宜参考文献を紹介する。
備考	毎回、各所属クラスごとに設定したグーグルクラスルームで、授業に使用するレジュメ・資料等を配布します。授業前に準備しておく。 課題についてもすべてグーグルクラスルームで配信する。
昨年度からの振り返り	会計（アカンティング）応用の授業は、1 年次の会計（アカンティング）入門を履修済みの学生を履修条件としている。会計の重要性はいうまでもないが、苦手としている人が多い。いわゆる HOW-TO 形式の本で「初心者にもわかる本」を読めば簡単に理解されるものではない。ビジネス系の他の科目と異なり、この科目を理解するには、まず基礎知識の修得が必要である。それはこの科目のオリジナルな用語法、システム（理論構造）を理解する必要があるからで、本来は簿記システムの総合的理解と地道な努力あってこそ、道が開ける科目である。その上で、この科目の実践的な役立ちが見えてくる。決して派手さはないが、着実に会計思考力を身に付けることで、財務戦略としてのファイナンスとの関連性を理解し、確実にビジネスにとって強力な武器として役立つ。受講する学生諸君の地道な努力に期待する。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	2 年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	法務リテラシーⅡ					授業形態	講義
授業コード	LL2123	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	境 真良						
授業概要	法務リテラシーI の講義内容を前提として、IT／ICT 事業に関わる、あるいは自ら起ち上げ、実施していく上で必要になる諸法について、電気通信に関する事業者責任、知的財産の取扱い、表現規制への対応を中心として解説していく。						
授業の目的・到達目標	以下の点についてその概要を把握する。 ・電気通信事業法の規制概要と、主として届出電気通信事業者に係る事業責任の構造 ・知的財産の取扱い、特に自らの事業を媒介として生じた問題に対する事業責任 ・広告の表示にまつわる社会的責任 ・射幸性の社会的制御の仕組みと基準						
授業計画							
第 1 回	ガイダンス～法務リテラシーⅠの総括 三権の役割／民事法と刑事法／民事法制の基本フレーム／商取引と企業経営を巡る法務／行政法と知的財産法						
第 2 回	IT／ICT を巡る法制度（1） 電気通信事業法概論／通信とは何か／通信と放送と電波制度／電気通信事業法が事業者に課す主な責務／特別な内容の通信に関する責務／電気通信事業者のその他の責務						
第 3 回	IT／ICT を巡る法制度（2） 個人情報保護法概論／個人情報とは何か／個人情報の利活用を巡る制約／同意の効果とそのやり方／個人情報の漏洩パターン／問題の発生とその収拾						
第 4 回	IT／ICT を巡る法制度（3） サイバーセキュリティとは何か／問題の発生とその態様／問題を誰がどう防いでいるか／事業者の責任とその遂行／サイバーセキュリティを巡る法制／責任が発生しても事業を存続させるために						
第 5 回	IT／ICT を巡る法制度（4） 表現の責任と媒介者の責任／カラオケ法理～独立犯か共犯か／違法情報公開とその収拾／著作権侵害コンテンツ公開とその収拾／プロバイダ責任制限法概論／名誉毀損とその収拾						
第 6 回	コンテンツを巡る法制度（1） 著作権法概論／著作権法の世界観／保護される複製、保護されない複製／許諾をとるべき相手／自分が使う時、誰かに使わせる時						
第 7 回	コンテンツを巡る法制度（2） ウェブサイト制作と著作権／制作過程におけるコンテンツの取扱い／複製の範囲～独創性と類似性と依拠性／インライン表示の取扱いと引用／コンテンツ制作を委託した場合／出来上がったウェブサイトについて						
第 8 回	コンテンツを巡る法制度（3） 創造と派生のエコシステム／プログラムの著作物／コンテンツの二次創作／ライセンス方式／主要なライセンスとその方式						
第 9 回	広告と射幸性を巡る法制度（1） 広告のメカニズム／広告を巡る問題と責任の所在／広告主の責任と特商法他の規律／広告表示者の責任／広告とウィルス供用罪／「不適切な情報」の拡散と法的、社会的責任						

第 10 回	広告と射幸性を巡る法制度（2） 娯楽性と射幸性／景表法概論／景表法と賭博罪～射幸性規制の相関関係／ネット広告と射幸性／ゲームと射幸性～「ガチャ」を中心に／ゲームプレイと射幸性～「賞金」論を中心に
第 11 回	金融行為を巡る法制度 金融を巡る法制度概論／決済行為と金融／資金決済法の適用範囲／デポジット(プリペイド)の法規制／クラウドファンディングの法規制／仮想通貨を巡る法規制／与信を巡る法規制
第 12 回	ハードウェアを巡る法制度 機器の供給者と利用者の責任分界点／取扱い説明書の機能と限界／消費者に機器の安全性をどう伝えるか／PSE マーク（電安法）概論／技適マーク概論／JIS マーク概論／製造物責任法概論／その他の製造供給者責任
第 13 回	その他のネット系ビジネスを巡る法制度 ネットを入口にするということについて／事業規制について／リアルな事業の規制体系外観／ネット系ビジネスと準拠法と規制実施
第 14 回	労働に関する法制度 働く契約の主類型／雇用・労働関係規律の基本思考／労働法の役割／労働組合／雇用主として守るべき主たる労働条件規律／労働規律の構造変化
第 15 回	まとめと補遺 行政庁と各種規制の機能と効果／電気通信の規制と表現の規制／知的財産の機能と効果／知的財産侵害リスクの考え方／リーガルマインド
成績評価の方法	毎授業時実施するグループワーク及び中間レポート 50% 期末テスト（リモート授業時は期末レポート）50%
準備学修（予習・復習、課題等）	法令については、次回授業で触れる法律については適宜 e-Gov 法令検索（https://elaws.e-gov.go.jp/）などで調べること。また、授業時に次回の主要事項を指示した場合には、インターネットなどで事前調べをしておくこと。なお、授業で言及する話題は情報技術、経済原理や現実のサービス動向、商品動向まで多岐に及ぶが、授業で言及したキーワードについては、インターネットなどで関連分野のことがらと共に調べること（各回 30～60 分程度は必要）

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	授業時に毎回レジュメ及び必要により参考資料を配布する。 参考文献： 事業時に参照した法令は、適宜 e-Gov 法令検索（https://elaws.e-gov.go.jp/）などで調べること。 産業動向や業界事情については、ITmedia（http://www.itmedia.co.jp/）や CNET Japan（http://japan.cnet.com/）など各種情報通信関連サイトなどに定期的に目を通し、最新の状況をキャッチアップすること。
備考	
昨年度からの振り返り	情報通信法制、著作権法制、消費者保護法制の三本柱は適切だったと実感。 昨年取り組めていなかったサイバーセキュリティ法制について整理するとともに、労働法制が法務リテラシーⅠとダブル配置になっているが、これは法務リテラシーⅠが基礎、法務リテラシーⅡが発展という整理。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	2年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	ファイナンス入門					授業形態	講義
授業コード	FIB123	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施しない
担当教員	中嶋 隆一						
授業概要	一般に、企業は資金を調達し、それらを運用して、収益を生むという活動をおこなう。そのため、ビジネスリーダーは、資金調達活動、投資活動、財務活動を、つねに考えて行動する必要がある。その際、会計情報を利用してファイナンス（財務：企業財務あるいは経営財務ともいう）をおこなうことは重要である。 最近、ICT を利用したビジネスの現場で、コーポレートガバナンスの強化とともに、このファイナンスの重要性が増している。そこで、この授業では、将来ビジネスリーダーを目指す学生を対象に、経営プロセスにそって、会計の知識をもとにファイナンスの基礎とその考え方を修得してもらう。それにより、経営の効率性や収益性を高め、企業価値の最大化を目指すファイナンス本来の基本的スタンスが理解できるようになる。						
授業の目的・到達目標	ICT を利用してビジネスの世界で活躍する人材の育成をめざし、必要とされるファイナンスの基礎知識を修得することを目的としている。単なる技術的手法を学ぶだけでなく、理論的考察をおこなうことで、実践力と創造力を養い、会計とともにビジネスの世界で需要なツールとして利用できるようになることが目標である。						
授業計画							
第 1 回	ファイナンスとは何かを考える。 －ファイナンスの意義と必要性－						
第 2 回	投資とは何か、現在と将来の価値を考える。 －事業投資への意思決定について－						
第 3 回	株式会社とは① －会社の種類について理解する－						
第 4 回	株式会社とは② －会社の設立、会社の機関設定を考える－						
第 5 回	会計とファイナンス －営業循環と資金の流れ、会計とファイナンスの役割について考える－						
第 6 回	比例縮尺図を作成する。 －財務 3 表（B/S、P/L、C/F）の関係－						
第 7 回	会社の利益構造を考える。 －利益とキャッシュ・フローとの係わり－						
第 8 回	黒字倒産の事例を考える。 －キャッシュ・フロー計算書の枠組みと間接法表示－						
第 9 回	キャッシュ・フローの管理（資金繰り） －キャッシュ・フローを増やすためのポイント－						
第 10 回	資本コストとは －企業価値向上のために－						
第 11 回	有利子負債コストの計算						
第 12 回	有利子負債コストの節税効果について						
第 13 回	株主資本コスト率の計算						

	－CAPM（資本資産評価モデル）について－
第 14 回	会社全体の資本コストを考える。 －WACC（加重平均資本コスト率）について－
第 15 回	企業価値について考える（応用）。 －資本効率と企業価値を高める方法とは－ KPI の利用と DCF 法等の概要を説明する。
成績評価の方法	・授業内小テスト・レポート・課題プレゼンテーション等を含む平常点 30% ・最終試験 70%（授業範囲すべてを含む）
準備学修（予習・復習、課題等）	予習：毎回完結型のテーマによる授業のため、関連する事例等をインターネット等で調べておく。 復習：授業時に適宜配布するレジュメと講義内容の復習。 授業時に適宜課す課題については平常点に係るので、提出準備をしておく。 （各回 1～2 時間程度）

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	毎回、レジュメ形式で配布した資料により授業をおこなう。 参考文献： 『あわせて学ぶ 会計＆ファイナンス入門講座』 保田隆明（著）、田中慎一（著）、ダイヤモンド社、2013 年 『ビジネスリーダーが学んでいる 会計＆ファイナンス』 日沖健（著）、中央経済社、2015 年 『図解 簿記からはじめる企業財務入門』 津森信也（著）、東洋経済新報社、2014 年 『コーポレートファイナンス入門〈第 2 版〉』 砂川伸幸（著）、日経 BP、2017 年 『新・企業価値評価』 伊藤邦雄（著）、日経 BP、2014 年 『コーポレート・ファイナンス〈第 10 版〉上・下』 リチャード・ブリリー（著）、スチャワート・マイヤーズ（著）、フランクリン・アレン（著）、藤井眞理子（訳）、國枝繁樹（訳）、日経 BP、2014 年
備考	本講座は、「アカンティング応用」受講者のみを前提として講義する。また、理解度の程度により、講義テーマで取り扱う内容も多少変える予定である。 なお、授業クラスごとに作られたグーグルクラスルームで授業用資料を配布・連絡する。 履修者はこちらからの連絡後、速やかにクラスルームへ登録し、資料を授業前に用意して授業に臨んでいただきたい。
昨年度からの振り返り	一昨年度から初めて開講した科目で、最初にお話ししたように、「アカンティング応用」履修者のみを受講対象とした授業であった（今年も同様）。内容はなるべく平易に、会社の起業を起点として、「会計とファイナンス」との係わりから、その後の会社の成長にともなって必要となる資金繰り、利益構造、資本コストと行った項目を順に取り上げ、ファイナンスの必要性・重要性を説明した。今年も同様の手法で授業を進めていく予定である。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	2 年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	問題形成と問題解決					授業形態	演習
授業コード	SPS121	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	三澤 一文						
授業概要	将来を見越したイノベーションを起こし、世界的な視野をもって決断し、俊敏に実行できるリーダー人材には、高度な問題の発見・解決能力は必須である。そのために、本授業では、世界の有力企業で実際に広く活用されている問題解決手法を学習する。 具体的には、①問題を明確にする②問題をブレイクダウンする③達成目標を決める④真因を考え抜く⑤対策を立てる⑥対策をやりぬく⑦結果とプロセスを評価する⑧成果を定着させる、といった 8 つのステップから成る問題解決手法を事例学習やグループワークを通じて体系的に学ぶ。						
授業の目的・到達目標	本授業を受講することで、受講生は、将来、リーダーとなる人材が押さえておくべき問題発見・解決の手法を習得することができる。今から 80 年以上前に、トヨタの創業者の豊田喜一郎は、自動織機の工場の片隅にある板張りの囲いの中で、本業とはまったく関係のない小さなガソリンエンジンをこっそりつくり始めたが、その「起業家精神」は、「問題解決手法」として形を変えて今も受け継がれている。 本授業で学習する問題解決手法を、意識して日々の問題解決に応用する場面を増やすことで、トヨタのように、いかなる問題の解決にも役立つ物事の進め方、すなわち「仕事の型」が身に付く。						
授業計画							
第 1 回	イントロダクション：本授業で学ぶ方法論の概要 ひとつの問題の解決が新たな問題を生んでしまう残念な事実 問題の発見と解決には論理的思考・心理学・組織論の 3 つが必要 問題解決の 9 割は実行力						
第 2 回	ステップ 1：問題を明確にする 隠れた問題を見つける方法 目的の目的を考える重要性 ビジネスの問題発見に役立つ「ユーザーエクスペリエンス」の本質とは？						
第 3 回	ステップ 2：問題をブレイクダウンする あいまいな問題を具体化していく方法 取り組むべき問題の優先順位を決める 顧客ニーズをブレイクダウンする「30 の価値要素」とは？						
第 4 回	事例研究（1）：社会課題編 DX（デジタルトランスフォーメーション）で SDG s に貢献する企業事例 交通問題を解決する MaaS（Mobility as a Service）とは？ 日本国内での MaaS 普及のための課題						
第 5 回	ステップ 3：達成目標を決める 挑戦的で具体性のある目標を設定する よくある間違いやすい目標の決め方 適切に目標設定するためのフレームワーク「SMART」とは？						
第 6 回	ステップ 4：真因を考え抜く 先入観を持たずに多くの視点から考える						

	人間の無意識の思い込み「アンコンシャス・バイアス」の壁 問題の原因を深く考える「5回のなぜ」とは？
第 7 回	事例研究（2）：情報システム編 これまでの情報システムの典型的問題 統合基幹業務システム（ERP：Enterprise Resource Planning）の登場 ERP のメリットとデメリットとは？
第 8 回	ステップ 5：対策を立てる ブレインストーミングの基本と応用例 実効性の高い対策に絞り込むための方法論 ゲーミフィケーションの効果とは？
第 9 回	ステップ 6：対策をやりぬく チーム一丸で実行するための 5 つの条件とは？ コミュニケーションを徹底するための留意点 対策をやりぬくためのアジャイル手法の演習
第 10 回	事例研究（3）：プロジェクト・マネジメント編 巧みなプロジェクト・マネジメントで DX を成功させた企業事例 QCD（品質、コスト、納期管理）を再考するためのケーススタディ プロジェクト実行のシングルタスクとマルチタスクとは？
第 11 回	ステップ 7：結果とプロセスを評価する 結果とプロセスを振り返る KPT（Keep, Problem, Try）手法 正しく振り返ることを妨げる人間心理とは？ 同じ失敗を繰り返さないための方法
第 12 回	ステップ 8：成果を定着させる 成果を仕組みとして標準化し共有化することの重要性 次に取り組むべき問題を発見する 4 つの戦略とは？ 暗中模索の状況から抜け出すセレンディピティ
第 13 回	事例研究（4）：起業編 なぜ、多くの起業はプランどおりにいかず失敗するのか？ マーケティングが理論どおりにいかない本当の理由 起業後に先行きが見えなくなったときにやるべきことは？
第 14 回	問題解決手法のまとめと FAQ（よくある質問） 問題発見・解決の心構え 7 ヶ条
第 15 回	授業内期末レポート： 本授業を通じての気付きや発見、将来のビジネスに応用したいこと、などについて授業内でレポートを作成する
成績評価の方法	毎回の授業内討議への参加、発表：30％ 毎回の授業課題の提出：40％ 授業内期末レポート：30％
準備学修（予習・復習、課題等）	毎回の授業内クラス討議を円滑に進めるために、授業前に UNIPA に掲示する講義資料や参考書の読了などの予習が必要。 毎回の授業の課題を指定期日までに UNIPA にアップすること。 第 15 回授業での授業内期末レポートの作成方法については、別途、担当教員から指示する。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考

指定なし				

参考書	『トヨタ式リーダー育成法』 三澤一文（著)、日経 BP、ISBN978-4-532-31944-1
備考	「問題形成と問題解決」の方法論はビジネスだけでなく広範囲に多くの場面でも応用できますので、学内外のプロジェクトや日常生活でも活用する（練習する）ようにこころがけてください。
昨年度からの振り返り	昨年度授業のフィードバックにもとづき、毎講義の授業内グループ討議の学習効果を上げるため、学生間の相互学習がさらに図れるようにする。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	2年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	組織行動論					授業形態	講義
授業コード	0BH121	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施しない
担当教員	◎青田 努、田口 光						
授業概要	組織は至る所に存在しており、組織と関係せずに生活はできなくなっている。本講義では様々な組織の中での人間行動について理解する。人間行動を規定する働きのある組織の構造や形態、組織文化を扱い、仕事への意欲の程度を示すものともいえる動機づけや、働き方を学び、企業トップや管理職に対するコーチング・コンサルテーション・組織開発ワークショップなどの実践理論と技術の習得を通して、個人が生かされ組織も創造性を増す組織開発を探求する。						
授業の目的・到達目標	「人事」は企業を経営する上で重要な機能であるにも関わらず、いわゆる「手なり」で実践されることが多い。しかし、人事には多くの場合「原理原則」があり、それをおろそかにすると痛い目に遭う。そこで、本講義では人事における原理原則・基本について解説する。						

授業計画	
第1回	オリエンテーション
第2回	チームビルディングと心理的安全性（前編）
第3回	チームビルディングと心理的安全性（後編）
第4回	原動力とトリガー（前編）
第5回	原動力とトリガー（後編）
第6回	リーダーシップとマネジメント（前編）
第7回	リーダーシップとマネジメント（後編）
第8回	ビジョンとストーリーテリング（前編）
第9回	ビジョンとストーリーテリング（後編）
第10回	組織成長の類型
第11回	組織社会化とコミュニケーション
第12回	組織コミットメントとエンゲージメント
第13回	コーチング（前編）
第14回	コーチング（後編）
第15回	質問を元にした回答会
成績評価の方法	参加態度（50%）、レポート（50%）
準備学修（予習・復習、課題等）	原則、予習は不要とする。あったとしてもブログ1、2本程度の分量とする。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				
参考書	必要な場合は都度指示する。			

備考	テーマは回によってシラバス記載の内容より変更が加わる場合がある。 その際は授業内で必要な連絡を行う。
昨年度からの振り返り	アンケートでは授業内のグループワークを増やす希望を数名からいただきました。2023 年度は試験的に少し増やします。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	3 年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	ビジネスゲームによる経営意思決定					授業形態	講義
授業コード	DMT121	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	菊地 祥由						
授業概要	世の中にある様々な経営現象（人事現象、市場現象等）を理解するには、なぜそれが起こったかの現象を説明する原理を学ぶ必要があり、その 1 つがゲーム理論がある。ゲーム理論は、人はなぜそう決めるのか、企業はなぜそう決めるのか、という「決める」ことに関する理論である。 本講義では、「決める（意思決定）」ことは経営現象全てに関わる事を理解し、ゲーム理論を活用し、主に ICT 業界の経営実務における、合理的な意思決定の手法を修得する。						
授業の目的・到達目標	ゲーム理論の基礎的な理屈を理解し、ビジネスへの応用が可能な水準を目標とする。						

授業計画	
第 1 回	ガイダンス：なぜ社会設計やビジネスにとって有益なのか
第 2 回	ゲーム理論とはなにかー囚人のジレンマとナッシュ均衡ー
第 3 回	戦略形ゲームのモデルを理解する
第 4 回	完全情報の展開形ゲーム
第 5 回	不完全情報の展開形ゲーム
第 6 回	不完全情報の戦略形ゲーム
第 7 回	クールノー競争とベルトラン競争①
第 8 回	クールノー競争とベルトラン競争②
第 9 回	混合戦略と純粋戦略①
第 10 回	混合戦略と純粋戦略②
第 11 回	企業経営における事例研究①
第 12 回	競争原理と戦略策定①
第 13 回	企業経営における事例研究②
第 14 回	競争原理と戦略策定②
第 15 回	まとめ
成績評価の方法	講義への参加状況を含む平常点、及び各講義後に提出する簡易レポート（50%）、及び期末レポート（50%）
準備学修（予習・復習、課題等）	事前の予習は要求しない。 講義後は扱った内容について復習するとともに、簡易レポートに取り組むこと。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				
参考書	特に設定しない。講義資料で包括できる範囲とする。			
備考	課題（簡易レポート）についても講義中の実践を通して一定程度包括できる範囲にする予定			

	であり、講義に集中して臨めば講義外学習の負荷が重くならないよう配慮する。
昨年度からの振り返り	昨年度から科目責任者が変更となっているため該当なし。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	3年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	人的資源管理論					授業形態	講義
授業コード	HRM121	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施しない
担当教員	◎田口 光、青田 努						
授業概要	経済・社会活動がグローバル化するなかでの競争激化や、経済社会の成熟化により、日本企業は事業運営においてこれまでにない模索を強いられ、時に大きな事業革新を求められている。一方で、人口高齢化と人口減少の進行は、企業の人的資源の担い手を大きく変えつつある。本講義では、以上のような状況のもとで、日本企業が進めている人的資源管理の取り組みとその背景を理解し、今後のあり方について検討を行うための視点を身につけることを目的とする。						
授業の目的・到達目標	「人事」は企業を経営する上で重要な機能であるにも関わらず、いわゆる「手なり」で実践されることが多い。しかし、人事には多くの場合「原理原則」があり、それをおろそかにすると痛い目に遭う。そこで、本講義では、2年次の「組織行動論」からの発展として、より実践的な人材・組織領域における考え方について解説する。						

授業計画	
第 1回	オリエンテーション
第 2回	人的資源管理の機能全体像
第 3回	採用（前編）
第 4回	採用（後編）
第 5回	パフォーマンスマネジメント
第 6回	人材開発とキャリア開発
第 7回	適所適材の人材活用
第 8回	後継者育成と代謝マネジメント
第 9回	バリューとカルチャー（前編）
第10回	バリューとカルチャー（後編）
第11回	報酬・労務管理
第12回	人事に関する法律
第13回	スタートアップの人事制度（前編）
第14回	スタートアップの人事制度（後編）
第15回	質問を元にした回答会
成績評価の方法	参加態度（50%）、レポート（50%）
準備学修（予習・復習、課題等）	原則、予習は不要とする。あったとしてもブログ1、2本程度の分量とする。

教科書

書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	必要な場合は都度指示する。
備考	テーマは回によってシラバス記載の内容より変更が加わる場合がある。 その際は授業内で必要な連絡を行う。
昨年度からの振り返り	昨年度はアンケート未実施のため該当なし。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	3 年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	地域創生とイノベーション					授業形態	演習
授業コード	RRI122	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	久米 信行						
授業概要	墨田区はじめ講師が関与して地域創生に成功した全国の事例を学ぶ。その現場で産業・観光・文化・教育振興や、SNS 等の情報発信で活躍したキーパーソンをゲスト講師に招いて議論し、理解を深める。 また、実際に街あるきや工場見学などのフィールドワークを行い、受講生自らが地域の魅力を発見・発掘して SNS で発信する。その成果を学生目線の墨田区観光マップにまとめ、地域のキーパーソンに報告し、講義 Web や SNS 等で発表する。						
授業の目的・到達目標	地域創生のキーパーソンや、コミュニティビジネスの起業家として活躍するための基礎知識と、SNS 等を活用した実践的な発信スキルを身につける。 地域のキーパーソンと講義・フィールドワーク・SNS 等で交流を結び、より深く学びながらプロジェクトを協働するパートナーを見つける。 数名のチームを結成し、グループでフィールドワークをしながら、観光マップなどの成果物を作成し発表するとともに、キーパーソンへの提言を行う。						
授業計画							
第 1 回	◎概要 教員紹介とガイダンス。Instagram・Facebook への投稿を講義用 Facebook へ投稿する方法 ◎事前準備 インスタグラムと Facebook（講義用新設可）を開設しておくこと ◎詳細 1）SNS を活用してキャリアを積んで来た講師の自己紹介をします。 2）教員の SNS 投稿事例を紹介しながら、受講生のみなさんに受講半年後の可能性を示します。 3）各自が取材して SNS に投稿するアクティブラーニングの進め方についてお伝えします。						
第 2 回	◎概要 SNS を活用した地方創生・観光地域づくりの手法 ◎事前準備 墨田区の魅力について、インターネットで調べておくこと ◎詳細 1）教員が全国の観光協会などで講演している内容を講義します。 2）インターネット上の情報の量と質が地方創生の成否に関わることを体感します。 3）当該地域の魅力をインターネットで調べる方法を学びます。						
第 3 回	◎概要 前回調べた墨田区の魅力と課題について各自発表 ◎事前準備 墨田区と地元を比較し魅力と課題についてクラスルームに書いて提出すること ◎詳細 1）観光・産業・文化・教育・市民活動の５項目について地元と墨田区の魅力と課題を考えます。 2）数名ずつのグループワークで、墨田区の魅力と課題の表を完成させます。 3）グループ毎に発表をして、それを聴きながら、自グループの表に追補します。						

第 4 回	◎概要 お店やスポットの探し方と、墨田区イチオシのパン屋さんの発表 ◎事前準備 墨田区にあるパン屋さんの中からイチオシのお店とパンを投稿 ◎詳細 1）ネットや専門誌などを活用して、お店やスポットを探す方法を学びます。 2）学生のパン投稿の中から数名をランダムに選んで、発表をしてもらいます。 3）全員で各自の発表にコメントをつけて、一番惹かれた投稿に投票します。
第 5 回	◎概要 インスタ映えする写真の撮り方と、墨田区イチオシのラーメン屋さんの発表 ◎事前準備 墨田区にあるラーメン屋さんの中からイチオシのお店とラーメンを投稿 ◎詳細 1）スマホでインスタ映えする写真の構図・撮り方・フィルターのかけ方を学びます。 2）学生のラーメン投稿の中から数名をランダムに選んで、発表をしてもらいます。 3）全員で各自の発表にコメントをつけて、一番惹かれた投稿に投票します。
第 6 回	◎概要 投稿で紹介した店主と SNS で仲良くなる方法と、墨田区イチオシのカレー屋さんの発表 ◎事前準備 墨田区にあるカレー屋さんの中からイチオシのお店とカレーを投稿 ◎詳細 1）写真を撮る時のあいさつと、投稿後のお礼メッセージの出し方を学びます。 2）学生のカレー投稿の中から数名をランダムに選んで、発表をしてもらいます。 3）全員で各自の発表にコメントをつけて、一番惹かれた投稿に投票します。
第 7 回	◎概要 読者の興味を惹くタイトルやキャッチコピーの付け方と、墨田区イチオシのスイーツ屋さんの発表 ◎事前準備 墨田区にあるスイーツ屋さんの中からイチオシのお店とスイーツを投稿 ◎詳細 1）投稿記事につけるタイトルやキャッチコピーのつけ方について学びます。 2）学生のスイーツ投稿の中から数名をランダムに選んで、発表をしてもらいます。 3）全員で各自の発表にコメントをつけて、一番惹かれた投稿に投票します。
第 8 回	◎概要 検索してもらえるハッシュタグのつけ方、墨田区イチオシの看板の発表 ◎事前準備 墨田区にある面白い看板あるいは美しい看板を見つけて投稿 ◎詳細 1）投稿記事につけるハッシュタグの選び方つけ方について学びます。 2）学生の看板投稿の中から数名をランダムに選んで、発表をしてもらいます。 3）全員で各自の発表にコメントをつけて、一番惹かれた投稿に投票します。
第 9 回	◎概要 Facebook で目立って信用される自己紹介文の作り方と、墨田区イチオシの風景の発表 ◎事前準備 墨田区にある美しい絶景あるいは面白い珍風景を見つけて投稿 ◎詳細

	1）興味を惹き信用されて自己プロデュースにつながる自己紹介文について学びます。 2）学生の風景投稿の中から数名をランダムに選んで、発表をしてもらいます。 3）全員で各自の発表にコメントをつけて、一番惹かれた投稿に投票します。
第 10 回	◎概要 SNS 向きのプロフィール写真の作り方と、墨田区イチオシミュージアムの発表 ◎事前準備 墨田区にある好きな美術館・博物館を見つけて投稿 ◎詳細 1）顔と人物像を憶えてもらえるプロフィール写真について学びます。 2）学生のミュージアムの投稿の中から数名をランダムに選んで、発表をしてもらいます。 3）全員で各自の発表にコメントをつけて、一番惹かれた投稿に投票します。
第 11 回	◎概要 自分らしさを強調する独自のこだわりテーマの見つけ方と、墨田区のおすすめスポット発表 ◎事前準備 墨田区にあるおすすめのスポットを見つけて投稿 ◎詳細 1）個性を発揮しつつ生涯究めたくなるこだわりテーマの見つけ方を学びます。 2）学生のおすすめスポット投稿の中から数名をランダムに選んで、発表をしてもらいます。 3）全員で各自の発表にコメントをつけて、一番惹かれた投稿に投票します。
第 12 回	◎概要 自分らしさを表現し SNS へと導く個人名刺の作り方と、墨田区のおすすめ動物・植物発表 ◎事前準備 墨田区で見つけたおすすめの動物・植物を見つけて投稿 ◎詳細 1）教員が親しい達人たちの名刺を紹介しながら個性的な名詞作成法について学びます。 2）学生のおすすめ動物の投稿の中から数名をランダムに選んで、発表をしてもらいます。 3）全員で各自の発表にコメントをつけて、一番惹かれた投稿に投票します。
第 13 回	◎概要 私の墨田区ベスト 10&マップの作り方と、私のこだわりテーマ発表 ◎事前準備 墨田区で見つけたこだわりテーマに関するものごとを投稿 ◎詳細 1）これまで 10 回にわたって投稿してきたお勧めを A4 用紙の裏表にまとめる方法を学びます。 2）学生のこだわりテーマの投稿の中から数名をランダムに選んで、発表をしてもらいます。 3）全員で各自の発表にコメントをつけて、一番惹かれた投稿に投票します。
第 14 回	◎概要 私の墨田区ベスト 10&マップの最終発表会 1 ◎事前準備 これまで投稿してきた内容を A4 用紙の裏表にまとめて前日までにネットで、当日授業前に印刷して提出 ◎詳細 1）私の墨田区ベスト 10&マップを発表してもらいます。（発表できるところまで）

	2）全員で各自の発表にコメントをつけて、一番惹かれた投稿に投票します。 3）優秀作は後日、発表動画と合わせて墨田区長や墨田区観光協会理事長などにも謹呈します。
第 15 回	◎概要 私の墨田区ベスト 10&マップの最終発表会 2 ◎事前準備 前回の発表を見て改良した場合は、印刷して当日授業前に提出 ◎詳細 1）私の墨田区ベスト 10&マップを発表してもらいます。（前回の続き） 2）全員で各自の発表にコメントをつけて、一番惹かれた投稿に投票します。 3）優秀作は後日、発表動画と合わせて墨田区長や墨田区観光協会理事長などにも謹呈します。
成績評価の方法	試験は行わず、毎回のレポートと課題、ならびに最終発表で評価します。 （出席していてもレポートと課題が提出されなければ単位取得はできません） 1. 出席代わりに授業中に書くレポート 30%（各回 2%×15 回） 毎回の学びのまとめと学生発表への評価と投票。クラスルームで提出 当日中に提出できなかった場合は、提出しても 1%換算 2. 第 4～13 回まで、10 のテーマについての SNS 投稿 50%（各回 5%×10 回） 自分の SNS にアップした上で、授業用 Facebook ページに各回前日の 17 時までに投稿 各回前日 17 時までに提出できなかった場合は、提出しても 3%換算 3. 14 回と 15 回に行う私のベスト 10 とマップの提出と発表 20% （クラスルームと印刷各 10%） 自分の SNS にアップした上で、授業用 Facebook ページに前日の 17 時までに投稿 14 回目の前日 17 時までにクラスルームで、15 回目の前日 17 時までに印刷で提出できなかった場合は、提出しても各 5%換算
準備学修（予習・復習、課題等）	1. 当授業を受講する前の準備 Instagram と Facebook アカウントの開設（既存の個人と別アカウントも可） 2. 授業開始前の予習 10 のテーマに従い、墨田区のイチオシを調べておく。 4 回目以降、毎回のテーマに合わせて、前日 17 時までに自分の SNS と授業の Facebook に投稿する。 3. 授業中の課題 毎回、授業中に当日の学びを簡潔にまとめるレポートと、学生の発表に対する評価コメントと投票をクラスルームに提出する。 4. 授業開始後の復習 当授業の学びを活かし Instagram と Facebook のプロフィールや記事投稿の不備を直していく。 5. 最終発表の予習 10 のテーマを、自分なりのレイアウトで私のベスト 10 とマップにまとめる。 14 回目の授業の前日 17 時までに講義 facebook に投稿し、クラスルームにもアップする。 プリントアウトしたものも 14 回目の授業前に提出する。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				
参考書				

備考	受講する際の注意点 1. iU のある墨田区を各自が授業時間外にフィールドワークをして魅力を発掘します。 街を探訪して歩くことが好きで、記事投稿に時間と手間がかけられる人向けの授業です。 2. 実名顔出しにて Facebook 投稿をすることで墨田区のキーパーソンにも見てもらいながら自分のブランド価値を高めますので、実名投稿ができる人向けの授業です。 3. 毎回、数名の受講生に、投稿した記事を、クラスの前で発表してもらい、プレゼン力も高めていきますので、積極的に人前で発表する力を身に着けたい人向けの授業です。 4. 出席率 100%でも、毎週の記事投稿が出来ない人、最終発表の課題が提出されない人は単位取得できませんのでご注意ください。
昨年度からの振り返り	この授業を選んでくれたみなさんが、墨田区を愛し、独自の視点で魅力を発見し楽しまれていることに感動しました。最終発表には、墨田区観光協会理事長、墨田区商店街連合会事務局長、すみだ向島 EXPO 実行委員長も参席してくれましたが、みなさんの発表の素晴らしさに感激されていました。コロナ禍で行動制限があった中、みなさんの知的好奇心と行動力に驚き、感謝しています。一期生のみなさんが充実してくださった Facebook を、後輩たちがさらに充実させてくれるでしょう。どうもありがとうございました。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	3 年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	イノベーション特論					授業形態	講義
授業コード	SIB121	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	三澤 一文						
授業概要	本授業では、イノベーションにかかわる重要な時事的テーマを学習する。従来、イノベーションの議論は、ビジネスの価値を持続的、漸進的に向上させるために、自社開発と外部利用の適切な判断基準はなにか、システム開発の投資効率はどう評価すべきか、イノベーションを加速させるための組織のしかけは何か、といった論点を中心に進められてきた。 しかし、今後のイノベーションの議論は、ICT のさらなる格段の進歩を見据え、人と情報を中心にして、ビジネスの価値を加速的に向上させることに論点が移る。そこで、本授業では、ICT 関連の技術分野を含む最新のイノベーションの潮流（たとえばスマート・ファクトリー、デジタル・オペレーション、など）や、経営分野で今後のイノベーションに関わる重要トピック（たとえばデジタル・トランスフォーメーション、アジャイル、など）などを学習する。						
授業の目的・到達目標	今後の市場、顧客、技術などの最新動向を踏まえ、イノベーションを実践する際の典型的課題と取組み方法を先進企業の事例で学習する。それにより、イノベーションを具体的に実現、加速させる高度なスキルを習得する。 加えて、実社会に入る直前の 3 年次の授業として、イノベーションを ICT と経営の両方から複眼的に考えることの必要性や、技術やマーケティング、営業、管理など様々な専門の人たちと協働的に活動することの重要性を認識する。						
授業計画							
第 1 回	イントロダクション：本授業全体の概要 ・変化し続ける時代の中で、国際社会と地域社会の産業発展へ貢献し、新たなサービスやビジネスを生み出すには、単独のビジネス活動だけでは不可能 ・継続的なイノベーションにはエコシステム（ビジネス生態系）が必須 ・エコシステムの中で活躍できる人材となるためには、経営と技術の両方に関する知識と実践力を組み合わせた応用力を身に付けることが重要 ・デジタルな未来に必要な経営と技術の知識・スキルを著名企業との産学連携形式で講義						
第 2 回	DX（デジタルトランスフォーメーション）の成功事例（1）：国内企業 ・目的：ICT を活用したビジネスモデルの変革、顧客対応時間の短縮と利便性の向上、管理業務の効率化、など ・方法：AI などの新技術を利用してサプライチェーン全体での利便性向上を図った新情報システムの導入、など ・結果：新サービス提供による顧客満足の格段の向上、自動化による業務生産性の向上、など （注：プロジェクト事例は他の事例に変更になることもあります）						
第 3 回	DX（デジタルトランスフォーメーション）の成功事例（2）：グローバル企業 ・目的：デジタルを活用してさまざまな社会課題をビジネスとして解決できる事業形態の開発、など ・方法：従来の現場力を最大限に活かしながら多くのデジタルデータの活用が可能となる情報基盤の構築、など ・結果：デジタルツインにより故障予知可能なスマートファクトリー（先進的な工場）、ビッグデータ活用による自然環境保護プロジェクト、など （注：プロジェクト事例は他の事例に変更になることもあります）						

第 4 回	イノベーションを促す経営サービス（1）：コンサルティング・サービスの概要 ・経営コンサルティングの仕事と業界地図 ・IT コンサルティングの仕事と業界地図 ・コンサルティング・サービスの具体事例 ・その他
第 5 回	イノベーションを促す経営サービス（2）：経営コンサルティングの実際 ・戦略コンサルティングの事例 ・業務コンサルティングの事例 ・経営コンサルティングの将来 ・その他
第 6 回	イノベーションを促す経営サービス（3）：IT コンサルティングの実際 ・IT 戦略コンサルティングの事例 ・IT システムコンサルティングの事例 ・IT コンサルティングの将来 ・その他
第 7 回	イノベーションを促す情報システムサービス（1）：情報システムサービスの概要 ・基幹情報システムサービスの仕事と業界地図 ・総合情報システムサービスの仕事と業界地図 ・情報システムサービスの具体事例 ・その他
第 8 回	イノベーションを促す情報システムサービス（2）：基幹情報システムサービスの実際 ・企業情報システムの意味と位置づけ ・ERP（Enterprise Resource Planning：統合基幹情報システム）とは？ ・基幹情報システムの将来 ・その他
第 9 回	イノベーションを促す情報システムサービス（3）：総合情報システムサービスの実際 ・社会課題を解決する総合情報システムとは？ ・SDG s の貢献にカギとなるデジタル技術 ・総合情報システムの将来 ・その他
第 10 回	イノベーションを促すソフトウェア（1）：ソフトウェア・ビジネスの概要 ・これまでのソフトウェア・ビジネスの仕事と業界地図 ・これからのソフトウェア・ビジネスの仕事と業界地図 ・ソフトウェア・ビジネスの具体事例 ・その他
第 11 回	イノベーションを促すソフトウェア（2）：これまでの企業向けソフトウェアの実際 ・ERP ソフトウェアの歴史 ・ERP ソフトウェアの機能 ・ERP ソフトウェアの進化 ・その他
第 12 回	イノベーションを促すソフトウェア（3）：これからの企業向けソフトウェアの実際 ・企業活動の総合的データ基盤（プラットフォーム）となるソフトウェア ・だれでもソフトウェアを作れるローコード／ノーコード化 ・企業向けソフトウェアの将来 ・その他

第 13 回	イノベーションを促す起業サービス（1）：起業サービスの概要 ・起業サービスの仕事と業界地図 ・起業サービスの具体事例 ・授業の振り返りと授業内最終レポート作成・提出
第 14 回	イノベーションを促す起業サービス（2）：ベンチャー・キャピタルの実際 ・起業の世界地図と現実 ・なぜ多くの起業はプランどおりにいかず失敗するのか？ ・起業の成功率を上げる方法 ・その他
第 15 回	ゲスト講師と履修生を交えてのパネル討議、質疑応答
成績評価の方法	毎回の授業内討議への参加、発表：40％ 毎日の授業課題の提出：30％ 授業内最終レポート：30％
準備学修（予習・復習、課題等）	・授業前に UNIPA に掲示される講義資料がある場合には、事前に内容を学習すること。 ・毎日の課題は翌日の授業開始までに UNIPA にアップすること。 ・授業内最終レポートを指定時間内で作成、完了させ、提出すること。

教科書

書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	『DX とは何か』 坂村健（著）、KADOKAWA、2021 年、ISBN978-4-04-082339-3 『Why Digital Matters？”なぜ”デジタルなのか』 プレジデント経営企画研究会（編）、プレジデント社、2018 年、ISBN978-4-8334-5130-7 『両極化時代のデジタル経営 ポストコロナを生き抜くビジネスの未来図』 デロイトトーマツグループ（著）、ダイヤモンド社、2020 年、ISBN 978-4-4781-1027-0 『グローバル経営のモダナイゼーション』 NTT データグローバルソリューションズ（著）、日経 BP、2019 年、ISBN978-4-2961-0212-9
備考	・本授業は就業や起業の前に修得すべき重要な職業スキルを中心に、企業や大学から多数のゲスト講師が講義されます。そのため、通常の講義日程とは異なり、後期授業開始前の 9 月の連続 5 日間に一日 3 コマの授業を実施する集中講義形式となります。ただし、単位認定の日程は通常の後期の学年暦に従います。 ・本授業では、企業や大学から多数のゲスト講師が講義されますので、授業に遅刻しないように十分に注意してください。 ・参考書の『DX とは何か』は、できれば本授業の開始前に一読することを推奨します。その他の三冊の参考書は、関心の程度に応じ、本授業の前後に一読することを推奨します。
昨年度からの振り返り	最新のトピックを盛り込んだ産学連携形式の講義のメリットを活かせるように、毎年、授業構成をアップデートします。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	3年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	コーポレートファイナンス					授業形態	講義
授業コード	CFI123	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	辻 貴之						
授業概要	企業における資金の調達・運用、設備投資等に関して包括的に学び、理論を正確に理解した上で、その応用力を身につけることを目的とする。具体的には、基本的なファイナンスに関する理論、企業における資金調達と資本構成の実態、資本コストの考え方やその算出方法、企業における配当政策、債権と株式の評価方法、現在価値の概念を用いてキャッシュフローを評価する方法、デリバティブに関する基本的な理論とリスクヘッジのためのデリバティブの利用などに関する知識を修得し、企業の財務意思決定の基礎理論を理解する。						
授業の目的・到達目標	起業を志したり、企業に勤めたりする人が、技術だけではなく、思想と理論を踏まえて、自らの「コーポレート」において「ファイナンス」を活用できるようになることを目指す。単に理論を知るのではなく、自分自身や履修者の問題意識や課題の解決を意識しながら学ぶことで、体得することを狙う。その過程を経て、履修者同士が今後も「ファイナンス」をきっかけにしたコミュニティとなり、授業後の日々でも課題解決しあえる関係になることを期待する。						
授業計画							
第1回	コーポレートファイナンスとは						
第2回	財務諸表（B/S、P/L、C/F計算書）とは						
第3回	財務諸表と財務指標（ROA・ROEなど）						
第4回	企業の成長過程や業種別の事業戦略と財務戦略						
第5回	企業価値評価（ROIC・DCF）						
第6回	現在価値と将来価値						
第7回	資本コスト（CAPM・WACC）						
第8回	投資家の視点（ポートフォリオ理論・市場の効率性など）						
第9回	資金調達方法（エクイティとデット）と最適資本構成（MM理論）						
第10回	ファイナンスを意識した事業計画、資本政策（投資家や契約方法の選び方・考え方）						
第11回	利益還元政策						
第12回	デリバティブの種類と活用方法						
第13回	M&Aやアライアンスの活用方法						
第14回	コーポレートガバナンスとサステナビリティ						
第15回	ラップアップ（レポートの事前プレゼンとインプット）						
成績評価の方法	・平常点50%（参加態度40%、質疑応答やチャットへの参加10%） ・最終レポート50%（事前プレゼン20%、レポート30%）						
準備学修（予習・復習、課題等）	予習：各回のテーマに関する自身の課題や問題意識を整理しておく。講義中に示したサイト等を事前に読んでおく。（各回90分程度） 復習：前回の講義中に行った質疑応答を、改めて自分自身で行う。（各回90分程度）						
教科書							

書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	『コーポレートファイナンス 戦略と実践』 田中慎一（著）、保田隆明（著）、ダイヤモンド社、2019 年 『起業のファイナンス』 磯崎哲也（著）、日本実業出版社、2015 年 『ファイナンス思考』 朝倉祐介（著）、ダイヤモンド社、2018 年
備考	・「ファイナンス入門」を履修していることが望ましいが、条件とはしない。財務会計の初歩的なことを、講義の初期段階で行うようにする。また、講義開始時は、前回の復習を行い、疑問を残さず進むよう心がける。 ・履修者の理解度等に応じて、テーマをシラバス記載の内容より変更する可能性がある。その際は、授業で必要な連絡を行う。
昨年度からの振り返り	事例の提示、理論や数式の実践、その上での参加者同士のディスカッションを、さらに行う。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	3年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	グローバル企業戦略論					授業形態	講義
授業コード	GES121	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	平澤 賢嗣						
授業概要	企業は単にその事業を成功させるだけでなく、株主に対してその利益の還元や企業のもつ価値をより高める必要がある。特に、ICT やグローバル化が進む今、従来の枠組みにとらわれず、企業の内外から経営資源を獲得し活用することが求められている。これは企業のイノベーションや成長を導くためにも不可欠なものとなっている。 本授業では、こうした観点から、実際の企業経営における意思決定のメカニズムとその際に用いられるツールやフレームワークを検討することを目的とする。具体的には、企業価値の定義とその向上策に関してどのような議論や取り組みがされたか、また、企業の成長と多角化に関してどんな戦略やマネジメント手法が考えられるかを具体的な事例を用いて学ぶ。あわせて、グローバル展開についてもとりあげ、これをすすめるために必要な組織管理、ルール、考え方についても、具体的な企業を取り上げ、理解を深める。						
授業の目的・到達目標	企業経営における意思決定のメカニズムと、その際に用いられるツールやフレームワークを理解し、起業や事業活動の意思決定への軸・切り口を獲得することを目的とする。戦略検討の軸を設定できるようになり、比較・分析を通して、企業の付加価値を高める創造力を養うことが目標である。 具体的には、企業の戦略分析を通して、企業の戦略設定を評価し、事業として成長させる方法と進め方を、毎回の授業で、段階を追って学習する。						
授業計画							
第 1 回	イントロダクション： グローバル企業戦略概論 （戦略を学ぶ意義、戦略と戦術、戦略相関、定量と定性、多国籍企業概念）						
第 2 回	ケイパビリティ理論①： 戦略経営プロセスと競争優位の獲得、ビジネスモデル・キャンバス、事業計画の重要性確認						
第 3 回	ケイパビリティ理論②： 外部環境分析（分析データ取得、他社比較、SWOT 概念 他）						
第 4 回	ケイパビリティ理論③： 内部環境分析（リソース・ベースト・ビュー、VRIO フレームワーク、バリューチェーン 他）						
第 5 回	ケイパビリティ理論④： 外部・内部環境分析の具体的事例研究						
第 6 回	ポジショニング理論： 差別化理論、コストリーダーシップ理論						
第 7 回	不確実性下の戦略： 残存不確実性と戦略姿勢・行動ポートフォリオ、コア・コンピタンス、ゲーム理論、バックキャスティング等（ケーススタディ 1 対象企業発表、個別戦略考察開始）						
第 8 回	ケーススタディ 1 ディスカッション①： グループ分け・期限発表→当日議論後「ケーススタディ 1 本日のまとめをグループ毎発表」						
第 9 回	戦略講演：事業会社社員講演						
第 10 回	ケーススタディ 1 ディスカッション②： 講演所感→ケーススタディ 1 最終議論「ケーススタディ 1 本日のまとめをグループ毎発表」						

第 11 回	グループ発表「ケーススタディ 1 戦略考察」 （ケーススタディ 2 対象企業発表、個別戦略考察開始）
第 12 回	ケーススタディ 2 ディスカッション①： グループ分け・期限発表→当日議論後「ケーススタディ 2 本日のまとめをグループ毎発表」
第 13 回	ケーススタディ 2 ディスカッション②： 「ケーススタディ 2 本日のまとめをグループ毎発表」
第 14 回	グループ発表「ケーススタディ 2 戦略考察」
第 15 回	(「ケーススタディ 2 各グループ発表の良かった点等まとめをグループ毎発表」) 授業の振り返り・まとめ
成績評価の方法	毎回の授業への参加：30% 毎回の授業内発言内容：30% ケーススタディ 1 報告・発表内容：20% ケーススタディ 2 報告・発表内容：20%
準備学修（予習・復習、課題等）	◆ケーススタディ前（第 1 回～第 7 回） 予習： 授業内クラス討議を円滑に進めるために、以下教科書（参考書）の該当箇所の読了、グループ発表に向けケーススタディ企業の戦略事例等をインターネット等を活用して調査（60 分程度） 復習： 授業での学修内容の振り返り（45 分程度） ◆ケーススタディ（第 8 回～第 15 回） 予習・復習： ・グループ発表に向けたグループワーク（90 分～120 分（進捗状況による）） ・発表用資料作成（90 分程度）

教科書

書名	著者	出版社	ISBN	備考
［新版］企業戦略論【上】基本編 戦略経営と競争優位	ジェイ B. バーニー、 ウィリアム S. ヘスタリー	ダイヤモンド社	4478111677	

参考書	『マネジメント・テキスト グローバル経営入門（新装版）』 浅川和宏（著）、日経 BP、2022 年 『［新版］競争戦略論 I』 マイケル E. ポーター（著）、竹内弘高（訳）、ダイヤモンド社、2018 年 『不確実性の経営戦略（ハーバード・ビジネス・レビュー・ブックス）』 Harvard Business Review（編）、DIAMOND ハーバードビジネスレビュー編集部（訳）、ダイヤモンド社、2000 年 『［新版］企業戦略論【中】事業戦略編』 ジェイ B. バーニー（著）、ウィリアム S. ヘスタリー（著）、岡田正大（訳）、ダイヤモンド社、2021 年 『［新版］企業戦略論【下】全社戦略編』 ジェイ B. バーニー（著）、ウィリアム S. ヘスタリー（著）、岡田正大（訳）、ダイヤモンド社、2021 年
備考	グローバル企業戦略論の分析の切り口は、起業のみならず、今後の研究や社会人生活において広範囲に多くの場面でも応用できますので、授業内でのグループ毎の分析に積極的に参加

	し、積極的な発言をお願いします。
昨年度からの振り返り	ケーススタディ 2 の議論時間が足りない場合、参加学生の要望を聞いた上で、第 14 回目に授業の振り返り・まとめ＋ケーススタディ議論を追加し、第 15 回目（最終授業）でケーススタディ 2 のグループ発表を実施する可能性あり。皆さんの積極的な授業への関与・意見を推奨します。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	4 年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	新興市場における事業開発					授業形態	講義
授業コード	NBE122	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎志村 一隆、曽根原 幹人						
授業概要	ビジネスのグローバル化を進めるうえで、海外市場を理解する視点や海外拠点・海外パートナーとの協働は重要である。また多様化していく市場を理解したうえ、的確に事業を行っていくためのマネジメントについても正しく理解しておく必要がある。 本授業では、発展途上である新興国に進出した事例の紹介、新興市場特有のマネジメントに関する知識や手法の紹介を行うとともに、実際に自分たちが新興国へ参入することを想定したビジネスプランや戦略の立案を通じて、新興市場での事業開発の考え方や手法を学ぶ。						
授業の目的・到達目標	アジアなど新興市場において、新たに事業開発する時に必要なスキルを身につける。法律、商慣習、市場環境、宗教、生活習慣、人口などをどのように調べるのか？調べた結果、戦略をどのように立案、実行するのか？新興国市場における組織はどのようなものがあるのか？そのような知識を得ることで、実際のビジネスシーンで役立つことを目標とする。						

授業計画	
第 1 回	オリエンテーション（学びたいこと、問題意識の共有）
第 2 回	企業活動・企業経営の基本（経営学等、過去の学びの振り返り）
第 3 回	グローバルビジネスの動向（とりわけ新興市場での動き等）
第 4 回	社会課題解決の考え方（SDGs の動向、日本企業の事例紹介）
第 5 回	新興地域の市場概観（アジア、とりわけ ASEAN の状況整理等）
第 6 回	新興市場進出の事例研究（企業の事例紹介）
第 7 回	新興国特有の課題・注意点（商習慣、宗教・価値観、文化等）
第 8 回	事業開発・展開における事例研究（日本企業の具体事例等）
第 9 回	ビジネスプラン作成～事業開発プロセス（プロマネ）の全体像
第 10 回	ビジネスプラン作成ワーク① WHY 形成（どんな問題に向かうか、動機は）
第 11 回	ビジネスプラン作成ワーク② WHERE 形成（どこで勝負するか）
第 12 回	ビジネスプラン作成ワーク③ WHAT 形成（どんな事業をするか）
第 13 回	ビジネスプラン作成ワーク④ HOW 形成（ビジネスモデルは、リソースや組織は）
第 14 回	ビジネスプラン発表会（チーム別発表）
第 15 回	チーム発表の結果とプロセスの振り返り
成績評価の方法	授業内での発表・討議への参加度・貢献度、質問等 30% 各回の授業レポート 40% チーム事業開発プラン制作発表 30%
準備学修（予習・復習、課題等）	予習：事前に提示される検討テーマ、事例の検討や発表に向けた準備（チーム討議含む）等（各回 1.5 時間程度） 復習：授業で学んだことについての事後レポート提出（各回 1.5 時間程度）

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考

指定なし				

参考書	『海外戦略ワークブック』 河瀬誠（著）、日本実業出版社、2014 年、ISBN978-4534052308 『ビジネス教養 東南アジア』 助川成也（監修）、新星出版社、2021 年、ISBN 978-4405120136 『60 分でわかる！SDGs 超入門』 バウンド（著）、功能聡子（監修）、佐藤寛（監修）、技術評論社、2019 年、ISBN 978-4297109691
備考	・第 1 回目の授業に臨む際、「自分自身がこの授業で学びたいこと」や、「アジアを中心とした新興国市場において知りたいこと」を考えた上で出席すること ・各授業で、必要に応じて次回までに検討しておく事項について指示するので、期日までに取り組む（または提出する）こと ・各回の授業後、学び・気づきの振り返りを行い、その内容をレポートにして提出すること ・演習等の進捗状況よって、講義内容及び講義の前後関係を一部変更する可能性がある
昨年度からの振り返り	昨年度は未開講のため該当なし。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	4年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	クロステックビジネスデザイン					授業形態	講義
授業コード	XTD121	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	幡鎌 博						
授業概要	情報通信技術の発展のなかで、金融や教育、医療、農業などの既存のビジネス領域とテクノロジーを融合し、産業構造の変化が進んでいる。これは既存のビジネスモデルの拡大や高度化、他分野やベンチャー企業の新規参入など、多様な論点が含まれている。 本科目ではこれらの産業のイノベーションの事例を紹介するとともに、テクノロジーと融合した既存のビジネスがどのように発展・成長してきたか、技術軸・時間軸の観点から概観する。あわせて、それぞれの産業特有の法律や規制などの課題や論点を整理し、諸外国での議論等を紹介しながら、日本のビジネスとテクノロジーの融合のあり方、ビジネスモデルについて検討、議論を通じて深めていきたい。						
授業の目的・到達目標	既存のビジネスがどのように発展・成長してきたかを技術軸・時間軸の観点から理解した上で、テクノロジーを活用したビジネスモデルを説明・評価・設計できるようになる。						
授業計画							
第1回	授業の目的・構成、基礎的な知識						
第2回	IT関連の法律・規制の問題、促進のための政策・制度						
第3回	ITを活用したDX（Digital Transformation）・ビジネスモデルの手法						
第4回	業界毎の動向・事例等 ネットショッピング／EC（BtoC、CtoC、BtoB、越境EC等）						
第5回	業界毎の動向・事例等 シェアリング、サブスクリプション、オムニチャネル／OMO						
第6回	業界毎の動向・事例等 広告、ソーシャルメディア、クチコミサイト、コンテンツ						
第7回	業界毎の動向・事例等 金融・物流・旅行・モビリティのDX						
第8回	業界毎の動向・事例等 農業・製造・建設のDX						
第9回	業界毎の動向・事例等 他のサービス（教育、医療、インフラ等）のDX						
第10回	ビジネスモデル特許（ビジネス方法特許）の概要と事例						
第11回	ビジネスモデルの設計方法・発想法						
第12回	ビジネスモデルの設計演習（個人毎の発表）						
第13回	ビジネスモデルの設計演習（グループワーク）						
第14回	ビジネスモデルの設計演習（グループの発表と議論）						
第15回	振り返り・全体のまとめ						
成績評価の方法	最終レポート60%、授業内での提出物20%、授業内での発表・発言等の貢献度20%						
準備学修（予習・復習、課題等）	予習は、次の回で学ぶ内容（用語など）について各自十分な下調べを行う。ビジネスモデルの設計演習の回では、個人毎の発表資料の作成やグループでの発表資料の作成も必要となる。（90分） 復習では、授業で学んだ内容の中で特に関心の高い内容を詳しく調査し、自分自身でもビジネス案などを考えてみる。（90分）						
教科書							

書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	『インビンシブル・カンパニー』 アレックス・オスターワルダー 他（著）、翔泳社、2021 年、ISBN978-4798167862 『e ビジネス・DX の教科書―デジタル経営の今を学ぶ―」 幡鎌博（著）、創成社、2022 年、ISBN978-4794425980 『DX のためのビジネスモデル設計方法』（2023 年に改訂版が出版予定） 幡鎌博（著）、インプレス R&D、2020 年、ISBN978-4844379430
備考	
昨年度からの振り返り	昨年度は未開講のため該当なし。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	4年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	デザインと経営					授業形態	講義
授業コード	DIB121	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	新谷 幸弘						
授業概要	ICT による急速な社会変化への対応が企業にとって重要な経営課題となる中で、旧来のビジネスモデルを刷新し、それを構築・実現する社外の人材やその知見を柔軟に取り入れることが求められている。 本授業ではビジネスモデルに着目した新しいビジネスのデザインの方法論と、社外の知見の活用方法としてのオープンイノベーションについて、そのタイプと導入・実践の手法を学ぶ。また、デザイナーやアーティストなどとの協働によるイノベーション（インターベンション）を行うことで、自らイノベーションを起こすために必要な知識やスキルを習得する。						
授業の目的・到達目標	★デザインとは何かを理解し、デザインを経営に活かす術（すべ）を身に付ける。 ★オープンイノベーションの意義を理解し、周りを巻き込むイノベーションの術（すべ）を身に付ける。						

授業計画	
第 1 回	イントロダクション：デザインとは何か？（本授業の背景、目標など）
第 2 回	イントロダクション：デザインと経営の関わりとは？（本授業の背景、目標など）
第 3 回	誰でもできる『イノベーション』1 イノベーションとは何か（教科書①第 1 章）
第 4 回	誰でもできる『イノベーション』2 デザイン思考の 5 ステップ（教科書①第 1 章）
第 5 回	始まりは『ニーズ』1 顕在化ニーズと潜在的ニーズ（教科書①第 2 章）
第 6 回	始まりは『ニーズ』2 共感を得るための手法（教科書①第 2 章）
第 7 回	目指すは究極の『いいとこ取り』1 顧客の願望を充たす（教科書①第 3 章）
第 8 回	目指すは究極の『いいとこ取り』2 当たり前を疑う（教科書①第 3 章）
第 9 回	『新たな価値』を創造する 1 1 人のアイデアより皆のアイデア（教科書①第 4 章）
第 10 回	『新たな価値』を創造する 2 ナンバーワンよりオンリーワン（教科書①第 4 章）
第 11 回	オープンイノベーション 1 イノベーション論の変遷（教科書②第 1 章）
第 12 回	オープンイノベーション 2 オープンイノベーションの特徴と類型（教科書②第 1 章）
第 13 回	イノベーション事例 1 国内企業のイノベーション事例（教科書②第 4 章）
第 14 回	イノベーション事例 2 海外企業のイノベーション事例（教科書②第 4 章）
第 15 回	まとめ＆振り返り
成績評価の方法	★平常点（授業内課題、授業への参加状況、提出物）60%、最終レポート 40% ★必要に応じて、グループワークによる発表・レポート提出を求めることがある（加点方式にて評価）。
準備学修（予習・復習、課題等）	予習：教員が指定する教科書・参考書の範囲を、事前に読んでおくこと。(2 時間) 復習：講義資料、並びに教科書・参考書等の該当部分を復習すること。(2 時間)

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考

デザイン思考2.0	松本勝	小学館	978-4098254408	
オープンイノベーション白書 第三版	NEDO	NEDO		<ダウンロード先URL> https://www.nedo.go.jp/content/100918466.pdf

参考書	『破壊的イノベーションの起こし方』 松本勝（著）、東洋経済新報社、2021年、ISBN978-4492522356 『世界「失敗」製品図鑑』 荒木博行（著）、日経BP、2021年、ISBN978-4296000395 参考書は適宜紹介する。
備考	
昨年度からの振り返り	昨年度は未開講のため該当なし。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	4年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	税務会計・会計処理					授業形態	講義
授業コード	TAT123	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	辻 貴之						
授業概要	税務会計とは、税法の様々な規程に基づき、企業が課税されるべき所得税を算出するものである。 本授業では業界・業種ごとの会計処理の特徴やルールを学びながら、税務会計の基礎から講義を行う。税務会計を通じ、様々な業界の特色を理解するとともにそのビジネスの展開やICTの活用の可能性について理解を深める。あわせて、申告書の作成までの一連の税務申告の流れを学ぶことで、実践的な税務会計についての知識を習得する。						
授業の目的・到達目標	起業を志したり、企業に勤めたりする人が、技術だけではなく、思想と理論を踏まえて、税務を理解した上で活用できるようになることを目指す。単に理論を知るのではなく、自分自身や履修者の問題意識や課題の解決を意識しながら学ぶことで、体得することを狙う。その過程を経て、履修者同士が今後も本講義をきっかけにコミュニティとなり、授業後の日々でも課題解決しあえる関係になることを期待する。						

授業計画	
第1回	税務と会計
第2回	財務諸表（B/S、P/L、C/F計算書）の基礎
第3回	日常生活における税金（国民の三大義務など）
第4回	財政と課税
第5回	課税所得計算（財務会計の利益計算との関係など）
第6回	課税所得計算（益金と損金など）
第7回	益金について（売買損益の基礎、営業外収益（受取配当金や有価証券の譲渡損益など））
第8回	益金について（収益認識基準、権利確定主義など）
第9回	損金について（債務確定、売上原価、減価償却、特別償却など）
第10回	損金について（資本的支出、繰延資産の償却、寄附金、租税公課など）
第11回	税額の計算、申告・納付まで（課税所得計算、欠損金、法人税額の計算、税額控除など）
第12回	日本国内の税制（日本国内の税制全般、連結納税、組織再編税制など）
第13回	海外の税制（国際的二重課税の排除、租税回避への対応など）
第14回	会計や税務を対象としたビジネスの展開（税理士、会計事務所、SaaSなど）
第15回	ラップアップ（レポートの事前プレゼンとインプット）
成績評価の方法	・平常点50%（参加態度40%、質疑応答への参加10%） ・最終レポート50%（事前プレゼン20%、レポート30%）
準備学修（予習・復習、課題等）	予習：各回のテーマに関する自身の課題や問題意識を整理しておく。講義中に示したサイト等を事前に読んでおく。（各回90分程度） 復習：前回の講義中に行った質疑応答を、改めて自分自身で行う。（各回90分程度）

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考

指定なし				

参考書	『税務会計の基礎』 本郷孔洋（著）、田中弘（著）、税務経理協会、2013 年 『コーポレートファイナンス 戦略と実践』 田中慎一（著）、保田隆明（著）、ダイヤモンド社、2019 年 『ファイナンス思考』 朝倉祐介（著）、ダイヤモンド社、2018 年
備考	・2024 年度以降は原則「コーポレートファイナンス」の履修を前提としたいが、今年度は未履修者も歓迎する。ただし、「アカウンティング応用」「ファイナンス入門」を履修していることが望ましい。 ・会計に関する知識が無いと自覚している場合は、少なくとも簿記 3 級程度を事前に自習しておくことを勧める。 ・履修者の理解度等に応じて、テーマをシラバス記載の内容より変更する可能性がある。その際は、授業で必要な連絡を行う。
昨年度からの振り返り	昨年度は未開講のため該当なし。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	1年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	イノベーションプロジェクトⅠ					授業形態	演習
授業コード	IP1125	単位数	2単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎志村 一隆、久米 信行、乘浜 誠二、松村 太郎、川上 慎市郎、坡山 里帆、三宅 志穂						
授業概要	3～5人のグループ単位で事業計画の策定を行い事業の立ち上げを目指す、一連の中核プログラムの一部である。 Ⅰでは、身近な街の生活者など身の回りの人々の行動観察から課題を発見し、その課題を解決するプロダクト／サービスを考案し、その開発に取り組む。ワークショップ形式の授業では、デザイン思考、リーンスタートアップのメソドロジーを取り入れて行い、適切なチームビルディングと事業開発のステップを踏めるようになることを狙う。また、その活動を通じて自分自身が「事業を興す」ために必要なビジネスの知識とICTのスキルが不足していることを痛感させ、個々の学生の今後の学習の意欲を高めるように促す。						
授業の目的・到達目標	・異なる価値観、性格のメンバーと、ゴールに向けて協働し期待された結果を出せるようになる ・観察、定義、解決策の考案・実装というデザイン思考の基本プロセスを理解し、実践できる ・身近なところに潜む課題解決に必要なスキルセットをイメージし、主体的に学習する意欲を得る						
授業計画							
第1回	科目の全体像と流れの説明、グループ編成、チームビルディング						
第2回	顧客観察と理解の手法、フィールドワーク						
第3回	顧客課題の分析と特定（1）共感マップ						
第4回	顧客課題の分析と特定（2）						
第5回	課題の解決策のアイデア創出（1）バリュープロポジション・キャンバス						
第6回	課題の解決策のアイデア創出（2）						
第7回	アイデアのプロトタイピング（実装）						
第8回	プロトタイプのテスト（1）フィールドワーク						
第9回	テスト結果の分析と再実装への反映						
第10回	プロトタイプのテスト（2）フィールドワーク						
第11回	ストーリーテリングの手法						
第12回	ストーリーの構想とプレゼンテーション練習						
第13回	中間プレゼン発表とフィードバック						
第14回	プレゼンテーションの再構成						
第15回	最終プレゼン発表とフィードバック						
成績評価の方法	・12回目までの各回のグループでの成果物提出とその内容（各回4%、計48%） ・グループ内メンバーのグループワークにおけるリーダーシップの相互評価（各回 2%、計30%） ・中間および最終プレゼン発表におけるパフォーマンス（各11%、計22%）						
準備学修	・予習：事前に、それぞれの回で必要となる知識やフレームワークについて参考書の指定範						

(予習・復習、課題等)	囲を読み込み、解説動画を視聴しておく（約 1 時間） ・復習：次回講義までにその成果物をグループ単位でまとめ、発表できるようにしてくる（約 2〜3 時間） ・課題：各回ともグループワーク課題が課され、それに取り組んで成果を発表する。もしくは、前回課された課題の成果を発表したうえで、その見直しに取り組む

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	各回ごとに必要な資料を適宜配布する。 参考文献： 『Lean Customer Development: Building Products Your Customers Will Buy』 Cindy Alvarez（著）、O’Reilly Media、2017 年 『起業の科学　スタートアップ・サイエンス』 田所雅之（著）、日経 BP 社、2017 年
備考	この科目は「大学等における修学の支援に関する法律」において本学が申請した実務経験のある教員による授業科目です。
昨年度からの振り返り	昨期はグループワーク、プレゼンなどに多くの時間を割いたが、リーダーシップなどグループ内の役割分担がうまくいくチームといかないチームに分かれた。 今期は自らの知見・経験に加え、投資家・経営者をゲスト講師に迎え、学生の視野を広げ、ビジネスアイデアを見つける可能性を拡大したい。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	1年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	イノベーションプロジェクトⅡ					授業形態	演習
授業コード	IP2125	単位数	2単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎志村 一隆、久米 信行、乘浜 誠二、松村 太郎、川上 慎市郎、坡山 里帆、三宅 志穂						
授業概要	3～5人のグループ単位で事業計画の策定を行い事業の立ち上げを目指す、一連の中核プログラムの一部である。 イノベーションプロジェクトⅡでは、Ⅰのグループからメンバーを再編成したうえで、身近な生活者の課題を発見し、その課題の解決策となるプロダクト／サービスを簡単なソフトウェア開発スキルを用いて実際に実装してみる（プロトタイピング）ことを通じて、解決策の実現可能性を高め、質を上げられるようになることを目指す。このため、Ⅰに比べてプロトタイピングからテストにかけてのサイクルをやや長めにとり、最終プレゼンでは単なるアイデアのみならず、実装されたプロダクト／サービスとその事業化の可能性までを展示・説明できるようにする。また、この活動を通じてソフトウェア技術やデータ解析のスキル習得に対する意欲をさらに高める。						
授業の目的・到達目標	・異なる価値観・性格のメンバーと、素早く打ち解けて協働できる対人スキルを身につける ・デザイン思考の基本プロセスを正しく理解し、その仮説検証サイクルを素早く回せるようになる ・ICT を用いた課題解決に必要なスキル（ソフトウェア開発・データ解析など）の全体像を把握し、それを用いたプロダクト実装と事業化した際の簡単な収益シミュレーションができるようになる						

授業計画	
第1回	科目の全体像と流れの説明、グループ編成、チームビルディング
第2回	顧客観察と課題の分析・特定（1）
第3回	顧客観察と課題の分析・特定（2）
第4回	課題の解決策のアイデア創出
第5回	アイデアのプロトタイピング（1）
第6回	プロトタイプのテスト（1）フィールドワーク
第7回	ビジネスモデルへの落とし込み（1）ビジネスモデル図
第8回	アイデアのプロトタイピング（2）
第9回	プロトタイプのテスト（2）フィールドワーク
第10回	ビジネスモデルへの落とし込み（2）UXデザインとMOT
第11回	ビジネスモデルへの落とし込み（3）収支モデルとKPI
第12回	ストーリーの構想とプレゼンテーション練習
第13回	中間プレゼン発表とフィードバック
第14回	プレゼンテーションの再構成
第15回	最終プレゼン発表とフィードバック
成績評価の方法	・12回目までの各回のグループでの成果物提出とその内容（各回4%、計48%） ・グループ内メンバーのグループワークにおけるリーダーシップの相互評価（各回 2%、計30%）

	・中間および最終プレゼン発表におけるパフォーマンス（各 11%、計 22%）
準備学修 (予習・復習、課題等)	・予習：事前に、それぞれの回で必要となる知識やフレームワークについて参考書の指定範囲を読み込み、解説動画を視聴しておく（約 1 時間） ・復習：次回講義までにその成果物をグループ単位でまとめ、発表できるようにしてくる（約 2～3 時間） ・課題：各回ともグループワーク課題が課され、それに取り組んで成果を発表する。もしくは、前回課された課題の成果を発表したうえで、その見直しに取り組む

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	各回ごとに必要な資料を適宜配布する。 参考文献： 『Lean UX 第 2 版―アジャイルなチームによるプロダクト開発（THE LEAN SERIES)』 ジェフ・ゴーセルフ（著)、ジョシュ・セイデン（著)、坂田一倫（監修)、 エリック・リース（編)、児島修（訳)、オライリージャパン、2017 年 『UX for Lean Startups: Faster, Smarter User Experience Research and Design』 Laura Klein（著)、O’Reilly Media、2013 年
備考	
昨年度からの振り返り	新たなビジネストレンド、海外市場など学生の知見を広げるゲスト、トピック紹介をさらに盛り込んでいく。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	1年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	スタートアップ基礎（起業論）					授業形態	講義
授業コード	TEN121	単位数	2単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	江端 浩人						
授業概要	新しい領域が確立され、技術革新が著しく、新しい価値が世の中に多数提供されるときには既存の価値提供モデル（ビジネス制度、社会制度、生活様式など）を進展させることよりも、新しいモデルを確立することが必要であろう。まさに現代はその時期にあたりIT革命（デバイス、通信技術、AI、IoT、Big Data活用など）や多様な価値観（働き方改革、Diversity & Inclusion、SDGsなど）に基づく多様な変化が数多く起こっている。 本授業では、これまで成功した企業やビジネスモデル、起業家が輩出された背景やそれぞれの想いや取ってきた手法をもとに、起業に必要な要素に分けて学びを深めることで、今、起業家に必要と思われる要素を推測し実証する。そのうえで、自らの想いを形にするためのビジネスモデルやパッション・ビジョン・ミッションを作り、今後の自分自身の成長計画につなげる。						
授業の目的・到達目標	授業を受けた個人が必要に応じ起業を検討できるように、各種基礎知識のインプットとそれを自分ごと化できる素地を与える。具体的に世の中の進展とそれに伴う個人が貢献できる価値提供、起業に必要な心構え（マナー、モラル、リスク管理含む）やビジネス知識を講義・ディスカッションする。 また、個人あるいは組織としてどのように社会に価値提供できるかというフレームワークを身につけ、自らのパッションに基づくビジョン・ミッションを構築することを目標とする。さらにそのために必要な各種資産を棚卸して自分の今後の成長計画を作ることを目指す。						
授業計画							
第1回	イントロダクション：本授業に必要な心構えと授業の目標の明確化						
第2回	現代の社会・経済環境：戦後に起業した日本や海外の事例研究						
第3回	グループワークショップ：現代の日本企業の立ち位置、経営や技術のトレンド／ビジネスモデルキャンバス						
第4回	ビジネスモデルⅠ：成功したビジネスのビジネスモデルの事例研究／カスタマージャーニー						
第5回	ビジネスモデルⅡ：よいビジネスモデルの条件／収支計算						
第6回	グループワークショップ：ビジネスモデル発表・ディスカッション						
第7回	競争ルールと成長戦略：事業ドメインなど環境の把握、競争ルールとその検討方法						
第8回	経営資源とマネジメント：活用できる資源、特に資金調達の手段と特徴						
第9回	ビジョン・ミッション：ビジョナリーカンパニーとは？継続に必要な要素						
第10回	グループワークショップ：ビジョナリーカンパニー発表・ディスカッション						
第11回	起業における諸問題Ⅰ：現代社会における価値創造、環境変化、ビジネス状況など						
第12回	起業における諸問題Ⅱ：マナー、モラルハザード、リスク管理など						
第13回	パッション・ビジョン・ミッションⅠ　レポート　およびディスカッション						
第14回	パッション・ビジョン・ミッションⅡ　レポート　およびディスカッション						
第15回	総括：起業家としての要素およびそれを活かす方法 ディスカッションなど						
成績評価	最終評価はパッション・ビジョン・ミッション　レポートの個別提出（60%）による。						

の方法	グループワークショップへの参加度やディスカッションへの参加も考慮に入れる（40%）。
準備学修（予習・復習、課題等）	個人による事前資料の理解。グループワークでの準備が毎回 1～3 時間ほど要求される。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	プリントを適宜配布します。 参考文献： 『ビジョナリー・カンパニー―時代を超える生存の原則』 ジム・コリンズ（著）、山岡洋一（訳）、日経 BP、1995 年 『[新版] 競争戦略論 I』 マイケル E. ポーター（著）、竹内弘高（訳）、ダイヤモンド社、2018 年 『サステナベーション sustainability × innovation：多様性時代における企業の羅針盤』 藤原遠（著）、日経 BP、2020 年
備考	この科目は「大学等における修学の支援に関する法律」において本学が申請した実務経験のある教員による授業科目です。
昨年度からの振り返り	本科目は学生の皆様に知識を与えながらも、学生の皆様にグループで考えていただくことを中心に考えています。是非、グループの課題を皆様できちんと時間を作って議論されてください。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	2 年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	イノベーションプロジェクトⅢ					授業形態	演習
授業コード	IP3125	単位数	2 単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎志村 一隆、久米 信行、乗浜 誠二、松村 太郎、川上 慎市郎、斎藤 祐士、髙橋 直秀、沼田 典子						
授業概要	3～5 人のグループ単位で事業計画の策定を行い事業の立ち上げを目指す、一連の中核プログラムの一部である。イノベーションプロジェクトⅢでは、デザイン思考・リーンスタートアップの技法を用いて解決する課題に国連の「持続可能な開発目標」(SDGs) とも関連するものをテーマとし、またその解決策を持続的に実現させ規模的に拡大するための事業戦略まで落とし込む。そのため、課題の調査分析やアイデアの構想だけでなく、経営戦略のフレームワークを活用した事業計画作成と、グループメンバーを「経営チーム」と見立てた場合の組織の長期ビジョン開発も行う。最終プレゼンの場には学外から投資家も招いて、評価を受ける。						
授業の目的・到達目標	・異なる価値観、性格のメンバーと協働しながら、他者にも協力を促せる強度のある長期ビジョンをまとめられるようになる ・デザイン思考によるプロダクト／サービス開発と事業戦略開発とを連動させながら、事業化のための仮説検証サイクルを回せるようになる						
授業計画							
第 1 回	科目の全体像と流れの説明、グループ編成、チームビルディング						
第 2 回	顧客観察と課題の分析・特定（1）						
第 3 回	顧客観察と課題の分析・特定（2）						
第 4 回	課題の解決策のアイデア創出						
第 5 回	アイデアのプロトタイピング						
第 6 回	プロトタイプのフィールドテスト						
第 7 回	ビジネスモデルへの落とし込み・収益シミュレーション						
第 8 回	プロトタイプのブラッシュアップとテスト						
第 9 回	スケールのための事業戦略立案（1）						
第 10 回	スケールのための事業戦略立案（2）						
第 11 回	経営理念と長期ビジョンの開発						
第 12 回	ストーリーの構想とプレゼンテーション練習						
第 13 回	中間プレゼン発表とフィードバック						
第 14 回	プレゼンテーションの再構成						
第 15 回	最終プレゼン発表とフィードバック						
成績評価の方法	・12 回目までの各回のグループでの成果物提出とその内容（各回 4%、計 48%） ・グループ内メンバーのグループワークにおけるリーダーシップの相互評価（各回 2%、計 30%） ・中間および最終プレゼン発表におけるパフォーマンス（各 11%、計 22%）						
準備学修（予習・復習、課題等）	・予習：事前に、それぞれの回で必要となる知識やフレームワークについて参考書の指定範囲を読み込み、解説動画を視聴しておく（約 1 時間） ・復習：次回講義までにその成果物をグループ単位でまとめ、発表できるようにしてくる						

	（約 2～3 時間） ・課題：各回ともグループワーク課題が課され、それに取り組んで成果を発表する。もしくは、前回課された課題の成果を発表したうえで、その見直しに取り組む

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	『リーンブランディング ―リーンスタートアップによるブランド構築（THE LEAN SERIES)』 ローラ・ブッシェ（著)、堤孝志（監修)、飯野将人（監修)、エリック・リース（編)、 児島修（訳)、オライリージャパン、2016 年 『ゼロ・トゥ・ワン 君はゼロから何を生み出せるか』 ピーター・ティール（著)、ブレイク・マスターズ（著)、瀧本哲史（その他)、関美和（訳)、NHK 出版、2014 年
備考	
昨年度からの振り返り	昨年度は、チームビルディングとプレゼンテーションのスキル向上に時間を割いた。 今年度も、昨年度同様、チームビルディング、プレゼンテーションスキルの向上、並びにグローバル市場を含めた視野の広さを培っていく。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	2年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	ビジネスフィールドリサーチⅠ					授業形態	実習
授業コード	FR1122	単位数	2単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎久米 信行、乗浜 誠二、松村 太郎、川上 慎市郎、各務 茂雄、徳本 昌大、山本 名美						
授業概要	実際の企業が直面している課題の分析とその解決策の立案実習を通じて、実務における経営学の応用力を体得する。 具体的には、前半の回で国内外の企業のケースを用いて「ケースを解き、クラスで議論する」というケーススタディの基本的な学習方法とその学習目的を理解・習得する。そのうえで、本学が連携する企業から提示された事例に基づき、グループでその事例に対し、調査（企業訪問、現場観察、2次情報収集、インタビュー等）、仮説形成、分析し、課題解決策をまとめ、企業の担当者にプレゼンテーションするための資料作成、パフォーマンス等準備を行う。実際の企業担当者から講評を得る。 経営戦略や財務会計を中心としたケースを主に扱い、1年次前期に履修した「マネジメント（経営学基礎）」を実際の企業の経営に当てはめて検討した場合の経営判断における示唆を得、またそれを実際の企業の担当者に評価されることを目指す。						
授業の目的・到達目標	・プロジェクトベースドラーニング（課題解決型学習）という学習方法を正しく理解し、スピーディーに問いと検証を回せるようになる ・企業の戦略について、定性、定量の両方の側面から分析を深め、実現可能な施策を導ける ・戦略や財務などの分析ツールを正しく使いこなし、その適用条件や限界についても理解する						

授業計画	
第1回	本コースの全体像と学習の進め方のオリエンテーション
第2回	問題解決（1）問題（イシュー）を発見する／問題の箇所（where）とロジックツリー
第3回	問題解決（2）問題の原因分析（why）
第4回	問題解決（3）因果構造図
第5回	問題解決（4）問題の解決方法（how）
第6回	問題解決（5）期限・目標・C/P
第7回	論理思考（1）説得力の論理構造（PS）
第8回	論理思考（2）演繹法と帰納法
第9回	論理思考（3）主張と根拠の三角形
第10回	論理思考（4）PSの構築
第11回	フレームワーク思考（1）マトリクス（四象限法）
第12回	フレームワーク思考（1）マトリクス（四象限法）
第13回	フレームワーク思考（2）プロセス
第14回	フレームワーク思考（2）プロセス
第15回	フレームワーク思考（3）要素
第16回	フレームワーク思考（3）要素
第17回	起業とサービスのマネジメント（1）起業のステップ
第18回	起業とサービスのマネジメント（2）デザイン思考

第 19 回	起業とサービスのマネジメント（3）サービスのデザイン
第 20 回	起業とサービスのマネジメント（4）カスタマージャーニー
第 21 回	起業とサービスのマネジメント（5）マルチサイド・プラットフォーム（MSP）
第 22 回	起業とサービスのマネジメント（6）サービスの成長戦略
第 23 回	起業とサービスのマネジメント（7）サービスのビジネスモデル
第 24 回	起業とサービスのマネジメント（8）MSP のレイヤー構造
第 25 回	起業とサービスのマネジメント（9）サービスのマーケティング
第 26 回	起業とサービスのマネジメント（10）サービスとエコシステム
第 27 回	起業とサービスのマネジメント（11）サービスのオペレーション分析
第 28 回	起業とサービスのマネジメント（12）サービスのオペレーション戦略
第 29 回	起業とサービスのマネジメント（13）サービス組織のマネジメント
第 30 回	起業とサービスのマネジメント（14）企業文化とリーダーシップ
成績評価の方法	・クラス内での議論への貢献（発言）：各回 1.5%、計 45% ・事前・事後の課題提出（15 回）とその内容：各回 3%、計 45% ・振り返りレポート：10%
準備学修（予習・復習、課題等）	・予習：ケーススタディの予習のための調べ学習（約 1 時間） ・復習：ケースセッションの振り返り（約 30 分） ・課題：指示に基づいたケースの分析とプレゼンの準備

教科書

書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	『経営戦略言論』 琴坂将広（著）、東洋経済新報社、2018 年 『コンサルを超える 問題解決と価値創造の全技法』 名和高司（著）、東洋経済新報社、2018 年 『イノベーションの DNA 破壊的イノベータの 5 つのスキル（Harvard Business School Press）』 クレイトン・クリステンセン（著）、ジェフリー・ダイアー（著）、ハル・グレガーセン（著）、櫻井祐子（訳）、翔泳社、2012 年 『問題解決 あらゆる課題を突破するビジネスパーソン必須の仕事術』 高田貴久（著）、岩澤智之（著）、英治出版、2014 年、ISBN4862761240 『ロジカル・プレゼンテーション 自分の考えを効果的に伝える戦略コンサルタントの「提案の技術」』 高田貴久（著）、英治出版、2004 年、ISBN9784901234436 『改訂 3 版 グロービス MBA マネジメント・ブック』 グロービス経営大学院（著）、ダイヤモンド社、2008 年、ISBN447800496X
備考	
昨年度からの振り返り	BFR で学んだことを、イノプロのビジネスプランに活かしているチームが多かったことが何より嬉しいことです。さらに、今期は、みなさんの来期のインターンシップや、当期のイノベーションプロジェクトに関連するゲスト講師をお招きして、熱心に質疑応答や課題回答をしてれたことで、講師のみなさんも感心していました。その後、実際にゲスト講師を訪ねて、みなさんのイノプロ、さらには起業済みの会社などに活かされている学生もいて感激してい

	ます。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	2 年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	イノベーションプロジェクトⅣ					授業形態	演習
授業コード	IP4125	単位数	2 単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎志村 一隆、久米 信行、乗浜 誠二、松村 太郎、川上 慎市郎、斎藤 祐士、髙橋 直秀、沼田 典子						
授業概要	3～5 人のグループ単位で事業計画の策定を行い事業の立ち上げを目指す、一連の中核プログラムの一部である。 イノベーションプロジェクトⅣでは、Ⅰ～Ⅲまでに身につけたデザイン思考やリーンスタートアップの技法を踏まえながら、墨田区内の実際の企業と協働し、その企業の抱えるユニークな技術や強みを生かしたイノベーションの創出に取り組む。 Ⅰ～Ⅲまでの顧客ニーズを起点としたプロジェクトと異なり、技術シーズを起点としたイノベーションを創出するためには、その技術の意味合いを深く理解し、そこから発想を飛躍させてプロダクトやサービスを構想しながら、逆算してそれを解決策として求める社会的な課題の探索を行う必要がある。企業の経営者や技術担当者も巻き込みチームビルディングを行いながら、技術分析のフレームワークを用いて技術を要素分解し、デザイン思考の仮説検証サイクルを超高速で回すことを目指す。						
授業の目的・到達目標	・企業の競争力の源泉であり、イノベーションのシーズともなる技術の意味を深く理解し、それを顧客ニーズと結びつける発想の飛躍をデザイン思考の手法を用いて生み出せるようになる ・これまでの学びを生かし、イノベーションのアイデアを実現可能な事業計画にまで落とし込んで、企業の担当者にその意図や価値が明確に伝わるようにプレゼンできるようになる						
授業計画							
第 1 回	科目の全体像と流れの説明、グループ編成、チームビルディング						
第 2 回	技術シーズの分析（1）技術の意味合いを理解する						
第 3 回	技術シーズの分析（2）技術の要素から発想を飛躍させる						
第 4 回	顧客課題仮説の立案と検証（1）						
第 5 回	顧客課題仮説の立案と検証（2）						
第 6 回	技術を用いたプロダクト／サービスのプロトタイピング						
第 7 回	プロトタイプのフィールドテスト						
第 8 回	プロトタイプのブラッシュアップと再テスト						
第 9 回	ビジネスモデルへの落とし込み・収益シミュレーション						
第 10 回	スケールのための事業戦略立案（1）トラクションの獲得						
第 11 回	スケールのための事業戦略立案（2）						
第 12 回	ストーリーの構想とプレゼンテーション練習						
第 13 回	中間プレゼン発表とフィードバック						
第 14 回	プレゼンテーションの再構成						
第 15 回	最終プレゼン発表とフィードバック						
成績評価の方法	・12 回目までの各回のグループでの成果物提出とその内容（各回 4%、計 48%） ・グループ内メンバーのグループワークにおけるリーダーシップの相互評価（各回 2%、計						

	30%） ・中間および最終プレゼン発表におけるパフォーマンス（各 11%、計 22%）
準備学修 （予習・復習、課題等）	・予習：事前に、それぞれの回で必要となる知識やフレームワークについて参考書の指定範囲を読み込み、解説動画を視聴しておく（約 1 時間） ・復習：次回講義までにその成果物をグループ単位でまとめ、発表できるようにしてくる（約 2～3 時間） ・課題：各回ともグループワーク課題が課され、それに取り組んで成果を発表する。もしくは、前回課された課題の成果を発表したうえで、その見直しに取り組む

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	各回ごとに必要な資料を配布する。 参考文献： 『トラクション スタートアップが顧客をつかむ 19 のチャネル』 ガブリエル・ワインバーグ（著）、ジャスティン・メアーズ（著）、和田祐一郎（訳）、オライリージャパン、2015 年
備考	
昨年度からの振り返り	新たなビジネストレンド、海外市場など学生の知見を広げるゲスト、トピック紹介をさらに盛り込んでいく。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	2年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	ビジネスフィールドリサーチⅡ					授業形態	実習
授業コード	FR2122	単位数	2単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎久米 信行、乗浜 誠二、松村 太郎、川上 慎市郎、各務 茂雄、徳本 昌大、山本 名美						
授業概要	本講座ではビジネスフィールドリサーチⅠの後半と同様、本学が連携する企業から提示された事例に基づいて、課題解決を提案するプロセスを実習する。 経営戦略や財務会計に加え、オペレーションや HRM、組織行動、法務など、実際の企業経営者やマネージャーが経営において日々直面する身近な課題を含むテーマを主に扱い、あわせてこれらの領域の理論やフレームワークについても適宜復習を行う。実際の企業の事例に基づく分析・解決を目指し、担当者にプレゼンして評価されることを目指す。						
授業の目的・到達目標	・ケーススタディの学習について、周囲の意見も受け止めながら、より広くバランスの取れた視野から分析を行えるようになる。 ・企業の組織や構成員の行動とその制約などについて、相手の気持ちに立って考え、企業をより良くするための効果的な施策を講じることができるようになる。						

授業計画	
第 1 回	本コースの全体像と学習の進め方のオリエンテーション
第 2 回	財務会計（1）財務三表とそれを用いた意思決定
第 3 回	財務会計（2）マーケティング戦略と会計の関連
第 4 回	財務会計（3）価格戦略と意思決定
第 5 回	財務会計（4）起業のファイナンス（さまざまな資金調達法）
第 6 回	財務会計（5）起業のファイナンス（エクイティファイナンスとバリュエーション）
第 7 回	管理会計（1）管理会計とは
第 8 回	管理会計（2）組織管理とリーダーの役割
第 9 回	管理会計（3）マネジメントシステムとは
第 10 回	管理会計（4）インセンティブ
第 11 回	デジタル時代の経営戦略（1）デジタル時代の戦略的競争優位性
第 12 回	デジタル時代の経営戦略（2）デジタルによる顧客体験価値
第 13 回	デジタル時代の経営戦略（3）グローバル化の戦略と非市場経済
第 14 回	デジタル時代の経営戦略（4）デジタル時代の規制・ビジネス倫理
第 15 回	リアルケーススタディ（1）対象企業の課題分析
第 16 回	リアルケーススタディ（1）対象企業の課題解決の検討
第 17 回	リアルケーススタディ（1）対象企業の経営者へのプレゼン
第 18 回	リアルケーススタディ（1）対象企業の経営者との討論
第 19 回	リアルケーススタディ（2）対象企業の課題分析
第 20 回	リアルケーススタディ（2）対象企業の課題解決の検討
第 21 回	リアルケーススタディ（2）対象企業の経営者へのプレゼン
第 22 回	リアルケーススタディ（2）対象企業の経営者との討論

第 23 回	リアルケーススタディ（3）対象企業の課題分析
第 24 回	リアルケーススタディ（3）対象企業の課題解決の検討
第 25 回	リアルケーススタディ（3）対象企業の経営者へのプレゼン
第 26 回	リアルケーススタディ（3）対象企業の経営者との討論
第 27 回	リアルケーススタディ（4）対象企業の課題分析
第 28 回	リアルケーススタディ（4）対象企業の課題解決の検討
第 29 回	リアルケーススタディ（4）対象企業の経営者へのプレゼン
第 30 回	リアルケーススタディ（4）対象企業の経営者との討論
成績評価の方法	・クラス内での議論への貢献（発言）：各回 1.5%、計 45% ・（1～14 回目）事前課題等の提出物とその内容：各回 2%、計 28% ・（15～30 回目）グループ活動での成果（プレゼンテーション）4 回：各回 4%、計 16% ・振り返りレポート：11%
準備学修（予習・復習、課題等）	・予習：リアルケーススタディの予習（約 1 時間） ・復習：リアルケーススタディやグループ学習の振り返り（約 1 時間） ・課題：指示に基づいたケーススタディの分析

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	都度必要な資料を配布する 参考文献： 『経営戦略言論』 琴坂将広（著）、東洋経済新報社、2018 年 『コンサルを超える 問題解決と価値創造の全技法』 名和高司（著）、東洋経済新報社、2018 年 『イノベーションの DNA 破壊的イノベータの 5 つのスキル（Harvard Business School Press）』 クレイトン・クリステンセン（著）、ジェフリー・ダイアー（著）、ハル・グレガーセン（著）、櫻井祐子（訳）、翔泳社、2012 年 『HIGH OUTPUT MANAGEMENT―人を育て、成果を最大にするマネジメント』 アンドリュー・S・グローブ（著）、ベン・ホロウィッツ（その他）、小林薫（訳）、日経 BP、2017 年
備考	
昨年度からの振り返り	

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	3 年	学期	通期	科目分類	職業専門科目
授業名	イノベーションプロジェクトⅤ					授業形態	演習
授業コード	IP5125	単位数	2 単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎志村 一隆、久米 信行、乘浜 誠二、松村 太郎、川上 慎市郎、得上 竜一、三宅 志穂						
授業概要	3～5 人のグループ単位で事業計画の策定を行い事業の立ち上げを目指す、一連の中核プログラムの一部である。 イノベーションプロジェクトⅤでは通年プログラムとし、1～2 年次のプログラムの中で得た気づきを元にして、学生自身が起業や新規事業開発などのイノベーション企画を考案し、自発的にチームを編成して取り組む。教員は各グループの企画案について適切な目標を設定するようにアドバイスし、またそのプロセスにおいて課題発見やプロダクト開発、学外の専門家や連携企業などパートナーの紹介、事業化に向けた資金調達などに関し、必要に応じてメンタリングを行う。						
授業の目的・到達目標	・自らの強みや弱みを踏まえて最適なチームメンバーを募り、グループを組成できる ・グループで社会課題の解決につながるイノベーションの企画を立案し、開発・検討を進められる ・適切なマイルストーンを設定しながらチームを率いて、設定した企画の目標を達成する						
授業計画							
第 1 回	科目の全体像と流れの説明、グループ編成、チームビルディング						
第 2 回	企画立案と目標・ワークロードの設定、フィードバック						
第 3 回	各グループからの進捗報告とフィードバック（1）						
第 4 回	各グループからの進捗報告とフィードバック（2）						
第 5 回	各グループからの進捗報告とフィードバック（3）						
第 6 回	各グループからの進捗報告とフィードバック（4）						
第 7 回	各グループからの進捗報告とフィードバック（5）						
第 8 回	中間プレゼン発表とフィードバック						
第 9 回	各グループからの進捗報告とフィードバック（6）						
第 10 回	各グループからの進捗報告とフィードバック（7）						
第 11 回	各グループからの進捗報告とフィードバック（8）						
第 12 回	各グループからの進捗報告とフィードバック（9）						
第 13 回	各グループからの進捗報告とフィードバック（10）						
第 14 回	各グループからの進捗報告とフィードバック（11）						
第 15 回	最終プレゼン発表とフィードバック						
成績評価の方法	・2～7 回目と 9～14 回目の各回のグループでの成果物提出とその内容（各回 4%、計 48%） ・グループ内メンバーのグループワークにおけるリーダーシップの相互評価（各回 2%、計 30%） ・中間および最終プレゼン発表におけるパフォーマンス（各 11%、計 22%）						
準備学修（予習・復習、課題等）	・予習：各グループで設定したマイルストーンに向けてイノベーション企画に取り組み、進捗結果をまとめて報告できるようにする（約 2～3 時間） ・課題：グループの進捗結果を発表し、受けたフィードバックをもとに適宜見直しを行いな						

	がら企画の実現に取り組む

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	必要に応じ適宜配布 『STARTUP（スタートアップ）：アイデアから利益を生みだす組織マネジメント』 ダイアナ・キャンダー（著）、牧野洋（訳）、新潮社、2017 年 『Y コンビネーター シリコンバレー最強のスタートアップ養成スクール』 ランダル・ストロス（著）、滑川海彦（訳）、高橋信夫（訳）、 TechCrunch Japan 翻訳チーム（訳）、日経 BP、2013 年 『スタートアップ・バイブル シリコンバレー流・ベンチャー企業のつくりかた』 アニス・ウッザマン（著）、講談社、2013 年
備考	
昨年度からの振り返り	多くのゲストを呼び、ビジネスリーダーの知見に触れた。またピッチフェス等、グループワークとプレゼンの機会を設けた。今期も引き続き、イノベーションを起こすビジネスを考えていく

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	3年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	インターンシップⅠ					授業形態	実習
授業コード	IN1124	単位数	12単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎富澤 豊、山内 正人、久米 信行、加藤 直人、佐藤 紀行						
授業概要	インターンシップⅠでは、企業活動の場での課題発見、解決を通して、主にシステム開発を行うために必要とされる専門的知識及び技術の統合を図り、イノベーション人材として具備すべき知識及び技能を修得させる。具体的には、インターンシップ先で担う業務の意義や役割を理解したうえで、システム開発の作業の一工程を担う。担当する業務についての計画を立てるとともに、実際の状況に応じながら、指導者のフィードバックのもと、業務の完了を目指す。一連の実務を通じ、システム開発の実務の理解、必要なスキルや能力を養う。						
授業の目的・到達目標	・与えられた業務がどのような意義を持つのかを理解し、効率的・効果的な方法で業務を完了することを目標として作業を進めることができる。 ・課題解決や目標の達成に向けた計画を立て、実際の状況に応じた計画修正の必要に自ら気づき、指導者の承認を受けて修正・変更しながら最後まで実行できる。 ・チームメンバーとしてシステム開発の作業の一工程として、示された設計書の通りに実装することができる。						

授業計画

3日	事前指導 1日目	（4時限分） 1. オフィス実務①-1（Officeソフトの使い方、Word関係） 2. オフィス実務①-2（Officeソフトの使い方、Word関係） 3. オフィス実務②-1（Officeソフトの使い方、Excel関係） 4. オフィス実務②-2（Officeソフトの使い方、Excel関係）
	事前指導 2日目	（4時限分） 5. 企業内コミュニケーションの方法1（メールの書き方） 6. 企業内コミュニケーションの方法2（手紙の書き方） 7. 企業研究1（企業研究レポートの作成） 8. 企業研究2（市場調査レポートの作成）
	事前指導 3日目	（2時限分） 9. 臨地実務実習の目標設定1（PROGの受検） 10. 臨地実務実習の目標設定2（PROG受検結果の解説）
40日	ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ実践 初日	オリエンテーション 企業の沿革、組織説明、就業規則、実習・研修の体制などの説明と、研修内容についてのオリエンテーションを実施する。また、自分自身の将来の目標について実習先指導者とすり合わせる。
	ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ実践 1週目	①実習生自らが業務の流れを見聞きし、理解したうえで、実習先企業の取り扱う製品やサービス、ビジネスの企画、開発、生産などの付随した業務内容を補助するための計画を行い実習期間中の各自の目標設定を行い、実習指導者のフィードバックを得る。 ②システム開発者の仕事の様子（プロジェクト型業務）を見学する。 ③システム開発を行う上での責任範囲、役割を理解し、手順に沿ってシステム開発を行うことの重要性を聴く。
	ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ実践	①システム開発チームメンバーとして開発作業の補助業務を行う。

	～3 週目	②実習期間 2 週間を振り返り、補助業務内容の反省および、必要とされる知識、技術の不足部分、問題点と、実習日誌の実習指導者からのフィードバックを基に自己分析を行う。また、実習先から与えられたテーマを課題として、企画立案、計画準備など、課題毎に取り組む。
	ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ実践 ～5 週目	①システム開発の作業の一工程を、示された設計書の通りに実装する課題に取り組む。 ②実習先から与えられた各自の課題に対しての進捗状況を適宜、実習指導者のチェックを受け、企画、計画など内容に修正がないか確認を行いながら業務を遂行する。週末までに、修正内容の改善計画を確認し、実習指導者のアドバイスを受け、次のステップに移行する。
	ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ実践 ～7 週目	①引き続き、与えられた課題を基に業務を遂行する。適宜、実習指導者のチェックを受け、企画、計画など内容に修正がないか確認を行う。週末までに、修正内容の改善計画を確認し、実習指導者のアドバイスを受け、最終プレゼンテーションに備えてブラッシュアップを行う。
	ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ実践 ～8 週目	①完成した成果物についてのプレゼンテーションならびに実習目標に伴う報告を行う。 ②実習先企業に協力を得て、できる限り多くのスタッフから評価を得ることを目指す。その評価を基に、得られた改善点について実習日誌にまとめ、成果物とともに実習指導者に提出し報告を行う。
3 日	事後指導 1 日目	（3 時限分） 1. 実習成果の確認①（報告資料作成の準備、他） 2. 実習成果の確認②（報告資料作成の準備、他） 3. 報告資料作成①（実習成果の確認、他）
	事後指導 2 日目	（3 時限分） 1. 報告資料作成②（報告資料作成、他） 2. 報告資料作成③（報告資料作成、他） 3. 報告資料作成④（報告資料作成、他）
	事後指導 3 日目	（4 時限分） 1. 報告資料作成⑤（報告資料作成、他） 2. 報告資料作成⑥（報告資料作成、他） 3. 発表会① 4. 発表会②

成績評価の方法	事前課題 10%、インターンシップ中の評価 60% 事後課題（実習日誌、インターンシップ報告書、報告会でのプレゼンテーション等）30%で総合評価する。
準備学修（予習・復習、課題等）	インターンシップ先の企業研究、レポート作成等 図書館などでシステム開発・保守等に関連する文献を調べ、視野を広げること。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	配布資料による。
備考	
昨年度から	

の振り返り	

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	3年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	インターンシップⅡ					授業形態	実習
授業コード	IN2124	単位数	12単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎富澤 豊、山内 正人、久米 信行、加藤 直人、佐藤 紀行						
授業概要	インターンシップⅡでは、インターンシップⅠを踏まえ、実践活動の場において、情報通信技術を活用した課題発見、解決を行い、主にビジネスの観点からマーケティングや企画提案・実装するために必要とされる専門的知識及び技術の統合を図り、企画や起業につながる知識や技能を修得させる。 具体的には、指示された業務について、アンケートやインタビューなどの調査・分析を通じ、これまで習得した知識や技能を実践する。また、与えられた業務を推進するための調整や提案を行う。一連の業務を通じ実際の企業活動の中での実務の理解、必要なスキルや能力を養う。						
授業の目的・到達目標	・自分のやるべき業務を的確に判断し、効率的な方法を考え、率先して創意工夫をしながら取り組むことができる。 ・異なる考え方の人たちと意見を交わして調整し、互いに納得できる結論を導き、状況に応じて自分の役割を適切に変えながら協力して業務を遂行することができる。 ・企業や事業を取り巻く状況について調査統計、アンケートやインタビューといった情報を適切に収集・分析し、それらを分かりやすく整理し、ビジネス上の的確な示唆を提示できる。 ・情報通信技術も活用し、事業の課題を解決する方策と実行計画、それによって生じるデメリットとその対処策などもあわせてプレゼンし、指導者の納得と助言を得ることができる。						

授業計画

5日	事前指導 1日目	(2時限分) 1. オリエンテーションと事務連絡 2. 前期の反省と後期の目標確認① ・前期実習の反省内容を踏まえ、後期実習の目標を自ら設定する。 ・担当教員と個別面談を行う。
	事前指導 2日目	(2時限分) 3. 前期の反省と後期の目標確認② ・前期実習の反省内容を踏まえ、後期実習の目標を自ら設定する。 ・担当教員と個別面談を行う。 4. 前期の反省と後期の目標確認③
	事前指導 3日目	(2時限分) 5. 前期の反省と後期の目標確認④ ・前期実習の反省内容を踏まえ、後期実習の目標を自ら設定する。 ・担当教員と個別面談を行う。 6. 前期の反省と後期の目標確認⑤
	事前指導 4日目	(2時限分) 7. ビジネス実務の確認① ・Officeソフトの使い方(Word、Excel)、企業内コミュニケーション、調査・研究。 8. ビジネス実務の確認②
	事前指導	(2時限分)

	5 日目	9. 受入企業に対する自習課題① ・後期実習に役立つと思われる課題を自ら設定し、遂行する。 10. 受入企業に対する自習課題②
40 日	ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ実践 初日	オリエンテーション ①必要に応じ、企業の沿革、組織説明、就業規則、実習・研修の体制などの説明と、研修内容についてのオリエンテーションを実施する。また、自分自身の将来の目標について実習先指導者とすり合わせる。 ②インターンシップⅠで発見した自分自身の課題等について実習先指導者とすり合わせる。
	ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ実践 1 週目	①実習生自らが業務の流れを見聞きし、理解したうえで、実習先企業の取り扱う製品やサービス、ビジネスの企画、開発、生産などの付随した業務内容を補助するための計画を行い実習期間中の各自の目標設定を行い、実習指導者のフィードバックを得る。 ②実習先で行われる実際の会議やミーティングに参加させてもらう。 ③マーケティング業務経験者や企画職経験者の仕事の様子（プロジェクト型業務）を見学する。
	ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ実践 ～3 週目	①営業、マーケティング業務、企画業務の補助業務を行う。 実習期間 2 週間を振り返り、補助業務内容の反省および、必要とされる知識、技術の不足部分、問題点と、実習日誌の実習指導者からのフィードバックを基に自己分析を行う。また、実習先から与えられたテーマを課題として、企画立案、計画準備など、課題毎に取り組む。
	ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ実践 ～5 週目	①企業や事業を取り巻く状況について調査統計、アンケートやインタビューといった情報を適切に収集・分析し、それらを分かりやすく整理する課題に取り組む。 ②実習先から与えられた各自の課題に対しての進捗状況を適宜、実習指導者のチェックを受け、企画、計画など内容に修正がないか確認を行いながら業務を遂行する。週末までに、修正内容の改善計画を確認し、実習指導者のアドバイスを受け、次のステップに移行する。
	ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ実践 ～7 週目	①前回の課題、インターンシップⅠを踏まえ、情報通信技術も活用し、事業の課題を解決する方策と実行計画、それによって生じるデメリットとその対処策などもあわせてプレゼンテーションする課題に取り組む。 ②課題に対し、実習指導者のチェックを受け、企画、計画など内容に修正がないか確認を行う。週末までに、修正内容の改善計画を確認し、実習指導者のアドバイスを受け、最終プレゼンテーションに備えてブラッシュアップを行う。
	ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ実践 ～8 週目	①完成した成果物についてのプレゼンテーションならびに実習目標に伴う報告を行う。 ②実習先企業に協力を得て、できる限り多くのスタッフから評価を得ることを目指す。その評価を基に、得られた改善点について実習日誌にまとめ、成果物とともに実習指導者に提出し報告を行う。
3 日	事後指導 1 日目	（3 時限分） 1. 実習成果の確認①（報告資料作成の準備、他） 2. 実習成果の確認②（報告資料作成の準備、他） 3. 報告資料作成①（実習成果の確認、他）
	事後指導 2 日目	（3 時限分） 1. 報告資料作成②（報告資料作成、他） 2. 報告資料作成③（報告資料作成、他） 3. 報告資料作成④（報告資料作成、他）

	事後指導 3 日目	（4 時限分） 1. 報告資料作成⑤（報告資料作成、他） 2. 報告資料作成⑥（報告資料作成、他） 3. 発表会① 4. 発表会②

成績評価の方法	事前課題 10% インターンシップ中の評価 60% 事後課題（実習日誌、インターンシップ報告書、報告会でのプレゼンテーション等）30%で総合評価する。
準備学修 (予習・復習、課題等)	インターンシップ先の企業研究、レポート作成等 図書館などでシステム開発・保守等に関連する文献を調べ、視野を広げること。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	配布資料による。
備考	
昨年度からの振り返り	

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	4 年	学期	通期	科目分類	職業専門科目
授業名	イノベーションプロジェクトⅥ					授業形態	演習
授業コード	IP6125	単位数	2 単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎志村 一隆、久米 信行、乗浜 誠二、松村 太郎、川上 慎市郎、岩本 恵、加藤 里香						
授業概要	3～5 人のグループ単位で事業計画の策定を行い事業の立ち上げを目指す、一連の中核プログラムの一部である。 イノベーションプロジェクトⅥでは 1～3 年までのイノベーションプロジェクトでの取り組みの経験を生かし、自ら新しいイノベーションを企画して事業化に取り組むグループ、2～3 年で関わりを持った外部の企業・団体との連携プロジェクトをさらに発展させるグループなどに分かれ、本学のイノベーションプロジェクトを発展させ、社会的成果に結びつけるための活動を行う。またあわせて、それらのプロセスを通じて学び・発見したことを個々人としてレポートにまとめ、4 年間の学習の総仕上げとする。						
授業の目的・到達目標	・自らの強みや弱みを踏まえて取り組むべきことを決め、協力して取り組むことのできるチームメンバーを集めてグループを組成し、適切な目標、マイルストーンを設定してプロジェクトを遂行できる。 ・プロジェクトにおける自分自身の行動や成果を振り返り、学びや気づきを体系化してレポートにまとめる。						
授業計画							
第 1 回	科目の全体像と流れの説明、グループ編成、チームビルディング						
第 2 回	企画立案と目標・ワークロードの設定、フィードバック						
第 3 回	各グループからの進捗報告とフィードバック（1）						
第 4 回	各グループからの進捗報告とフィードバック（2）						
第 5 回	各グループからの進捗報告とフィードバック（3）						
第 6 回	各グループからの進捗報告とフィードバック（4）						
第 7 回	各グループからの進捗報告とフィードバック（5）						
第 8 回	グループのプレゼン発表とフィードバック						
第 9 回	個人レポートの企画検討と進捗報告、フィードバック（1）						
第 10 回	個人レポートの企画検討と進捗報告、フィードバック（2）						
第 11 回	個人レポートの企画検討と進捗報告、フィードバック（3）						
第 12 回	個人レポートの企画検討と進捗報告、フィードバック（4）						
第 13 回	個人レポートの企画検討と進捗報告、フィードバック（5）						
第 14 回	個人レポートのプレゼン発表とフィードバック（1）						
第 15 回	個人レポートのプレゼン発表とフィードバック（2）						
成績評価の方法	・7 回目までの各回のグループでの成果物提出とその内容（各回 4%、計 28%） ・グループプレゼン発表におけるパフォーマンス（20%） ・1～8 回目のグループ内メンバーのグループワークにおけるリーダーシップの相互評価（各回 2%、計 16%） ・個人レポートとそのプレゼン発表の評価（36%）						
準備学修	・予習：各グループで設定したマイルストーンに向けてイノベーション企画に取り組み、進						

(予習・復習、課題等)	捗結果をまとめて報告できるようにする（約 2～3 時間） ・課題：前期は、グループの進捗結果を発表し、受けたフィードバックをもとに適宜見直しを行いながらプロジェクトの完遂に取り組む。後期は、個人のレポートを企画し、それについて必要な調査や分析を行う

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	必要に応じ適宜配布 『STARTUP（スタートアップ）：アイデアから利益を生みだす組織マネジメント』 ダイアナ・キャンダー（著）、牧野洋（訳）、新潮社、2017 年 『Y コンビネーター シリコンバレー最強のスタートアップ養成スクール』 ランダル・ストロス（著）、滑川海彦（訳）、高橋信夫（訳）、 TechCrunch Japan 翻訳チーム（訳）、日経 BP、2013 年 『スタートアップ・バイブル シリコンバレー流・ベンチャー企業のつくりかた』 アニス・ウッザマン（著）、講談社、2013 年
備考	
昨年度からの振り返り	昨年度は未開講のため該当なし。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	1年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	コンピュータとソフトウェア基礎					授業形態	講義
授業コード	CSW131	単位数	2単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施しない
担当教員	堀田 耕一郎						
授業概要	コンピュータがどのような仕組みで動作するのか、基本的な考え方について利用シーンを意識しながら学ぶ。まず、コンピュータシステムの利用シーンの変遷について学ぶ。次に、伝統的なコンピュータを題材に、ハードウェア、ソフトウェアの両面から動作の仕組みを学ぶ。さらに、ネットワーク化されたコンピュータの活用事例とそれに伴う問題点の事例を通じて，コンピュータシステムの将来像を考える基礎とする。最後に実際の製品ソフトウェア開発の手順を照会することで、ここまでに学んだ内容を実務と関連付ける。						
授業の目的・到達目標	本講義ではICTを活用するイノベータになるために、ICTの中核となるコンピュータの可能性を考える基礎を身に着ける。この成果を活かして、起業のためのアイデアを得る第一歩となることを期待する。 そのために、コンピュータが現在どのような使われ方をしているかを見通すことから始め、基本的な動作原理を理解する。コンピュータハードウェアと各機能の利用方法について、ソフトウェアの動作を通じて理解する。さらに、ICT社会で懸念される問題点について議論し、これにより、コンピューティングリテラシーを身に着ける。						
授業計画							
第1回	情報技術の利用シーン：「情報」の活用と表現						
第2回	コンピュータシステムの構成要素、デジタルとアナログ						
第3回	ユーザーインターフェース、10進数、2進数、16進数						
第4回	ブール代数と論理回路、2の補数						
第5回	2進数の表現、CPUの基本動作（コンピュータの命令）						
第6回	CPUの基本動作（メモリとレジスタ）						
第7回	コンピュータのソフトウェア（1）：基本的なソフトウェアの種類						
第8回	コンピュータのソフトウェア（2）：アプリケーションプログラム						
第9回	コンピュータネットワーク（1）：ネットワークの仕組み						
第10回	コンピュータネットワーク（2）：World Wide Web						
第11回	コンピュータの応用分野（1）：大規模計算						
第12回	コンピュータの応用分野（2）：音楽や動画の配信、電話とネットワーク						
第13回	ICT社会での問題点、コンピュータのトラブル、コンピュータのセキュリティ問題						
第14回	商用ソフトウェア開発の実態（1）：ソフトウェアの設計						
第15回	商用ソフトウェア開発の実態（2）：ソフトウェアの評価						
成績評価の方法	小テストを含む課題の提出状況とその内容の評価、および講義への貢献度（質問等）50% 講義中に行う小テストの得点25% 期末の成果物とその評価25%						
準備学修(予習・復習、課題等)	講義毎に復習中心の簡単な課題を提示するので、次の講義までに回答を用意すること。その内容を、次の講義内での議論のきっかけとする。						

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	必要な資料を適宜配布する 参考文献： 『基本を学ぶコンピュータ概論（改訂 2 版）』 安井浩之 他（著）、オーム社、2019 年 『サイバーフィジカル』 飯尾淳（著）、森北出版、2022 年 『教養としてのコンピューターサイエンス講義』 ブライアン・カーニハン（著）、日経 BP、2020 年 『数学ガールの秘密ノート／ビットとバイナリー』 結城浩（著）、SB クリエイティブ、2019 年 『コンピュータはなぜ動くのか～知っておきたいハードウエア＆ソフトウエアの基礎知識～』 矢沢久雄（著）、日経 BP、2003 年 『プログラムはなぜ動くのか 第 2 版 知っておきたいプログラムの基礎知識』 矢沢久雄（著）、日経 BP、2007 年 その他、講義中に随時紹介する。
備考	
昨年度からの振り返り	講義をきちんと聞き、課題に取り組んでいれば理解できるようにしています。覚えるのではなく考えてください。 お互いに話しやすい環境にしたいと思っております。グループワークはほとんどありませんが、くだらないと思うことでも、ぜひ質問してください。それを題材に、教室中で議論できれば幸いです。 利用する環境は他の科目と違うと思いますが、課題の締め切り等に関するスケジュール管理は自分で心掛けてください。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	1年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	プログラミングⅠ					授業形態	実習
授業コード	PG1131	単位数	2単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎寺脇 由紀、大島 真言、毛 鳳雨						
授業概要	ICT 技術を用いて、プロダクトやサービスにイノベーションを起こすためには、コンピュータに問題解決の手順を教えるための言葉であるプログラム言語の習得は必要不可欠である。本講義では、近年幅広く使われている Java を対象にして、オブジェクト指向プログラミングの理論をもとに、プログラミング言語によりソフトウェアをどのように作成するのかという基本と、問題を解決するためのアルゴリズムの概念と実装の基礎について理解する。具体的には変数の表示・計算、条件分岐、制御構造、配列、クラスなどを学習しながら、これらを用いた簡単なプログラムを記述できることを目標とする。プログラミングの基礎的な考え方を学ぶとともに、最終的には、簡単なプログラムを自分で書けるようになることで、ICT の技術を活用しサービスやビジネスをイノベーションするための基礎的なスキルを身に付ける。						
授業の目的・到達目標	Java を使って、自ら考えプログラムが作成できるようになる。また、Java を通して、コンピュータの本質的な側面および、ソフトウェアをつくる技術であるプログラミングを理解する。Java を習得し、オブジェクト指向プログラミングの基礎概念である、カプセル化、インヘリタンス（継承）、ポリモーフィズム等を理解し、問題に応じた適切なアルゴリズムを選択できるようになる。						
授業計画							
第 1 回	プログラミングの基礎知識： 本講義の進め方および、プログラミングの基礎知識を説明する。 また講義で用いる学習管理システム（LMS：Learning Management Sysmtem）Google Classroom の登録・利用方法を学ぶ。						
第 2 回	Java 言語概要： Java について外観し、オブジェクト指向の基本概念について学ぶ。 またオブジェクト指向の三大要素である継承・カプセル化・ポリモーフィズムを簡単に紹介する。						
第 3 回	Java アプリケーションの実行： 実習環境 PeMT（Programming Environment for Mass Teaching）の利用方法を解説する。 完成した Java 言語によるプログラムを Java アプリケーションと実行方法を知る。						
第 4 回	変数・画面への表示： 変数、データ型について学び、簡単なプログラムを作成し実行する。						
第 5 回	書き方のルール： 識別子、予約語、命名規約、コメントの書き方など望ましいプログラムの書き方を学ぶ。						
第 6 回	コンパイルエラーへの対処法： 典型的なコンパイルエラーの例を紹介し、エラーメッセージの読み方やその対処法を学ぶ。						
第 7 回	アルゴリズム、および、プログラムの制御構造： アルゴリズムとは何かを学び、3 つの制御構造を説明できるようになる。また、領域図とフローチャートを用いたアルゴリズムの表現方法を学ぶ。						
第 8 回	アルゴリズムとプログラム： 順次構造など単純なアルゴリズムを用いて、フローチャートで表現したアルゴリズムをどの						

	ようにプログラミングするかを学ぶ。
第 9 回	アルゴリズム演習（加算・交換）： 加算・交換・判断、それぞれのアルゴリズムを理解し、演習を通してそれぞれのアルゴリズムをフローチャートで表現する。また、作成したアルゴリズムをレビューする方法を学ぶ。
第 10 回	プログラム演習（加算・交換）： フローチャートに基づいて正確にプログラミングし、プログラムの品質を担保するための技法を習得する。
第 11 回	アルゴリズム演習（判断）： 判断のアルゴリズムを理解し、演習を通して判断のアルゴリズムをフローチャートで表現する。
第 12 回	アルゴリズム演習とレビュー（判断）： 判断のアルゴリズムについて、複数の演習問題を用いてフローチャートでの表現やトレースを習得する。
第 13 回	プログラム演習（選択構造 1）： 関係演算子と論理演算子からなる条件式を用いて最も基本的な制御フロー文をフローチャートに基づいて正確にプログラミングし､プログラムの品質を担保するための技法を習得する。
第 14 回	プログラム演習（選択構造 2）： 複数の実行経路をもつ制御フロー文をフローチャートに基づいて正確にプログラミングし、プログラムの品質を担保するための技法を習得する。
第 15 回	アルゴリズム演習（反復）： 反復のアルゴリズムを理解し、演習を通して判断のアルゴリズムをフローチャートで表現する。
第 16 回	アルゴリズム演習とレビュー（反復）： 反復のアルゴリズムについて、複数の演習問題を用いてフローチャートでの表現やトレースを習得する。
第 17 回	プログラム演習（反復構造 1）： 繰り返し文をフローチャートに基づいて正確にプログラミングし、プログラムの品質を担保するための技法を習得する。
第 18 回	プログラム演習（反復構造 2）： 無条件分岐文をフローチャートに基づいて正確にプログラミングし、プログラムの品質を担保するための技法を習得する。
第 19 回	アルゴリズム演習（制御の多重構造）： 制御の多重構造、強制脱出、スキップについてフローチャートで表現することにより理解する。
第 20 回	プログラム演習（制御の多重構造 1）： 制御の多重構造、強制脱出、スキップなどのプログラムの作成演習をする。
第 21 回	プログラム演習（制御の多重構造 2）： 多重ループを伴うプログラムの作成演習をする。
第 22 回	データ構造： データ構造について概説する。また、代表的なデータ構造である配列の扱い方について学ぶ。
第 23 回	アルゴリズム演習とレビュー（配列）： 配列を扱うアルゴリズムをフローチャートで表現し、アルゴリズムのトレースすることで、配列を扱うアルゴリズムを習得する。
第 24 回	プログラム演習（配列の走査）：

	フローチャートに基づいて正確にプログラミングし、配列の走査について習得する。プログラムの品質を担保するための技法を習得する。
第 25 回	アルゴリズム演習（集計・探査）： 集計の考え方を学び、フローチャートで表現しレビューをする。また、探査については、探査法の種類について紹介する。
第 26 回	プログラム演習（集計 1）： 単純集計、数値の偶数のみを集計するなど、複数の演習を扱いフローチャートに基づいて正確にプログラミングする技法を習得する。
第 27 回	プログラム演習（配列と集計）： 配列に格納されたデータを集計（合計・平均）を行う、上位者のみを表示するなど、配列に格納されたデータに関して、複数の演習を扱いフローチャートに基づいて正確にプログラミングする技法を習得する。
第 28 回	プログラム演習（探査）： 逐次探査法・2 分探査法の考え方を学び、領域図・フローチャートに基づいて正確にプログラミングする技法を習得する。
第 29 回	プログラム演習（整列）： 整列法の種類について学び、基本選択法、単純交換法などについて、領域図・フローチャートに基づいて正確にプログラミングする技法を習得する。
第 30 回	総括： 本講義にて学んだ内容を総括し、総合解説を行う。
成績評価の方法	授業への取り組み態度・授業への貢献（40%）、授業内外に行う例題と課題、および、小テスト・小レポートなどの学習成果物の提出状況と出来栄え（60%）で評価する。
準備学修（予習・復習、課題等）	プログラミングの知識や経験は不要。しかし、コンピュータの扱いと、キーボードでの文字入力に慣れていることは必須となる。キーボードでの文字入力については、1 分間に 150 文字以上のタッチタイピングができることが目安となる。先述の目安に満たないキーボードでの入力に不慣れな人は、タイピングソフトでの練習を事前に行っておくこと。 プログラミングを身につけるためには訓練を経ることが必須である。毎回配布する教材の復習および、例題や演習を繰り返しプログラミングしてみるなど、毎回の授業につき、30 分から 60 分の自宅学習が必要である。 なお、授業中に行う例題や課題を完成できなかった場合は、毎回配布する教材を自身で見直して、次回授業日までに完成させておくこと。

教科書

書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	教員の作成する教材で進める。 参考文献：参考文献は購入の必要はない。 〈1〉 『Effective Java 第 3 版』 Joshua Bloch（著）、柴田芳樹（訳） 参考文献は購入の必要はない。 以下に登録情報を記載する。 出版社：丸善出版；第 3 版（2018/10/30） 言語：日本語 ISBN-10：4621303252

	ISBN-13：978-4621303252 〈2〉 JIS 情報処理用流れ図・プログラム網図・システム資源図（JIS X 0121-1986）
備考	アクティブラーニング形式を用いた講義は、学習内容によって効果的な場合に実施しています（毎回の講義で行いません）。
昨年度からの振り返り	学生同士の交流によって学ぶ形式について好評をいただきました。 学習者同士の交流を実りあるものにするためには、まず自分自身が十分に理解していることが前提となります（自身の理解を前提に他者との交流する）。もう少し具体的に表現すると、学生同士で相談しながらプログラミングの学習を進めていくためには、講義で説明された知識を各自が理解し（共通認識を持つ）、その理解に基づいてある程度プログラミング言語で表現できなければ、相談しながらプログラムを作成するという学習が成立しません。 本講義では、初学者の方にも理解しやすいように噛み砕いて授業を進めていきます。初学者だから、コンピュータは苦手だから、と考えるのではなく、積極的かつ能動的に取り組んでいただき、学習内容についてご自身のなり理解をしていただき、理解できている箇所と理解できていない箇所を整理していただいた上で、学生同士（または、教員）と積極的に交流していただきたいと思います。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	1年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	データ構造と処理法					授業形態	演習
授業コード	ADS134	単位数	2単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施しない
担当教員	片桐 雅二						
授業概要	プログラムを作成する上で基本となるデータ構造と処理の基本的な流れ（アルゴリズム）について学習する。内容を解説するとともに、学修する項目毎に課題を設定し、実習形式で実際にデータ処理を行いながら学修する。選択するデータ構造と処理方法によって、同じ結果を得るための所要時間等が異なることを体験的に修得する。 はじめに、文字列照合アルゴリズムおよび整列アルゴリズムを具体例として取り上げ、同一のタスクであってもアルゴリズムによって性能等に違いが生じる事を実習により確認し、アルゴリズムの重要性を学ぶ。その後、基本的なデータ構造（キュー、スタック、木構造など）およびその操作方法（挿入、削除など）について説明し、その特性を実習により確認する。さらにはネットワーク制御など実際の課題でも用いられる最短経路問題および最小全域木問題を取り上げ、それらに対するアルゴリズムについて学ぶ。						
授業の目的・到達目標	基本的なデータ構造に対して、その基礎的な操作方法（挿入、削除、探索、整列など）とともにその特性を理解し、説明できるようになる。 所望の課題に応じた適切なデータ構造および処理方法を検討する際に、必要に応じて自らより深く調べる手がかりとして、得た知識を課題解決に活用できるようになる。						
授業計画							
第1回	アルゴリズムとは コース概要、授業の進め方、イントロダクション						
第2回	文字列照合アルゴリズム（1） 文字列の走査とは、素朴な方法、KMP法						
第3回	文字列照合アルゴリズム（2） BM法、演習（文字列照合アルゴリズムの手法による性能差を考え、理解を深めるとともに応用する力を身につける）						
第4回	整列アルゴリズム（1） 整列問題（ソート）とは、バブルソート、選択ソート、挿入ソート						
第5回	整列アルゴリズム（2） クイックソート、マージソート、基数ソート						
第6回	整列アルゴリズム（3） 整列アルゴリズムに関する演習を行い理解を深めるとともに応用する力を身につける						
第7回	基本データ構造とその操作（1） データ構造の重要性、配列、線形リスト、ハッシュテーブル、キュー、スタック						
第8回	基本データ構造とその操作（2） 二分探索木、平衡木、ヒープ、素集合データ構造						
第9回	基本データ構造とその操作（3） 演習を行い基本データ構造に関する理解を深めるとともに応用する力を身につける						
第10回	最短経路アルゴリズム（1） 最短経路問題とは、グラフ構造とその表現方法						
第11回	最短経路アルゴリズム（2）						

	ダイクストラ法、ベルマンーフォード法
第 12 回	最短経路アルゴリズム（3） 演習を行い最短経路アルゴリズムに関する理解を深めるとともに応用する力を身につける
第 13 回	最小全域木アルゴリズム（1） 最小全域木問題とは
第 14 回	最小全域木アルゴリズム（2） 最良優先探索法、クラスカル法、プリム法
第 15 回	最小全域木アルゴリズム（3） 演習を行い最小全域木アルゴリズムに関する理解を深めるとともに応用する力を身につける
成績評価の方法	単元ごとの課題レポートの内容（15%×5 単元＝75%）、定期試験の結果（15%）、受講態度等（10%）により評価する。
準備学修（予習・復習、課題等）	特に復習によって自分なりに頭を整理して理解を深め内容を消化することが大切なので、教科書を活用すること（30-60 分／回） 単元ごとにレポート課題を設定する（60-120 分×5 回）

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
アルゴリズムとデータ構造	藤田聡	数理工学社	978-4-901683-99-9	グラフィック情報工学ライブラリ

参考書	『図解でかんたんアルゴリズム 情報処理のかなめとなる考え方が手に取るようにわかる！』（サイエンス・アイ新書） 杉浦賢（著）、SB クリエイティブ、2012 年
備考	この科目は「大学等における修学の支援に関する法律」において本学が申請した実務経験のある教員による授業科目です。
昨年度からの振り返り	昨年度からの改善点：各単元にて設定している演習について、対面授業であることも踏まえて、学び合いがより活発となるように取り組みを工夫する。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	1 年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	オペレーティングシステム入門					授業形態	演習
授業コード	OPS132	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	佐藤 紀行						
授業概要	情報システムの形成に必要なオペレーティングシステムの役割、基本的概念および実現方式を理解する。 実際に PC、Linux を利用し、CUI での操作を修得する。基本的な概念を説明した後、実機演習を通じて操作を学ぶ。具体的にはコマンドを用いた操作、OS 操作や管理、簡単なプログラムを用いたプロセスの自動化などを演習形式で行う。オペレーティングシステムの技術や知識の習得を通じて、コンピュータシステムの動作原理に対する理解を深める。						
授業の目的・到達目標	OS の構成要素とそれぞれの役割について説明できるようになる。 エディタによるテキストの編集、コマンドラインによる OS の操作、スクリプトによるプロセスの自動化を行えるようになる。 OS のユーザー管理、ソフトウェアインストール、資源管理など基本的な管理・設定を行えるようになる。						
授業計画							
第 1 回	PC の準備と基本操作 Windows あるいは macOS でコマンドラインインターフェースに触れる						
第 2 回	コマンドによるファイル、ディレクトリの操作（1）ディレクトリ、ファイルの作成 Windows、あるいは macOS でのファイル操作を理解する						
第 3 回	ネットワークの管理 SSH による安全なネットワーク利用のため秘密鍵を生成し、実際に演習用の Linux をリモートからコマンドラインインターフェースでログインする						
第 4 回	コマンドによるファイル、ディレクトリの操作（2）ディレクトリ、ファイルの管理 SCP を用いたリモートの Linux のファイル送受を理解する。 Linux のコマンドラインでのファイル操作を理解する。						
第 5 回	ユーザー管理と権限管理 ユーザーの追加と権限の管理 パーミッションの概念を理解し、実際にファイル、ディレクトリを操作する						
第 6 回	OS によるプログラム実行の管理 プロセスの表示、一時停止、停止 OS の「リソース」の概念を理解し、OS が行う「抽象化」に触れる						
第 7 回	オペレーティングシステムの機能と構成要素 リソース、抽象化の概念の理解を深化する						
第 8 回	スクリプトによる操作の基礎（1）テキストデータの高度な編集（grep、パイプ） コマンドラインで grep やパイプを用い、テキスト処理を行えることを理解する						
第 9 回	テキストエディタの利用						
第 10 回	スクリプトによる操作の基礎（1）シェルスクリプト						
第 11 回	スクリプトによる操作の基礎（2）その他のスクリプト言語（ruby） ruby を用いた簡単なスクリプトを作成する						
第 12 回	ソフトウェアのインストールと設定 SL コマンドを例にとり、make、CC などを用いてソースコードからプログラムが作成できることを理解する						

第 13 回	ログ管理 OS およびソフトウェアのログの参照方法と管理 ウェブサーバのログを例にとり、OS の運用の初歩を理解する
第 14 回	その他の OS の基本操作 ウェブサーバで CGI を実行することを例にとり、関連する一連の操作を行う
第 15 回	仮想環境の構成 仮想環境として CGI 環境を例にとり、実際に CGI を実行する OS 仮想化についても触れる。
成績評価の方法	各回の課題の提出状況と、その内容を評価する。(70%) 加えて、授業中への参加度・貢献度（質問、発言など）を評価する。(30%)
準備学修(予習・復習、課題等)	前回までの内容は理解している前提で、講義が進みます。 講義時間内に終わらなかった課題は、必ず次回までに提出してください。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	各人の理解度に合わせ、適宜書籍あるいは URL 等を紹介する。
備考	あなたが将来経営する会社、運用するチームはほぼ間違いなく IT、インターネットをつかいます。 そしてそのインターネットで Linux は重要な位置を占める OS です。 経営者、リーダーは雇うべきエンジニアを Linux の知識がないままに正しく評価できるでしょうか？ この講義では OS として Linux を例に、使い方を中心に学びます。 エンジニアでなくとも、エンジニアなしでビジネスの成功はありません。 まずは知るところ、経験するところから始めましょう！
昨年度からの振り返り	課題は作業自体に時間がかかるものが多くあります。 放棄される方の多くが、毎週の課題に着手しなかったことがきっかけになっています。 課題は必ず講義中に着手してください。 課題を進める途中で疑問が湧いてきます。これもコンピュータ関連の講義の特徴の一つです。 オフィスアワーや、講義後の時間で積極的に声をかけてください。課題が提出できるまでお付き合いします。 前回までの内容をもとに次回の講義が進むこともあり、前回までの講義内容の理解は講義理解の前提になっています。 このため、提出物の評価の比重が決定的に重くなっています。 欠席には事情もあろうかと思いますが、オフィスアワーや、講義後の時間で積極的に声をかけ、欠席の遅れを取り返してください。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	1 年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	プログラミングⅡ					授業形態	実習
授業コード	PG2131	単位数	2 単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎寺脇 由紀、大島 真言、毛 鳳雨						
授業概要	本講義では、プログラミングⅠに引き続き Java の特徴的機能である、ネットワーク、マルチスレッドなどを利用する技法を理解する。さらに、 開発するソフトウェアシステムの要求仕様書に基づいて、統合開発環境を活用してソフトウェアアーキテクチャの設計とプログラム開発、統合テストを実施する。プログラムやテストに関する仕様の文書化も行う。システム開発の基礎となるプログラミングのさらなる活用を学び、簡単なシステムを構築できるようになることで、ICT の技術を活用しサービスやビジネスをイノベーションするための基礎的なスキルを身に着ける。						
授業の目的・到達目標	統合開発環境の利用方法を習得し、複雑なソフトウェアの開発技法を学ぶ。 構築実習を通じて、ソフトウェアシステムの構築過程を経験し、必要な文書とその役割を理解する。						
授業計画							
第 1 回	オブジェクト指向プログラミング の基本： オブジェクト指向のオブジェクトとクラスを理解する。						
第 2 回	UML と Java 概論： オブジェクト指向プログラミング において特に重要度の高いクラス図とシーケンス図について理解する。						
第 3 回	クラスとメソッド： クラス定義、オブジェクトの生成を学習し、演習を行う。						
第 4 回	カプセル化と情報隠蔽： カプセル化および、情報隠蔽の意義を説明する、さらに、アクセッサ・メソッドを理解し、使えるようになる。						
第 5 回	カプセル化と情報隠蔽（演習）： クラス定義、オブジェクト生成などについて、クラス図とシーケンス図に基づいたプログラミング 演習を行う。						
第 6 回	コンストラクタ： コンストラクタについて学ぶ、コンストラクタの定義と利用について理解する。						
第 7 回	コンストラクタのオーバーロード・メソッドのオーバーロード（1）： コンストラクタのオーバーロードおよび、メソッドのオーバーロードについて学ぶ。						
第 8 回	コンストラクタのオーバーロード・メソッドのオーバーロード（2）： オブジェクト生成時の初期化、同じ名前のメソッドの定義等について演習を行う。						
第 9 回	修飾子・static 変数・static メソッド： static 変数とインスタンス変数の違いを学び、演習を行う。						
第 10 回	継承（1）： オブジェクト抽象化のためのメカニズムである継承について学ぶ。						
第 11 回	継承（2）： 継承の適切な使用について理解し、演習を行う。						
第 12 回	継承（3）：						

	抽象クラス・抽象メソッドについて学び、演習を行う。
第 13 回	インタフェース： メソッドの使い方の統一について学ぶ。
第 14 回	抽象クラスとインタフェース： 抽象クラスとインタフェースの違いについて理解し、演習を行う。
第 15 回	クラス同士の関係（1）： 関連・集約について理解する。
第 16 回	クラス同士の関係（2）： 関連・集約についてクラス図とシーケンス図に基づいたプログラミング 演習を行う。
第 17 回	多態性（1）： 多態性の意義について理解する。
第 18 回	多態性（2）： 多態性の活用例について学び、演習を行う。
第 19 回	例外処理（1）： 提供されている例外クラスについて学ぶ。
第 20 回	例外処理（2）： ユーザー定義例外について学ぶ。また例外処理の演習を行う。
第 21 回	パッケージ: クラスの整理整頓について学び、演習を行う。
第 22 回	Java の基本動作に関するクラス（1）： Object クラス、String クラスなど、Java の基本動作に関するクラスについて理解する。
第 23 回	Java の基本動作に関するクラス（2）： Object クラス、String クラスなど、JavaAPI の代表的なクラスを活用して演習を行う。
第 24 回	コレクションフレームワーク（1）： さらに、コレクションフレームワークについて理解する。
第 25 回	コレクションフレームワーク（2）： コレクションフレームワークの実装クラスによる演習を行う。
第 26 回	Java と UML の対応（1）： クラス図と Java との対応を学び、UML に基づきプログラムを作成する。
第 27 回	Java と UML の対応（2）： シーケンス図と Java との対応を学び、UML に基づきプログラムを作成する。
第 28 回	総合演習（1）： これまでに習得した技法、またはマルチスレッドの利用する技法について紹介し、演習を行う。
第 29 回	総合演習（2）： これまでに習得した技法、またはマルチスレッドの利用する技法について紹介し、演習を行う。
第 30 回	総括： 学んだ内容を総括し、総合解説を行う。
成績評価の方法	授業への取り組み態度・授業への貢献（40%）、授業内外に行う例題や課題、小テストや小レポートなどの学習成果物の提出状況と出来映え（60%）で評価する。
準備学修（予習・復習、	毎回配布する教材の復習および、例題や演習を繰り返しプログラミングしてみるなど、毎回の授業につき、30～60 分程度の授業外学習が必要である。

課題等)	もし、授業中に行う例題や課題を完成できず、遅れてしまった場合は、自分で教材を見直して、次の授業日の前日までに完成させておくこと。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	教員の作成する教材で進める。 参考文献： 『Effective Java 第3版』 Joshua Bloch（著)、柴田芳樹（訳） 参考文献は購入の必要はない。 以下に登録情報を記載する。 出版社：丸善出版；第3版（2018/10/30） 言語：日本語 ISBN-10：4621303252 ISBN-13：978-4621303252
備考	アクティブラーニング形式を用いた講義は、学習内容によって効果的な場合に実施しています（毎回の講義で行いません)。
昨年度からの振り返り	教員と一緒にプログラミングをするHands on形式に好評をいただきました。 講義する知識や技術を実践する例題に基づいたHands on を、積極的に取り入れて進めていきたいと思います。 みなさんは、Hands onの時間に教員のプログラムを写すだけにならないように、講義で得た知識との関連を意識しながらプログラムを書くということを心がけてください。 つまり、講義で説明する知識と技術をしっかりと消化していただき、知識に基づいてプログラミングしてみるということが重要となります。 知識が欠けてしまうと、教員の入力した文字を真似して入力しているだけとなります。講義内容を聞き逃さないという姿勢で授業に臨むこと、講義で説明した技術や知識を復習し確実に自分の中に積み上げていくということを徹底してください。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	1年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	ネットワーク技術					授業形態	講義
授業コード	NWT133	単位数	2単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎Adrian David Cheok、山内 正人						
授業概要	現在多くのシステムがインターネットに繋がり、コンピュータネットワークは社会システムの基盤として動作している。本講義ではその根幹となる情報通信技術の基礎についてコンピュータネットワークの歴史や成り立ち、発展の経緯から通信をする上で重要となる標準化とその方法、階層化と各階層におけるプロトコル、LAN の基礎、ネットワークサービス、ネットワークセキュリティの基礎、最新技術動向など幅広く解説し、インターネットがどのように構成され、動作するかを理解する。また現在インターネットで広く使用されている IPv4 のみならず、今後広く使われていくと考えられる IPv6 についても解説し、社会に出ても役立つネットワーク技術について体系的に解説する。						
授業の目的・到達目標	通信における階層化及び各層で構成される各種プロトコル等について理解し、説明できることを目的とする。通信における階層化の概念を理解し説明できる、各層で構成される各種プロトコル等について理解し説明できる、ネットワークに関する最新動向を把握し説明できることを目標とする。						
授業計画							
第 1 回	ネットワークの基礎（1）（コンピュータネットワークの成り立ちや目的、構成について学ぶ）						
第 2 回	ネットワークの基礎（2）（通信メディアを作成し、その規格や仕組みを理解する）						
第 3 回	TCP/IP の基礎（各階層におけるプロトコルが果たす役割について理解することで TCP/IP でどのように通信が行われているかについて学ぶ）						
第 4 回	データリンク（1）（データリンクの役割及び技術、イーサネット等について学ぶ）						
第 5 回	データリンク（2）（MAC アドレスやその役割等について学ぶ）						
第 6 回	IP プロトコル（1）（IP の基礎及び IP アドレスの基礎について学ぶ）						
第 7 回	IP プロトコル（2）（IP アドレス及びサブネットマスクについて学ぶ）						
第 8 回	IP プロトコル（3）（経路制御について学ぶ）						
第 9 回	IP プロトコル（4）（IP ヘッダのヘッダチェックサムについて学ぶ）						
第 10 回	IP プロトコル（5）（IPv6 について学ぶ）						
第 11 回	IP プロトコル（6）（DNS や DHCP など IP に関連する技術について学ぶ）						
第 12 回	TCP と UDP（1）（トランスポート層の役割及びポート番号、TCP などについて学ぶ）						
第 13 回	TCP と UDP（2）（UDP、NAT/NAPT などについて学ぶ）						
第 14 回	アプリケーションプロトコル（E-mail や WWW などで使用されるアプリケーションプロトコルについて学ぶ）						
第 15 回	まとめ（総まとめ及び最新のネットワーク技術の動向について学ぶ）						
成績評価の方法	最終レポート（30%）と、課題への取り組み（70%）で評価する。						
準備学修（予習・復習、課題等）	授業における資料や教材を用いて予習・復習を行う。 また演習課題については授業外の時間も活用し課題を完了させること。 （あわせて各回 30～60 分程度）						

<table>
<tr><th colspan="6">教科書</th></tr>
<tr><th>書名</th><th>著者</th><th>出版社</th><th>ISBN</th><th colspan="2">備考</th></tr>
<tr><td>指定なし</td><td></td><td></td><td></td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>参考書</td><td colspan="5">適宜プリントを配布する

参考文献：
『マスタリング TCP/IP 入門編 第 5 版』
竹下隆史（著）、村松公保（著）、荒井透（著）、苅田幸雄（著）、オーム社、2012 年
『コンピュータネットワーク 第 5 版』
アンドリュー・S・タネンバウム（著）、デイビッド・J・ウエザロ（著）、日経 BP、2013 年
『プロフェッショナル IPv6』
小川晃通（著）、ラムダノート、2018 年</td></tr>
<tr><td>備考</td><td colspan="5"></td></tr>
<tr><td>昨年度から
の振り返り</td><td colspan="5">教材の更新</td></tr>
</table>

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	1 年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	オペレーティングシステム演習					授業形態	演習
授業コード	POS132	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施しない
担当教員	鎌谷 修						
授業概要	情報通信技術を活用した新たなサービスの開発、実現にあたっては、コンピュータのハードウェア構成やソフトウェア制御などコンピュータに関する様々な知識が必要となる。この科目ではコンピュータの仕組みや考え方、動作原理への理解に基づき、その内部構成についてさらに理解を深めるとともに、オペレーティングシステム（以下、OS）の主な役割とその代表的な機能について学ぶ。OS の原理や仕組み、基本機能をより深く理解するために演習形式で学びを深める。あわせて、今日的な話題である OS の仮想化や IoT など有用なシステム開発や設計に関連する知識やスキルについても身に付け、情報通信技術を活用したシステム開発への応用につなげる。 なお、本授業は「オペレーティングシステム入門」で単純な OS 操作を学んだうえで、ICT を活用したシステム開発への応用につなげることを目的に設定されていることから、連続性をもって履修することを推奨する。						
授業の目的・到達目標	・コンピュータの内部構成や動作について理解できる。 ・OS の主な役割や機能とその設定について理解し、運用できる。 ・ユーザとハードウェア、ソフトウェアとハードウェアの関係性の中で OS が果たす役割を理解し、サービス開発に生かすことができる。						
授業計画							
第 1 回	ソフトウェアの概要と種類 （オペレーティングシステムの役割、ミドルウェア、応用ソフトウェアなど）						
第 2 回	プロセッサの概要と種類 （基本的な特徴と要素、プロセッサの基本構造、動作原理と性能、高速化技術）						
第 3 回	OS のインタフェース （ユーザインタフェースとプログラミングインタフェース）						
第 4 回	OS の構成と基本機能 （シェルとカーネル、制御プログラム、CPU による命令語の実行、コンパイラなど）						
第 5 回	プロセス管理とスケジューリング （ジョブ、プロセス、スレッドの考え方とスケジューリングなど）						
第 6 回	プロセス管理における同期と排他制御 （プロセスの同期と排他制御、デッドロック、プロセス間通信制御など）						
第 7 回	メモリ管理機能 （メモリ管理の概要、メモリ領域管理、仮想メモリ（ページング、アドレス変換など））						
第 8 回	ファイル管理 （ファイル名と属性、ディレクトリ、ファイルシステムの管理）						
第 9 回	入出力装置と制御 （入出力装置と制御方式）						
第 10 回	OS のセキュリティ （アクセス制御、セキュリティモデル、暗号化、認証、認可など）						
第 11 回	仮想化技術（1）						

	（仮想化技術の概要、ホスト型、実行環境の構築と動作確認）
第 12 回	仮想化技術（2） （ハイパーバイザ型、コンテナ型、実行環境の構築と動作確認）
第 13 回	ネットワークの制御 （通信インタフェース、プロトコル、クライアント・サーバ方式）
第 14 回	組み込み機器用ソフトウェアと IoT （組み込み機器用ソフトウェアの種類とその特徴、IoT サービスの動向）
第 15 回	まとめ （OS の性能と運用管理、OS のシステム性能に関する要素、運用管理の基本）
成績評価の方法	各テーマごとに設定される課題の提出状況とその内容（100%） 課題への説明が論理的に行われているか。 講義内容を反映した内容となっているか。 自身の考え、新たな視点を盛り込んだ内容となっているか。 参考文献のリストをつけているか。
準備学修（予習・復習、課題等）	予習（標準学習時間：1 時間） ・Web サイト等を閲覧し、基本的な用語・概念について理解をしたうえで授業に臨むこと。 復習（標準学習時間：1 時間） ・各授業で示した参考文献、Web サイト、演習課題等について振り返り、着実に理解した上で次回の授業につなげる。

教科書

書名	著者	出版社	ISBN	備考
IT Text オペレーティングシステム（改訂 2 版）	野口健一郎	オーム社	978-4-274-22156-9	2020/1/30
MODERN OPERATING SYSTEMS 4th Edition（第 4 版）	Andrew S. Tanenbaum	ピアソンエデュケーション	9781292061429	2015/1/23

参考書	適宜、参考となる文献や Web サイト等を指示する。 参考文献： 『オペレーティングシステムの仕組み』 河野健二（著）、朝倉書店、2019 年 『組込みエンジニアの教科書』 渡辺登（著）、牧野進二（著）、C&R 研究所、2020 年 『IoT の基本・仕組み・重要事項が全部わかる教科書』 八子知礼（著）、杉山恒司（著）、竹之下航洋（著）、松浦真弓（著）、土本寛子（著）、SB クリエイティブ、2017 年
備考	上記教科書購入については、初回講義の際に担当教員より説明します。 この科目は「大学等における修学の支援に関する法律」において本学が申請した実務経験のある教員による授業科目です。
昨年度からの振り返り	講義の位置づけについて、初回講義にてご説明します。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	1 年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	コンピュータアーキテクチャ					授業形態	講義
授業コード	CAT131	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施しない
担当教員	堀田 耕一郎						
授業概要	コンピュータハードウェアのコンポーネントの構造と振る舞い、およびプログラムが動作するために、コンポーネントがどのように相互作用するかを学ぶ。システムの安定動作、プログラムの正確な動作を担保するための方式に重点を置く。また、主要コンポーネントであるCPU 内の命令セットアーキテクチャについて、汎用コンピュータの事例を学んだ後、スーパーコンピュータがどのように高速実行を行うかについて深く検討する。ソフトウェアの動作と関連させながら学ぶことによって、プログラムを高速化させる方法を理解することができる。						
授業の目的・到達目標	コンピュータがどのように機能しているのか、各機能の動作原理と複数の機能の連携について理解する。コンピュータアーキテクチャを評価できるレベルを目指す。						
授業計画							
第 1 回	デジタル表現と計算回路						
第 2 回	ALU とレジスタ						
第 3 回	主記憶装置						
第 4 回	コンピュータ命令の動作						
第 5 回	命令の表現形式と命令セット						
第 6 回	アドレッシング、サブルーチンの実現						
第 7 回	命令パイプライン（1）						
第 8 回	命令パイプライン（2）						
第 9 回	命令パイプライン（3）						
第 10 回	記憶階層（1）：主記憶装置とキャッシュ						
第 11 回	記憶階層（2）：仮想記憶						
第 12 回	命令レベル並列処理（1）						
第 13 回	命令レベル並列処理（2）						
第 14 回	入出力と周辺装置						
第 15 回	例外処理						
成績評価の方法	小テストを含む課題の提出状況とその内容の評価および講義への貢献度（質問、発言など）40％ 講義中に行う小テストの得点 30％ 期末の成果物とその評価 30％						
準備学修（予習・復習、課題等）	前期講義「コンピュータとソフトウェア基礎」を復習しておくこと。 講義の切れ目で復習中心の簡単な課題を提示するので、次の講義までに回答を用意すること。その内容を、次の講義内での議論のきっかけとする。 参考文献に挙げた 『コンピュータアーキテクチャ（電子情報通信レクチャーシリーズ）』 坂井修一（著）、電子情報通信学会（編）、コロナ社、2014 年						

	に沿って講義を進める。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	必要な資料を適宜配布する。 参考文献： 『コンピュータアーキテクチャ（電子情報通信レクチャーシリーズ)』 坂井修一（著)、電子情報通信学会（編)、コロナ社、2014 年 『コンピュータの構成と設計 第 5 版』 ジョン・L. ヘネシー（著)、デイビッド・A. パターソン（著)、成田光彰（訳)、日経 BP、2014 年 『コンピュータアーキテクチャ技術入門 高速化の追求×消費電力の壁』 Hisa Ando（著)、技術評論社、2014 年
備考	
昨年度からの振り返り	前期の「コンピュータとソフトウェア基礎」の理解を前提として進める。講義形式とするが、多くの発言ができるように運営する。 講義資料は事前に UNIPA にアップロードするので確認して臨むこと。 また、終了後、講義ビデオを公開するので復習に活用してほしい。日常、触れたことのない内容にはなるが、講義時間と復習で理解できる内容と考える。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	2 年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	ソフトウェア設計・構築					授業形態	演習
授業コード	SDD131	単位数	2 単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎桐谷 恵介、白井 貴子						
授業概要	実用的なソフトウェア・システムやソフトウェア製品を開発するために必要となる開発プロセスや開発技術（分析、設計、検証）に関する基礎知識と実践的なプロジェクトマネジメント手法を学ぶ。また、ソフトウェア設計の代表的なモデリング手法である UML（Unified Modeling Language）を演習形式で理解する。これらの学習を通じ、ソフトウェアの設計や構築の基本的な技能と知識を習得するとともに、自らがソフトウェアやそれを使用するサービスを設計する際に協同者に対し、仕様や要件を適切に依頼できるようになることを目指す。						
授業の目的・到達目標	(1) ソフトウェアの開発及びマネジメントのプロセスを理解し、活用することができる。 (2) ソフトウェアの分析、設計手法を理解し、実際の開発に応用することができる。 (3) ソフトウェアの特徴を理解し、様々な問題に対して適切に判断し、行動することができる。 (4) ソフトウェアの代表的な設計手法である UML の概要を理解する。 (5) ソフトウェア開発を取り巻く社会環境や今後の動向について説明することができる。						
授業計画							
第 1 回	ガイダンス 授業ガイダンス（シラバス記載事項の確認、実習環境の確認、グループ構成など）。 IT システムの現状、失敗事例などの例示。						
第 2 回	ソフトウエア開発プロセス ソフトウェアのライフサイクルにおけるプロセスモデルを概観し、プロセス改善の意義と狙いについて。						
第 3 回	ソフトウェア設計手法とプロジェクトマネジメント 代表的な設計手法を取り上げ、比較検討する。さらにプロジェクトマネジメントに必要なプロセスを概観し、プロジェクトの立上げから終結まで、どのような流れでプロジェクトが進むのかについて。						
第 4 回	ソフトウェアテストとソフトウエア品質 ソフトウェア開発におけるテストの位置付け、テストの種類、テスト技法について。 ソフトウェアの品質の全体像を理解し、要求される品質を満たすための活動について。						
第 5 回	オブジェクト指向技術 再利用性、保守性に着目して、オブジェクト指向技術を理解する。						
第 6 回	UML（Unified Modeling Language）概説 1 オブジェクト指向技術において、よく使用される代表的なダイアグラムの書き方について。						
第 7 回	UML（Unified Modeling Language）概説 2 オブジェクト指向技術において、よく使用される代表的なダイアグラムの書き方について。						
第 8 回	UML（Unified Modeling Language）概説 3 オブジェクト指向技術において、よく使用される代表的なダイアグラムの書き方について。						
第 9 回	グループ演習 1 分析・設計モデリング与えられたシステムを 3 つの視点（機能、構造、振る舞い）で整理し、UML の図を使って表現する。課題設定と要求分析。						
第 10 回	グループ演習 2						

	分析・設計モデリング前回の続き。ユースケース設定。
第 11 回	グループ演習 3 分析・設計モデリング前回の続き。クラス図、アクティビティ図、ユースケース図の作成。
第 12 回	グループ演習 4 分析・設計モデリング前回の続き。シーケンス図、オブジェクト図、その他 UML 図の作成。
第 13 回	グループ演習 5 分析・設計モデリング前回の続き。グループ内ディスカッション。
第 14 回	グループ演習 6 演習レポート提出 分析・設計モデリング（発表） 分析モデリングの結果をグループ毎に発表し、全員で意見交換。
第 15 回	授業まとめ
成績評価の方法	演習結果のレポート（40%）、演習発表内容（20%）、授業での参加姿勢（20%）、授業中ワーク結果（20%）を考慮し判断する。
準備学修（予習・復習、課題等）	継続した演習を行うことから次回に備えて復習をしておくこと（各回 30 分～1 時間程度）。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	
備考	
昨年度からの振り返り	授業の進みが早いとの意見を受け、進め方を見直します。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	2年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	データベース					授業形態	演習
授業コード	DBM134	単位数	2単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施しない
担当教員	◎片桐 雅二、信田 勝美						
授業概要	ソフトウェアシステムを構築する上で欠かせないデータベース（DBMS、リレーショナルDB、オブジェクト指向DB、エンティティ、オブジェクト、データモデル、概念モデリング、正規化、SQL、情報検索）について学習する。データベースに関する一通りの知識を講義により学ぶとともに、実習により基本的な操作および設計を体験し知識を活用する実践力を体得する。前半では、データベースの基本について、仕組み・構成要素・基本的機能から、設計の仕方、トランザクション処理・同時実行制御、障害復旧などを講義にて学ぶ。後半においては、SQL問い合わせ、トランザクション処理・同時実行制御、設計・正規化などについて実習を行う。その後、NoSQL などの最近のデータベースおよび将来に向けたデータベースの重要性について学ぶ。						
授業の目的・到達目標	データベースの原理・考え方や基本構造について理解し、説明できるようになる。 SQLを用いたデータベースの基本的な操作方法を習得し、使うことができるようになる。 小規模な関係データベースを設計構築する基礎的な能力を体験的に獲得する。						
授業計画							
第1回	データベースとは（1） コースのイントロダクション。データベースシステムとはどのようなものか、日頃利用している実例などにより理解する。また歴史的な発展を知り、その位置付けについて学ぶ。						
第2回	データベースとは（2） データベースとは何かを理解するために、DBMS、データモデル、SQLなどの概要を学ぶ。						
第3回	SQL問い合わせ（1） SQL言語を用いてデータベースを操作する方法の基本（SELECT、FROM、*、AS、DISTINCT、WHERE）について学び、簡単なSQL問い合わせの実行を体験する。						
第4回	SQL問い合わせ（2） SQL言語を用いてデータベースを操作する方法の基本(算術式､集約関数､GROUP BY､HAVING、ORDER BY）について学び、簡単なSQL問い合わせの実行を体験する。 リレーショナルデータモデルにおいてデータ操作を行うための基本となる関係代数(射影・選択・和・差・共通）について、その概要とSQLにおける利用法を理解する。						
第5回	SQL問い合わせ（3） リレーショナルデータモデルにおいてデータ操作を行うための基本となる関係代数(結合・直積・商）について、その概要とSQLにおける利用法を理解する。						
第6回	SQL問い合わせ（4） SQL言語を用いてデータベースを操作する実習を行う。						
第7回	データベースの基本要素 データベースの構成要素と基本的機能を学ぶ。データの構造として、三層スキーマとは何かを理解する。データの一貫性の維持や安全性（セキュリティ）の確保の必要性を理解し、それらを実現する仕組みの概要を学ぶ。						
第8回	データの一貫性（1） トランザクション処理とは何か、同時実行制御とは何かを理解する。それぞれを実現するために用いられる基本的な仕組みついて概要を理解する。						

第 9 回	データの一貫性（2） トランザクション処理および同時実行制御について、その動作を確認する実習を行う。
第 10 回	障害対策 実際のデータベースの運用において重要となる、障害対策の基本について学ぶ。想定される障害の種類や、対策として用いられている代表的な方策について、その概要を理解する。
第 11 回	設計・正規化（1） データベースの設計とは、どのようなものかを学ぶ。概念スキーマの設計、および論理スキーマの設計について概要を理解する。
第 12 回	設計・正規化（2） 概念スキーマ設計として E-R 図を用いた設計、論理スキーマ設計としてリレーションへの変換の実習を行う。（机上演習）
第 13 回	設計・正規化（3） 論理スキーマ設計として正規化の実習を行う。（机上演習）
第 14 回	データベース応用（1） NoSQL と呼ばれ近年注目を集めている新しいタイプのデータベースについて、その概要と特徴を理解する。
第 15 回	データベース応用（2） 様々な分野で用いられているデータベースについて特徴的なものを理解し、今後どのような応用の発展が考えられるかをその重要性とともに学ぶ。
成績評価の方法	実習レポートの内容（15%×3）、問題演習の内容（15%×3）、受講態度等（10%）により評価する。
準備学修（予習・復習、課題等）	講義については、特に復習によって自分なりに内容を消化することが大切である（30-60 分／回） 項目毎に、演習問題または実習結果に基づいたレポート課題を設定する（60-120 分×6 回）

教科書

書名	著者	出版社	ISBN	備考
データベース―基礎からネット社会での応用まで―	三木光範、田中美里	共立出版	978-4-320-12406-6	情報工学テキストシリーズ

参考書	『SQL 第 2 版ゼロからはじめるデータベース操作』 ミック（著）、翔泳社、2016 年 『基本がわかる SQL 入門』 西村めぐみ（著）、技術評論社、2020 年 『おうちで学べるデータベースのきほん』 ミック（著）、木村明治（著）、翔泳社、2015 年 『SQL データ分析・活用入門』 西潤史郎（著）、山田祥寛（監修）、ソシム、2019 年
備考	
昨年度からの振り返り	昨年度からの改善点：とくに実習において、対面授業であることを踏まえて、学生がより円滑に取り組めるように、実習着手前の説明／指示をする方法や実習取組み中の指導支援方法を工夫する。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	2年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	モバイルサービス概論					授業形態	講義
授業コード	MSD135	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施しない
担当教員	磯 俊樹						
授業概要	ICTとは、「Information Communications Technology」の略で、情報通信技術全般を指すものであり、人と人だけなく、「人」と「モノ」をつなげる（コミュニケーションする）様々なサービスに関与している。本講義では、社会生活で情報をやり取りする際に不可欠なツールとなった「ケータイ」に着目し、人とモノをつなげているモバイルサービスを実現するために使われているICTのコア技術を俯瞰する。そして、サービスシステムを実現するために、これらのコア技術がなぜ使われているのかを「アプリケーションの利用環境条件」や「サービス提供上の制約条件」の観点から技術を考察することで、各技術の特性の違いを定性的に理解する。						
授業の目的・到達目標	人とモノをつなげる「現実世界から情報を獲得する」系サービス、人と人をつなげる「自らの状態を知る」系サービス、クラウド上の「集合知利用系サービス」、さらには「モバイル端末の入出力インタフェース」に関するICTの主な技術の特徴や用途が平易な表現で説明できることを目指す。そして、「ユーザの視点」、「サービス提供者の視点」、「技術者の視点」をバランスよく持ってサービス企画立案できる「技術のソムリエになること」を究極の目標とする。						
授業計画							
第1回	『モバイルサービスの変遷』 ケータイを中心に進歩してきたモバイルサービスの動向を、社会的な役割や行動心理学の観点で分析する。						
第2回	『「外界から情報を獲得する系サービス」を実現するICT（1)』 ケータイ搭載カメラから情報が得られる二次元コード（QRコードやVisualtag）読取技術の概要を学ぶ。						
第3回	『「外界から情報を獲得する系サービス」を実現するICT（2)』 景観画像から情報を獲得する特定画像認識の概要を学ぶ。						
第4回	『「外界から情報を獲得する系サービス」を実現するICT（3)』 モーションセンサとカメラを用いたモバイルXR技術の概要を学ぶ。						
第5回	『中間演習（1)』 「外界から情報を獲得する系サービス」を実現するICTの特徴を、サービス適用条件や制約条件等の観点からまとめる。						
第6回	『「自分の状態を知る系サービス」を実現するICT（1)』 ケータイの携行方法にロバストなモーションセンサを用いた歩行状態認識の概要を学ぶ。						
第7回	『「自分の状態を知る系サービス」を実現するICT（2)』 把持センサを用いたケータイ利用中の個人認証の概要を学ぶ。						
第8回	『「自分の状態を知る系サービス」を実現するICT（3)』 生体情報センサを用いたヘルスケア技術の概要を学ぶ。						
第9回	『中間演習（2)』 「自分の状態を知る系サービス」を実現するICTの特徴を、サービス適用条件や制約条件等の観点からまとめる。						
第10回	『「集合知利用系サービス」を実現するICT（1)』						

	「モバイル空間統計サービス」の概要を学ぶ。
第 11 回	『「集合知利用系サービス」を実現する ICT (2)』 ベイズ推定を利用したレコメンドシステム等の概要を学ぶ。
第 12 回	『「集合知利用系サービス」を実現する ICT (3)』 「my daiz（マイデイズ)」のような質問応答系サービスの概要を学ぶ。
第 13 回	『中間演習 (3)』 「集合知利用系サービス」を実現する ICT の特徴を、サービス適用条件や制約条件等の観点からまとめる。
第 14 回	『「モバイル端末の入出力インタフェース」で利用される ICT』 ウエアラブルデバイス等の概要を学ぶ。
第 15 回	『将来あるべきモバイルサービスやケータイの姿』 今後のモバイルサービスに求められるものや、それを実現するために必要な技術などを議論する。
成績評価の方法	期末レポート：50% 課題レポート：40% 上記以外のレポート提出（適時）や授業取り組み状況等の学習意欲：10%
準備学修(予習・復習、課題等)	予習：各単元の実例をインターネットや文献等で 1 つ以上調べてスライドにまとめる 復習：各単元で学んだ内容についてインターネットや文献等で 2 つ以上調べてスライドにまとめる。 （各回 1 時間程度）

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	必要により、授業時にプリントを配布、または参考資料を適宜指示する。 参考文献： 『データ分析のための数理モデル入門』 江崎貴裕（著)、ソシム、2020 年 『分析者のためのデータ解析学入門』 江崎貴裕（著)、ソシム、2020 年 『データ分析に必須の知識・考え方 統計学入門』 阿部真人（著)、ソシム、2021 年 『本質を捉えたデータ分析のための分析モデル入門』 杉山聡（著)、ソシム、2022 年 『ディジタル画像処理』 画像情報教育振興協会（著)、画像情報教育振興協会、2015 年 『臨床医学のためのウェーブレット解析』 石川康宏（著)、医学出版、2000 年 『iPhone のすごい中身』 柏尾南壮（著)、日本実業出版社、2010 年 『ジャイロセンサ技術』 多摩川精機株式会社（編)、東京電機大学出版局、2011 年 『わかりやすい GPS 測量』 小白井亮一（著)、オーム社、2010 年 『データ解析のための統計モデリング入門』

	久保拓弥（著)、岩波書店、2012 年 『統計数理は隠された未来をあらわにする―ベイジアンモデリングによる実世界イノベーション』 樋口知之（著)、照井伸彦（著)、井元清哉（著)、北川源四郎（著)、石井信（著)、 東京電機大学出版局、2007 年 『デジカメの画像処理』 蚊野浩（監修)、映像情報メディア学会（編)、オーム社、2011 年 『フリーソフトでつくる音声認識システム』 上野俊行（著)、森北出版、2018 年
備考	・本科目は、「技術系の専門科目」、すなわち、技術志向の学生向けの講義である。従って、微分積分や確率統計に関する基礎知識（「数学基礎 A」ならびに「数学基礎 C」履修レベル）があることが望ましい。 ・進捗状況により授業内で扱う題材の難易度を変更する場合がある。 ・なお、事前に担当教員に申し出あれば、科目選択しなくとも（単位取得にならない）聴講生として受講することは可能とする。 ・教員のオフィスアワー等を利用した個別対応による指導も可能である。
昨年度からの振り返り	講義の内容が「技術系の専門科目」であるので、モバイルサービスの実装上の課題に対する技術選定の根拠が理解できるように解説する。 また、スケジュール調整がつく範囲になるが、ゲストスピーカーの招聘を継続していく。 技術の使い分けができるような観点を重視して解説をしていく。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	2年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	情報系数学応用A					授業形態	講義
授業コード	MIA132	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	落合 慶広						
授業概要	本科目では微分方程式や最適化法を中心として、各産業分野で利用される代表的な手法の原理や特徴を理解すると共に、これらの手法を実世界の問題に活用する力を習得することを目標とする。微分方程式は、自然現象や物理現象を特徴付けをして記述することができ、これを解くことにより、これらの現象の解析や将来の挙動を予測が可能となる。このため数値計算と合わせて、より多くの実世界の課題が解けるように講義する。また、最適化法は、製品設計、流通計画から高度な画像・音声認識処理に至るまで多くの分野で活用されることから、これらの導入にもなるよう講義する。本科目を通じ、これらの手法の原理や特徴を理解すると共に、実世界の課題を解く力を養う。						
授業の目的・到達目標	・微分方程式や最適化等の基礎知識を習得し、説明できる。 ・上記知識を用い、課題の捉え方や定式化、その課題に適した解法の選択方法や適用方法など、得た知識をもとに課題解決に活用できる。						
授業計画							
第1回	最適化法のガイダンス 最適化法（1） 最適化の基本的な考え方、様々な手法の特徴や違い						
第2回	最適化法（2） 線形計画法の基本的な考え方、代表的な手法の特徴や違い ・シンプレックス法 ・内点法						
第3回	最適化法（3） 非線形計画法の基本的な考え方、代表的な手法の特徴と違い ・制約なし非線形計画問題 ・最急降下法 ・ニュートン法 ・Levenberg-Marguardt法（修正Marguardt法）						
第4回	最適化法（4） 収束の早い非線形計画法の代表的な手法の特徴と違い ・共役勾配法 ・準ニュートン法（DFP（Davidon-Fletcher-Powell法、BFGS（Broyden, Fletcher, Goldfarb, Shanno）法）						
第5回	最適化法（5） ・制約あり非線形最適化法、ペナルティ法、ラグランジェ乗数法 ・非線形最適化法とニューラルネットの学習法との関連など						
第6回	最適化法（6） 多目的最適化法やパレート効率性の考え方、使い方						
第7回	最適化法（7） 大域的最適化法や遺伝的アルゴリズムの考え方や計算方法と産業応用						
第8回	微分方程式のガイダンス						

	微分方程式（1） 微分方程式の概要、特徴による基本的な分類、解の分類など
第 9 回	微分方程式（2） 変数分離形、斉次方程式などの概要、解き方、使い方
第 10 回	微分方程式（3） 1 階線形微分方程式の考え方、解き方、使い方
第 11 回	微分方程式（4） 2 階線形微分方程式の考え方、解き方、使い方
第 12 回	微分方程式（5） 実世界の問題でよく知られている微分方程式、活用事例
第 13 回	微分方程式の数値解法（1） いくつかの微分方程式を事例とし、より多くの問題が解けるようになる考え方や解き方、使い方（差分法、テイラー法など）
第 14 回	微分方程式の数値解法（2） いくつかの微分方程式を事例とし、より多くの問題が解けるようになる考え方や解き方、使い方（オイラー法、Runge-Kutta 法など）
第 15 回	最適化法、微分方程式の活用 工業製品における形状・機能設計、物流配送計画等、活用事例やその方法
成績評価の方法	各授業内容の理解と応用する力を下記の観点から評価する。 ・各授業で「課題」を出します。これをノートに解き、写真を撮影して、課題レポートとして提出して下さい（80%）。 課題を解くために、授業資料、本、インターネット等で調べ学習をして解いて頂いて結構です。 Word、PowerPoint 等により、電子文字を用いて作成したレポートは、電子的コピーが作れる為、不可とします。 手書きにより作成したレポートの写真（jpeg フォーマット）を原則とします。この写真を PowerPoint に貼り付けて提出することは OK です。 ・授業中での取り組み状況、発表や質疑応答などを評価します（20%）。
準備学修（予習・復習、課題等）	■本科目では、最適化手法、微分方程式の解法の原理、特徴を学ぶだけでなく、Excel のソルバー、マクロを行いて、最適化問題や微分方程式を数値的に解く方法についても講義、演習を行い、習得できるようにします。授業でも使い方などを解説しますが、下記の操作に慣れることも必要になります。 ・最適化法：Excel のソルバー（Excel に組み込まれてるプログラム）の使い方 ・微分方程式：Excel のマクロ（Visual Basic）によるプログラミング（Visual Basic プログラミング） 授業資料：毎回、授業用の資料を配布する。 予習：事前に提示する最適化手法、微分方程式について、概要、特徴などを調べてノートに書く（20～30 分） 授業：授業で新しく気づいた事、理解した事、理解度確認課題をノートに書く（90 分授業） 復習：課題に対する調べ学習、考察結果をノートに書いて、レポート提出（20～30 分程度）

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				
参考書	■最適化法の参考書			

	・初学者向き： 『これなら分かる最適化数学―基礎原理から計算手法まで』 金谷健一（著)、共立出版、2005 年 ・理論的： 『非線形計画法』 今野浩（著)、山下浩（著)、日科技連、1978 年（数式多く理論面が充実） ・実用向き： 『最適化プログラミング』 茨木俊秀（著)、福島雅夫（著)、岩波書店、1991 年（FORTRAN プログラム記載有） 『最小二乗法による実験データ解析（新装版)』 中川徹（著)、小柳義夫（著)、2018 年（実課題への適用方法が幅広く扱われている） ■微分方程式の参考書 ・初学者向き： 『常微分方程式（原著第 8 版)』 E. クライツィグ（著)、近藤次郎（訳)、堀素夫（訳)、培風館、2006 年 ・実利用向き： 『微分方程式で数学モデルを作ろう』 David Burghes（著)、Morag Borrie（著)、垣田高夫（訳)、大町比佐栄（訳)、 日本評論社、1990 年
備考	「数学基礎 A」（微分積分)・「数学基礎 B」（線形代数）の知識を前提として授業を進める為、これらの科目を履修していることが強く望まれる。 履修していない場合、該当する知識を自主的に習得することを前提に本科目の履修をお願いします。
昨年度からの振り返り	最適化法や微分方程式の数値解法を身近なツール（excel）で使えるようになるところが好評でした。 これらの手法は、実際の社会課題に対しても、非常に役立つ手法ですので、技術を目指している方のみならず、起業を目指している方にもお薦めします。 特に、最適化法は、ビジネス（会社）活動を効率化、省力化するためにも使うことができ、スケジューリング、荷物の配送コスト、製造の製造コストの省力化、意思決定支援などに幅広く使われています。 社会科学分野では、オペレーションズリサーチ（主に線形計画法）として知られています。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	2 年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	情報技術演習 I					授業形態	演習
授業コード	IT1131	単位数	2 単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施しない
担当教員	鎌谷 修						
授業概要	ユーザアプリケーションからサーバシステムまでを対象とした情報ネットワーキングシステムの全体アーキテクチャを理解し、演習による基本動作検証の体験を通じて、より実践的なスキルを習得する。また、与えられた情報ネットワーキングシステムの例題に対して、ユーザインタフェース設計書を作成し、デザインレビュ、基本動作検証、関係データベースの構築、プロジェクト管理までの演習を行う。						
授業の目的・到達目標	情報ネットワーキングアーキテクチャの全体像の理解と、演習による実際の動作実証。 ユーザインタフェース設計書の作成方法の理解と、デザインレビュの演習。 与えられた要求条件を元にした、ソフトウェア設計スキルや関係データベースの設計構築スキルなどを演習を交えて習得する。 データベース連携技術を理解し、実際の動作検証手法について基本的な内容を身に付ける。						
授業計画							
第 1 回	授業の概要と目的、演習の進め方についての説明。アカウント作成と基本操作確認（1）						
第 2 回	アカウント作成と基本操作確認（2）						
第 3 回	インスタンス作成と動作確認（1）						
第 4 回	インスタンス作成と動作確認（2）						
第 5 回	データベース構築と動作確認（1）						
第 6 回	データベース構築と動作確認（2）						
第 7 回	インスタンスとデータベースの連携動作確認（1）						
第 8 回	インスタンスとデータベースの連携動作確認（2）						
第 9 回	プロジェクト管理ツール、その他 ICT ツール等の動作確認						
第 10 回	プロジェクト計画の策定						
第 11 回	プロジェクト計画の実施と動作確認（1）						
第 12 回	プロジェクト計画の実施と動作確認（2）						
第 13 回	プロジェクト計画動作結果のとりまとめ（1）						
第 14 回	プロジェクト計画動作結果のとりまとめ（2）						
第 15 回	まとめと振り返り						
成績評価の方法	各テーマごとに設定されるレポートの提出状況とその内容（100%） レポートの記述が論理的に行われているか。 講義内容を反映した内容となっているか。 自身の考え、新たな視点を盛り込んだ内容となっているか。 参考文献のリストをつけているか。						
準備学修（予習・復習、課題等）	予習（標準学習時間：1 時間） ・Web サイト等を閲覧し、基本的な用語・概念について理解をしたうえで授業に臨むこと。 復習（標準学習時間：1 時間） ・各授業で示した参考文献、Web サイト等について振り返り、着実に理解した上で次回の授						

	業につなげる。				
教科書					
書名	著者	出版社	ISBN	備考	
指定なし					
参考書	適宜、参考となる文献やWebサイト等を指示する。 参考文献： 『Amazon Web Services基礎からのネットワーク＆サーバー構築 改訂3版（日本語）」 大澤文孝（著）、玉川憲（著）、片山暁雄（著）、今井雄太（著）、日経BP、2020年 『AWSではじめるLinux入門ガイド（日本語）」 山下光洋（著）、マイナビ出版、2020年				
備考					
昨年度からの振り返り	演習を円滑に進めるための参考資料を適宜提示させて頂きます。				

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	2年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	システム設計演習					授業形態	演習
授業コード	PSD131	単位数	2単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎桐谷 恵介、　白井 貴子						
授業概要	企業活動における販売管理、生産管理、会計の管理システム、または我々の社会生活に広く浸透しているSNSまで、情報システムは、私達が暮らす社会では欠かすことができない重要なものとなっている。情報システムがどのように作られているか、その設計を理解することは、将来、設計者の立場であっても、利用者の立場であっても役立つ知識となる。この講義では、社会における情報システムの重要性を理解し、講義や演習を通じて情報システム設計に関わる際に必要な知識を得ることを目的とする。						
授業の目的・到達目標	情報システムの構築、および設計とは何かを理解すること。 情報システムの設計方法を理解すること。 演習を通じて情報システム設計の知識を定着させること。						
授業計画							
第1回	ガイダンス 授業ガイダンス（シラバス記載事項の確認、実習環境の確認、グループ構成など）。						
第2回	情報システムにおける設計、設計の全体像と基本方針 情報システム開発工程概要、代表的な情報システム構成、ソフトウェア・エンジニアリング、プロジェクトマネジメントについて。						
第3回	要件定義でやっておくべきこと 要件定義（ビジネス要件、機能／非機能要件）の概要、手法について。						
第4回	データ設計のセオリー 基本設計（データ設計）の概要、手法。概念データモデル、論理データモデル、物理データモデルについて。外部インターフェイスの設計について。						
第5回	プロセス設計のセオリー 基本設計（プロセス設計）の概要、手法。業務プロセスの概要定義／詳細定義について。						
第6回	機能の概要定義 基本設計（機能概要）の概要、手法について。画面・帳票、バッチ処理の概要、論理CRUD、物理CRUDについて。						
第7回	機能の詳細定義 詳細設計（機能詳細）の概要、手法について。画面・帳票、バッチ処理の詳細定義、共通機能の定義について。						
第8回	グループ演習1 要件定義について、業務要件定義書の作成。						
第9回	グループ演習2 要件定義について、システム要件定義書の作成。						
第10回	グループ演習3 基本設計について、データ設計、プロセス設計の作成。						
第11回	グループ演習4 基本設計について、機能概要設計の作成。						
第12回	グループ演習5						

	詳細設計について、機能詳細設計の作成 1。
第 13 回	グループ演習 6 詳細設計について、機能詳細設計の作成 2、ユーザビリティ設計の作成。
第 14 回	グループ演習 7 演習レポート提出 グループ内ディスカッション。演習成果発表。全員で意見交換。
第 15 回	授業まとめ
成績評価の方法	演習結果のレポート（40%）、演習発表内容（20%）、授業での参加姿勢（20%）、授業中ワーク結果（20%）を考慮し判断する。
準備学修（予習・復習、課題等）	継続したグループ演習を行うことから次回に備えて復習をしておくこと（各回 30 分～1 時間程度）。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
システム設計のセオリー	赤俊哉	株式会社リックテレコム	978-4-86594-005-3	

参考書	
備考	
昨年度からの振り返り	授業の難易度が高い、進みが早いとの意見を受け、難易度、進め方を見直します。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	2 年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	データサイエンス					授業形態	講義
授業コード	DSC135	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施しない
担当教員	◎磯 俊樹、Adrian David Cheok						
授業概要	データサイエンスは、文字通り、「データを科学（分析）する」ものであるが、人間の代わりに機械が代替することを目的としている AI とは異なり、分析結果を「人間が解釈する」ことで実社会に有益な知見（価値）を提供するものである。これを実践するためには、単にデータを統計解析するだけでなく、分析対象の背後にある知識を駆使してデータを観察することが重要となる。特に、以下の 3 つのスキルが必要になる。 （1）ビジネス力（課題背景を理解した上で、ビジネス課題を整理し、解決する力） ・分析対象の背景や知識に基づき、分析結果を評価・解釈すること （2）データサイエンス力（数理モデル、統計モデル、機械学習モデルを駆使して、適材適所で使いこなす力） ・分析対象の特性や目的に応じて、適切な分析手法を選択すること （3）データエンジニア力（実際にデータを意味のあるような形に加工・表現する力） ・計算機を用いてデータを加工し、人間が解釈し易い形に処理すること 本講義では、はじめに、データサイエンスに必要なこれら 3 つのスキルの概要について学ぶ。そして、データサイエンスの主役である「データ」を解釈するための手法（データの特性分析等）やモデリング手法（数理モデル、統計モデル、機械学習モデル化等）の基礎についても学ぶ。 さらに、実データと Python のサンプルコードを使ってデータ分析の実習することで、の各手法の特徴を体感しながら理解を深めていく。						
授業の目的・到達目標	実応用の分野で用いられている代表的なデータサイエンスに関する手法を用途に応じて適材適所で見極められることを究極の目標とし、各手法の特徴や用途が平易な表現で説明できることを目指す。						
授業計画							
第 1 回	データサイエンスの概要 実社会での適用事例からデータサイエンスの役割と全体的な流れ、さらには AI との違いを学ぶ。						
第 2 回	データサイエンスに必要な 3 つのスキル ビジネス力、データサイエンス力、データエンジニア力の概要を学ぶ。						
第 3 回	データ分析時に用いるモデリング手法 数理モデル、統計モデル、機械学習モデルの基礎を学ぶ。						
第 4 回	データ分析の具体的な流れの概要 「データ前処理」、「分析モデルの構築」、「モデルの妥当性評価」を学ぶ。						
第 5 回	中間演習（1） これまでの内容をまとめる。						
第 6 回	データ前処理（1） データの特性を評価する手法を学ぶ。						
第 7 回	データ前処理（2） 規格化・標準化や特徴量抽出などデータを加工する手法を学ぶ。						
第 8 回	データ前処理の実践						

	Python を用いて、「データ前処理」を実習する。
第 9 回	データ分析時に用いるモデリング手法 データ分析におけるモデリング手法の 1 つである機械学習モデルを例にとり、このモデルが持つ特性と使い分けるときのポイントについて学ぶ。
第 10 回	データ分析時に用いるモデリング手法の実践 データ分析のモデリング手法の 1 つである機械学習モデルを例にとり、Python を用いて、「データ分析モデルの構築」を実習する。
第 11 回	モデルの妥当性評価 汎化性評価など機械学習モデルを最適化するための基本的な評価方法を学ぶ。
第 12 回	モデルの妥当性評価の実践 Python を用いて、「機械学習モデルの妥当性評価」を実習する。
第 13 回	総合演習（1） Python を用いて、データ分析の一連の作業を実習する。
第 14 回	総合演習（2） 総合演習（1）で実施した分析結果の評価・解釈を実習する。
第 15 回	データサイエンスのまとめ 目的や用途に応じて使い分けができるようにデータサイエンスの各手法をまとめる。
成績評価の方法	期末レポート：50% 課題レポート：40% 上記以外のレポート提出（適時）や授業取り組み状況等の学習意欲：10%
準備学修（予習・復習、課題等）	予習：各単元の実例をインターネットや文献等で 1 つ以上調べ、スライドにまとめる 復習：各単元で学んだ内容についてインターネットや文献等で 2 つ以上調べ、スライドにまとめる。 また、教科書付属のサンプルコードを動作させながら学習内容の理解を深める。 （各回 1 時間程度）

教科書

書名	著者	出版社	ISBN	備考
応用基礎としてのデータサイエンス	北川源四郎	講談社	978-4-065-30789-2	2022 年
Python で儲かる AI をつくる	赤石雅典	日経 BP	978-4-296-10696-7	2020 年

参考書	上記に加え、授業時にプリントを配布、または参考資料を適宜指示する。 ◎準教科書的な参考文献 『データ分析のための数理モデル入門』 江崎貴裕（著）、ソシム、2020 年 『分析者のためのデータ解析学入門』 江崎貴裕（著）、ソシム、2020 年 『データ分析に必須の知識・考え方 統計学入門』 阿部真人（著）、ソシム、2021 年 『本質を捉えたデータ分析のための分析モデル入門』 杉山聡（著）、ソシム、2022 年 ◎参考文献（データ解釈関連） 『「原因と結果」の経済学―データから真実を見抜く思考法』

	中室牧子 他（著)、ダイヤモンド社、2017 年 『新版 統計学のセンス―デザインする視点・データを見る目―』 丹後俊郎（著)、朝倉書店、2018 年 『効果検証入門～正しい比較のための因果推論／計量経済学の基礎』 安井翔太（著)、技術評論社、2020 年 ◎参考文献（モデリング手法関連） 『イラストで学ぶ機械学習』 杉山将（著)、講談社、2013 年 『見えないものをさぐる―それがベイズ：ツールによる実践ベイズ統計』 藤田一弥（著)、フォワードネットワーク（監修)、オーム社、2015 年 ◎参考文献（データエンジニアリング関連） 『R と Python で学ぶ実践的データサイエンス＆機械学習』 有賀友紀（著)、大橋俊介（著)、技術評論社、2019 年 『機械学習のための特徴量エンジニアリング―その原理と Python による実践』 Alice Zheng、Amanda Casari 他（著)、オライリー・ジャパン、2019 年 『データサイエンスのための統計学入門 第 2 版―予測、分類、統計モデリング、統計的機械学習と R／Python プログラミング』 Peter Bruce 他（著)、オライリー・ジャパン、2020 年
備考	・本科目は、「技術系の専門科目」、すなわち、技術志向の学生向けの講義である。従って、微分積分や確率統計に関する基礎知識（「数学基礎 A」ならびに「数学基礎 C」履修レベル）があることが望ましい。 ・アルゴリズムの動作確認のためにプログラムのサンプルコードを活用するが、授業の中でプログラミング言語の教育は設定していないので、自習できるスキルがあることを前提する。 ・進捗状況により授業内で扱う題材の難易度を変更する場合がある。 ・なお、事前に担当教員に申し出あれば、科目選択しなくとも（単位取得にならない）聴講生として受講することは可能とする。 ・教員のオフィスアワー等を利用した個別対応による指導も可能である。
昨年度からの振り返り	データサイエンスの事例を紹介しながら、「データサイエンスで何ができるか」、や「何が重要なのか」等、大枠について解説する。 また、データサイエンスの分析方法を体感するために、教科書に付属しているプログラムを動作させるなど実習の機会を増やしていく。 解析モデルの説明にあたっては、「数式を読む（解釈する)」ことが手法を使い分ける上で重要性であることを、具体的な例を交えながら解説する。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	2 年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	情報系数学応用 B					授業形態	講義
授業コード	MIB132	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施しない
担当教員	片桐 雅二						
授業概要	本科目では、数理論理学や計算理論を中心に、関連する議論も含め、ICT 技術を支える中核的な理論の基礎を広く学習する。各理論／概念については具体的な応用先の例もあわせて学ぶことで、理解をより深いものとする。ソフトウェアを形式的に特徴づけたり解析するためには、計算や論理に関する知識が不可欠である。 具体的には、集合・論理・関係・写像・代数系・数え上げ・グラフ理論についてその入門的な内容（用語・定義・記法、基本的概念・原理、応用先の例など）を順次学ぶことで、論理的、数理的に課題解決へのアプローチができるようになることを目指す。						
授業の目的・到達目標	・数理論理学や計算理論等の基礎知識を習得し、説明できるようになる。 ・上記知識を用い、実際の課題についてソフトウェアを用いて解決する際に、必要に応じて自らより深く調べる手がかりとして、得た知識を課題解決に活用できるようになる。						
授業計画							
第 1 回	コース導入 コース全体の概要、授業の進め方を理解する。 集合（1） 集合の基礎知識として、集合の定義、集合の数学的表現方法、いろいろな集合とその性質、集合に対する基本的演算などを学ぶ。						
第 2 回	集合（2） 引き続き集合の基礎知識として、ベン図による複数の集合の間の関係の表現方法、包除原理などを学ぶ。また実課題で用いられている集合の応用事例をいくつか紹介する。						
第 3 回	論理（1） 論理学の基礎知識として、命題の定義、命題に対する演算としての論理演算、条件付き命題、命題関数／述語などを学ぶ。						
第 4 回	論理（2） 推論の定義、推論の枠組みにおける必要条件と十分条件、全称記号と存在記号などを学ぶ。また、実課題で用いられている論理の応用事例をいくつか紹介する。						
第 5 回	関係（1） 関係の定義を直積集合から理解する。関係を表現する方法として関係グラフ・隣接行列・有向グラフを学び、関係の合成についても学ぶ。						
第 6 回	関係（2） 関係の上で定義できる基本的な性質（反射的・対称的・反対称的・推移的）を学び、集合の分割、同値関係、剰余類などを学ぶ。また実課題で用いられている関係の応用事例をいくつか紹介する。						
第 7 回	写像（1） 写像の定義、単射・全射・全単射・逆写像、写像の合成について学び、鳩の巣原理を理解する。						
第 8 回	写像（2） 写像の特別な形としての置換、集合の濃度、写像による集合の表現方法などについて学ぶ。また、実課題で用いられている写像の応用事例をいくつか紹介する。						

第 9 回	代数系（1） 代数系の基礎知識として、二項演算および代数系の定義、結合律と交換律、剰余和と剰余積、単位元と逆元などについて学ぶ。
第 10 回	代数系（2） 代数系の構造として、半群・モノイド・群について学ぶ。また、群の構造を比較する方法として、準同型写像と同型写像について学ぶ。
第 11 回	計算の複雑さ・数え上げ 巡回セールスマン問題や分割問題を紹介し、数え上げの原理を学ぶ。また順列および二項係数について理解する。
第 12 回	順序集合から束へ（1） 半順序関係の定義、半順序集合・比較可能・比較不能・全順序集合などについて学び、半順序集合の要素の関係を図式化するハッセ図の描画方法を理解する。
第 13 回	順序集合から束へ（2） 最大元・最小元、極大元・極小元、上界と上限・下界と下限、束、分配束と可補束などについて学ぶ。
第 14 回	グラフ理論（1） グラフ理論の基礎的知識として、グラフの数学的定義、グラフの表現方法として隣接行列・接続行列、特別なグラフとして完全グラフ・正則グラフ・2 部グラフ、グラフにおける経路・連結・非連結・閉路などについて学ぶ。
第 15 回	グラフ理論（2） グラフの応用事例として、オイラーグラフ、ハミルトン閉路、平面グラフなどを紹介する。
成績評価の方法	単元ごとの演習課題の内容（10%×8）、定期試験の結果（10%）、受講態度等（10%）により評価する。
準備学修（予習・復習、課題等）	特に復習によって自分なりに内容を消化することが大切である（30-60 分／回） 単元ごとに演習課題に取り組む（30-60 分×8 単元）

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
応用事例とイラストでわかる離散数学	延原肇	共立出版	978-4320110991	

参考書	『イラストで学ぶ離散数学』 伊藤大雄（著）、KS 情報科学専門書、講談社、2019 年
備考	
昨年度からの振り返り	昨年度からの改善点：対面授業であることを踏まえて、より対話的な説明／授業進行をすることで、履修者の理解が深まるように工夫する。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	3年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	情報系数学応用C					授業形態	講義
授業コード	MIC132	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施しない
担当教員	片桐 雅二						
授業概要	本科目では、離散数学や情報理論を中心に、関連する議論も含め、ICT 技術を支える中核的な理論の基礎を広く学習する。前半では、離散数学の中の一分野である代数学およびグラフ理論について取り上げ、公開鍵暗号やネットワーク解析などの実課題に適用されている手法の原理を学ぶ。後半は情報理論の基礎として、情報量・符号理論などの基礎的内容を理解するとともに、その理論が実際に適用されている事例について学ぶ。授業全体として、例題とその解説によって理解を深めるとともに、各種の課題を ICT／情報システムにより解決する場合に求められる数理的考え方や応用力を修練する。 なお、本科目の履修に当たっては、「数学基礎C」および「情報系数学応用B」を履修していることが望ましい。						
授業の目的・到達目標	・離散数学および情報理論の基本知識を習得し、説明できるようになる。 ・離散数学や情報理論を中心に数学的発想と論理的思考について学び、実際の課題解決を検討するための能力を獲得する。						
授業計画							
第1回	コース導入 コース全体の概要、授業の進め方を理解する。 代数学の基礎（1） 合同式の基本的な考え方、数学的な定義、数学的な証明の例（ユークリッドの互除法）						
第2回	代数学の基礎（2） 有限体の基本的な考え方、数学的定義、フェルマーの小定理						
第3回	代数学の基礎（3） RSA公開鍵暗号の仕組みを代数学の考え方から理解する						
第4回	グラフ（1） グラフ構造の基本的性質、パス、連結性の基本的な定理、手法の基礎						
第5回	グラフ（2） グラフ理論の問題とその解を求める難しさ（計算複雑性）の尺度について						
第6回	グラフ（3） グラフ彩色問題を事例に、代表的な問題設定とそれに対する代表的な手法の概要						
第7回	グラフ（4） 複雑ネットワークに関する構造の解析と有用性（中心性、スケールフリー性、スモールワールド性、PageRank）						
第8回	情報理論の基礎（1） 情報理論の概要、確率の基礎的な知識の復習						
第9回	情報理論の基礎（2） エントロピーの意味、計算方法						
第10回	情報理論の基礎（3） ダイバージェンスの意味、2つの確率分布間のダイバージェンスの計算方法						
第11回	符号（1）						

	様々な符号の定義や違い、計算の方法
第 12 回	符号（2） 木構造や数直線を用いた語頭符号、クラフトの不等式
第 13 回	符号（3） 符号化アルゴリズムの基本的な考え方
第 14 回	通信理論 通信路符号化（通信路モデル）、通信路容量、誤り訂正符号など
第 15 回	情報理論の応用 情報理論の応用として音声・画像・動画などで用いられている符号化方式、スペクトル拡散通信方式、情報ハイディングなどのセキュリティ技術
成績評価の方法	単元ごとの演習課題の内容（75％：15％×5 通）、定期試験の結果（15％）、受講態度等（10％）により評価する。
準備学修（予習・復習、課題等）	特に、授業内で出された事例・例題を用いて、復習によって自分なりに内容を消化することが大切である。（30-60 分／回） 単元ごとに演習課題に取り組む。（30-60 分×5 単元） また、授業範囲について講義前日に配布されるプリントにより（必要に応じて参考書等も活用して）予習を行うことが望ましい。

教科書

書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	『情報工学のための離散数学入門』（グラフィック情報工学ライブラリ） （該当授業：第 1～5 回） 西野哲朗（著）、若月光夫（著）、数理工学社、2015 年、ISBN978-4-86481-032-6 『初等離散数学』（新数学入門シリーズ）（該当授業：第 6 回） 秋山仁（著）、占部正承（著）、森北出版、1998 年、ISBN978-4-627-03551-5 『ソーシャルメディア論―行動データが解き明かす人間社会と心理―』（該当授業：第 7 回） 土方嘉徳（著）、サイエンス社、2020 年、ISBN978-4-7819-1486-2 『はじめての情報理論』（該当授業：第 8～15 回） 小嶋徹也（著）、近代科学社、2011 年、ISBN978-4-7649-0413-2 『情報量―情報理論への招待―』（該当授業：第 8～13 回） 山本宙（著）、コロナ社、2019 年、ISBN978-4-339-02890-4
備考	
昨年度からの振り返り	昨年度からの改善点：対面授業であることを踏まえて、より対話的な説明／授業進行をすることで、履修者の理解が深まるように工夫する。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	2 年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	Web システム演習					授業形態	演習
授業コード	PWS135	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	落合 慶広						
授業概要	本授業では Web 上統合的システムを構築するための知識とスキルの習得を行う。「プログラミングⅠ・Ⅱ」や「ネットワーク技術」で習得した知識やスキルは、Web や Andoroid 上でのアプリケーション開発や Web 上で使用する様々な業務システムの開発につながるものである。授業内では大規模な Web 統合システムの統合のプロセスを題材に、Web システムの設計、開発を演習形式で行う。授業内での演習を通じ、自分が実現したいサービスを形にする力を養う。						
授業の目的・到達目標	本授業では、大規模分散型の Web 統合システムを開発する際に用いられる技術、及び、高可用性と事業継続性を考慮した設計方法などを理解すると共に、簡易実装の演習を通じて、実現する力を習得する。						
授業計画							
第 1 回	HTML（1） （基礎）HTML を用いた Web ページ制作を実施 （発展）Web 技術の変遷と現状						
第 2 回	HTML（2） （基礎）HTML を用いた Web ページ制作を実施 （発展）Web システムの開発方法とリスク						
第 3 回	HTML（3） （基礎）HTML を用いた Web ページ制作を実施 （発展）並列分散型 Web システムを設計・構築する際の課題と解決方法						
第 4 回	CSS（1） （基礎）CSS を用いたデザイン演習を実施 （発展）プロジェクト開発管理ツール～redmine						
第 5 回	CSS（2） （基礎）CSS を用いたデザイン演習を実施 （発展）負荷分散とセキュリティを考慮した Web システムの出入口の設計方法						
第 6 回	CSS（3） （基礎）CSS を用いたデザイン演習を実施 （発展）スマートな Web システム：テンプレートエンジンの活用						
第 7 回	データベース（1） （基礎）SQlite3 を用いた演習を実施 （発展）REST による柔軟な連携						
第 8 回	データベース（2） （基礎）SQlite3 を用いた演習を実施 （発展）分散 DB 設計：高可用性と分散設計～MySQL・PostgreSQL						
第 9 回	データベース（3） （基礎）SQlite3 を用いた演習を実施 （発展）コミュニティサイト、映像配信サイト等で用いられる高負荷対策技術						
第 10 回	Web サイト（1）、PHP（1）						

	（基礎）PHP を用いたデータ入出力の演習を実施 （発展）様々な認証方式とサイト間の連携認証
第 11 回	Web サイト（2）、PHP（2） （基礎）PHP を用いたデータ入出力の演習を実施 （発展）Web システムの動作検証、及び、ボトルネックとパフォーマンス検証方法
第 12 回	Web サイト（3）、PHP（3） （基礎）PHP を用いたデータ入出力の演習を実施 （発展）ネット上でのファイルサーバ機能の構築～WebDAV
第 13 回	総合演習 1 各自が想定する起業／新規ビジネスについて、その企業のサイト、ショップサイトなどの Web システムを構築します。
第 14 回	総合演習 2 各自が想定する起業／新規ビジネスについて、その企業のサイト、ショップサイトなどの Web システムを構築します。
第 15 回	課題発表会と最新動向について
成績評価の方法	各授業において出題する理解度確認課題（80%）と総合演習課題（20%）により評価する。
準備学修（予習・復習、課題等）	・Web システムを構築するための基本技術（HTML、CSS、PHP、データベース）について演習形式で学びます。 ・授業は講義と演習で構成され、演習では Web サイトの構築演習をする為、パソコン／ノートパソコン等が必要となります。 授業では、OS は Windows のみを扱います。Mac の方は、自身で環境構築ができることを前提として、受講して下さい。 各授業、課題では、各自のノートパソコンを使って演習を行うため、Chrome ブラウザ、PHP、SQLite のインストールを行い環境構築を行います。 このために 100Mbyte 程度の disk 空き容量が必要です。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	授業ごとに資料を配布
備考	
昨年度からの振り返り	授業時、課題共に、演習（プログラミング）が中心となります。 最終的には、簡単な Web サイトを構築します（総合演習）。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	2年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	インタラクティブ・システムデザイン					授業形態	演習
授業コード	ISD135	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	佐藤 紀行						
授業概要	スマートフォンやPCなどにインストールされたアプリケーションを、ユーザが操作し、コンピュータが応答する。その応答に対してまたユーザが操作を行う（インタラクティブ・システム）。 よいアプリケーションは、この相互のやり取りが優れているアプリケーションである。ユーザは違和感無く操作を始めることができ、自然に操作に習熟して、効率よく自分の目的を達成することができるようになる。 ユーザとコンピュータの間の優れたやり取りは、設計と実装によって実現される。開発されたアプリケーションは、テスト・評価され、結果は次のバージョンに反映される。設計・実装・評価の一連の活動は、適切に計画されている必要がある。 本講では、ユーザと相互にやりとりするシステムの計画・設計・実装・評価のための知識と技法を、実習を通じて学習する。						
授業の目的・到達目標	個人演習とグループ演習を行い、インタラクティブなシステムの計画・設計・実装・評価を実施する基本的な技法について、知識と技能を身に付ける。						
授業計画							
第1回	インタラクティブシステムの概要 身近なインタラクティブを複数あげ、どのようなものが「インタラクティブシステム」に該当するか大まかに理解する。 次回までに調査しておくべき対象を伝える。						
第2回	システムデザインのためのユーザ調査法と、インタラクティブシステムの要件の整理 実在するシステムを題材に、特に対人インターフェースを持つシステムを設計する時の調査と方法について概観する。						
第3回	システムデザインのプロセスの全体像とシステムデザインの計画法 「システム」をデザインする時に用いられるプロセスをなぞり、システムを作るプロセスを大まかに理解する。 デザイン思考の考え方 システムの設計を行う際に有益な「デザイン思考」について概観し、考え方を理解する。						
第4回	インタラクティブシステムの設計（1） Webで使えるコンポーネントについて概要を理解する。 Web特有の特性（問題点）を理解し、実装方法がデザインに影響を及ぼすことを理解する。						
第5回	インタラクティブシステムの設計（2） ユーザ導線の検討 利用者の視点でシステムの利用シーンを考え、自身のデザインを評価する方法を理解する。 ユーザ導線、ユーザ体験の違いによるシステムの評価が左右されることを理解する。 ワイヤーフレームの制作 ユーザ導線を書面に残す手法を理解し、自身のデザインの綻びを確認し、協力者に自身の考えを伝える方法を学ぶ。						
第6回	インタラクティブシステムの設計（3-1） インタラクティブシステムの企画を考え、調査すべき項目のリストを作成する。						

第 7 回	インタラクティブシステムの設計（3-2） 前回検討したインタラクティブシステムの企画からワイヤーフレームを制作する。 作成したワイヤーフレームはクラスに公開し、チームメンバーを募る。
第 8 回	システムのデザイン システムアイデア発表会と、チーム分け
第 9 回	インタラクティブシステム実装演習（1） チームでシステムアイデアを検討し、ブラッシュアップする。
第 10 回	インタラクティブシステム実装演習（2） 要件定義と設計
第 11 回	インタラクティブシステム実装演習（3） 実装
第 12 回	インタラクティブシステム実装演習（4） 実装
第 13 回	インタラクティブシステムの評価
第 14 回	インタラクティブシステム実装演習（5） 評価とフィードバックによる改修
第 15 回	インタラクティブシステム実装演習（6） 評価
成績評価の方法	チーム演習における担当作業の担当範囲と作業成果を加味し、提出物の提出状況と内容を評価する。（70%） 講義への参加度・貢献度（質問、発言など）を評価する。（30%）
準備学修（予習・復習、課題等）	講義では主に説明・解説を行う。次回までに指示された調査を行い、課題、あるいは自習で内容を理解しておくこと。 講義の時間内に演習が終わらないときは、次回までに作業を完遂させておくこと。 次の講義では前回の内容を理解していることを前提に講義を進める。

教科書

書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	『UX デザインの教科書』 安藤昌也（著）、丸善出版、2016 年 『インタラクティブシステムデザイン』 ウィリアム M. ニューマン（著）、マイケル G. ラミング（著）、北島宗雄（監訳）、ピアソンエデュケーション、1999 年 （こちらは絶版のようですが、図書館に 1 冊寄贈してありますのでご参照ください。良い本です。）
備考	
昨年度からの振り返り	前半ではすでに実用されているシステムについて調査し、検討します。 指定された対象などをできれば実際に操作し、その経験を次の講義にもってきてください。 また、自身の考えたシステムを他者に説明する手法も学びます。 後半ではチームでインタラクティブシステムのデザインに取り組みます。 この講義では、自身が興味のあるテーマを実施するチームに所属することが講義内容の理解に有効です。 しかし、チームの評価が高いことと、個人の評価が高いことは連動しません。 チームの評価が高くとも、そのメンバー個々では D 評価の方が発生します。

	自身の興味のあるテーマに基づくシステムを他者に説明し、自身が中心となってチームを集めることに、ぜひとも挑戦してください。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	2年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	情報システムのプロジェクト管理					授業形態	講義
授業コード	PMS131	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	平山 敏弘						
授業概要	前半は、プロジェクトマネジメントの国際標準およびディファクトスタンダードの知識体系である「PMBOK (Project Management Body of Knowledge)」を構成する10スキルの概要を学び、プロジェクト管理の基礎を理解する。後半では、実務につながるように、実質的なプロジェクト計画やマネジメントの方法を理解するため、ソフトウェアの開発～テスト～リリースまでの一連の流れにおける、開発工程とテスト工程の対応関係を表したモデルである「V字モデル」や、対応するプロジェクトフェーズ双方向の関連性を確保するために考えだされた「トレーサビリティ・マトリクス」を学び理解を深める。また理論に止まらず、個人特性に基づいたチームビルディング手法やチーム力アップに不可欠なモチベーションアップ手法／ビジネスコミュニケーション等、実際の現場で必ず必要となる実践力を学ぶ。加えて履修生自身の身近なスケジュール例をWBS（Work Breakdown Structure）化するなどを通して、どのような場面でもプロジェクト管理が有用であることを理解する。						
授業の目的・到達目標	PMBOKを通じてプロジェクトマネジメントの基本的知識を得て、情報システムのプロジェクト管理の基礎を理解することを目的としている。そのために以下の項目ができることを目標とする。 (1) PMBOKを通じて、プロジェクトのライフサイクルと運営のしくみを理解する (2) WBSをベースとしたプロジェクト計画書を作成することができる (3) V字モデルやトレーサビリティ･マトリックスを学び、プロジェクトの品質管理をシンプルに確実に行なえるようになる また当講義は、プロジェクト管理の理論に止まらず、実際にプロジェクトを推進する際に必須となるチームビルディングが実践できるように、「自分の強み診断」「モチベーションアップ手法」「ビジネスコミュニケーション」などのチーム力を高めるための実践力についても、演習を通じて理解することを目標とする。						
授業計画							
第1回	(1) プロジェクト管理とは プロジェクト管理とは何か、どのようなことを考えなければいけないのか、プロジェクトを成功に導くためには何が必要なのかのポイントを理解することにより、次回以降に学ぶ学習内容の前提知識を身に付けます。						
第2回	(2) PMBOKとは (1) PMBOK (Project Management Body of Knowledge：ピンボック) を構成する10の知識エリア、「品質管理」、「原価管理」、「スケジュール管理」、スコープ管理」、「要員管理」、「コミュニケーション管理」、「リスク管理」、「調達管理」、「ステークホルダー管理」、「統合管理」とは何かについて学びます。						
第3回	(3) PMBOKとは (2) 「立ち上げ」、「計画」、「実行」、「監視・管理」、「終結」という5つに分割されたプロセスについて学び、知識エリアとのマトリクスによって、どのプロセスで何を作成・管理すべきについて学びます。						
第4回	(4) PMBOKとは (3) PMBOKで定義されている、「入力」、「ツールと実践技法」、「出力」という3つのパートを学び、知識エリアとプロセスとの関連性についての理解を深めます。						

第 5 回	(5) プロジェクト・フェーズ プロジェクトでは、「要件定義」から「システムテスト」まで複数のフェーズがあります。各フェーズでどのようなことを実施するのかについて学びます。
第 6 回	(6) プロジェクトスケジュール PMBOK の知識エリアである「プロジェクト・スケジュール・マネジメント」の計画プロセス群に含まれる「アクティビティの順序設定」「アクティビティ所要時間の見積」「スケジュールの作成」の 3 つのプロセスを中心に説明を行い、プロジェクトスケジュールが作成できるようになることを目標とします。
第 7 回	(7) スケジュールの作成 プロジェクトスケジュールの様々な技法を学び、その技法を利用して身近な例でスケジュールを作成する演習を行います。
第 8 回	(8) プロジェクトスコープからの WBS（ワーク・ブレークダウン・ストラクチャー） スコープとして定義された成果物を、その構成要素単位で詳細化、細分化した結果を木（ツリー）構造で表した、WBS（Work Breakdown Structure）について学びます。
第 9 回	(9) WBS 演習 履修生の身近にある計画（プロジェクト）について、WBS 化する演習を実施することで WBS の理解を深めます。
第 10 回	(10) マスタースケジュール マスタースケジュールとは、プロジェクト全体の流れが最初から最後まで分かる主要な工程表のことです。プロジェクト規模が大きくなればなるほど、各パートの進捗は細分化されるため、全体感を常に把握しておくことが重要になります。マスタースケジュールを理解することで、プロジェクト全体が進む中で、今どこに立ち位置があるのかを確認することが出来るようになります。
第 11 回	(11) マスタースケジュール作成演習 マスタースケジュール作成の順序を学び、自身の例をもとにしたマスタースケジュール作成の演習を実施して理解を深めます。
第 12 回	(12) 要員計画とコスト管理 プロジェクトで重要となるコスト見積もりの手法を学びます。また要員計画におけるリソースヒストグラムと山崩しとは何かを学び、プロジェクトにおけるコスト管理を理解します。
第 13 回	(13) 要員管理とモチベーション プロジェクトメンバーのモチベーションをアップさせることは、プロジェクトのチーム力アップに繋がり、要員管理に直結します。動機付け理論を学ぶことにより、メンバーが一丸となって共通のゴールに向かってチャレンジするチームビルディングを論理的に実現できるようになります。
第 14 回	(14) プロジェクトにおける追跡可能性 上位要件と下位要件との追跡可能性や、要件と下流の作業成果物との追跡可能性を格子表（マトリクス）に整理した「トレーサビリティ・マトリクス」について学びます。
第 15 回	(15) 成功裏に導くプロジェクト管理 プロジェクト管理においては、理論を学ぶことはもちろんであるが、それだけではプロジェクトを成功裏には導けません。多くのプロジェクト開発関連の裁判において問題とされる「プロジェクトマネジメント義務違反」について、判例に基づく検証から、プロジェクト管理の重要性を理解し、当講義で学んだことを実践で活かす必要性を理解します。
成績評価の方法	(1) 試験・テストについて 定期試験に準じた最終レポートを提出して頂きます。 (2) 試験以外の評価方法

	毎回の講義時に提出する提出物（授業内容確認小レポート）、および演習内容・発表により評価をします。 （3）成績の配分・評価基準等 最終レポートの評価に加え、毎回の授業時に提出する小レポートや授業への貢献度、および演習発表などを下記の割合で判断して評価します。 （最終レポート 50%、小レポート 15%、授業への貢献度 15%、授業時演習課題の成果物および発表 20%）
準備学修 （予習・復習、課題等）	（予習） 次回講義内容について、インターネットや参考資料などを利用して、調査しておくこと。また自身の特性診断などを予め実施しておく場合あり。（標準学習時間：1 時間） （復習） 講義内容を復習して、確認しておくこと。また演習や分析作業の講義後には、次回講義時に発表できるための資料準備。（標準学習時間：1 時間）

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	『IT エンジニアのためのプロジェクトマネジメント入門』 飯尾淳 他（著）、オーム社、2020 年、ISBN9784274225925 『モチベーション 3.0』 ダニエル・ピンク（著）、大前研一（訳）、講談社、2010 年、ISBN4062144492 『さあ、才能（じぶん）に目覚めよう〈ストレングス・ファインダー2.0〉」 トム・ラス（著）、古屋博子（訳）、日経 BP、2017 年、ISBN9784532321437 『図解入門よくわかる 最新 PMBOK 第 6 版の基本』 鈴木安而（著）、秀和システム、2018 年、ISBN9784798053561 『実務で役立つ WBS 入門』 Gregory T. Haugan（著）、伊藤衡（訳）、翔泳社、2005 年、ISBN-4798108499
備考	
昨年度からの振り返り	講義内容は難しかったが、有意義な授業であったとの声が多かったので、授業レベルは維持していきたいが、演習が多かったので理解が深まったとのコメントにもあるように、座学で学んだ内容を演習で確認し、理解を深めるといった講義形態は継続していきたいと思います。また、演習の理解を深めるために、授業の最初の段階より、履修生自身のケースを意識して実施してもらえるように進めていきます。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	3年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	情報技術演習Ⅱ					授業形態	演習
授業コード	IT2131	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施しない
担当教員	鎌谷 修						
授業概要	少人数グループ毎に、実際の社会課題及びサービス事例の調査を行い、新たなサービス事例の企画立案、検討を行う。検討結果から、ユースケースの議論及び、要求条件の明確化を行い、業務フローや機能一覧、ネットワーク構成等の基本設計と、機能設計やデータベース設計等の詳細設計を作成する。ユーザアプリケーション及びサーバアプリケーションを実際に構築し、情報ネットワーキング統合システムの基本的な動作検証までの演習を行う。グループ毎に動作検証結果の中間報告を行い、改善点について議論し、基本設計・詳細設計の改訂を行う。最終的に得られたサービスの検証を行い、グループ毎に最終報告を行い、演習全体を総括する。						
授業の目的・到達目標	社会課題を解決するためのサービス検討、ユースケース及び要求条件検討を通じた、情報ネットワーキングアーキテクチャの全体像の実践的な理解と、演習による実際の動作実証。サービス導入までのプロジェクト管理と進捗確認によるフィードバックを演習することによる、実践的なプロジェクトマネジメントスキルの習得。						
授業計画							
第1回	授業の概要と目的、演習の進め方、動作検証環境についての説明。検証用アカウント作成と基本動作確認（1）						
第2回	検証用アカウント作成と基本動作確認（2）						
第3回	実際の社会課題、サービス事例の調査（1）						
第4回	実際の社会課題、サービス事例の調査（2）						
第5回	プロジェクト計画の策定（1）						
第6回	プロジェクト計画の策定（2）						
第7回	プロジェクト計画についての、中間発表会を実施する。						
第8回	プロジェクト修正計画の策定						
第9回	プロジェクト計画の実施と動作確認（1）						
第10回	プロジェクト計画の実施と動作確認（2）						
第11回	プロジェクト計画動作結果のとりまとめと資料作成（1）						
第12回	プロジェクト計画動作結果のとりまとめと資料作成（2）						
第13回	プロジェクト計画動作結果のとりまとめと資料作成（3）評価結果についての発表会を実施する。						
第14回	プロジェクト計画動作結果のとりまとめと資料作成（4）評価結果についての発表会を実施する。						
第15回	まとめと振り返り						
成績評価の方法	前半及び後半で設定されるレポートの提出状況とその内容（100%） レポートの記述が論理的に行われているか。 講義内容を反映した内容となっているか。 自身の考え、新たな視点を盛り込んだ内容となっているか。						

	参考文献のリストをつけているか。
準備学修 (予習・復習、課題等)	予習（標準学習時間：1時間） ・Webサイト等を閲覧し、基本的な用語・概念について理解をしたうえで授業に臨むこと。 復習（標準学習時間：1時間） ・各授業で示した参考文献、Web サイト等について振り返り、着実に理解した上で次回の授業につなげる。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	適宜、参考となる文献やWebサイト等を指示する。
備考	
昨年度からの振り返り	昨年度はアンケート未実施のため該当なし。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	3 年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	ソフトウェアプロセスと品質					授業形態	講義
授業コード	PQS131	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	寺脇 由紀						
授業概要	ソフトウェアライフサイクルの主要工程、進化と保守、ソフトウェア品質の概念とテスト技法、管理方法、および、ソフトウェアプロセスの概念とその改善手法を学ぶ。具体的には、ソフトウェアのもつ独特の性質、ソフトウェア開発のライフサイクルモデル、および、品質の概念についてソフトウェア工学、および、ソフトウェア開発の発展の歴史を通して学ぶ。歴史や概念をはっきりと定義した上で、ソフトウェア品質に関する現行規格に対して理解を深め、実例・例題、さらには、現場・現在の問題を通じてソフトウェア品質保証の技法を生きたノウハウにしていく（客観的事実、一般的見解と区別できる力を養う)。「測れないものは制御できない：DeMarco（1982)」という言葉のとおり計測はあらゆる管理の基本である。このため本講義では品質管理の技法についても学ぶ。						
授業の目的・到達目標	ソフトウェアのもつ独特の性質に着目し、それを作るプロセスや手法を学ぶ。さらには、ソフトウェア品質に対する変遷を学び、高品質なソフトウェアを開発するための考え方を説明できるようになり、各種技法を使えるようになる。						
授業計画							
第 1 回	ソフトウェアの品質管理： ソフトウェアの品質問題とその影響について学ぶ。						
第 2 回	ソフトウェアの品質： ソフトウェアの品質に対する考え方の変遷を概説する。また、ISO/IEC25010 システム・ソフトウェアの品質を参照しながら、ソフトウェア品質を理解する。						
第 3 回	ソフトウェアの開発工程と品質管理： ソフトウェア開発工程と個々の工程での品質向上について理解する。						
第 4 回	レビュー技術（1)： プログラム開発におけるレビューの役割および分類について理解する。						
第 5 回	レビュー技術（2)： レビューの計画、準備、実施について理解する。						
第 6 回	レビュー技術（3)： 例題をもとにレビュー演習を行う。						
第 7 回	テスト技術： ソフトウェア開発におけるテストの目的、テストの種類、テストのタイプについて学ぶ。						
第 8 回	構造ベース技法： 構造ベース技法（ホワイトボックス）を学び、制御パステストの演習を行う。						
第 9 回	仕様ベース技法（1)： 仕様ベース技法（ブラックボックス）について学び、仕様ベース技法のメリット・デメリットを理解する。						
第 10 回	仕様ベース技法（2)： 同値分割・境界値分析について学び、演習を行う。						
第 11 回	仕様ベース技法（3)： デシジョンテーブル・状態遷移テストについて学び、演習を行う。						

第 12 回	プログラム開発におけるテスト作業： プログラム開発におけるテストの計画、準備、実施について学ぶ。
第 13 回	プログラムの品質評価： プログラムの品質評価について学び、評価の手順と観点を理解する。
第 14 回	品質データの分析： P-B 曲線、また、QC の手法を説明する。レビューおよびテストの結果の分析について理解する。
第 15 回	評価結果に対する処置： テスト結果の合格基準や作業改善について学ぶ。
成績評価の方法	授業への取り組み態度（20%）、授業中に行う小テスト（30%）、課題・レポート（50%）として評価する。
準備学修（予習・復習、課題等）	毎回の授業につき、30 分から 60 分の自宅学習が必要である。 演習について、授業内で演習時間を十分に確保できない回は、授業外（自宅学習）で演習を完了させ提出する。 もし授業や演習に遅れた場合は、毎週配布する教材を各自で復習し、次回授業までにキャッチアップすること。

教科書

書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	『ソフトウェア品質知識体系ガイド―SQuBOK Guide』 SQuBOK 策定部会（編）、オーム社、2007 年、ISBN978-4-274-50162-3 『ISO/IEC25010:2011 - Systems and software engineering Systems and Software Quality Requirements and Evaluation (SQuaRE) - System and Software Quality Models.』
備考	教科書は、教員の作成する教材にて進める。 授業では、講義だけでなく演習に取り組む。技法の性質に合わせて、個人演習、ペア演習、グループ演習を行う。 毎回の授業でノートパソコンを持参すること。
昨年度からの振り返り	昨年度から科目担当者が変更となっているため該当なし。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	3年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	モデル化と要求開発					授業形態	講義
授業コード	MRD132	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	寺脇 由紀						
授業概要	ソフトウェア開発における開発対象のモデル化と要求仕様の作成についてUMLを通じて理解する。学習項目としては、モデル化の原則、モデルの種類、モデルの分析基礎、要求分析の基礎といった一連のモデル化技法と要求定義技法について学ぶ。 これまでの要求定義の目的は、顧客の要求を正確に理解し、それを設計者に伝えるための要求仕様書を作成することであった。しかし近年ソフトウェアを取り巻く環境は、ニーズの多様性と変動性、さらには短納期化という新たな問題への対応を要求定義に突きつけている。これらの新しい問題に対応するためには、これまでの要求工学の技術に加えて、ステークホルダの意図という視点にとどまらず、ニーズの発生場所であるビジネス環境そのものを理解し、そこで発生している問題を解決することが必要である。そこで本講義では、単に対象世界をモデル化するだけにとどまらず、その世界が抱えている問題を理解し解決する能力を養うために、経営工学、知識工学、民族学などの周辺領域を概観しながら実際の問題を解決するための論理的な思考体系もあわせて学ぶ。						
授業の目的・到達目標	要求を定義するプロセスは、要求獲得、要求記述、要求検証、要求管理である。本講義では、要求定義のプロセスを理解し、さらには、要求獲得、要求記述、要求検証を対象とし、ステークホルダの特定に始まり、ユースケースモデリング、要求仕様化、要求検証においての方法と手法を習得することが目的となる。						
授業計画							
第1回	ソフトウェア開発の歴史： 大規模ソフトウェア開発の歴史を巡り、その歴史の中ででてきた問題を考察する。						
第2回	ソフトウェア工学と要求工学： 大規模ソフトウェア開発の歴史を踏まえ、ソフトウェア開発の課題とソフトウェア工学および、要求工学の取り組みを理解する。						
第3回	ソフトウェアプロセスモデル： 代表的なソフトウェアのライフサイクルモデルを説明し、各ソフトウェアプロセスモデルにおける特徴を理解する。						
第4回	ソフトウェア開発における手戻り： 各ソフトウェアプロセスモデルの特徴を踏まえ、ソフトウェア開発における手戻りについて考察する。						
第5回	要求定義： 要求定義について外観し、要求と仕様について理解する。						
第6回	要求定義プロセス： IEEE、SQuaREシリーズなどの標準規格を参照し、要求定義のプロセスとプロダクトを理解する。						
第7回	要求獲得（1）： 要求抽出のための各種技法を外観し、要求工学と、経営学、心理学、認知心理学、一般発見問題など周辺領域との関わりを理解する。						
第8回	要求獲得（2）： 抽出した要求の合意形成や意思決定の手法を理解する。						

第 9 回	要求獲得（3）： 合意形成や意思決定のための各種手法を用いた演習を行う。
第 10 回	要求仕様化技法（1）： 構造化分析を説明し、演習を行う。
第 11 回	要求仕様化技法（2）： オブジェクト指向分析を説明する。
第 12 回	UML（1）： 静的な側面を表現するモデル表現について理解する。
第 13 回	UML（2）： 動的な側面を表現するモデル表現について理解し、演習を行う。
第 14 回	UML（3）： 状態を表すモデル表現について理解し、演習を行う。
第 15 回	総括： 学んだ内容を総括し総合解説を行う。
成績評価の方法	授業への取り組み態度（20%）、授業中に行う小テスト（30%）、課題・レポート（50%）として評価する。
準備学修（予習・復習、課題等）	毎回の授業につき、30 分から 60 分の自宅学習（予習・復習）を標準とします。 授業中に行う演習等に遅れた場合は、配布した教材を各自で復習し、次回授業までにキャッチアップすること。

教科書

書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	『Software Engineering 10th ed.』 lan Sommerville（著）、Pearson、2015 年、ISBN-10：0133943038 『ISO/IEC25010:2011 - Systems and software engineering Systems and Software Quality Requirements and Evaluation (SQuaRE) - System and Software Quality Models』 『IEEE, Recommended Practice for Software Requirements Specifications. Std 830-1998』
備考	教科書は、教員の作成する教材にて進める。 技法の性質に合わせて、個人演習、ペア演習、グループ演習を行う。毎回の授業でノートパソコンを持参すること。
昨年度からの振り返り	例題に基づいてモデル表現を実践していく形式に好評をいただきました。 今年度も、講義によって知識を吸収するだけではなく、事例に基づいて要求仕様を実際にモデル化していきたいと思います。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	3年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	システムインテグレーション					授業形態	演習
授業コード	SIT131	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎平山 敏弘、桐谷 恵介						
授業概要	情報システムを構築するサービスを行うにあたり、要件定義や設計、開発、保守運用を行うITコンサルティングの一連の流れを理解するとともに、失敗事例やリスク事例などを学ぶことで、情報システムを通じ、ビジネスに貢献していくことを目指す。 前半では、過去の情報システムの失敗例や大規模障害事例などを通じ、成功のために何を注意しなければならないかについて学ぶ。また社会やビジネスモデルの変革に影響を与えた情報システム事例などを通じて、情報システムが社会に与える影響について学ぶ。後半では、ビジネスに役立つ IT システムを導入するために発注者側と受注者側が何をするべきか理解する。実践的なプロジェクトマネジメント体系を用いて、経営に役立つITシステムを企画・計画し、プロジェクトの実践を通して、成功に導いていく方法について学んでいく。 情報システムの導入、活用、改善に向けて、発注者側と受注者側の双方にメリットを生み出しビジネスに貢献していくことを目指す。						
授業の目的・到達目標	・情報システムの開発・構築を行う際のリスクやプロジェクトの失敗例を学び、分析することで、成功に導くために必要な検討項目を理解する。 ・問題の洗い出しから課題のまとめ、施策の立案方法について理解する。 ・システムの企画から設計、開発、運用、保守までの流れについて理解する ・事業価値をあげる IT システムの活用方法。特に新しい技術（AI や IoT 技術など）をどのように取り入れていくかを理解する。						
授業計画							
第 1 回	(1) ガイダンス システムインテグレーションとは、ITシステムとプロジェクトマネジメントの視点より学びます。						
第 2 回	(2) 要件分析入門 要求から要件への変換、機能要件と非機能要件とは何かを学びます。						
第 3 回	(3) システム構想策定プロセスとは システム構築の超上流工程の進め方について、その意義と進め方、成果物例を学びます。 またシステム構築ロードマップに関して、上流工程の成果物としてのロードマップの意義と作成方法について学びます。						
第 4 回	(4) 要件定義の重要性 システム開発プロジェクトの失敗と要件定義のポイントについて学びます。						
第 5 回	(5) 情報システムの失敗 情報システムトラブルの三大リスク（システム開発失敗、セキュリティ、システムダウン）から、失敗の理由を学びます。						
第 6 回	(6) システム開発の失敗とは 機能要件が実現されない点が、プロジェクトの失敗に直結することを学びます。						
第 7 回	(7) 非機能要件から見るリスク管理 非機能要件項目から、大規模なシステムダウンや事業継続等に関するリスク管理を考えられるようになります。						
第 8 回	(8) 新たな脅威「セキュリティ視点」での対策とその検討						

	サイバー攻撃によるセキュリティ被害を想定した、リスクと注意点について学びます。
第 9 回	（9）社会やビジネスモデルの変革に影響を与えた情報システム事例 ビジネスモデルとは何か、社会を変えた IT 技術とはどのようなものであったのかを、講師が経験した事例を通じて学びます。
第 10 回	（10）まとめ① レポート作成演習 失敗事例の調査とシステム開発の際に注意すべき点、およびその対応方法について、レポートを作成し、提出してもらいます。
第 11 回	（11）要求定義（RFP）の作り方 業務要件のまとめ方、および RFP（Request for Proposal：提案依頼書）で伝えるポイントについて学びます。
第 12 回	（12）発注側の要求定義（RFP）の作成（演習） 新ビジネス構想や課題対策シートから要求仕様書（RFP）を作成する流れと実際に要求仕様書を作成するワークを行います。
第 13 回	（13）提案書の作り方 受注者側が要求定義書（RFP）を受け取った後、どのようにして提案書を作成していくのか、構成、ドキュメント形式、書くべき内容など提案書の作り方を具体的に学びます。
第 14 回	（14）提案書作成の実務（演習） RFP から提案書を作成する流れを、具体的なサンプルをもとに提案書として作成する演習・ワークを行ないます。
第 15 回	（15）まとめ② これまでの学習を踏まえた提案依頼書（RFP）、提案書の発表、講評を行ないます。
成績評価の方法	下記の割合で評価します。 ・まとめ①および②での課題、レポート提出。（70%、（まとめ①30%、まとめ②40%）） ・毎回の講義時に提出する授業内容確認小レポートによる評価。（30%）
準備学修（予習・復習、課題等）	予習：次回講義内容に関する事例を参考資料などを利用して事前に調査する。 復習：授業内で完了しなかった課題については次回発表できるよう準備する。 （各回 1 時間程度）

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	『動かないコンピュータ～情報システムに見る失敗の研究～』 日経コンピュータ（編）、日経 BP、2002 年 『イノベーションを確実に遂行する 実践プログラムマネジメント』 吉田邦夫（著）、山本秀男（著）、日刊工業新聞社、2014 年 『100 の失敗事例に学ぶ！！ IT プロジェクトの危険予知訓練』 青島弘幸（著）、ソフト・リサーチ・センター、2009 年 『プロジェクトのトラブル解決大全』 木部智之（著）、KADOKAWA、2022 年
備考	
昨年度からの振り返り	二人の教員で担当するので、実務に基づいた話が聞けてお得であるとのコメントもありましたので、二人の教員でより連携して授業を進めるようにしていきます。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	3 年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	クラウド					授業形態	演習
授業コード	CLS135	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎各務 茂雄、菊地 祥由						
授業概要	近年のシステム開発の現場では、一般にクラウド技術が利用されるようになってきた。 本講義では、クラウドに関する基本的な知識を修得する。また、大手クラウドサービス事業者のサービスを実際に利用・操作して、その基本スキルを学び、システムの実装を行う。具体的には、クラウドの分類、ネットワーク構成、クラウドサーバー・ストレージ・データベースの管理や運用、セキュリティ、負荷分散技術などについて、各テーマごとに知識の習得と演習を行い、スキルを習得する。 あわせて、発展・機能追加の早い分野であることから、新たな技術動向についても適宜解説し、クラウド上で実現されている機能の利用やクラウドの果たす役割や可能性について考え、実装できるようになる。						
授業の目的・到達目標	クラウドコンピューティングの概論とビジネスにおける活用方法を学ぶ。非エンジニアとして、エンジニアとシステム開発のディスカッションができる水準を目標とする。						
授業計画							
第 1 回	授業ガイダンス クラウドコンピューティングとは何か						
第 2 回	ビジネスから見るクラウドコンピューティング①						
第 3 回	ビジネスから見るクラウドコンピューティング②						
第 4 回	大手クラウドサービスについて クラウドコンピューティング実践①						
第 5 回	クラウドサーバーとストレージ						
第 6 回	クラウドコンピューティング実践②						
第 7 回	データベースとビジネスの歴史						
第 8 回	クラウドコンピューティング実践 DB						
第 9 回	データベース構築概論と活用事例						
第 10 回	クラウドコンピューティング実践③						
第 11 回	分散化技術概論－ブロックチェーンの基礎と活用事例－						
第 12 回	クラウドコンピューティング技術動向						
第 13 回	日本企業とクラウドコンピューティング						
第 14 回	クラウドコンピューティング実践④						
第 15 回	まとめ						
成績評価の方法	講義への参加状況を含む平常点、及び各講義後に提出する簡易レポート（50%）、及び期末レポート（50%）						
準備学修(予習・復習、課題等)	事前の予習は要求しない。 講義後は扱った内容について復習するとともに、簡易レポートに取り組むこと。						
教科書							

書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	特に設定しない。講義資料で包括できる範囲とする。
備考	課題（簡易レポート）についても講義中の実践を通して一定程度包括できる範囲にする予定であり、講義に集中して臨めば講義外学習の負荷が重くならないよう配慮する。
昨年度からの振り返り	昨年度のフィードバックを踏まえて、実践や生徒間でのディスカッションをやや増加させる予定である。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	3年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	ビッグデータ					授業形態	演習
授業コード	BDP135	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎加藤 直人、落合 慶広						
授業概要	近年、コンピュータ、センサー、機器類が生成するデータの種類、量が爆発的に増大しており、今までのデータ管理ツールでは取り扱うことが困難な規模のデータ（ビッグデータ）になっている。こうしたビッグデータに潜む解析対象（人の行動、環境、社会現象）の傾向や異種データ間の関係性を洗い出すことにより、従来では発見できなかった知見を見い出し、新たな学問領域やビジネスを開拓できる可能性がある。 本授業では、こうしたビッグデータ解析に関する基本的な知識や解析技術等を修得する。また、実践例として分散処理システム（Hadoop）やビッグデータ処理API（BigQuery）などを活用して、実際のビッグデータの処理・解析方法を演習を通して学修し、新しい知見を発見する力を養う。						
授業の目的・到達目標	本授業では、ビッグデータ解析の一連の処理～データ収集・解析、可視化、結果の解釈～における基本的なデータの取り扱い方法や解析手法・手順を理解すると共に、ビッグデータ解析特有の問題点やこれを解決する方法・技術などについても理解し、様々な分野の多種多様なデータを適切に取り扱う方法を習得する。 また、ビッグデータ解析を可能にするための解析環境を構築し、解析技術の適用方法、結果の吟味の仕方等の演習を通して習得し、これらを活用して新しい知見を発見する力を養うことを目的とする。						

授業計画	
第1回	オリエンテーション 講義の進め方など
第2回	テキストビッグデータとは 文字コード、コーパス
第3回	テキストビッグデータの解析 形態素解析
第4回	テキストビッグデータの解析 構文解析
第5回	テキストビッグデータの解析 Rによるテキスト解析
第6回	テキストビッグデータの解析 テキスト分類、重要文抽出、tfidfなど
第7回	テキストビッグデータの解析 テキストマイニングの事例紹介。データジャーナリズム、評判分析など
第8回	テキストビッグデータのまとめ
第9回	構造化ビッグデータの解析 世の中の課題と構造化ビッグデータ、データ分析環境構築
第10回	構造化ビッグデータの解析 データ入出力、基本統計量と求め方、データの可視化
第11回	構造化ビッグデータの解析

	2 変数間の特徴を捉える。相関分析など。
第 12 回	構造化ビッグデータの解析 線形回帰分析。単回帰分析、重回帰分析。
第 13 回	構造化ビッグデータの解析 主成分分析
第 14 回	構造化ビッグデータの解析 因子分析
第 15 回	ビッグデータまとめ テキストマイニング、データマイニング。
成績評価の方法	各授業において出題する下記により評価する ・理解度確認課題（70%） ・課題レポート（30%）
準備学修(予習・復習、課題等)	授業で、各種ツール類を利用する為、Linux／Windows／MacOS の取扱いに慣れていることが望ましい。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	『自然言語処理〔改訂版〕(放送大学教材)』 黒橋禎夫（著)、NHK 出版、2019 年 『自然言語処理の基礎』 奥村学（著)、コロナ社、2010 年 『統計学が最強の学問である』 西内啓（著)、ダイヤモンド社、2013 年 『教養としてのデータサイエンス』 北川源四郎 他（編著)、講談社、2021 年
備考	
昨年度からの振り返り	データによる演習を中心に、その分析の手法や意義について講義を行う。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	3 年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	IoT					授業形態	演習
授業コード	IOT135	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施しない
担当教員	◎鎌谷 修、Adrian David Cheok						
授業概要	IoT（Internet of Things）は身近なものをインターネットとつなげ、新たなサービスやシステムを生み出す仕組みを指す。IoT を通じ、新たなサービスやシステムを生み出すためには、データベース、ネットワーク、ソフトウェアなど、本学で学ぶ情報通信技術に関する様々な知識とスキルが必要となる。本科目では、ユーザアプリケーションからサーバシステムまでを対象とした IoT システムの全体アーキテクチャを理解し、演習による基本動作検証の体験を通じて、IoT に関する基本的なスキルを習得する。国際標準に準拠した IoT システムを構築するための、組込みコンピュータ、各種センサ、アクチュエータの制御手法について理解し、与えられた要求条件を満たすための、IoT システムの構築について演習を行う。						
授業の目的・到達目標	国際標準に準拠した IoT アーキテクチャ全体像の理解と、演習による実際の動作実証。 与えられた要求条件を元にした、IoT システム設計スキルの習得。 組込みコンピュータ、各種センサ、アクチュエータの制御手法の理解。 演習による実際の動作検証の手法を身に付ける。						
授業計画							
第 1 回	Overview and purpose of the class, describe to proceed with the seminar. Descriptions of IoT basic technology, and requirements for the lab. 授業の概要と目的、演習の進め方 演習で必要とされる IoT 基本技術についての説明 Watch IoT documentary						
第 2 回	What is Arduino Arduino IDE software What is a sketch and how does it work Hello world program Blinking LED project Watch IoT documentary						
第 3 回	Eight LED flowing light project PWM control LED project Switch project Watch IoT documentary						
第 4 回	Buzzer project Potentiometer project Serial monitor project Watch IoT documentary						
第 5 回	Photoresistor project I2C LCD1602 project RGB LED project Watch IoT documentary						
第 6 回	One Digit 7-Segment LED display project 4 Digit 7 Segment LED display project						

	Watch IoT documentary
第 7 回	TMP36 project SW-520D Tilt sensor project Watch IoT documentary
第 8 回	74HC595 project 74HC595 with one digit 7-segment LED display project Watch IoT documentary
第 9 回	Digital dice project Traffic light controller project Watch IoT documentary
第 10 回	IR remote control project Watch IoT documentary
第 11 回	Stepper motor project Stepper speed control Watch IoT documentary
第 12 回	Watch IoT documentary
第 13 回	Finishing of project. Preparation for the presentation. プロジェクト計画における IoT システム基本動作検証結果の取りまとめ 発表会に向けた準備
第 14 回	Finishing of project. Preparation for the presentation. プロジェクト計画における IoT システム基本動作検証結果の取りまとめ 発表会に向けた準備
第 15 回	Presentation on the results of the project. プロジェクト計画結果についての発表会 Class individual presentation of student project software and hardware and answer any questions
成績評価の方法	Project (software and hardware doing in class and final presentation) 100%
準備学修(予習・復習、課題等)	Project (software and hardware doing in class and final presentation) 100%

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	『Arduino Cookbook 3rd Edition』 Michael Margolis (著)、Brian Jepson (著)、Nicholas Robert Weldin (著)、 O'Reilly Media、2020 年、ISBN9781491903520
備考	
昨年度からの振り返り	Thank you for your feedback. Some students found the projects difficult so we will make the projects a little bit easier and have more work in pairs together.

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	4 年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	スーパーコンピュータ					授業形態	演習
授業コード	SCP135	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施しない
担当教員	堀田 耕一郎						
授業概要	スーパーコンピュータシステムの構成（アーキテクチャ）と活用についての二つの課題について考える。スーパーコンピュータは主として科学技術計算用途に活用される、高速計算が可能なコンピュータであり、「同時代のコンピュータに比べてはるかに高速」なコンピュータというあいまいな定義が与えられている。実現に当たっては計算を並列に実行することで高性能を引き出すアーキテクチャが一般的である。第一の課題はこの並列演算の方式である。ただし、単に高速計算ができても、実際に、人の生活に貢献できる用途が与えられなければ無益である。第二の課題はスーパーコンピュータを活用するプログラム開発の手法となる。						
授業の目的・到達目標	スーパーコンピュータは通常のコンピュータと比べて、使いこなしてハードウェアの持つ能力を十分に引き出すことが難しい。スーパーコンピュータの構成を理解することによって、スーパーコンピュータと通常のコンピュータを比較し、スーパーコンピュータの特徴的な構成を理解することによって、ハードウェアの持つ能力を十分に引き出すための知識を獲得する。						
授業計画							
第 1 回	スーパーコンピュータの定義と歴史						
第 2 回	コンピュータアーキテクチャと計算速度						
第 3 回	ベクトル処理と並列処理						
第 4 回	スーパーコンピュータのシステム構成						
第 5 回	並列処理アーキテクチャ						
第 6 回	スーパーコンピュータの通信機能とインターコネクト						
第 7 回	スーパーコンピュータの活用（1）プログラミング手法						
第 8 回	スーパーコンピュータの活用（2）並列プログラミング						
第 9 回	スーパーコンピュータの活用（3）並列プログラミング言語						
第 10 回	スーパーコンピュータの活用（4）プログラムのチューニング						
第 11 回	性能評価の方法						
第 12 回	性能向上の壁（1）スケーリング、消費電力						
第 13 回	性能向上の壁（2）信頼性の壁						
第 14 回	性能向上の壁（3）プログラミングの壁						
第 15 回	さらなる進歩						
成績評価の方法	期末の成果物とその評価 50% 各回の課題の提出状況とその内容の評価、講義への貢献 50%						
準備学修（予習・復習、課題等）	講義毎に復習中心の簡単な課題を提示するので、次の講義までに回答を用意すること。その内容を、次の講義内での議論のきっかけとする。（各回 60 分程度）						
教科書							

書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	必要な資料を適宜配布する。 参考文献： 『スーパーコンピュータ（岩波講座 計算科学 別巻)』 小柳義夫（編著)、中村宏（著)、佐藤三久（著)、松岡聡（著)、宇川彰（編)、岩波書店、2012 年 その他講義中に提示する。
備考	
昨年度からの振り返り	昨年度は未開講のため該当なし。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	4年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	AI					授業形態	演習
授業コード	AIT135	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施しない
担当教員	◎Adrian David Cheok、落合 慶広						
授業概要	人工知能で良く用いられるニューラルネット（脳のモデル）の基本的特徴を理解し、産業応用するための実用化技術の取得、及び、応用力を養うことを目的とする。各応用分野で良く利用されるニューラルネットの構造や学習機能等の基本的特徴を理解すると共に、産業応用時の問題点、及び、これを解決するために欠かせない実用化技術の知識を修得する。また、実課題への応用力を養う為に、大手ITベンダー等が公開している人工知能関連の各種のAPI、ツール等を活用して、簡単な実課題を解くためのアプリケーションを制作する演習を実施する。演習では、産業課題の捉え方から、実課題における検証方法まで、幅広い観点からの応用力を養う。						
授業の目的・到達目標	本授業では、各種ニューラルネットの基本的な機能、特徴を理解すると共に、特に、産業応用するための実用化技術の習得、及び、応用力を養うことを目標としている。 人工知能の産業応用で良く使われるニューラルネットのモデル構造・学習方法等の基本的特徴を理解すると共に、産業応用する際に必要となる実用化技術（学習の加速化、汎化技術等）を理解する。また、ニューラルネットを実課題に応用する力を養う為、大手ITベンダー等が公開している各種機械学習ツールの使い方を習得し、これを用いて簡易な産業課題に応用する演習を実施する。演習では、産業課題の捉え方、解決方針の立案、学習データの選定、実課題での検証方法等、幅広い観点からの応用力を養う。						
授業計画							
第1回	AIガイダンス 人工知能研究の盛衰と近年の産業活用について ～大脳の機能とニューラルネットで実現できる機能の比較なども交えて～						
第2回	機械学習モデルの種類、特徴とその応用事例						
第3回	ニューラルネットの学習法と加速化法 誤差逆伝搬法の原理と非線形最適化法の観点から加速化法を解説する						
第4回	ニューラルネットを用いた学習課題、及び、過学習と汎化技法						
第5回	深層ニューラルネットと深層学習 ～深層学習における加速化、汎化技法なども交えて～						
第6回	画像認識モデル 畳み込みニューラルネットと画像認識への応用						
第7回	物体検出モデル ～注意機構、transformerなどの最新の動向も含めて解説～						
第8回	強化学習 確率的推論に基づくエージェントモデルとロボティクスへの応用						
第9回	Introduction to Generative AI and Chat GPT API Overview of generative AI and its applications Introduction to the Chat GPT API and its capabilities Discussion of potential ethical considerations when working with generative AI ---------- Generative AIとChat GPT APIの概要						

	ジェネレーティブ AI とそのアプリケーションの概要 Chat GPT API とその機能の概要 ジェネレーティブ AI を使用する際の潜在的な倫理的考慮事項についての議論
第 10 回	Natural Language Processing and Preprocessing Introduction to natural language processing and its importance in generative AI Overview of the preprocessing steps required to use the Chat GPT API, including tokenization and text cleaning Practical demonstration of preprocessing with sample data ---------- 自然言語処理と前処理 自然言語処理の概要と生成 AI におけるその重要性 トークン化やテキストクリーニングなど、Chat GPT API を使用するために必要な前処理手順の概要 サンプルデータを使用した前処理の実際のデモンストレーション
第 11 回	Fine-Tuning the Chat GPT Model Overview of fine-tuning a pre-trained model with custom data Explanation of the steps involved in fine-tuning the Chat GPT model Practical demonstration of fine-tuning the model with sample data ---------- Chat GPT モデルの微調整 カスタムデータを使用した事前トレーニング済みモデルの微調整の概要 Chat GPT モデルの微調整に含まれる手順の説明 サンプルデータを使用したモデルの微調整の実践的なデモンストレーション
第 12 回	Text Generation with Chat GPT Introduction to text generation with the Chat GPT model Explanation of various techniques for generating text, including sampling and beam search Practical demonstration of text generation with the Chat GPT API ---------- Chat GPT によるテキスト生成 Chat GPT モデルを使用したテキスト生成の概要 サンプリングやビームサーチなど、テキストを生成するためのさまざまな手法の説明 Chat GPT API を使用したテキスト生成の実践的なデモンストレーション
第 13 回	Evaluating and Optimizing Chat GPT Overview of techniques for evaluating the performance of a generative AI model Introduction to metrics such as perplexity and BLEU score Discussion of strategies for optimizing the Chat GPT model for better performance ---------- Chat GPT の評価と最適化 ジェネレーティブ AI モデルのパフォーマンスを評価する手法の概要 perplexity や BLEU スコアなどの指標の概要 パフォーマンスを向上させるために Chat GPT モデルを最適化するための戦略についてのディスカッション
第 14 回	Applications of Generative AI with Chat GPT Discussion of various applications of generative AI, including chatbots, language translation, and content creation

	Practical demonstration of using the Chat GPT API for a specific application, such as creating a chatbot or generating product descriptions ---------- Chat GPT を使用したジェネレーティブ AI のアプリケーション チャットボット、言語翻訳、コンテンツ作成など、ジェネレーティブ AI のさまざまなアプリケーションに関するディスカッション チャットボットの作成や製品説明の生成など、特定のアプリケーションに Chat GPT API を使用する実践的なデモンストレーション
第 15 回	Ethical Considerations and Future Developments Discussion of potential ethical concerns related to generative AI, such as bias and misuse Overview of current research and future developments in generative AI Practical exercise in developing a generative AI project with a focus on ethical considerations ---------- 倫理的配慮と今後の展開 バイアスや誤用など、ジェネレーティブ AI に関連する潜在的な倫理的懸念についての議論 ジェネレーティブ AI の現在の研究と将来の開発の概要 倫理的な考慮事項に焦点を当てたジェネレーティブ AI プロジェクトの開発における実践的な演習
成績評価の方法	各演習での取り組み（60%）、及び、考察やレポート（40%）で成績を評価する。
準備学修（予習・復習、課題等）	各テーマごとの資料を事前配布する為、授業前に事前に読んでおくこと（20～30 分）。

教科書

書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	『深層学習 Deep Learning』 麻生英樹（著）、安田宗樹（著）、前田新一（著）、岡野原大輔（著）、岡谷貴之（著）、久保陽太郎（著）、ボレガラ・ダヌシカ（著）、人工知能学会（監修）、神嶌敏弘（編集）、近代科学社、2015 年 『機械学習のための連続最適化』 金森敬文（著）、鈴木大慈（著）、竹内一郎（著）、佐藤一誠（著）、講談社、2016 年 『これなら分かる最適化数学』 金谷健一（著）、共立出版、2005 年
備考	
昨年度からの振り返り	昨年度は未開講のため該当なし。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	2年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	ネットワーク構築Ⅰ					授業形態	演習
授業コード	DN1133	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	山内 正人						
授業概要	小規模なネットワークにおけるネットワーク機器の構成や技術、動作などの概要について演習形式で実践的に学ぶ。OSI参照モデルにおける物理層、データリンク層、ネットワーク層、トランスポート層、アプリケーション層の役割やプロトコルについて理解し、IPネットワークの基礎的な構築を行う。ネットワーク層ではIPv4におけるアドレス計画について学び、小規模なネットワークにおいてアドレス計画を実践する。IPネットワークのサブネット化を学ぶことで IP ネットワーク分割の概念を理解するとともに、サブネットマスクを用いたアドレス計画への対応についても学ぶ。また実際に構築したネットワークはネットワーク管理ツールなどを用いてテストし接続性に問題ないことを確認する。						
授業の目的・到達目標	小規模なネットワークを構築する技術や概念について理解し、ネットワーク機器の基本設定が出来ることを目的とする。小規模なネットワークで用いられるネットワーク機器について理解し説明できる、各ネットワーク機器の働きや動作について理解し、説明できる、小規模なネットワークにおいて正しく疎通していることを確認できる事を目標とする。						
授業計画							
第 1回	ネットワーク構築の基礎(ネットワーク構築する上での環境整備及び基本用語について学ぶ)						
第 2回	ローカルネットワーク(ネットワーク管理ツールなどを用いてローカルネットワークを知る)						
第 3回	ローカルネットワークへの接続（ネットワークの種類やネットワークコンポーネントなどについて学ぶ)						
第 4回	通信媒体と設計（ネットワークに使われる通信媒体とその特性について説明し、適切な媒体の選択方法について学ぶ)						
第 5回	中間復習（これまでの内容に関する復習を行う）						
第 6回	通信の原理（ネットワークを機能させるための通信規格や通信の仕組みについて学ぶ)						
第 7回	イーサネットネットワークの仕組み(通信における階層型モデルや階層型設計について学ぶ)						
第 8回	ネットワークの構築方法（ネットワークの適切な設計やアクセスレイヤの構築などについて学ぶ)						
第 9回	ネットワーク間のルーティング（経路制御表やLANの作成について実践的に学ぶ)						
第10回	IPv4アドレス（IPv4アドレスの目的や構造について学ぶ)						
第11回	サブネットマスク（IPv4アドレスの要素とサブネットマスクとの関係について学ぶ)						
第12回	IPv4アドレスの取得方法（アドレスの割り当てとDHCPについて学ぶ)						
第13回	IPv4アドレス管理（ネットワークの境界とアドレス空間などについて学ぶ)						
第14回	IPv6でのアドレス指定（IPv4アドレスとIPv6アドレスの違いなどについて学ぶ)						
第15回	まとめ						
成績評価の方法	課題やクイズ100%						
準備学修(予習・復習、	授業における資料や教材を用いて予習・復習を行う。 また演習課題については授業外の時間も活用し課題を完了させること。						

課題等)	（あわせて各回 30～60 分程度）				
教科書					
書名	著者	出版社	ISBN	備考	
指定なし					
参考書	Cisco Networking Academy				
備考	「ネットワーク技術」の単位を修得済みまたは同等の知識、スキルを要していること				
昨年度からの振り返り	教材の更新				

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	2年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	情報セキュリティ演習Ⅰ					授業形態	演習
授業コード	PS1133	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施しない
担当教員	平山 敏弘						
授業概要	ICT 利用なしの世界が考えられない現在、万一企業において情報流失などの事件が発生した場合での金銭的な損失や企業イメージの低下など、計り知れない損害を被ることになる。本授業では前半にSNS利用の際の注意点などを理解することで、社会人に必要なセキュリティリテラシーを学ぶ。中盤以降では、インターネットの成り立ちを学んだ後、Web システムを中心としたコンピュータシステムの各構成要素の概要と各構成要素において注意すべきセキュリティ事項について事例を交えながら学び、情報セキュリティ全般に対する学習を行う。最後の総まとめでは授業全般を振り返り、情報セキュリティに関する知識とスキルの定着を図る。						
授業の目的・到達目標	ICT に大きく依存している現代社会において、情報漏えい事件やインターネット上での詐欺事件などが後を絶たない。これはICTが取り扱う情報の価値が年々高まってきていることが背景にある。将来 ICT を職業とする人はもちろんのこと、ICT 業界以外に進む人にとってもICT を使用せずに暮らすことがほとんど不可能な状況の中、情報の取り扱い方やその危険性について理解しておくことが、今後益々必要になってくる。 本授業では、ICT における情報とは何であり、情報セキュリティの事件や事故が自分自身を含む社会全体に対して、多大な影響を与える可能性があることを、事例などを通じて理解することを目標とする。加えて情報セキュリティにおける攻撃方法とその対策についての概要を理解し、今後社会人として情報セキュリティに対して何をすべきかについて、自身で対策できる対処方法を理解し、実行できることを目標とする。						
授業計画							
第 1回	(1) 情報におけるリスクとは 現代における情報とは何であり、その情報がなぜ価値あるものに変化したのかについて学びます。 加えて、ITにおける情報がどのような危機に瀕しているのかを学ぶことで、情報セキュリティの重要性を理解します。						
第 2回	(2) インターネット概説＆Webシステム概要 インターネット誕生の背景を学び、なぜインターネットが社会に広まったのかについて学びます。またWebシステムがどのような構成で構築されているかについて理解します。						
第 3回	(3) ネットワーク基礎技術 サイバーセキュリティを理解する前提知識となるインターネットや TCP/IP プロトコルの概要を理解します。またIPアドレスを使用してデータがどのように相手に届き、通信が行われるのかについて学びます。						
第 4回	(4) ネットワークリスク ネットワークに潜んでいる脅威やリスクについて理解し、ネットワーク基礎技術で学んだネットワークの仕組みを利用して、どのようにセキュリティインシデントが発生するのかについて学びます。						
第 5回	(5) Webサーバーシステムリスク Webシステムにおいて、WebサーバーおよびDBサーバーなどWebシステムを構成するコンポーネントにおけるリスクを理解すると共に、その対策例について学びます。						

第 6 回	（6）Web アプリケーションへの脅威 Web アプリケーションの仕組みを学ぶと共に、どのようなセキュリティ脅威があるのかを理解し、Security by Design など Web アプリケーション作成時における、設計段階からのセキュリティを考慮する重要性について学びます。
第 7 回	（7）映画に学ぶ情報セキュリティ基礎技術 情報セキュリティがテーマの映画を鑑賞し、その中で使用されているサイバー攻撃手法について、第 6 回までの講義で学んだ知識を利用して見つけ出すことで、セキュリティスキルの整理と定着を図ります。
第 8 回	（8）サイバーセキュリティ対策基礎技術まとめ Web システムを構成する各コンポーネントの役割とそこに潜む脅威やリスクについてのまとめを行い、各回の講義で学んだ内容を総合的に理解します。
第 9 回	（9）オペレーティングシステムおけるセキュリティ オペレーティングシステムにおけるセキュリティリスクを理解し、その対策を学びます。
第 10 回	（10）認証とアクセス制御 認証技術とアクセス制御方法について理解し、データ保護の重要性とその対策方法を学びます。 また暗号化の基本技術については、簡易的なデータ暗号化および復号化を体験することで理解を深めます。
第 11 回	（11）クラウドセキュリティ クラウドコンピューティングの概要、およびクラウド環境におけるセキュリティ／プライバシーの脅威と対策について学びます。
第 12 回	（12）新たな働き方に潜むセキュリティの脅威と事業継続におけるセキュリティの在り方 攻撃者のターゲットが個人へ移行している現状を理解することと、自然災害などと同様にセキュリティにおいても事業継続の考え方が必要なことを理解します。
第 13 回	（13）スマートデバイスにおけるセキュリティの脅威と防御策 スマートデバイスや SNS の標準設定は、世界基準で考えられているため、使用者自身が設定内容を理解していないことで、予期せぬ自身の情報公開をしているケースがあり、その結果情報漏えい事件に発展している場合もあります。そのような危険に巻き込まれないため、サイバーセキュリティ脅威の理解と防御策を学びます。
第 14 回	（14）自分の身の回りに潜むセキュリティ 大学を狙ったサイバー攻撃事例などをもとに、身近にある情報漏えいの危険性を理解すると共に、企業・組織としてのリスクを学ぶことにより、企業における情報漏えい対策を学びます。
第 15 回	（15）情報セキュリティ基礎総括 今日の社会で求められているプラス・セキュリティ人材とは、どのような人材であるのかを知ることにより、全 15 回講義で学んだことが、どのような分野に進んだとしても受講者自身が実践の場で活用出来る内容であることを理解し、講義終了後もセキュリティ意識が必要であることを理解します。
成績評価の方法	（1）試験・テストについて 定期試験を実施します。 （2）試験以外の評価方法 講義時に提出する授業内容確認小レポートによる評価をします。 （3）成績の配分・評価基準等 定期試験の評価に加え、毎回の授業時に提出する小レポートおよび確認テストを下記の割合で評価します。

	（定期試験 70%、授業内での提出物 30%（小レポート 15%、確認テスト 15%））
準備学修 （予習・復習、課題等）	（予習） 次回講義内容について、インターネットなどを利用して、具体的なセキュリティインシデント（事件・事故）事例などを調査しておくこと。また自身や自分の周りでの身近な事例があるかについても調べておくこと。（標準学習時間：1 時間） （復習） 毎回講義の最後に確認テストを実施するので、その正解と理由について学んだ講義内容を復習して、確認しておくこと。答え合わせは、翌週講義の最初に実施する。（標準学習時間：1 時間）

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	『情報セキュリティ白書 2022』 独立行政法人情報処理推進機構（IPA）、2022 年、ISBN978-4-905318-77-4 『CISO ハンドブック』 日本ネットワークセキュリティ協会、技術評論社、2021 年、ISBN978-4-297-11835-8 『サイバーセキュリティ 2020 脅威の近未来予測』 日本ネットワークセキュリティ協会未来予測プロジェクト、インプレス R&D、2015 年
備考	
昨年度からの振り返り	もっと手を動かしたりしたり、グループワークをしたいとのコメントがありました。当講義は知識習得の座学中心のため本格的なグループワーク導入は難しいですが、履修生からアウトプットできる工夫を前年以上に取り込みたいと思います。 当講義のレベルは、セキュリティリテラシー＋α のプラス・セキュリティ人材向けのレベルを継続していきます。さらにアドバンスの学習をしたい方は、3 年生前期に開講する「情報セキュリティ演習Ⅱ」の履修も是非検討ください。 動画があるのでわかりやすかったや、コンピテンシーやコミュニケーションに関する内容が興味深く、また役立ったなどの声もありましたので、その点については継続していきます。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	2年	学期	後期	科目分類	職業専門科目
授業名	ネットワーク構築Ⅱ					授業形態	演習
授業コード	DN2133	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	山内 正人						
授業概要	小規模なネットワークにおけるルーティングプロトコルやネットワークサービス、トラブルシューティングについて演習形式で実践的に学ぶ。ルーティングプロトコルの動作について理解し、IPv4及びIPv6での設定を行うことでIPv4とIPv6の共通点及び相違点について学ぶ。またルーティングプロトコル以外にもIPv4アドレスの自動設定方法としてDHCPの設定を行い、IPv6アドレスの自動設定方法のStateless Address Auto Configuration (SLAAC) や DHCPv6 との仕組みの違いなどについて考察する。またトラブルシューティングの方法について学ぶことで問題の切り分けを行い、ネットワーク管理者へ問題や挙動について正しく説明することが出来るようになる。						
授業の目的・到達目標	ネットワーク機器を設定し、小規模なネットワーク構築が出来るスキル習得を目的とする。小規模なネットワークで用いられるネットワーク機器について理解し説明できる、ネットワーク機器の働きや動作について理解し、説明できる、小規模なネットワークにおいて正しく疎通していることを確認できる事を目標とする。						
授業計画							
第1回	クライアントとサーバ（ネットワークを構築するための環境構築及びクライアントとサーバの関係について学ぶ）						
第2回	TCP/IP（TCP/IPプロトコルスイートについて学ぶ）						
第3回	アプリケーションプロトコルとサービス（Web、FTP、Telnet、電子メールなどのアプリケーションプロトコルについて学ぶ）						
第4回	ホームネットワークの基礎(ホームネットワークで使われるネットワーク技術について学ぶ)						
第5回	復習						
第6回	ホームネットワークの適切な設定（SSIDなどの適切な設定について学ぶ）						
第7回	ホームネットワークにおけるセキュリティ（ホームネットワークにおける脅威と対策について学ぶ）						
第8回	周辺機器との接続（周辺機器と接続するための近距離無線通信について学ぶ）						
第9回	ネットワークセキュリティ1（攻撃者とマルウェアについて学ぶ）						
第10回	ネットワークセキュリティ 2（攻撃の方法とそれに対するセキュリティツール等を使用してネットワークを保護する方法について学ぶ）						
第11回	ネットワークセキュリティ 3（ファイアウォールなどを使用してネットワークを保護する方法について学ぶ）						
第12回	セキュリティの基本的な考え方について学ぶ						
第13回	セキュリティインシデントを擬似体験し、インシデントレスポンスについて学ぶ						
第14回	ルータOSについて学ぶ						
第15回	まとめ						
成績評価の方法	課題やクイズ100%						

準備学修 (予習・復習、 課題等)	授業における資料や教材を用いて予習・復習を行う。 また演習課題については授業外の時間も活用し課題を完了させること。 （あわせて各回 30～60 分程度）

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	Cisco Networking Academy
備考	「ネットワーク技術」、「ネットワーク構築Ｉ」の単位を修得済みまたは同等の知識、スキルを要していること
昨年度からの振り返り	教材の更新

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	3年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	情報セキュリティ演習Ⅱ					授業形態	演習
授業コード	PS2133	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	平山 敏弘						
授業概要	情報セキュリティマネジメントの視点より、企業で準備しなければならないセキュリティポリシーを学び、ビジネスにおける情報の価値を理解することにより、情報におけるリスクとは何かを考える。中盤以降では、学生では経験することが難しいリスク管理やセキュリティの運用・手法について、グローバル標準であるサイバーセキュリティフレームワーク（CSF）などを参考に、セキュリティインシデント発生時の役割や防御・復旧方法などを学ぶ。また独立行政法人情報処理推進機構（IPA）から毎年発表される「情報セキュリティ10大脅威」など最新セキュリティ状況を交えることでより理解を深める。						
授業の目的・到達目標	情報セキュリティ分野は知識を学んだだけでは、その身に付けた能力を活かす事ができません。また近年セキュリティ人材が10数万人不足と叫ばれているが、セキュリティ人材といってもその役割は様々であり、一括りで扱うことはできない。 当授業では、学生では学ぶことが難しいセキュリティインシデント発生時の対応をケーススタディ形式での演習を通じて学ぶことにより、セキュリティに携わる仕事の種類や役割を理解すると共に、セキュリティマネジメントやセキュリティ運用についての理解も深めることを目標とする。						
授業計画							
第1回	（1）身の回りにある危険と個人レベルでのリスク管理 一般人においてもセキュリティを考慮しなければならない時代である点を理解するため、個人レベルでのリスクとは何かを学びます。						
第2回	（2）身近なインシデント事例 身近なインシデント事例や情報セキュリティ 10 大脅威を学んだ後、インシデント事例調査の演習を行います。						
第3回	（3）身近なインシデント事例の発表 第2回で調査したインシデント事例についての発表を行います。						
第4回	（4）セキュリティ運用体制とセキュリティインシデント初動対応演習 セキュリティ運用についてCSIRT（Computer Security Incident Response Team）とは何であり、そのチーム内でのそれぞれの役割について理解します。 運用体制について理解した後、自分のPCがウィルス感染し、いきなりマルウェアに「感染しました」とのポップアップ画面が表示された時を想定した演習を実施して理解を深めます。						
第5回	（5）身近なインシデントを分類 第2回および第3回の演習で調査した身近なインシデント事例を攻撃毎に分類する演習を実施します。						
第6回	（6）通販サイトの問題点と改善策 ケーススタディを通して、通販サイトで発生したセキュリティインシデントの問題点と改善策を考える演習を行います。						
第7回	（7）非機能要件とセキュリティ（当通販サイトで検討すべき非機能要件演習） 機能要件と非機能要件の概要を学び、非機能要件の中で検討すべきセキュリティ項目について学びます。 ケーススタディである通販サイトにおいて、検討すべき非機能要件の検討を行う演習を行い						

	ます。
第 8 回	（8）セキュリティマネジメント基礎 企業活動を行なう上で、個人情報などの秘密性の高いデータを取り扱うことが必須となり、そのようなデータ取り扱い時のセキュリティ対策や方針をセキュリティポリシーとして取りまとめます。セキュリティポリシーとはどのようなものかなど、セキュリティマネジメントの基礎を学びます。
第 9 回	（9）サイバーキルチェーンとは 近年、サイバー攻撃は段階を踏んで行われるようになっています。この攻撃を構造化したものが「サイバーキルチェーン」であり、標的型攻撃の一連の行動を軍事行動に似せてモデル化されたものですが、事例を通じてサイバーキルチェーンの理解を深めます。
第 10 回	（10）セキュリティ運用と通販サイトでの封じ込め対応演習 グローバル標準である CSF（サイバーセキュリティフレームワーク）や JPCERT/CC インシデントハンドリングマニュアルなどを参考に、セキュリティインシデント発生時の役割や防御・復旧方法の基礎を学びます。 その後、サイバーキルチェーンの考え方に基づき、ケーススタディの通販サイトにおける封じ込め対応について、リアル感を持った机上演習を実施します。
第 11 回	（11）封じ込め対策の経営層への報告演習 演習で検討した封じ込め対策について、経営層を意識した模擬報告の発表（演習）を行ないます。
第 12 回	（12）多層防御とスイスチーズモデル 事故モデルとして提唱された「スイスチーズモデル」は、事故は単独で発生するのではなく複数の事象が連鎖して発生するとしたものですが、情報リスク管理の多層防御の考え方にも通じるものです。スイスチーズモデルと多層防御とは何かを学び、ケーススタディの通販サイトにおける多層防御対策を検討する演習を行います。
第 13 回	（13）再発防止策検討結果の発表 演習で検討した多層防御の視点からの再発防止対策について、経営層を意識した模擬報告の発表（演習）を行ないます。
第 14 回	（14）情報漏えい被害額の算定 漏えいした個人情報について、1 人当たりの損害賠償額は、500 円ではありません。今回情報漏えいしてしまったケーススタディ企業での、想定される損失額を算出する演習を行い、情報漏えいが企業経営へ大きな影響を与えることを理解します。
第 15 回	（15）まとめ 演習を通じての気づきや学びについて、履修生各人から発表すると共に、第一線での経験がある教員が発表に対して補足説明を行なうことで、学生では学ぶことが難しいセキュリティマネジメントやセキュリティインシデントハンドリングについての理解を深めます。
成績評価の方法	（1）試験・テストについて ・定期試験に準ずる最終レポートを提出していただきます。 （2）最終レポート以外の評価方法 ・講義時に提出する演習資料と発表評価 ・授業時の貢献度（毎回の講義時に提出する小レポートなどにより判断） （3）成績の配分・評価基準等 最終レポートの評価に加え、授業時作成資料・発表内容および授業への貢献度を総合的に判断して評価します。 （最終レポート 50%、授業内での演習および作成成果物 20%、授業への貢献度 30%）
準備学修	演習成果を発表することが含まれる講義のため、チームおよび個人での演習資料作成など、

（予習・復習、課題等）	約 2 時間程度の講義時間以外の予習復習が必要。 復習） 講義内で実施した演習について、講義時間内で終了しない内容の継続検討および、演習結果資料のまとめを行なっておくこと。（標準学習時間：1 時間） 予習） 次回講義にプレゼンテーション実施できるため発表資料の準備。または、次回講義の際における講義内で使用される言葉の内容などを調べておくなどの事前調査を行なっておくこと。（標準学習時間：1 時間）

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	必要な資料については、講義時に配布する資料を使用する。 参考文献： 『CSIRT：構築から運用まで』 日本シーサート協議会（著）、NTT 出版、2016 年 『すべてわかるセキュリティ大全 2018』 ITpro（編）、日経コンピュータ(編)、日経 BP、2017 年
備考	
昨年度からの振り返り	机上演習（TTX：Table Top Exercise）中心の講義であり、サイバー攻撃や情報漏えい事件での被害額想定など、セキュリティ専門家を目指す人はもちろんのこと、経営視点でのセキュリティを考えたり、マネジメント面での対応など、プラス・セキュリティ人材向けとしても、学んでもらいたい講義内容になります。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	3 年	学期	前期	科目分類	職業専門科目
授業名	ネットワーク構築Ⅲ					授業形態	演習
授業コード	DN3133	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	山内 正人						
授業概要	小規模なネットワークにおけるスイッチドネットワーク、仮想的な LAN セグメント、ネットワークの冗長化及びトラブルシューティングについて演習形式で実践的に学ぶ。ネットワーク機器であるスイッチの動作について理解し、LAN 環境での冗長性、リンク集約、トラブルシューティングの方法について学ぶことで問題の切り分けを行うことが出来るようになる。具体的には仮想的な LAN セグメント（VLAN）の概念やその設定、VLAN 間ルーティング及びスパニングツリープロトコル、ファストホップ冗長プロトコル、ゲートウェイロードバランシングプロトコル、リンクアグリゲーションの概要とその設定方法、トラブルシューティング方法について学ぶ。						
授業の目的・到達目標	ネットワーク機器を設定し、ネットワーク構築及びネットワークの冗長化が出来るスキル習得を目的とする。ネットワーク機器について理解し説明できる、ネットワーク機器の動作について理解し、説明できる、信頼のおけるネットワークを構築し疎通していることを確認できる事を目標とする。						
授業計画							
第 1 回	ルータの構成と起動について学ぶ						
第 2 回	ルータ OS のナビゲート						
第 3 回	ルータ OS の基本設定 1（show コマンドなどの基本操作について学ぶ）						
第 4 回	ルータ OS の基本設定 2（各種設定コマンドなどの基本操作について学ぶ）						
第 5 回	スイッチとルータを使用したネットワーク構築						
第 6 回	トラブルシューティングの基本について学ぶ						
第 7 回	トラブルシューティングの実践 1（トラブルシューティングに使用するツールについて学ぶ）						
第 8 回	トラブルシューティングの実践 2（名前解決に関するトラブル）						
第 9 回	トラブルシューティングの実践 3（Wi-Fi に関するトラブル）						
第 10 回	トラブルシューティングの実践 4（トラブル解決に向けたヒアリング）						
第 11 回	これまでの内容を復習する						
第 12 回	ネットワークの構築実践 1（実践的なネットワークの構築に必要な知識について学ぶ）						
第 13 回	ネットワークの構築実践 2（実践的なネットワークの構築を行う）						
第 14 回	ネットワークの構築実践 3（実践的なネットワークの構築を行う）						
第 15 回	ネットワークの構築実践 4（実践的なネットワークの構築を行う）						
成績評価の方法	課題やクイズ 100%						
準備学修（予習・復習、課題等）	授業における資料や教材を用いて予習・復習を行う。 また演習課題については授業外の時間も活用し課題を完了させること。 （あわせて各回 30-60 分程度）						
教科書							

書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	Cisco Networking Academy
備考	「ネットワーク技術」、「ネットワーク構築Ⅰ」、「ネットワーク構築Ⅱ」の単位を修得済みまたは同等の知識、スキルを要していること
昨年度からの振り返り	機材の拡充

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	1年	学期	前期	科目分類	展開科目
授業名	ビジネス英語実習Ⅰ					授業形態	実習
授業コード	PE1141	単位数	2単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎阿部川 久広、Hug Jose、柿崎 理、栗田 昭宏、平野 麻紀子						
授業概要	ビジネスとICTを用いて、世界に変革を起こしていくためには、さまざまな国の人々と協同することが重要である。様々な価値観や文化的背景の異なる人々と協働するために多様性の受容、コミュニケーションやプレゼンテーションなどを共通言語となる英語で行う必要がある。 ビジネス英語実習Ⅰでは、ビジネスの基本となる挨拶やマナー、簡単な電話やメール等でのやり取り、会議や出張の手配など、初歩的なビジネス英語での会話力、表現力を習得する。本授業終了時には、英語を用いて、簡単なビジネス応対や観光案内、機器の操作説明ができるようになることを目標とする。						
授業の目的・到達目標	・テーマに沿った内容を英語で理解し、表現する。 ・授業を通じ、グローバルでのコミュニケーションに必要な技術や知識を習得する。						
授業計画							
第1回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4]＋自己紹介と演習 ・[ドラッカー] Daily Drucker Feb 11 (1) Management ・Steve Jobsスピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習						
第2回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4]＋自己紹介と演習 ・[ドラッカー] Daily Drucker Feb 11 (2) Management ・Steve Jobsスピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習						
第3回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4]＋自己紹介と演習 ・[ドラッカー] Daily Drucker March 12 (1) Business Purpose ・Steve Jobsスピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習						
第4回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4]＋自己紹介と演習 ・[ドラッカー] Daily Drucker March 12 (2) Business Purpose ・Steve Jobsスピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習						
第5回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4]＋自己紹介と演習 ・[ドラッカー] Daily Drucker February 27 (1) What is our business ・Steve Jobsスピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習						
第6回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4]＋自己紹介と演習 ・[ドラッカー] Daily Drucker February 27 (2) What is our business ・Steve Jobsスピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習						
第7回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker March 17 (1) Profit ・Steve Jobsスピーチ&プレゼンテーション						

	・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 8 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker March 17 (2) Profit ・Steve Jobs スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 9 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker February 28 (1) Customer ・Steve Jobs スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 10 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker February 28 (2) Customer ・Steve Jobs スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 11 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker March 1 (1) Leader ・Steve Jobs スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 12 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker March 1 (2) Leader ・Steve Jobs スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 13 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker March 6 (1) Risk ・Steve Jobs スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 14 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker March 6 (2) Risk ・Steve Jobs スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 15 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker April 5 (1) Leader ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 16 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker April 5 (2) Leader ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 17 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker June 1 (1) Manage oneself ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 18 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker June 1 (2) Manage Oneself ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習

第 19 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker June 26 (1) Enjoy working ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 20 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker June 26 (2) Enjoy Working ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 21 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker September 11 (1) Results ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 22 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker September 11 (2) Results ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 23 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker September 1 (1) Know Thy Time ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 24 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker September 1 (2) Know Thy Time ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 25 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker October 3 (1) Decision Making ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 26 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker October 3 (2) Decision Making ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 27 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker September 29 (1) Stone cutter ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 28 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker September 29 (2) Stone Cutter ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 29 回	まとめと振り返り 総合演習
第 30 回	まとめと振り返り 総合演習
成績評価	Attitude：

の方法	授業へ積極的に参加しているか、思考し発言しているか、理解しようと努めているか（15%） Contribution： 授業に貢献しているか、グループ内で発言しているか、議論に参加しリードし議論内容を進化させようとしているか（15%） Willingness： 積極的に参加しようと努めているか、グループの議論を助けようとしているか、何かを得ようとやる気を出しているか（10%） Assignment： 授業中のタスク、授業中のプレゼンテーション、授業中の発言、授業後の提出物など、課されているものをしっかり理解し、対応しようとしているか（60%）
準備学修（予習・復習、課題等）	各回ごとに設定されるテーマをもとに、表現や内容の準備と振り返りを行う。配布された資料の単語などを辞書で調べておくとよい。フィールドワークに向けて地域の事柄を説明できるようになる。（各回 30～60 分）

教科書

書名	著者	出版社	ISBN	備考
公式 TOEIC Listening & Reading 問題集 8	ETS	IIBC	978-4906033638	
The Daily Druker	Peter F. Drucker	Routledge	978-0750665995	Kindle 版でも可
スティーブジョブズ伝説のスピーチ＆プレゼン	CNN English Express	朝日出版	978-4255006796	
人を動かす気配りの英語表現 Navitgating Difficult Situations	マヤ・バーダマン	The Japan Times 出版	978-4789017916	

参考書	適宜資料を配布する。 参考文献： 『TOEIC Speaking & Writing 公式テストの解説と練習問題』 ETS（著）、IIBC、2015 年 『ドラッカー365 の金言』（416 ページ） P. F. ドラッカー（著）、上田惇生（著）、ダイヤモンド社、2005 年
備考	講義は TOEIC テキストの解釈、音読、問題演習、ジョブズなど経営者によるスピーチやプレゼンの解釈、音読、ドラッカーなどビジネスに直結する内容や表現の解釈、音読、などを行います。また The Daily Drucker の Action Point を用いてクラスで討議したり、クラス内のグループでミニプレゼンを作り、発表＋QA なども行います。 この科目は「大学等における修学の支援に関する法律」において本学が申請した実務経験のある教員による授業科目です。
昨年度からの振り返り	①講義難易度については、現状のレベルで、平易な表現を選択しますが、その分、話す、聞く力を意識して練習します。 ②ブレイクアウトなどグループで討議したり、発表したりする機会を増やし、また事前に時間を区切ることで、効率よく、かつ集中力の途切れない講義構成とします。

	学生各位の積極的、自主的な授業への参加を希望します。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	1年	学期	後期	科目分類	展開科目
授業名	ビジネス英語実習Ⅱ					授業形態	実習
授業コード	PE2141	単位数	2単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎阿部川 久広、Hug Jose、柿崎 理、栗田 昭宏、平野 麻紀子						
授業概要	ビジネスとICTを用いて、世界に変革を起こしていくためには、さまざまな国の人々と協同することが必要であり、様々な価値観や文化的背景の違う人々と協働するために多様性の受容、コミュニケーション、ディベート、ネゴシエーション、プレゼンテーションなどを共通言語となる英語で行うことができることは重要である。 ビジネス英語実習Ⅱでは会社や事業の紹介、仕様説明や問い合わせ対応時に必要な用語や表現、日常会話ではなくビジネスの現場で使用する用語や表現と、それらを用いた説明時や会議時に必要な会話力や表現力を習得する。本授業終了時には、英語を用いて、説明書や仕様書を作成できること、ネイティブの方と英語を交えて会議ができることを目標とする。						
授業の目的・到達目標	・テーマに沿った内容を英語で理解し、表現する。 ・授業を通じ、グローバルでのコミュニケーションに必要な技術や知識を習得する。						

授業計画	
第1回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4]＋自己紹介と演習 ・[ドラッカー] Daily Drucker Feb 11 (1) Management ・Steve Jobsスピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第2回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4]＋自己紹介と演習 ・[ドラッカー] Daily Drucker Feb 11 (2) Management ・Steve Jobsスピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第3回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4]＋自己紹介と演習 ・[ドラッカー] Daily Drucker March 12 (1) Business Purpose ・Steve Jobsスピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第4回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4]＋自己紹介と演習 ・[ドラッカー] Daily Drucker March 12 (2) Business Purpose ・Steve Jobsスピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第5回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4]＋自己紹介と演習 ・[ドラッカー] Daily Drucker February 27 (1) What is our business ・Steve Jobsスピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第6回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4]＋自己紹介と演習 ・[ドラッカー] Daily Drucker February 27 (2) What is our business ・Steve Jobsスピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第7回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker March 17 (1) Profit ・Steve Jobsスピーチ&プレゼンテーション

	・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 8 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker March 17 (2) Profit ・Steve Jobs スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 9 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker February 28 (1) Customer ・Steve Jobs スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 10 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker February 28 (2) Customer ・Steve Jobs スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 11 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker March 1 (1) Leader ・Steve Jobs スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 12 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker March 1 (2) Leader ・Steve Jobs スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 13 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker March 6 (1) Risk ・Steve Jobs スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 14 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker March 6 (2) Risk ・Steve Jobs スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 15 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker April 5 (1) Leader ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 16 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker April 5 (2) Leader ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 17 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker June 1 (1) Manage oneself ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 18 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker June 1 (2) Manage Oneself ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習

第 19 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker June 26 (1) Enjoy working ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 20 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker June 26 (2) Enjoy Working ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 21 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker September 11 (1) Results ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 22 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker September 11 (2) Results ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 23 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker September 1 (1) Know Thy Time ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 24 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker September 1 (2) Know Thy Time ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 25 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker October 3 (1) Decision Making ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 26 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker October 3 (2) Decision Making ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 27 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker September 29 (1) Stone cutter ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 28 回	・[TOEIC L&R Part 3, Part 4] ・[ドラッカー] Daily Drucker September 29 (2) Stone Cutter ・Philip Kotlar スピーチ&プレゼンテーション ・[Navigating Difficult Situations] 各章レビュー＋練習
第 29 回	まとめと振り返り 総合演習
第 30 回	まとめと振り返り 総合演習
成績評価	Attitude：

の方法	授業へ積極的に参加しているか、思考し発言しているか、理解しようと努めているか（15%） Contribution： 授業に貢献しているか、グループ内で発言しているか、議論に参加しリードし議論内容を進化させようとしているか（15%） Willingness： 積極的に参加しようと努めているか、グループの議論を助けようとしているか、何かを得ようとやる気を出しているか（10%） Assignment： 授業中のタスク、授業中のプレゼンテーション、授業中の発言、授業後の提出物など、課されているものをしっかり理解し、対応しようとしているか（60%）
準備学修（予習・復習、課題等）	各回ごとに設定されるテーマをもとに、表現や内容の準備と振り返りを行う。配布された資料の単語などを辞書で調べておくとよい。フィールドワークに向けて地域の事柄を説明できるようになる。（各回 30～60 分）

教科書

書名	著者	出版社	ISBN	備考
公式 TOEIC Listening & Reading 問題集 8	ETS	IIBC	978-4906033638	
The Daily Druker	Peter F. Drucker	Routledge	978-0750665995	Kindle 版でも可
スティーブジョブズ伝説のスピーチ&プレゼン	CNN English Express	朝日出版	978-4255006796	
人を動かす気配りの英語表現 Navitgating Difficult Situations	マヤ・バーダマン	The Japan Times 出版	978-4789017916	

参考書	適宜資料を配布する。 参考文献： 『TOEIC Speaking & Writing 公式テストの解説と練習問題』 ETS（著）、IIBC、2015 年 『ドラッカー365 の金言』（416 ページ） P. F. ドラッカー（著）、上田惇生（著）、ダイヤモンド社、2005 年
備考	講義は TOEIC テキストの解釈、音読、問題演習、ジョブズなど経営者によるスピーチやプレゼンの解釈、音読、ドラッカーなどビジネスに直結する内容や表現の解釈、音読、などを行います。また The Daily Drucker の Action Point を用いてクラスで討議したり、クラス内のグループでミニプレゼンを作り、発表＋QA なども行います。
昨年度からの振り返り	①講義難易度については、現状のレベルで、平易な表現を選択しますが、その分、話す、聞く力を意識して練習します。 ②ブレイクアウトなどグループで討議したり、発表したりする機会を増やし、また事前に時間を区切ることで、効率よく、かつ集中力の途切れない講義構成とします。 学生各位の積極的、自主的な授業への参加を希望します。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	2年	学期	前期	科目分類	展開科目
授業名	ビジネス英語実習Ⅲ					授業形態	実習
授業コード	PE3141	単位数	2単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎阿部川 久広、Hug Jose、柿崎 理、平野 麻紀子						
授業概要	ビジネスとICTを用いて、世界に変革を起こしていくためには、さまざまな国の人々と協同することが必要であり、様々な価値観や文化的背景の違う人々と協働するために多様性の受容、コミュニケーション、ディベート、ネゴシエーション、プレゼンテーションなどを共通言語となる英語で行うことができることは重要である。 ビジネス英語実習Ⅲでは、1年次の「ビジネス英語実習Ⅰ・Ⅱ」を土台とし、ケーススタディを通じてビジネスやICTのトレンドを活かす力、英語でビジネスプランや新たな製品やサービスの提案を行うことができる力、英語で業務の指示や相談ができる力を身に付ける。本授業終了時にはビジネスの現場で滞りなく業務を遂行できる英語力を習得することを目指す。						
授業の目的・到達目標	・テーマに沿った内容を英語で理解し、表現できる。 ・授業を通じ、グローバルなビジネスの場の英語実践を行う。						
授業計画							
第1回	Introduction to course, Textbooks, and Expectations						
第2回	・[Wickman] Chapter1 (1) ・[Drucker] p.1-33 “January” ・Entrepreneurs’ English/Jeff Bezos-1						
第3回	・[Wickman] Chapter1 (2) ・[Drucker] p.35-65 “February” ・Entrepreneurs’ English/Jeff Bezos-2						
第4回	・[Wickman] Chapter1 (3) ・[Drucker] p.67-99 “March” ・Entrepreneurs’ English/Jeff Bezos-3						
第5回	・[Wickman] Chapter2 (1) ・[Drucker] p.10-132 “April” ・Entrepreneurs’ English/Jeff Bezos-4						
第6回	・[Wickman] Chapter2 (2) ・[Drucker] p.133-165 “May” ・Entrepreneurs’ English-Elon Musk-1						
第7回	・[Wickman]						

	Chapter2 (3) ・[Drucker] p.167-198 “June” ・Entrepreneurs’ English/Elon Musk-2
第 8 回	・[Wickman] Chapter3 (1) ・[Drucker] p.199-231 “July” ・Entrepreneurs’ English/Elon Musk-3
第 9 回	・[Wickman] Chapter3 (2) ・[Drucker] p.233-265 “August” ・Entrepreneurs’ English/Elon Musk-4
第 10 回	・[Wickman] Chapter3 (3) ・[Drucker] p.267-298 “September” ・Entrepreneurs’ English/Mark Zuckerberg-1
第 11 回	・[Wickman] Chapter4 (1) ・[Drucker] p.299-331 “October” ・Entrepreneurs’ English/Mark Zuckerberg-2
第 12 回	・[Wickman] Chapter4 (2) ・[Drucker] p.333-364 “November” ・Entrepreneurs’ English//Mark Zuckerberg-3
第 13 回	・[Wickman] Chapter4 (3) ・[Drucker] p.365-397 “December” ・Entrepreneurs’ English/Steve Jobs-1
第 14 回	・[Wickman] Chapter5 (1) ・Entrepreneurs’ English/Steve Jobs-2 ・[Ohno] Philip Kotler-1
第 15 回	・[Wickman] Chapter5 (2) ・Entrepreneurs’ English/Steve Jobs-3 ・[Ohno] Philip Kotler-2
第 16 回	・[Wickman] Chapter5 (3) ・Entrepreneurs’ English/Bill Gates-1

	・[Ohno] Philip Kotler-3
第 17 回	・[Wickman] Chapter6 (1) ・[Drucker] p.1-33 “January” ・Entrepreneurs’ English/Bill Gates-2 ・[Ohno] Philip Kotler-4
第 18 回	・[Wickman] Chapter6 (2) ・[Drucker] p.35-65 “February” ・Entrepreneurs’ English/Bill Gates-3 ・[Ohno] Philip Kotler-5
第 19 回	・[Wickman] Chapter6 (3) ・[Drucker] p.67-99 “March” ・Entrepreneurs’ English/Larry Page and Sergey Brin-1 ・[Ohno] Philip Kotler-6
第 20 回	・[Wickman] Chapter7 (1) ・[Drucker] p.10-132 “April” ・Entrepreneurs’ English/Larry Page and Sergey Brin-2 ・[Ohno] Scott Galloway-1
第 21 回	・[Wickman] Chapter7 (2) ・[Drucker] p.133-165 “May” ・Entrepreneurs’ English/Larry Page and Sergey Brin-3 ・[Ohno] Scott Galloway-2
第 22 回	・[Wickman] Chapter7 (3) ・[Drucker] p.167-198 “June” ・Entrepreneurs’ English/Jack Ma-1 ・[Ohno] Scott Galloway-3
第 23 回	・[Wickman] Chapter8 (1) ・[Drucker] p.199-231 “July” ・Entrepreneurs’ English/Jack Ma-2 ・[Ohno] Scott Galloway-4
第 24 回	・[Wickman] Chapter8 (2) ・[Drucker]

	p.233-265 “August” ・Entrepreneurs’ English/Jack Ma-3 ・[Ohno] Scott Galloway-5
第 25 回	・[Wickman] Chapter8 (3) ・[Drucker] p.267-298 “September” ・Entrepreneurs’ English/Jimmy Wales-1 ・[Ohno] Scott Galloway-6
第 26 回	・[Wickman] Chapter9 (1) ・[Drucker] p.299-331 “October” ・Entrepreneurs’ English/Jimmy Wales-2 ・[Ohno] Yuval Noah Harari-1
第 27 回	・[Wickman] Chapter9 (2) ・[Drucker] p.333-364 “November” ・Entrepreneurs’ English/Jimmy Wales-3 ・[Ohno] Yuval Noah Harari-2
第 28 回	・[Wickman] Chapter9 (3) ・[Drucker] p.365-397 “December” ・[Ohno] Yuval Noah Harari-2
第 29 回	・[Wickman] Chapter10 ・[Ohno] Yuval Noah Harari-2
第 30 回	FINAL EXAMS
成績評価の方法	Attitude： 授業へ積極的に参加しているか、思考し発言しているか、理解しようと努めているか（15%） Contribution： 授業に貢献しているか、グループ内で発言しているか、議論に参加しリードし議論内容を進化させようとしているか（15%） Willingness： 積極的に参加しようと努めているか、グループの議論を助けようとしているか、何かを得ようとやる気を出しているか（10%） Assignment： 授業中のタスク、授業中のプレゼンテーション、授業中の発言、授業後の提出物など、課されているものをしっかり理解し、対応しようとしているか（60%）
準備学修（予習・復習、課題等）	毎週の授業を受けるにあたっては、事前に教科書の指定箇所等を読んでおくこと。 また、授業時に課題を課すため、必ず期限内に提出すること。
教科書	

書名	著者	出版社	ISBN	備考
［改訂版］起業家の英語（Entrepreneurs' English）	米山明日香、佐野正博	コスモピア	978-4864541282	
The Daily Drucker	Peter F. Drucker	Routledge	978-0750665995	Kindle 版でも可
On the Frontline of Wisdom	大野和基	ジャパンタイムズ	978-4789017138	
Traction	Gino Wickman	BenBella Books	978-1936661831	

参考書	『Disciplined Entrepreneurship』 Bill Aulet（著）、Wiley、2013 年、ISBN978-1118692288
備考	
昨年度からの振り返り	各回の授業は、学生を主体とした「反転授業」の形式で行います。そのため、十分な準備をした上で授業に出席する必要があります。なお、準備学修に必要な資料等はすべて提供します。 授業時には能力や理解度を確認するため、課題に関する演習を行います。また、グループワークを取り入れ、グループへの貢献度も評価の対象となります。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	2年	学期	後期	科目分類	展開科目
授業名	ビジネス英語実習Ⅳ					授業形態	実習
授業コード	PE4141	単位数	2単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎阿部川 久広、Hug Jose、柿崎 理、Keith Schellin、平野 麻紀子						
授業概要	ビジネスとICTを用いて、世界に変革を起こしていくためには、さまざまな国の人々と協同することが重要である。様々な価値観や文化的背景の異なる人々と協働するために多様性の受容、コミュニケーションやプレゼンテーションなどを共通言語となる英語で行う必要がある。 ビジネス英語実習Ⅳでは、「ビジネス英語実習Ⅰ～Ⅲ」を土台とし、カンファレンスやビジネスプランコンテストなどで、ビジネスプランを英語でプレゼンテーションするという想定で講義のゴールを設定する。そのためのビジネスプランそのもの、そのストーリー化、スクリプト化、プレゼンテーション資料の作成、発表に向けた段取りなどについて学習を進める。 TED、SLUSH、STARTUP WORLDCUPなど、世界的なスタートアップのイベントやプレゼンテーションの機会で本学の学生がネイティブと対等にプレゼンテーションやコミュニケーションを図ることができることを目標とする。						
授業の目的・到達目標	・テーマに沿った内容を英語で理解し、表現できる。 ・授業を通じ、グローバルなビジネスの場の英語実践を行う。						
授業計画							
第1回	Daily Dracker-1 (2.2) Traction Chapter 1 (1) Discussion and presentation						
第2回	Daily Dracker-2 (2.13) Traction Chapter 1 (2) Discussion and presentation						
第3回	Daily Dracker-3 (2.27) Traction Chapter 1 (3) Discussion and presentation						
第4回	Daily Dracker-4 (2.28) Traction Chapter2 (1) Discussion and presentation						
第5回	Daily Dracker-5 (2.29) Traction Chapter2 (2) Discussion and presentation						
第6回	Daily Dracker-6 (3.12) Traction Chapter2 (3) Discussion and presentation						
第7回	Daily Dracker-7 (3.17) Traction Chapter3 (1) Discussion and presentation						
第8回	Daily Dracker-8 (3.21) Traction Chapter3 (2) Discussion and presentation						

第 9 回	Daily Dracker-9 (4.1) Traction Chapter3 (3) Discussion and presentation
第 10 回	Daily Dracker-10 (4.24) Traction Chapter4 (1) Discussion and presentation
第 11 回	Daily Dracker-11 (5.9) Traction Chapter4 (2) Discussion and presentation
第 12 回	Daily Dracker-12 (5.27) Traction Chapter4 (3) Discussion and presentation
第 13 回	Daily Dracker-13 (6.8) Traction Chapter5 (1) Discussion and presentation
第 14 回	Daily Dracker-14 (6.26) Traction Chapter5 (2) Discussion and presentation
第 15 回	Daily Dracker-15 (7.18) Traction Chapter5 (3) Discussion and presentation
第 16 回	Daily Dracker-16 (8.10) Traction Chapter6 (1) Discussion and presentation
第 17 回	Daily Dracker-17 (8.11) Traction Chapter6 (2) Discussion and presentation
第 18 回	Daily Dracker-18 (8.12) Traction Chapter6 (3) Discussion and presentation
第 19 回	Daily Dracker-19 (8.13) Traction Chapter7 (1) Discussion and presentation
第 20 回	Daily Dracker-20 (8.25) Traction Chapter7 (2) Discussion and presentation
第 21 回	Daily Dracker-21 (8.26) Traction Chapter7 (3) Discussion and presentation
第 22 回	Daily Dracker-22 (8.27) Traction Chapter8 (1) Discussion and presentation
第 23 回	Daily Dracker-23 (9.9) Traction Chapter8 (2)

	Discussion and presentation
第24回	Daily Dracker-24 (10.3) Traction Chapter8 (3) Discussion and presentation
第25回	Daily Dracker-25 (10.30) Traction Chapter9 (1) Discussion and presentation
第26回	Daily Dracker-26 (10.31) Traction Chapter9 (2) Discussion and presentation
第27回	Daily Dracker-27 (11.12) Traction Chapter9 (3) Discussion and presentation
第28回	Daily Dracker-28 (supplement) Traction Chapter10 (1) Discussion and presentation
第29回	Daily Dracker-29 (supplement) Traction Chapter10 (2) Discussion and presentation
第30回	Daily Dracker-30 (supplement) Traction Chapter10 (3) Discussion and presentation
成績評価の方法	Attitude： 授業へ積極的に参加しているか、思考し発言しているか、理解しようと努めているか (15%) Contribution： 授業に貢献しているか、グループ内で発言しているか、議論に参加しリードし議論内容を進化させようとしているか (15%) Willingness： 積極的に参加しようと努めているか、グループの議論を助けようとしているか、何かを得ようとやる気を出しているか (10%) Assignment： 授業中のタスク、授業中のプレゼンテーション、授業中の発言、授業後の提出物など、課されているものをしっかり理解し、対応しようとしているか (60%)
準備学修(予習・復習、課題等)	毎週の授業を受けるにあたっては、事前に教科書の指定箇所等を読んでおくこと。 また、授業時に課題を課すため、必ず期限内に提出すること。

教科書

書名	著者	出版社	ISBN	備考
The Daily Drucker	Peter F. Drucker	Routledge	978-0750665995	Kindle版でも可
Traction	Gino Wickman	BenBella Books	978-1936661831	

参考書	『Blitzscaling: The Lightning-Fast Path to Building Massively Valuable Companies』 Reid Hoffman 他 (著)、Currency、2018年 『Crossing the Chasm』 Geoffrey A. Moore (著)、HarperCollins、2014年

	『Inside The Tornado』 Geoffrey A. Moore (著)、HarperCollins、2005 年
備考	
昨年度からの振り返り	各回の授業は、学生を主体とした「反転授業」の形式で行います。そのため、十分な準備をした上で授業に出席する必要があります。なお、準備学修に必要な資料等はすべて提供します。 授業時には能力や理解度を確認するため、課題に関する演習を行います。また、グループワークを取り入れ、グループへの貢献度も評価の対象となります。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	2年	学期	後期	科目分類	展開科目
授業名	多文化理解					授業形態	演習
授業コード	CCM143	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎白河 桃子、宮谷 敦美、マヤ・バーダマン						
授業概要	本授業では、日本のみならず世界中の事例をとりあげ、複数の異文化が混在する「多文化社会」の中で知っておきたい人種・文化・宗教、価値観と、学んだ知識をもとに適切に行動し、異文化を受容する素地を養う。具体的には、多文化の中でのキーワードや事例を取り上げグループでの調査やプレゼンテーションを行い、相互理解を深める。多様性が入り混じる社会やビジネスの現場において、様々な考え方や文化を受け止め、最大限のパフォーマンスを引き出せるリーダーとしての素養を、講義やディスカッション、ロールプレイを通じ、実務を支える理論や知識を習得する。						
授業の目的・到達目標	私たちの出発点は、異文化（different culture）の理解ではなく、多様な文化が混在し、協調しあう多文化（multiculture）の理解である。それは文化の単なるテキスト（text 文章）の集積ではなく、コンテキスト（context 文脈）の包括的理解である。そのための切り口が知識、概念、体験、問いかけであり、それらをグループで討議し、まとめ、クラス全体の共有知とした上で、それを行動に結びつける。(行動に結びつかない知性は道半ばである) 行動は、国籍、地域、人種、宗教、文化、男女などに関わるあらゆる偏見を超える必要がある。多様なバックグランドを持つ3人の個性的な俊英がそれぞれの体験と考察に基づく具体的文化論を諸君とともに展開する。この講義は君たちがグローバルで活躍するための太い知性の幹、他の世界人と競い、高め合うための強力な武器となる。						
授業計画							
第 1回	CMはなぜ炎上するのか？ビジネス、クリエイティブに必要な、ジェンダー視点をアップデート（担当：白河）						
第 2回	情報の見極め方講座（担当：白河） （ゲスト講師：古田大輔氏　早稲田大卒。朝日新聞記者を経て、BuzzFeed Japan 創刊編集長。2019年に独立し、ジャーナリスト／メディアコンサルタントとして活動。メディアコラボ代表。2020年9月にGoogle News Labティーチングフェローに就任。著書に「子どもを育てられるなんて思わなかったLGBTQと伝統的な家族のこれから」(編著、山川書店)、「フェイクと憎悪」(共著、大月書店) など。ニューヨーク市立大ジャーナリズムスクール「News Innovation and Leadership 2020」修了）						
第 3回	LGBTQとは何か、見えないマイノリティであるLGBTQが社会的にどう認められつつあるか（担当：白河） （ゲスト講師：松中権氏　電通退社後、NPO グッド・エイジング・エールズ代表／プライドハウス東京代表／一般社団法人Marrriage for All Japan 結婚の自由をすべての人に 理事）						
第 4回	台湾にみる多様性 アジアトップのジェンダー平等を実現した台湾から学べることは？（担当：白河） （ゲスト講師：近藤弥生子氏　台湾のオードリー・タン デジタル担当相への取材、コーディネートを多数手がけ、著書も多数出版。近著に『まだ誰も見たことのない「未来」の話をしよう』(SBクリエイティブ) 台湾在住の編集・ライター）						
第 5回	ビジネスの基礎教養としての「モラル」と「人権」 Netflixの現場改革などの実例から（担当：白河）						
第 6回	コミュニケーションの手段と受け取るメッセージ（担当：宮谷）						

	コミュニケーションの手段である「ことば」で伝える／伝わるメッセージと、それ以外の方法で伝える／伝わるメッセージについて、具体例を挙げながら理解を深めます。そのあとで、コミュニケーションの齟齬になりうる事例についてディスカッションします。
第 7 回	文化とコミュニケーション（担当：宮谷） 国、地域、属している組織などにより、私たちがもつ「文化」は異なります。この回では、私たち一人ひとりが属している「文化」の違いについて理解を深めます。特に、「価値観」や「規範意識」について注目し、異なる文化に属する人が、協働する場面で何に留意すればよいか、ディスカッションを通して考えます。
第 8 回	D.I.E.分析、ケーススタディ①（担当：宮谷） 異文化コミュニケーションの分野で用いられるコミュニケーション分析フレームワーク「D.I.E.分析」について概説し、活用方法を学びます。そのあと、海外の日系企業で実際にあった出来事についてケースを読み、どうしてこのようなコミュニケーション摩擦がおきたのか、グループディスカッションを通して分析します。
第 9 回	アサーティブコミュニケーション、ケーススタディ②（担当：宮谷） コミュニケーション摩擦が起きたときに、どのように解決すればよいのでしょうか。この回では、アサーティブコミュニケーションという手法について学び、相手を尊重しながら自分の気持ちを伝えるコミュニケーション方法について理解を深めます。 その後、共に働く場面でのケースを読み、アサーティブコミュニケーションの手法を使って、解決を導き出すための方法をグループディスカッションを通して考えます。
第 10 回	私たちが遭遇する異文化（担当：宮谷） 履修学生が、自分自身の異文化摩擦体験について紹介し、第 6～10 回で学んだ内容を基に、グループで解決方法を考え、発表します。
第 11 回	多文化な現場での異文化コミュニケーション（担当：バーダマン） 言葉の背景にある文化の違いや、コミュニケーションに影響するさまざまな要素について考えます。実際の多文化な環境で働く際、どのようなことに気をつけるべきかをよりイメージできるようになります。
第 12 回	英語の誤解と敬語（担当：バーダマン） 敬語がないと思われがちな英語の丁寧表現について学びます。グローバルな舞台に立つ際に知っておきたい、共通語としての英語の「敬語」や効果的なコミュニケーションのポイントを身につけます。
第 13 回	アメリカ黒人の歴史と文化（担当：バーダマン／ゲスト講師：ジェームス・M・バーダマン氏 早稲田大学名誉教授） アメリカの黒人の歴史を通して、アメリカの歴史、そして現在も存在する差別や偏見への理解を深めます。人種、文化、宗教、価値観などにも焦点を当て、「広い観点のレンズ」を持てるようになります。
第 14 回	インクルーシブなコミュニケーション（担当：バーダマン） 文化の違いがスモールトーク（雑談）にも反映される例を見ながら、避けた方が良いトピック、無意識な差別、インクルーシブなコミュニケーションとは何かを考えます。
第 15 回	多文化・グローバルな舞台に立つ前に必要なツールとマインドセット（担当：バーダマン） 自己紹介、自己アピール、発言、など日々直面する場面で、日本文化の「モード」から切り替えるヒントを学びます。
成績評価の方法	定期試験は実施しない。成績は①出席による講義への質的参加度合、②毎回の講義で講師が指示する提出課題の内容と提出回数、③各講師がそれぞれの講義の最終回に課する最終レポートの提出と内容の三つで評価する。

	【マヤ・バーダマン】 上記①・②について： 次回に向けて自分なりに考えて準備する。(提出物はなし。授業のアクティブな参加が必須) 上記③について： 異文化コミュニケーションについてトピックを選択し、リサーチ及び考えをもとにレポートを提出する。(トピックの例：エリン・メイヤーの本、人種差別などについて、賛成／反対か、なぜ現代の社会において大切か、など)
準備学修 (予習・復習、課題等)	各講師がシラバスで掲げる概要に関して、自分なりに予習することが望ましい。また復習を必ず行うこと。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
ハラスメントの境界線	白河桃子	中央公論新書	978-4-12-150656-6	

参考書	【白河桃子】 上記教科書を使用します。 【宮谷敦美】 教科書はありません。授業前までに資料 PDF をダウンロードし、授業中参照しながら参加できるよう準備しておくこと。 【マヤ・バーダマン】 教科書はありません。 推薦図書： 『異文化理解力―相手と自分の真意がわかる ビジネスパーソン必須の教養』 エリン・メイヤー（著)、英治出版、2015 年、ISBN4862762085
備考	
昨年度からの振り返り	【白河桃子】 多彩なゲストをお招きすることで、みなさんの視点が広がり、多様性の一助となることを期待しています。また社会変革、社会インパクトのプロのゲストなので、事業の立ち上げについての知見が得られます。 （※他の教員については、本年度から担当のため、該当なし。）

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	2年	学期	後期	科目分類	展開科目
授業名	比較宗教論					授業形態	演習
授業コード	CRS143	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	藤井 修平						
授業概要	本授業では、宗教の定義や歴史、世界の主要な宗教の基本的な概念の理解とその比較を通して、宗教と人間、文化、社会の関係性について検討を行う。これまでの歴史において、宗教と無関係の社会や文化はない。諸宗教の理解を通じて、グローバル時代にふさわしい宗教についての中立的で幅広い知識を身に付ける。あわせて、人間の生活や文化、生き方に大きな影響をもたらす宗教が、それぞれどのような理念体系を持ち、また人々や社会にどのように受け入れられているのかを知ることで、より深く人間を理解することを目標とする。ビジネスの場面において、宗教や社会を理解した発想や応用ができるよう、理論や知識を習得する。						
授業の目的・到達目標	(1)「宗教」という概念に含まれるさまざまな要素を整理して述べることができる。 (2) 世界の宗教についての知識を、時事問題の理解や日常的な問題の解決に応用することができる。 (3) 政治やビジネス、芸術など社会の諸側面に、宗教がいかに影響を与えているかを適切に説明することができる。						
授業計画							
第1回	【導入（第1回～第2回)】 オリエンテーション						
第2回	宗教学的思考－宗教はどのように研究できるか						
第3回	【世界の宗教を学ぶ（第3回～第7回)】 仏教－地域によってさまざまに違う教え						
第4回	キリスト教－西洋文明の根本						
第5回	イスラム教－ますます身近になる宗教						
第6回	ユダヤ教とヒンドゥー教－古代から現在まで続く教え						
第7回	日本宗教－多様な信仰の形						
第8回	【身近な宗教的事象（第8回～第10回)】 スピリチュアル・ブーム－新しい宗教性のあり方						
第9回	神話－創作へのインスピレーションの源						
第10回	宗教のネガティブな側面－疑似科学やカルト問題						
第11回	【社会のさまざまな側面と宗教（第11回～第15回)】 宗教と政治－なぜ宗教のもとで人は動くのか						
第12回	宗教と哲学－世界のあり方をめぐる知的な戦い						
第13回	宗教とジェンダー－宗教への異議と、それへの応答						
第14回	宗教とビジネス－関わりの歴史と新たな応用の試み						
第15回	宗教とテクノロジー－技術発展の背後にある宗教的思想						
成績評価の方法	・授業への参加状況30% 採点基準：予習・復習が行えており、授業に真面目に取り組む姿勢が見られること ・授業後課題30% 採点基準：学んだことや問いに応じた意見が記述されていること						

	・期末レポート 40% 採点基準：選んだテーマに対して、授業で学んだ内容を踏まえて自分の考えが提示できていること 期末レポートの課題内容は初回授業時に伝えます。
準備学修 (予習・復習、課題等)	・予習（90 分） 各授業の最後に次回のテーマを提示するので、そのテーマに関わるニュースや用語などを予習してください。同時に、次回の授業の導入で取り上げる問いも提示するので、自分の答えを考えてきてください。 ・復習（90 分） 授業後に課題を提示するので、授業内容を踏まえて回答してください。次回の授業開始時に設ける復習の時間で、提出された課題について講評を行います。また、期末レポートのために毎回の授業の中から関心のあるテーマを 1 つ選び、情報を収集しておいてください。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	毎回、教員が作成した資料を使用するため教科書は用いませんが、授業の理解を助けるものとして以下を参考書として指定します。 『本当にわかる宗教学』 井上順孝（著）、日本実業出版社、2011 年 『よくわかる宗教学』 櫻井義秀（編著）、平藤喜久子（編著）、ミネルヴァ書房、2015 年 『宗教学』 伊原木大祐（編）、竹内綱史（編）、古荘匡義（編）、昭和堂、2023 年
備考	受講者との双方向性を重視し、授業内で特定のトピックについて議論する時間を設けるほか、授業毎に質問や感想を受け付けます。授業中の疑問点や分かりにくかった点、質問、感想などは積極的に述べてください。
昨年度からの振り返り	

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	3 年	学期	前期	科目分類	展開科目
授業名	グローバルビジネスと通訳					授業形態	講義
授業コード	EIB142	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	阿部川 久広						
授業概要	ビジネスの現場では、語学や専門知識に関する理解力や運用能力に格差があるチームメンバーとともに仕事を進めなければならない場面が数多くある。 グローバルな場面でリーダーシップを発揮していく中では、ビジネスや会議の内容をその場でまとめ、共有する場面や、相手の反応に応じて理解できるスキルやコミュニケーション力が求められる。本授業では、上記のような場面でも通用するグローバルコミュニケーションの技法の 1 つとして、通訳を取り上げ、ビジネスの現場で多方面に展開できる通訳スキルとコミュニケーション力を修得する。						
授業の目的・到達目標	多様な人種・文化・宗教・価値観が入り混じるグローバル社会について、ロールプレイを通じ体感しながら知識を習得し、文化の違いを受容しつつ、リーダーシップを発揮し多方面にわたり円滑にビジネスを展開していくことができるようになる。						
授業計画							
第 1 回	通訳史、翻訳史、理論的バックグランドと周辺理論-1						
第 2 回	通訳史、翻訳史、理論的バックグランドと周辺理論-2						
第 3 回	内容の理解-1（小松第四章）理解と実習						
第 4 回	内容の理解-2（小松第四章）理解と実習						
第 5 回	内容の理解-3（小松第四章）理解と実習						
第 6 回	ノートの取り方-1（小松第 5 章）理解と実習						
第 7 回	ノートの取り方-2（小松第 5 章）理解と実習						
第 8 回	ノートの取り方-3（小松第 5 章）理解と実習						
第 9 回	声に出して表現してみる-1（小松第 6 章）理解と実習						
第 10 回	声に出して表現してみる-2（小松第 6 章）理解と実習						
第 11 回	サイトトランスレーションと同時通訳-1（小松第 7 章、第 8 章）理解と実習						
第 12 回	サイトトランスレーションと同時通訳-2（小松第 7 章、第 8 章）理解と実習						
第 13 回	翻訳入門-1						
第 14 回	翻訳入門-2						
第 15 回	まとめ：通訳とは何か、翻訳とは何か（歴史、考え方、テクニック、ビジネス現場での応用など）						
成績評価の方法	(1) 毎回の講義内での議論、討議、実習の内容の理解と、実習に取り組む姿勢 65% (2) 実習での達成度 25% (3) 最終実習試験 10%						
準備学修(予習・復習、課題等)	(1) 講義内での実習に集中し、講義時間内に内容を理解し、さらなる実践への手がかりを掴むこと (2) 講義後に必ず実践の復習を行うこと (3) 毎日継続して実習すること						
教科書							

書名	著者	出版社	ISBN	備考
通訳の技術	小松達也	研究社	978-4327451912	

参考書	『よくわかる翻訳通訳学』 鳥飼玖美子（編著)、ミネルヴァ書房、2013 年 『よくわかる逐次通訳』 ベルジュロ伊藤宏美 他（著)、東京外国語大学出版、2009 年 『実践英語スピーチ通訳』 ピンカートン曄子 他（著)、大修館書店、2005 年
備考	実際のビジネスで用いられた PowerPoint を用いて、英語での読み、英日逐次訳、日英逐次訳などもトレーニングします。
昨年度からの振り返り	昨年度はアンケート未実施のため該当なし。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	3年	学期	前期	科目分類	展開科目
授業名	国際情勢論					授業形態	講義
授業コード	INS143	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎柿崎 理、藤井 修平						
授業概要	世界で起こっている出来事と、それに伴う各国の変化や動きなどを、地政学・歴史・地理・経済などの観点から読み解く視点を養う。具体的には、各回ごとにこれまで起こった国際情勢の変化の代表的な出来事や、時事の話題を取り上げ、その背景と結果を分析、解説する。また現在起こっているグローバリゼーションについて、これまでの事例から日本の社会や私たちの生活、ビジネスにどのような影響を及ぼすのかを検討する。本講義を通じ、国際情勢を分析する視点を養い、グローバル化が進む現代でビジネスや事業を展開する上で必要な判断力や応用力を養う。						
授業の目的・到達目標	一見混沌として見える国際関係をある切り口で眺められ、個々の事象について自分なりに整理でき、その背景や原因や影響について説明できる。						
授業計画							
第1回	序論						
第2回	国際政治学の諸原理						
第3回	国際関係史1－ウエストファリアから第一次世界大戦まで						
第4回	国際関係史2－第一次世界大戦から第二次世界大戦まで						
第5回	国際関係史3－冷戦						
第6回	国際関係のマクロ理論						
第7回	国際関係のミクロ理論						
第8回	現代の国際情勢－冷戦後の展開						
第9回	現代の国際情勢－現在の紛争地域						
第10回	現代の国際情勢－テロリズム						
第11回	現代の国際情勢－グローバル化						
第12回	現代の国際情勢－国際経済と相互依存関係						
第13回	現代の国際情勢－ICTと国際関係						
第14回	現代の国際情勢－トランスナショナルな諸問題と国際関係						
第15回	授業のまとめ・確認テスト						
成績評価の方法	講義時に指示された課題の提出状況（40%）と、講義や講義内で示された課題に対して取り組む姿勢、議論等への貢献度（30%）、確認テスト（30%）により評価する。						
準備学修（予習・復習、課題等）	予習として、入江昭『新日本の外交』（中公新書）、中西寛『国際政治とは何か』（中公新書）などの入門書を読んでみること。また、日頃から様々な媒体で国際情勢に触れてみること（計90分）。復習としては、講義を聞いて関心を抱いたことについて、関連図書を読んだり、徹底的に調べてみること（90分）。						

教科書

書名	著者	出版社	ISBN	備考
国際紛争―理論と	ジョセフ・S・ナイ・	有斐閣	978-4641149175	

歷史 原書第10版	ジュニア（著）、 デイヴィッド・A・ウェルチ（著）、 田中明彦（訳）、 村田晃嗣（訳）			

参考書	『国際関係学 第2版』 滝田賢治（編）、大芝亮（編）、都留康子（編）、有信堂、2017年 『よくわかる国際政治』 広瀬佳一（編著）、小笠原高雪（編著）、小尾美千代（編著）、ミネルヴァ書房、2021年 『今がわかる時代がわかる 世界地図 2023年版』 成美堂出版編集部（編）、成美堂出版、2022年
備考	講義中は、私語や、指示がある場合を除いてPC、タブレット、スマートフォンの操作は慎むこと。
昨年度からの振り返り	昨年度はアンケート未実施のため該当なし。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	3 年	学期	前期	科目分類	展開科目
授業名	日本文化					授業形態	演習
授業コード	JCS143	単位数	2 単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎谷川 嘉浩、宮本 道人						
授業概要	現在、世界ではゲームやアニメなどのポップカルチャーを中心にクール・ジャパン現象への関心が寄せられているが、これはジャポニズムから始まる近現代の日本文化ブームの一連の流れの 1 つである。本講義では、近現代も含めた時代ごとの「日本文化論」とそれを構成する要素、またそれらの国内外での評価をもとに「日本文化」自体の形成過程を論じる。様々な文献や映像、絵画、マンガ等を教材とし、日本独自の文化の歴史的な変遷や海外の文化との関係性についても理解を深める。日本文化への理解を通じ、文化や社会の形成の観点からもビジネスの思想や発想ができるよう、理論や知識を習得する。						
授業の目的・到達目標	・「好き」を共有できない相手にも理解可能な仕方で、文化を語り伝えることができる。 ・ポピュラーカルチャーを通じて、現代という時代や日本社会の特性を論じることができる。 ・友人とともに、事柄のより深い理解を目指して主張し、議論することができる。 ・論説文を適切かつ妥当に読解することができる。						
授業計画							
第 1 回	ガイダンス、自己紹介、本の読み方、資料の作り方						
第 2 回	日本文化の見方を学ぶ① 日本文化論への入門						
第 3 回	日本文化の見方を学ぶ② 日本文化論への入門						
第 4 回	日本文化の見方を学ぶ③ 日本文化論への視点						
第 5 回	日本文化の見方を学ぶ④ 日本文化論への視点						
第 6 回	日本文化の見方を学ぶ⑤ 日本文化論の分析と考察						
第 7 回	日本文化の見方を学ぶ⑥ 日本文化論の分析と考察						
第 8 回	日本文化の見方を学ぶ⑦ 日本文化論の深化						
第 9 回	日本文化の見方を学ぶ⑧ 日本文化論の深化						
第 10 回	日本文化の見方を学ぶ⑨ 日本文化論の考察と展開						
第 11 回	日本文化の見方を学ぶ⑩ 日本文化論の考察と展開						
第 12 回	日本文化の見方を学ぶ⑪ 日本文化論の発展						
第 13 回	日本文化の見方を学ぶ⑫ 日本文化論の発展						
第 14 回	日本文化の見方を学ぶ⑬ 日本文化論の総括と今後						
第 15 回	日本文化の見方を学ぶ⑭ 日本文化論の総括と今後						
成績評価の方法	授業内での発言等（30%）、授業内での発表（50%）、期末課題（20%）						
準備学修（予習・復習、課題等）	受講生は、この授業を通じて 2 冊程度の本を、専門家たる教員の案内を受けながら、厳密に、そして深く読み込んでいく。1 人で読んでわかるものを読んでも仕方がないので、それなりの難易度があったり、読み込み甲斐のある文献を指定している。第 2 回以降では、参加者は指定された箇所を事前に読むこと。担当者は、発表資料を作り、発表の準備をしておくこと。予習 120 分程度・復習 30 分程度の時間配分を想定している。期末課題は、テストではなく提出物を予定している。						

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
スマホ時代の哲学	谷川嘉浩	Discover 21	978-4-7993-2913-9	電子版でもよい
ネガティヴ・ケイパビリティで生きる	谷川嘉浩、 杉谷和哉、朱喜哲	さくら社	978-4865813753	電子版でもよい
古びた未来をどう壊す？	宮本道人	光文社	978-4334953485	電子版でもよい

参考書	『メディア・コンテンツ・スタディーズ』 岡本健（編）、田島悠来（編）、ナカニシヤ出版、2020 年
備考	教科書を第 2 回目が始まるまでに入手しておくこと（電子版でもよい）。 授業は、教科書の講読＋ディスカッション＋レクチャーの形で進めていく。講読パートでは、事前に指定された受講生が該当箇所を整理し、発表することになる（参加者は必ず 1 回発表する）。担当者は初回に決定するので、受講希望者は初回に必ず参加するように。
昨年度からの振り返り	昨年度はアンケート未実施のため該当なし。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	3年	学期	後期	科目分類	展開科目
授業名	グローバルビジネスにおけるディスカッション・ディベート					授業形態	演習
授業コード	EDB142	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	水野 稚						
授業概要	グローバルにおける会議や交渉の場では、参加者が意見を伝え、対話するという、よりよい答えを導くプロセスを全員で形成する必要がある。本授業ではそういった場面での対話手法として、ディスカッションやディベートのスキルを身に付けることを目的とする。ディスカッションでは提示されるテーマをもとに、資料、調査、質問事項など準備をおこない、発表や討議を行なう。あわせて自身の意見や討議をエッセーにまとめる。ディベートでも同様に事前準備のうえ、賛否に分かれ議論し、ジャッジを行なうとともに議論の要点、強みと弱み、改善点などをグループでまとめ、次の学びにつなげる。一連の流れの中で、グローバルビジネス現場での会議など、文化的背景の異なる人々と協業や実践の場で応用できるディスカッション力、ディベート力を養う。なお授業では国内の事例だけでなく、海外でのテレビ会議を想定した実践やオンラインの英文記事なども活用する。						
授業の目的・到達目標	ディスカッションやディベートに共通する論理の作法や英文構成について理解を深め、身近な問題から世界的な社会問題に至るまで、様々なテーマで議論するための力を実践的な学びを通じて醸成する。その過程の中で、議論の技術のみならず、その基盤となる教養を深め、日本を発信するために必要な英語能力の向上を目指す。なお、教科書は英文で書かれているが、深い思考、批判的に思考する力を養うため、授業で使用する言語は主として日本語とする。						
授業計画							
第1回	オリエンテーション（自己紹介や授業の目標や進め方、教科書の紹介や評価方法について）						
第2回	Chapter1 Cell Phones①：Section1-5（Reading comprehension, For or Against, Opinions）						
第3回	Chapter1 Cell Phones②：Section6-8（TV debate, Debate the issues, Discussion）						
第4回	Chapter3 The Gender Gap①：Section1-5（同上）						
第5回	Chapter3 The Gender Gap②：Section6-8（同上）						
第6回	Chapter4 Japanese Manga and Anime①：Section1-5（同上）						
第7回	Chapter4 Japanese Manga and Anime②：Section6-8（同上）						
第8回	Chapter7 The True Spirit of the Olympics①：Section1-5（同上）						
第9回	Chapter7 The True Spirit of the Olympics②：Section6-8（同上）						
第10回	Chapter8 Global Population Growth①：Section1-5（同上）						
第11回	Chapter8 Global Population Growth②：Section6-8（同上）						
第12回	Chapter10 The Internet①：Section1-5（同上）						
第13回	Chapter10 The Internet②：Section6-8（同上）						
第14回	Chapter13 Management Positions①：Section1-5（同上）						
第15回	Chapter13 Management Positions②：Section6-8（同上）						
成績評価の方法	最終レポート80%、授業内での発言等の貢献度20%						

準備学修 (予習・復習、課題等)	各 Chapter①に関しては、「Reading Comprehension」のセクションまで予習の上臨むこと。授業内で英文解釈の詳細は扱わないので、各自で読解してくること。各 Chapter②に関する予復習に関しては、進捗状況に応じて授業内に指示する。(各回予習 90 分・復習 90 分程度)

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
Debating Current Issues	西本徹、 Beryl Hawkins	成美堂	9784791931156	

参考書	『異文化理解力』 エリン・メイヤー (著)、英治出版、2015 年、ISBN9784862762085
備考	授業は主として日本語で行います。日本語で深い思考が出来て初めて、英語での議論やディベートが効果的に行えるからです。進捗状況によって、英語に切り替える可能性があります。単なる勝ち負けでなく、より良い結論を導く思考訓練としての議論の作法を学んでいきましょう。英文解釈の詳細は授業内で扱わないので、DeepL などの機械翻訳を活用しながら、必ず予習してから臨んでください。みなさんと大いに議論をする機会を楽しみにしています。
昨年度からの振り返り	

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	3年	学期	後期	科目分類	展開科目
授業名	国際メディア論					授業形態	講義
授業コード	IMB143	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	堂満 一成						
授業概要	グローバル化とデジタル化の進展により、新たなメディア・コミュニケーションを基盤とした社会が生まれつつある。本講義ではグローバル社会におけるメディア・コミュニケーションについての学びを進める。講義内容は、グローバルなメディアが成立するまでの、起源、発展プロセス、文化産業論の展開、戦後の発展概略、マスコミ産業からグローバルメディア、IT産業とソーシャルメディア、グローバルメディア体制とその問題点や可能性等について具体的事例を挙げながら、学習する。						
授業の目的・到達目標	劇的な変化と膨張を遂げている21世紀のメディア。新聞、テレビ、映画といった旧来のマスメディアに加え、インターネットやスマートフォンの普及によりソーシャルメディアが発達し、大都市からジャングルの奥地まで一瞬で同じ情報を共有し、世界が一斉に反応を始める新たなメディア時代に入っている。一方、検索エンジンの個人への過度な最適化のため、エコーチェンバー、フィルターバブルといった情報の閉鎖空間に陥る問題も生じてきている。本授業では、情報メディアとコミュニケーションの歴史と背景を押さえたうえで、激しい環境変化の渦中にある世界の情報コミュニケーションの現状と未来像に目を向けることで、その役割と特性を理解し、生活者として賢く利用できるようになることを目指す。						
授業計画							
第 1回	イントロダクション ～身の回りに見るメディアとコンテンツ、そしてネット～						
第 2回	世界のメディアのいま ～コンテンツとプラットフォームのせめぎ合い～						
第 3回	メディア史＃1 グーテンベルク、コーヒーハウス、新聞とビジネス						
第 4回	メディア鎖国はどこまで可能か？ ～ロシアと中国のいま～						
第 5回	メディア史＃2 音声・映像の時代へ ～蓄音機、映画、そしてエジソン～						
第 6回	西洋のメディア見取り図 イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、イスラム世界など						
第 7回	メディア史＃3 日本のメディアの源流　遊行僧、かわら版、蔦屋重三郎						
第 8回	日本のメディア見取り図 新聞・テレビ・映画・ネット						
第 9回	メディア史＃4 戦争、Me Too、ジャーナリズムと広告の微妙な関係						
第10回	アジアのメディア見取り図 中国、韓国、インドなど						
第11回	自分を守るための情報キュレーション ～フェイク対策、ファクトチェック～						
第12回	未来のメディア・公共放送、そしてコミュニケーションのゆくえ						
第13回	地域活性化、セルフブランディングのためのメディア活用術①						
第14回	地域活性化、セルフブランディングのためのメディア活用術②						
第15回	まとめ、確認テスト						
成績評価の方法	定期試験は実施しない。講義時に指示された課題の提出状況（40%）と、講義や講義内で示された課題に対して取り組む姿勢、議論等への貢献度（30%）、確認テスト（30%）で評価する。						
準備学修（予習・復習、	予習として、「メディアとコミュニケーションの文化史」（伊藤明己：世界思想社）や「世界のメディア―グローバル時代における多様性」（小寺敦之編：春風社）や						

課題等)	「図説 日本のメディア［新版］」(藤竹暁、竹下俊郎編著：NHK ブックス）などを読み、BBC や CNN など様々な国際メディアで世界情勢に触れておくこと。(90 分) 復習として、講義で関心を抱いたことについて Web や書籍で情報を読み、徹底的に調べてみること。(90 分)

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	毎回レジュメ・資料を配布する。参考書・参考資料は授業中に指示する。
備考	学生間・教員と学生の建設的で積極的なコミュニケーションを評価する。明るく楽しく元気よく、好奇心の熱量を授業にぶつけてほしい。自ら情報を収集し、最先端で起こっている事象、その背景や未来を考えてほしい。講義中は私語を慎むこと。
昨年度からの振り返り	

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	3年	学期	後期	科目分類	展開科目
授業名	製造業における国際化					授業形態	演習
授業コード	GMI144	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	伊藤 道大						
授業概要	情報通信技術関連（IoT、IIoT、Security、Cloud、Virtualization など）はもちろんのこと、広く製造業全般（自動車など機械、半導体など精密機器、その他製品製造業など）のテーマを扱い、製造業におけるグローバル化やイノベーションの事例を通じ、ビジネスの特性や専門性の理解を図る。具体的には、製造業の現場で用いられている技術文書に加え、製造業系のグローバルメディアである EETimes や EDN などの記事や各企業のホワイトペーパーなどを利用し、技術や戦略等への理解を深める。日本語だけでなく英語でも事例を検討し、業界内の専門的なビジネスについて理解するとともに、経営や情報通信技術の専門知識をもとに製造業における新たなビジネス展開やイノベーションに活用できる応用力を身に付ける。						
授業の目的・到達目標	製造業とは何か？このことを突き詰めていく講義となるが、例えば普段の生活の中でも様々な国際分業によって生み出された製品が溢れている。この講義ではそうしたちょっとした「気づき」を比較検証していくことに主軸を置く。なお、漠然と海外に興味があると考えている人に特に形が残る授業にしたい。授業では、下記の2点に到達することを目標とします。 1）製造業の国際ビジネスに関する基本的な理論、概念、用語を理解し、文章によって説明できる。 2）海外におけるビジネスの違いと課題を積極的に考え、異文化理解に関連づける。						
授業計画							
第 1 回	オリエンテーション。製造業とは何か、考えてみる。製造業での起業について。						
第 2 回	垂直統合型と水平分業型の製造業の事例から、製造業のスタイルを学ぶ。						
第 3 回	国際分業について。労働集約型産業の成り立ちと産業が成り立つ条件について考える。						
第 4 回	国際分業の最大の集積地域であるアジアを国と地域毎に比較検証する。						
第 5 回	国際分業の最大の成功都市、中国・深圳（Shenzhen）について学ぶ。						
第 6 回	深圳（Shenzhen）のエコシステムの紹介と、課題レポートのテーマ提示を行う。						
第 7 回	［第一回］自動車産業の歴史と将来像① 戦前のイノベーションから現在までの歴史。						
第 8 回	［第二回］自動車産業の歴史と将来像② 自動車産業の今後について考えてみる。						
第 9 回	［第三回］自動車産業の歴史と将来像③ アジアを代表するメーカーの事例を研究する。						
第 10 回	［第四回］自動車産業の歴史と将来像④ EV 化を中心に次世代の自動車を考える。						
第 11 回	製造業の進化と変化その事例を電機・電子産業を軸に学ぶ。						
第 12 回	スケールしたグローバル製造企業とは何か、考えてみる。						
第 13 回	グローバルなのか、ローカルなのか？製造業の国際戦略を考える。						
第 14 回	製造業の強みと弱みを分析してみる。また他のカテゴリーの産業との融和について学ぶ。						
第 15 回	授業総括と振り返り。課題レポートについて。						
成績評価の方法	・評価方法：出席コメントカードの提出と期末のレポートで算出。 ・出席コメントカード提出で 40％＋レポート（それなりに難易度が高いので、23 年末までに課題提示予定）の点（50％）で算出。なお、平常点（授業での発表等で 10％）も加味する。						
準備学修	・本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。受講前にアウトラインを決めて、						

(予習・復習、課題等)	受講後は振り返りを必ずすることを推奨します。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	『文系出身者が 2 時間で製造業がわかる本』 照井清一（著)、八田信正（著)、三恵社、2017 年、ISBN978-4864876223 ※適時授業で参考書籍を紹介します。
備考	・比較検証していくことに主軸を置く。アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）をしながら進める。 座席配置（ホワイトボードの配置も）はその為と理解下さい。 ・なお、聴いているだけでは楽勝科目にはならないので、そのつもりで受講ください。 ・私語など他の学生の迷惑となる行為・無断中途退出には厳正に対処するのでそのつもりで。 （理由：クラスメイトのビジネスの機会喪失につながる為) ・要望があれば、その都度遠慮しないで、申し出て欲しい。コメントカードの活用も可能。 ・授業履修者は皆、仲間という意識で取り組んで欲しい。
昨年度からの振り返り	昨年度はおかげさまで、受講生の皆さんから、毎回熱いフィードバックがあり、それを活かして授業テーマに盛り込んでいきました。今年度もコメントカードから抽出して、皆さんの気づきに最大限に答えていきたいと思います。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	4年	学期	前期	科目分類	展開科目
授業名	グローバルビジネスにおけるプレゼンテーション					授業形態	演習
授業コード	EPB142	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	Hug Jose						
授業概要	自身の事業やビジネスのアイディアや企画を周囲に説明し採用されるためには、内容だけでなく効果的に説得するための情報伝達技法が必要とされる。 本授業では提示されるテーマをもとに日本語・英語双方でプレゼンテーションに必要な内容や資料の準備、場面に応じたパフォーマンスや技法等を学ぶ。あわせて、質疑応答やジャッジ等一連のやり取りを行いプレゼンテーションの目的、役割、手法について理解を深める。 プレゼンテーション力だけでなく、文化的背景の異なる人々に対し日本語・英語問わずビジネスプランやアイディアを伝え、グローバルな場での実践に直結させるためのスキルを習得する。						
授業の目的・到達目標	各授業計画の記載を参照						
授業計画							
第1回	このコースでは、Chat GPT、Perplexity AI、および WordTune、ProWritingAId、Quillbot などのその他の AI 駆動型テキスト生成ツールを使用して、学生にアカデミックライティングを紹介します。AI ツールを使用して、クラスでのディスカッションやライティング課題のコンテンツを生成します。学習プロセスの一環として、足場、フレーミング、リフレーミングも組み込まれます。最終論文を修正する方法を学ぶことに加えて、学生は GPTZero を使用して学術的な不正行為や盗作を回避します。 This course introduces students to academic writing by using ChatGPT, Perplexity AI, and other AI-driven text generation tools such as WordTune, ProWritingAId, and Quillbot. The use of AI tools will be used to generate content for class discussions and writing assignments. As part of the learning process, scaffolding, framing, and reframing will also be incorporated. In addition to learning how to revise their final thesis papers, students will also use GPTZero to avoid academic dishonesty or plagiarism. Active Listening + Organizing Your Speech This project covers the difference between hearing and listening, and steps for exploring the ways listening helps build strong, lasting connections. o Purpose: The purpose of this project is to demonstrate your ability to listen to what others say. o Overview: Fulfill the role of Topicsmaster. As Topicsmaster, comment on each speaker’s Table Topics speech to demonstrate your active listening skills. For example, you might say, “Thank you. That was a compelling opinion on the benefits of ¢¢¢. I understand you feel strongly that everyone needs to spend some time doing something they love.” The following is a list of competencies that you will learn and practice in this project. ・Apply listening skills to increase comprehension and connection. ・Acknowledge the need for active listening. ・Recognize the difference between hearing and listening. ・Improve basic listening skills.						

	This project includes: ・Serving as Topicsmaster.
第 2 回	Impromptu Speaking This project is meant to help speakers learn how to outline carefully, become familiar with the general structure, and be prepared for a successful impromptu presentation. ・Purpose: The purpose of this project is for the member to dev
第 3 回	Icebreaker This foundational project is designed to introduce you to the class and the skills you need to begin your speaking journey. ・Purpose: The purpose of this project is to introduce yourself to the class and learn the basic structure of a public
第 4 回	Introduction to Vocal Variety and Body Language This project focuses on the fundamentals of delivering a speech-vocal variety and body language. The project specifically focuses on how to recognize body language used when speaking publicly and how to use
第 5 回	Connect With Storytelling This project addresses storytelling techniques and descriptive skills to help make every speech relatable and interesting. ・Purpose: The purpose of this project is to practice using a story within a speech or giving a speech th
第 6 回	Persuasive Speaking This project focuses on helping you to develop and support a viewpoint and identify the most appropriate type of persuasive speech for your topic. ・Purpose: The purpose of this project is to understand the types of persuasive speeche
第 7 回	Engage Your Audience with Humor This project focuses on understanding what makes you laugh and how to share that with an audience. ・Purpose: The purpose of this project is to begin developing a collection of humorous stories and to present a speech that
第 8 回	Using Descriptive Language This project addresses the difference between literal and figurative language along with how to determine when to use each to create vivid descriptions. ・Purpose: The purpose of this project is to practice writing a speech wit
第 9 回	Inspire Your Audience This project addresses how to present a speech in an enthusiastic and inspiring fashion to establish a strong rapport with your audience. ・Purpose: The purpose of this project is to practice writing and delivering a speech that inspires others. ・Overview: Select a topic with the intent of inspiring your audience and prepare a 5- to 7-minute speech for your club. This project includes: ・A 5- to 7-minute speech
第 10 回	Creating Effective Visual Aids

	This project addresses effective methods for choosing the best visual aid for your presentation along with the creation and use of each type. This project addresses the use of presentation software-from identifying topics that benefit from the use of technology to effective slide design and presentation. ・Purpose: The purpose of this project is to practice selecting and using a variety of visual aids during a speech. ・Overview: Select a speech topic that lends well to a visual presentation using technology. Create at least one but no more than three visual aids to enhance your presentation. Your speech can be humorous, demonstrative, or informational, and it may include stories or anecdotes. Deliver your 5- to 7-minute presentation. Your evaluator must be present for your speech. This project includes: ・Creating one to three visual aids. ・A 5- to 7-minute speech.
第 11 回	Questions & Answers Session This project addresses how to prepare to answer questions and provide information clearly, concisely, and with confidence. ・Purpose: The purpose of this project is to learn about and practice facilitating a question-and-answer session. ・Overview: Select a topic of which you are particularly knowledgeable. Prepare and deliver a speech on this topic, followed by a question-and-answer session. Together, the speech and question-and-answer session must be 15 to 20 minutes. Use your time effectively to ensure both segments are completed. This project includes: ・A 5- to 7-minute speech. ・A question-and-answer session after the speech.
第 12 回	Moderate a Panel Discussion [Part 1] This project addresses the skills needed to successfully moderate a panel discussion and how to be an effective participant on a panel. ・Purpose: The purpose of this project is to apply your skills as a public speaker and leader to facilitate a panel discussion. ・Overview: Plan and moderate a 20- to 40-minute panel discussion. The panel discussion can be on any topic. Students who participate as panelists do not receive credit. This project includes: ・Planning and moderating a 20- to 40-minute panel discussion.
第 13 回	Moderate a Panel Discussion [Part 2]
第 14 回	Preparation for FINAL SPEECH CONTEST
第 15 回	SPEECH CONTEST
成績評価の方法	格付けは、次の内容で構成されます。 テーブルトピックマスター、役割＝20% ［役割は最低 1 回実行する必要があります］ テーブルトピック（即興）スピーカー、役割＝15% ［役割は最低 3 回（各 5%）実行する必要があります］ テーブルトピック評価者、役割＝15% ［役割は最低 3 回（各 5%）実行する必要があります］

	準備スピーカー、役割＝30％ ［役割は最低３回実行する必要があります（各 10％)］ 準備スピーカー評価者、役割＝15％ ［役割は最低３回（各 5％）実行する必要があります］ グラマリアンおよび／またはタイマー、役割＝5％ ［役割は最低５回実行する必要があります（各 1％)］ Table Topics Master, role = 20% ［role must be done a minimum of 1 time］ Table Topics (Impromptu) Speaker, role = 15% ［role must be done a minimum of 3 times (each 5%)］ Table Topics Evaluator, role = 15% ［role must be done a minimum of 3 times (each 5%)］ Prepared Speaker, role = 30% ［role must be done a minimum of 3 times (each 10%)］ Prepared Speaker Evaluator, role = 15% ［role must be done a minimum of 3 times (each 5%)］ Grammarian and/or Timer, roles = 5% ［roles must be done a minimum of 5 times (each 1%)］
準備学修 (予習・復習、課題等)	すべてのクラスミーティングは、組織化された一連のスピーチに基づいています。 スピーカーは、多くの場合、同僚や教師からフィードバックを受けます。フィードバックを提供する論評者は、メインスピーカーのパフォーマンスに基づいた建設的なフィードバックを含む即席のスピーチを行います。 クラスミーティングの一部は、トピックスマスターによってその場で割り当てられる即席のスピーチであるテーブルトピックスに費やされます。これの目標は、学生が最小限の準備で自分の足で考えることを奨励することです。各即興スピーチの後、クラスは誰が最も優れた即興スピーチを提供したと思うかを投票するよう求められます。 このコースは、人前で話すこととリーダーシップのスキルを構築することに重点を置いており、対人コミュニケーション、管理、戦略的リーダーシップ、動機、および自信の要素が含まれています。毎週、最終的なスピーチコンテストに向けたさまざまなテーマ／プロジェクトで構成されます。外部審査員を招待して最終スピーチコンテストを審査します。 Every class meeting is based on a set of organized speeches. Speakers are given feedback, often by peers and the teacher. Evaluators who provide feedback give an impromptu speech with constructive feedback based on the main speaker's performance. Part of the class meetings is devoted to Table Topics, which are impromptu speeches that are assigned on the spot by a Topicsmaster. The goal of this is to encourage students to think on one's feet with minimal preparation. After each impromptu speech, the class is asked to vote on whom they thought provided the best impromptu speech. The course places a large emphasis on building public speaking and leadership skills and includes elements of Interpersonal Communication, Management, Strategic Leadership, motivation, and Confidence. Each week will consist of different themes/projects that build towards a final speech contest. External judges will be invited to attend and judge the final speech contest.

教科書					
書名		著者	出版社	ISBN	備考
指定なし					
参考書	本講座のテキストを購入する必要はありません。 Chat GPT や Perplexity AI などの最近の技術的ブレークスルーアプリケーションは、このコースの執筆および研究セクションで学習および適用されます。 Students will not be required to purchase textbooks. Recent technological breakthrough applications such as ChatGPT and Perplexity AI are studied and applied in the writing and research sections of this course.				
備考	None.				
昨年度からの振り返り	昨年度は未開講のため該当なし。				

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	4年	学期	前期	科目分類	展開科目
授業名	国際開発論					授業形態	講義
授業コード	IND143	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	進藤 弘騎						
授業概要	国際開発の分野で注目されている論点を取り上げ、開発途上国の現状と課題を外観し、経営や情報通信技術の観点からの開発援助や、持続可能な開発目標（SDGs）など国際開発の動向を理論と事例から検討する。具体的には国内外の貧困問題、地域紛争、こども、教育、資源など様々な問題に対して理解を深めるとともに、アジア、中東、アフリカ、ラテンアメリカなどへの具体的な開発・協力事例を取り上げる。国際開発や協力の手法への理解を深め、ビジネスや情報通信技術など専門分野の観点からの課題解決について検討することで、グローバル化が進む現代でビジネスや事業を展開する上で必要な判断力や応用力を養う。						
授業の目的・到達目標	・グローバルな社会課題への理解を深め、諸課題の関係性を具体的に説明できるようになる。 ・国際感覚を醸成することで、個々人の価値観を改めて評価し、次世代のグローバル人材が必要とする知識を分類できるようになる。						
授業計画							
第1回	オリエンテーション。変化する資本主義。民間企業と社会貢献。綺麗ごとから常識へ。						
第2回	国際開発業界・国際協力業界で活躍するアクター。業界全体を見渡す。						
第3回	SDGsとは何か。誕生の背景・歴史。ESG投資。						
第4回	貧困課題にかかる現状把握と具体事例 ～SDGsの一丁目一番地～						
第5回	食・飢餓にかかる現状把握と具体事例 ～イエメン・アフガニスタンに見る食の現状～						
第6回	環境・資源・水にかかる現状把握と具体事例 ～エコ・バック、ストロー議論の先へ～						
第7回	中間レポートについて。国際開発・協力の手法。グループ・ディスカッション。						
第8回	業界内で代表的な人物を通じた国際感覚 ～“How dare you”とは何だったのか～						
第9回	地域紛争にかかる現状把握と具体事例 ～ウクライナ・南スーダン・ベネズエラ等の紛争～						
第10回	こども・教育にかかる現状把握と具体事例 ～こども食堂始めました～						
第11回	平等、ジェンダー平等、働きがい等、SDGsに掲げられるその他の目標について。						
第12回	SDGsというフィルターを通じた機会の模索 ～ピンチはチャンス～						
第13回	SDGsというフィルターを通じたリスクの確認 ～建設的批判とモンスター化する顧客～						
第14回	国際感覚。先例から学ぶ、次世代のグローバル人材とは。グループ・ディスカッション。						
第15回	総括。課題レポートについて。						
成績評価の方法	試験は実施しない。中間レポート（20%）、期末レポート（40%）による評価に加え、授業中の議論（含むグループ・ディスカッション）への貢献度、積極性、及びユニークな意見を評価する（40%）。						
準備学修(予習・復習、課題等)	予習として、マスメディア等で得られるSDGsにかかる情報をまとめ、右情報への個々人の意見を準備する（90分）。 各講義中には、準備した者が発表する時間を設ける。また、複数回グループ・ディスカッションの機会を設けるので、その際に発表することも可能。 復習として、講義で得た情報を活用して、来年以降の社会人としての活動にどのような変化をもたらせるか熟考する（90分）。						

教科書					
書名		著者	出版社	ISBN	備考
指定なし					
参考書	持続可能な開発のための 2030 アジェンダ（The 2030 Agenda for Sustainable Development） 英語：https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000101401.pdf 日本語：https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000101402.pdf				
備考	国際開発というテーマを通じて、これからの社会人の方々が必要とする教養を習得するのみならず、何故働くのか、といった個々人の根本的な課題について考える上でも有意義な内容になると考えています。就職活動などで、進路を悩む方々は、是非、奮って履修ください。				
昨年度からの振り返り	昨年度は未開講のため該当なし。				

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	4年	学期	前期	科目分類	展開科目
授業名	ファイナンス業における国際化					授業形態	演習
授業コード	GFI144	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	坂下 直史						
授業概要	グローバル化が進んでいる分野の1つとしてファイナンスやこれに付随する業界、ビジネスモデルを取り上げる。例えば、サブプライム問題や金融の仮想化などファイナンス業に関する出来事は、一国だけでなく世界中の国と産業に大きな影響を及ぼしてきた。グローバル化の進展やこれに付随するファイナンス業の発展はビジネスや情報通信技術の変化と切り離せない。 本授業では制度、歴史、政策などの側面から多面的に展開することで、現在も進むファイナンスのグローバル化の本質と意味を理解するとともに、他分野に考え方を活かし新規ビジネスや既存事業のイノベーションに繋げる方法を検討する応用力を身に付ける。 なおファイナンス業の今日的な話題を捉えるため、授業では日本語・英語両方を用いて進行する。						
授業の目的・到達目標	実際のビジネスの現場でファイナンスがどのように活用されているかを理解するとともに、近年進むグローバル化とビジネスモデルの変化を理解することを目的とする。本授業を通じてビジネスマンとして最低限必要なファイナンスの知識を身に着け、正しい問題意識をもってファイナンスに関わる事象を捉えられるようになることを到達目標とする。						
授業計画							
第1回	「オリエンテーション」及び「日本におけるバブル崩壊とは何だったのか？」						
第2回	「サブプライムローン問題が与えた影響について」ケーススタディ①『Subprime Crisis』						
第3回	「金融機関の役割：コーポレート・ファイナンスの視点から」						
第4回	「ファイナンスの基本トピック：貨幣・為替・インフレ／デフレ・受要／供給曲線」						
第5回	「金利とリスク」						
第6回	「現在価値と将来価値」						
第7回	「日本企業の財務戦略の傾向」ケーススタディ②『森永製菓』						
第8回	「グローバル企業の財務戦略」ケーススタディ③『Amazon』						
第9回	「M&A戦略①：M&Aとは？」						
第10回	「M&A戦略②」ケーススタディ④『JT／ミツカン』						
第11回	「投資検証方法」と「その他のファイナンス概念」						
第12回	「Fin-Techと仮想通過」						
第13回	「BaaS：Banking as a Serviceとは？」						
第14回	「チームプレゼンテーション①」						
第15回	「チームプレゼンテーション②」及び「ラップアップセッション」						
成績評価の方法	授業への参加、発言、貢献30% チームプレゼンテーション30% 個人レポート或いは期末試験40%（初回授業時に決定する）						
準備学修(予習・復習、	各回の主要テーマにつき、用語の理解等の事前学習を行うこと。又、ケーススタディに関しては全て精読の上、自分なりの答えをもって授業に参加されたい。						

課題等)	復習は各授業の後知識の定着化を図るために十分に時間を取ること。				
教科書					
書名	著者	出版社	ISBN	備考	
指定なし					
参考書					
備考	教科書は指定しない。授業は講義用の PP 資料を用いて進める。アクティブラーニング型の授業としてケーススタディや直近のビジネストピックを多く扱うため、授業への積極参加を望むとともに、広くビジネス関連トピックに関心を持って情報を収集されたい。				
昨年度からの振り返り	昨年度は未開講のため該当なし。				

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	4年	学期	前期	科目分類	展開科目
授業名	サービス業における国際化					授業形態	演習
授業コード	GSI144	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	伊藤 道大						
授業概要	産業構造のシフトによって日本だけでなく世界中で、医療・福祉、教育、接客業などサービス業の需要や経済に与える影響が高まっている。その一方、高まるニーズに対し人材不足や専門性に対するスキル不足など、課題は多く存在する。 本授業ではサービス業の構成や特性、サービスモデルなどを理解するとともに、グローバル化やイノベーションがどのように推進されているか、国内外の具体的な事例に基づいて検討する。これらを通じ、グローバルビジネスにおけるサービス業のあり方や、ビジネスや情報通信技術の観点からサービス業と特性に応じた課題解決やイノベーションをおこすことができるよう理論や知識を習得する。なお本授業では日本語だけでなく、原著（英語）の講読や英語でのディスカッションも行う。						
授業の目的・到達目標	サービス業とは何か？このことを突き詰めていく講義となるが、例えば普段の生活の中でも様々なサービスを受け取り対価を支払っている。この講義ではそうしたちょっとした「気づき」を比較検証していくことに主軸を置く。なお、漠然と海外に興味があると考えている人に特に形が残る授業にしたい。授業では、下記の2点に到達することを目標とします。 1）サービス業の国際ビジネスに関する基本的な理論、概念、用語を理解し、文章によって説明できる。 2）海外におけるビジネスの違いと課題を積極的に考え、異文化理解に関連づける。						
授業計画							
第1回	オリエンテーション。サービス業とは何か、考えてみる。サービス業での起業について。						
第2回	宿泊業／飲食サービス業の国際化						
第3回	生活関連サービス業／娯楽業の国際化						
第4回	不動産業／物品賃貸業の国際化						
第5回	教育・学習支援業の国際化						
第6回	医療／福祉の国際化						
第7回	情報通信業の国際化						
第8回	運輸業／郵便業の国際化						
第9回	学術研究／専門・技術サービス業の国際化						
第10回	サービス業の海外展開例（アジア＆オセアニア）						
第11回	サービス業の海外展開例（北米＆中南米）						
第12回	サービス業の海外展開例（欧州）						
第13回	サービス業の海外展開例（中東＆アフリカ）						
第14回	日本のサービス業の強みと弱みを分析する。						
第15回	授業総括と振り返り。課題レポートについて。						
成績評価の方法	・評価方法：出席コメントカードの提出と期末のレポートで算出。 ・出席コメントカード提出で40%＋レポート（それなりに難易度が高いので、講義折り返しの時点で課題提示予定）の点（50%）で算出。なお、平常点（授業での発表等で10%）も						

	加味する。
準備学修 （予習・復習、 課題等）	受講後は振り返りを必ずすることを推奨します。（各回 180 分程度）

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	『日本流通史：小売業の近現代』 満薗勇（著）、有斐閣、2021 年、ISBN978-4641165861 ※適時授業で参考書籍を紹介します。
備考	・比較検証していくことに主軸を置く。アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）をしながら進める。座席配置（ホワイトボードの配置も）はその為と理解下さい。 ・なお、聴いているだけでは楽勝科目にはならないので、そのつもりで受講ください。 ・私語など他の学生の迷惑となる行為・無断中途退出には厳正に対処するのでそのつもりで。（理由：クラスメイトのビジネスの機会喪失につながる為） ・要望があれば、その都度遠慮しないで、申し出て欲しい。コメントカードの活用も可能。 ・授業履修者は皆、仲間という意識で取り組んで欲しい。
昨年度からの振り返り	昨年度は未開講のため該当なし。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	4年	学期	後期	科目分類	展開科目
授業名	農業・林業・漁業における国際化					授業形態	演習
授業コード	GAF144	単位数	2単位	必修・選択の別	選択	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	小林 久美子						
授業概要	産業の最も基本である第一次産業（農業、林業、漁業）におけるグローバル化やイノベーション実例を学ぶ。具体的には、農業を取り巻く環境や資源、政策などをビジネスの観点から基本的な理解を深める。同様に林業や漁業について環境とあわせて、基本的な理解を図る。また､情報通信技術を駆使したマネジメント手法や新たなビジネスモデルを活用した事例や、農林漁業の6次産業化など、日本に限らず世界の事例をもとに検討し、産業の発展と課題解決について理解を深める。これらを通じ、一次産業でのビジネスや、経営や情報通信技術を活用した新たなビジネスモデルを構築する応用力を身に付ける。なお、海外の事例検討などを行うことを考慮し、授業は日本語・英語両方を用いて進行する。						
授業の目的・到達目標	既存産業においてテクノロジーを駆使した経営管理や情報通信技術の活用事例について、産業の最も基本である第一次産業から学び、自身のビジネスプランや他分野への展開方法について検討できるようになる。						

授業計画	
第 1回	ガイダンス
第 2回	農業① 現状と取り巻く環境、資源
第 3回	農業② 政策
第 4回	農業③ 地域社会とビジネスモデル
第 5回	農業④ 農業におけるイノベーション事例
第 6回	農業まとめ
第 7回	漁業① 環境と政策
第 8回	漁業② ビジネスモデルとイノベーション事例
第 9回	林業① 環境と政策
第10回	林業② ビジネスモデルとイノベーション事例
第11回	第一次産業における技術イノベーション事例
第12回	第一次産業における新たなビジネスモデル
第13回	農林漁業の6次産業化
第14回	農林漁業の国際化
第15回	まとめ
成績評価の方法	授業内課題50% 最終課題50%
準備学修（予習・復習、課題等）	予習：テーマに関する文献リサーチ（45分） 復習：授業課題への取り組み（60分）

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考

指定なし				

参考書	参考書・資料等は授業の中で適宜紹介する。
備考	
昨年度からの振り返り	昨年度は未開講のため該当なし。

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023 年度	配当学年	3 年	学期	後期	科目分類	総合科目
授業名	総合理論演習					授業形態	演習
授業コード	SM1151	単位数	2 単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎鎌谷 修、中嶋 隆一、石村 源生、寺脇 由紀、江端 浩人、久米 信行、平山 敏弘、川上 慎市郎、志村 一隆、富澤 豊、三澤 一文、磯 俊樹、片桐 雅二、加藤 直人、堀田 耕一郎、落合 慶広、桐谷 恵介						
授業概要	学生の興味関心に基づき、4 年次卒業課題を見通した研究を行う。研究方法について学ぶと共に、先行研究・ビジネスケース等を学び合う。また、卒業課題設定のための課題抽出、立論のための技法を学ぶ。さらにグループ発表では、抽出課題に沿った研究がなされているか（調査、製作などの方法とそのまとめ方）教員の指導を受けながら、広く柔軟な視野を持ち、4 年次卒業課題に向けて自らのテーマを創造的に発展させ、論文形式でまとめる。また、卒業課題の仮テーマ設定と計画書もあわせて作成する。						
授業の目的・到達目標	興味関心のあるテーマに基づき、関連図書・研究論文の講読、フィールドワーク等を通して知見を増やすと同時に、卒業課題の設定を目的に、自ら課題抽出をする力を養う。また、自ら抽出した課題についての先行研究・ビジネスケース・既存製品等を批判的に考え、論文形式でまとめる力を養う。また、卒業課題の仮テーマ設定と計画書もあわせて作成する。						
授業計画							
第 1 回	総合理論演習の進め方						
第 2 回	研究方法の学習						
第 3 回	先行研究・ケース等の発表：課題抽出						
第 4 回	先行研究・ケース等の発表：課題抽出						
第 5 回	文献研究 1						
第 6 回	グループ発表・ディスカッション						
第 7 回	文献研究 2						
第 8 回	グループ発表・ディスカッション						
第 9 回	文献研究 3						
第 10 回	グループ発表・ディスカッション						
第 11 回	卒業課題テーマ探求の為のフィールドワーク学習						
第 12 回	グループ発表・ディスカッション						
第 13 回	振り返り・卒業課題テーマ設定に向けた文献研究						
第 14 回	振り返り・卒業課題テーマ設定に向けた文献研究						
第 15 回	卒業課題の仮テーマ設定と計画書作成						
成績評価の方法	グループ発表・ディスカッション内容（40%） 個人課題（卒業課題のテーマおよび概説、課題設定、計画設計）（40%） その他演習への参加・取り組み姿勢（20%）						
準備学修（予習・復習、課題等）	毎回の授業で出す小課題については、次回授業までに必ず取り組むこと。 指摘された事項を踏まえ、各自必ず振り返りを行うこと。 発表に当たっては、自ら文献を探すなど念入りに準備をし、発表技術の向上に努めること。						
教科書							

書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	
備考	
昨年度からの振り返り	

情報経営イノベーション学部情報経営イノベーション学科

授業年度	2023年度	配当学年	4年	学期	通期	科目分類	総合科目
授業名	総合実践演習					授業形態	演習
授業コード	SM2151	単位数	4単位	必修・選択の別	必修	アクティブ・ラーニング	実施する
担当教員	◎鎌谷 修、中嶋 隆一、石村 源生、寺脇 由紀、江端 浩人、久米 信行、平山 敏弘、川上 慎市郎、志村 一隆、富澤 豊、三澤 一文、磯 俊樹、片桐 雅二、加藤 直人、堀田 耕一郎、落合 慶広、桐谷 恵介						
授業概要	総合理論演習において設定したテーマおよび仮説を、専任教員の指導の下「卒業課題」として検証（実証）、実践にまとめる。卒業課題については公開の場でプレゼンテーションを行うとともに、書面及びデータで提出する。尚、課題は個人、グループのいずれかの方法での提出を可能とする。 ・卒業課題に必要となる条件について 以下の項目が提出物内で具体的かつ明確に説明されていること。 1. 新規性があり、産業界からのニーズに適した、理論と実務を架橋するテーマであること 2.「イノベーション人材」になるためのステップとしてふさわしいテーマであること ・提出形式 1. ビジネスプラン ｉ）新規性があり、産業界からのニーズに適したビジネスプラン 2. 論文 ｉ）産業界における新規性、先見性の認められる仮説を立て、それを検証した論文 3. 作品 ｉ）新規性があり、かつコンテンツ産業および関連産業から特に優れたものと評価された作品						
授業の目的・到達目標	以下を目標として卒業課題に取り組む。 1. ビジネスプラン ＜提出形式＞ ｉ）新規性があり、産業界からのニーズに適したビジネスプラン ＜アウトプットイメージ＞ ・ビジネスプランとして必要となる「市場分析」「コンテンツ（製品・サービスなど）の特徴」「事業戦略」「事業計画」を明記すること ・ビジネスプランにとりあげるサービスなどを作成 2. 論文 ＜提出形式＞ ｉ）産業界における新規性、先見性の認められる仮説を立て、それを検証した論文 ＜アウトプットイメージ＞ ・研究テーマを取り上げる目的や先行研究・事例、研究の方法とそれに基づく結果、そこから考察されることなどから構成されるもの 3. 作品・プロダクト ＜提出形式＞ ｉ）新規性があり、かつコンテンツ産業および関連産業から特に優れたものと評価された						

	作品 ＜アウトプットイメージ＞ ・ICT 技術を用いて制作した作品および作品説明（企画書等）とする。
授業計画	
第 1 回	授業の進め方と卒業課題の概要、テーマ、スケジュール説明
第 2 回	卒業課題の設定に向けた準備：文献研究、調査、情報収集等
第 3 回	卒業課題の設定に向けた準備：文献研究、調査、情報収集等
第 4 回	グループ発表・ディスカッション
第 5 回	グループ発表・ディスカッションの振り返り
第 6 回	卒業課題テーマの決定・発表
第 7 回	卒業課題計画の決定・発表
第 8 回	課題内容の構想と準備
第 9 回	課題進捗状況の報告・ディスカッション
第 10 回	課題進捗状況の報告・ディスカッション
第 11 回	課題進捗状況の報告・ディスカッション
第 12 回	課題進捗状況の報告・ディスカッション
第 13 回	課題進捗状況の報告・ディスカッション
第 14 回	中間まとめ（発表）
第 15 回	中間まとめ（振り返り）
第 16 回	課題進捗状況の報告・ディスカッション
第 17 回	課題進捗状況の報告・ディスカッション
第 18 回	課題進捗状況の報告・ディスカッション
第 19 回	課題進捗状況の報告・ディスカッション
第 20 回	課題進捗状況の報告・ディスカッション
第 21 回	課題進捗状況の報告・ディスカッション
第 22 回	課題進捗状況の報告・ディスカッション
第 23 回	課題進捗状況の報告・ディスカッション
第 24 回	卒業課題の提出
第 25 回	卒業課題発表準備
第 26 回	卒業課題発表準備
第 27 回	卒業課題発表準備
第 28 回	卒業課題発表内容の決定
第 29 回	卒業課題発表会
第 30 回	卒業課題発表会
成績評価の方法	課題への取り組みと提出課題に基づいて評価（90%）、卒業課題発表会の内容（10%） （評価基準） 【ビジネスプラン】 ・テーマ設定条件への適合

	・テーマに対する事業アプローチの設定根拠 ・先行事例・関連事例の調査状況 ・ビジネスプランとしての競争優位性・分析・評価等の調査手法 ・市場環境の分析・調査手法 ・財務計画の適切性 【論文】 ・テーマ設定条件への適合 ・テーマに対するアプローチの設定論拠 ・先行研究・関連研究の調査状況 ・論文としての新規性 ・分析・評価等の調査手法 ・研究を通じた学術への貢献 ・卒業課題の完成度／発展性 【作品】 ・テーマ設定条件への適合 ・テーマに対する作品アプローチの設定根拠 ・先行事例・関連事例の調査状況 ・作品としての競争優位性・分析・評価等の調査手法 ・市場環境の分析・調査手法 ・学外の学会、展示会での発表、学術誌、新聞等に掲載され、高い評価を得ることができる作品であるか否か
準備学修 (予習・復習、課題等)	・各自のテーマに沿って，自ら学習の計画を立て，その計画に沿って進めること。 ・指摘された事項を踏まえ，各自必ず振り返りを行うこと。 ・発表に当たっては，自ら文献を探すなど念入りに準備をし，発表技術の向上に努めること。

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
指定なし				

参考書	
備考	
昨年度からの振り返り	昨年度は未開講のため該当なし。